明治三十八年四月十五日定期増刊 (毎月一回五日発行) 明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可

女学世界定期増刊

戦勝紀念 閨秀文壇

第五巻第六号

女學世界定期增刊

閨秀文壇目次



小林習古筆

春色



(某閨秀画家寄)

春の夕

蘭香女史筆



ひな



蘭香女史筆

醫學士 小玉龍藏君著

延命長壽法

（紙數四百卅頁 四月下旬出版）

全一册

洋装三六版 總クロース上製 金文字入
正價六拾錢 郵稅六錢

醫學士石原喜久太郎君閱
醫學得業士首藤環君著

◉衛生生理問答

全一册紙皮上綴 正價貳拾錢
小判二〇二頁 郵稅四錢

（甲●一）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

新奇發明
増酒資料

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、醬油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、焼酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に眞似せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ：：（當館は去廿壹年の創立也）確實

發明元祖　東京市神田五軒町拾九番地　**日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時種々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名稱に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが

（腋臭症）

根治確證　新發見藥

諸病賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる愛なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓發送者金則到送藥す郵券代用必ず二錢割增の事（電話下谷五四六番）貳藥以上

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

（甲の四）

米國醫學博士アイ、ピー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫隱岐敬次郎君譯述

女子衛生學 附結婚論

（近日發行）

全壹册洋装袖珍上製
總クロース金文字入
約三百頁頗美本

女子衛生學は米國の大醫アイ、ピー、デーヴィス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其說く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲めに懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衛生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは其主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の敎義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尚附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當にして其說述の美逸なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむるなり。

西田敬止君著

育兒と衛生

全壹册洋裝菊判美本

能く健全なる小兒を生育し、又家族の健康を保つは、是れ人間第一の幸福の基なり、著者親切に、平易明瞭に、其の次第を詳敍し、文字の足らざる處は鮮明美麗の畵を以て之を補ひ、懇篤至らざる處なし。世の文字を解する人々之を讀みて育兒衛生に注意し玉ふべし

正價金廿五錢郵稅六錢

醫學博士三島通良君編

はゝのつとめ

全壹册洋裝大判美本

本書は博士が個人衛生中最必要にして且つ國家富强の基たる婦人及び小兒の健康を保護增進せんが爲め泰西の學理を應用し之を本邦の人情風俗に鑑み能く我邦現時の家庭に適應する衛生法を叙述されたる者にして世の賢母良妻たるの職責を盡さんとするの人は素より一家の經營上何人も缺くべからざるの要書なり

正價金七拾五錢郵稅拾錢

（甲の五）

二大法典豫約廣告

(第十七版)

改正增補 帝國六法全書

全一冊

洋裝袖珍美本 紙數千八百餘頁 全部新規組替

▲總革特製定價壹圓廿五錢郵稅拾四錢 ▲洋布上製定價壹圓郵稅拾貳錢

豫約法

四月三十日迄の申込に限り

總革包表紙 特製金九拾五錢 帝國法典合併特價 金壹圓七拾錢

總クロース 上製金七拾五錢 帝國法典合併特價 金壹圓五拾錢

外要送料

初刊以來非常の好評を博したる本書は今や删補改正を加へて第十七版を發行するに至れり、其載する所の者は、憲法々例裁判所構成法、民法、商法、民事訴訟法、刑法、刑事訴訟法、監獄則の九大法律と、之れに附屬の法規は、法律と訓令若くは告示に論なく、又內地に行はるゝものと臺灣に限らるゝ特則とを問はず、悉皆之れを網羅したり其數無慮數百、總紙數壹千八百餘頁に及べり、其內容の豐富なる知るべきなり、權利の擁護に忠實なるの士は、座右に一本を備ふるを怠るべからざるなり、今回前記の豫約方法に依り發賣致候間、期限中至急御申込あらんことを。

增訂 帝國法典

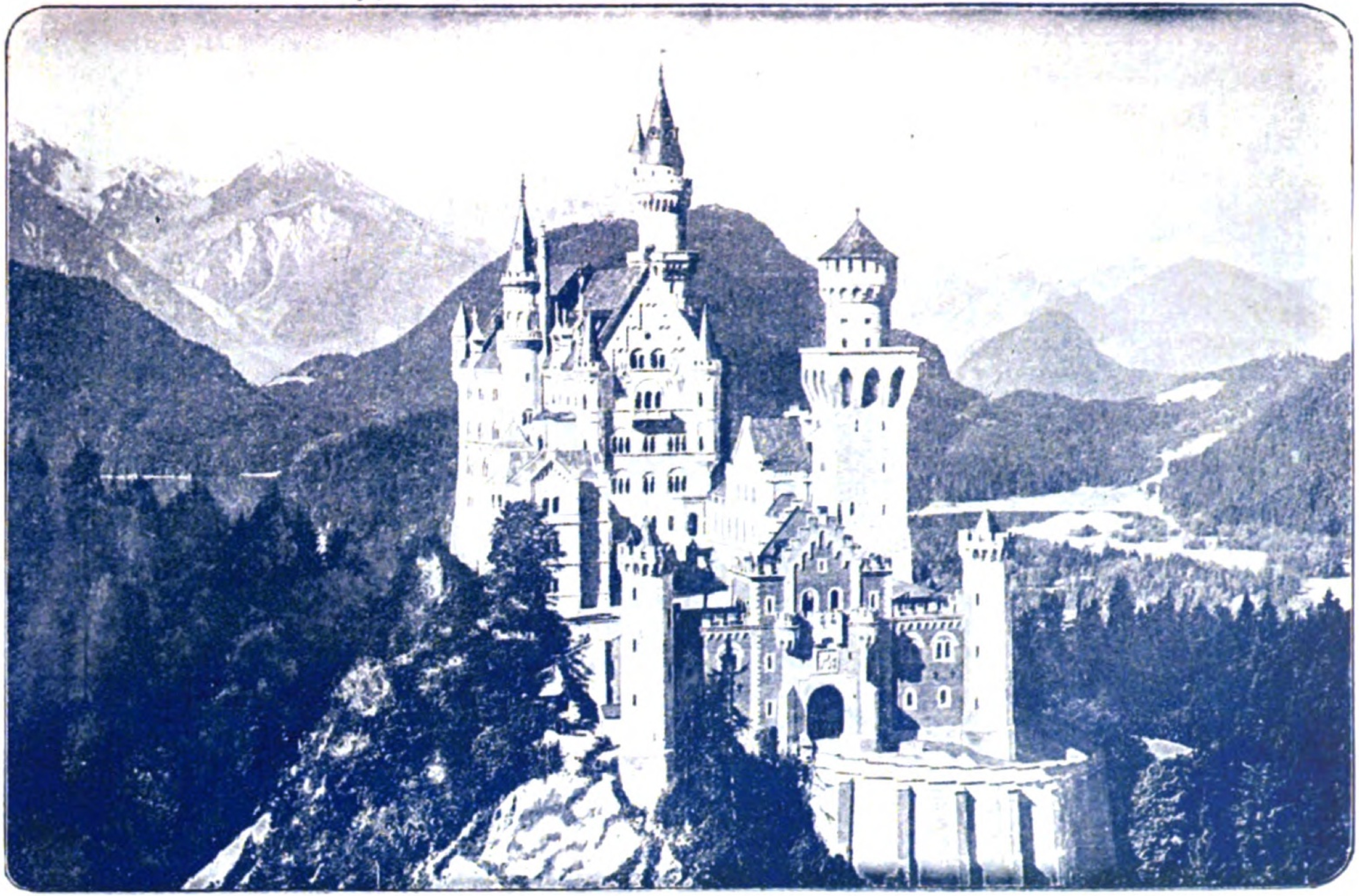
本書類を分つこと十有三、曰く帝國議會、曰く地方制度、曰く租稅、曰く土地及水面、森林及原野、道路渡津及橋梁、砂防、水利及水道、河川、開港、曰く通信、曰く勸業、曰く教育、感化、年號及曆時、曰く貨幣、度量衡、曰く會計、曰く訴願及行政訴訟法、曰く警察、曰く軍事、而して大は詔勅法律より、小は訓令告示に至るまで、法令を蒐むること無慮一千に及び、帝國六法全書と併せて法令書中の双璧たり。

全一冊袖珍總クロース上製
帝國六法全書同型千五百頁
正價壹圓郵稅拾貳錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(甲の六)

ババリヤの王宮

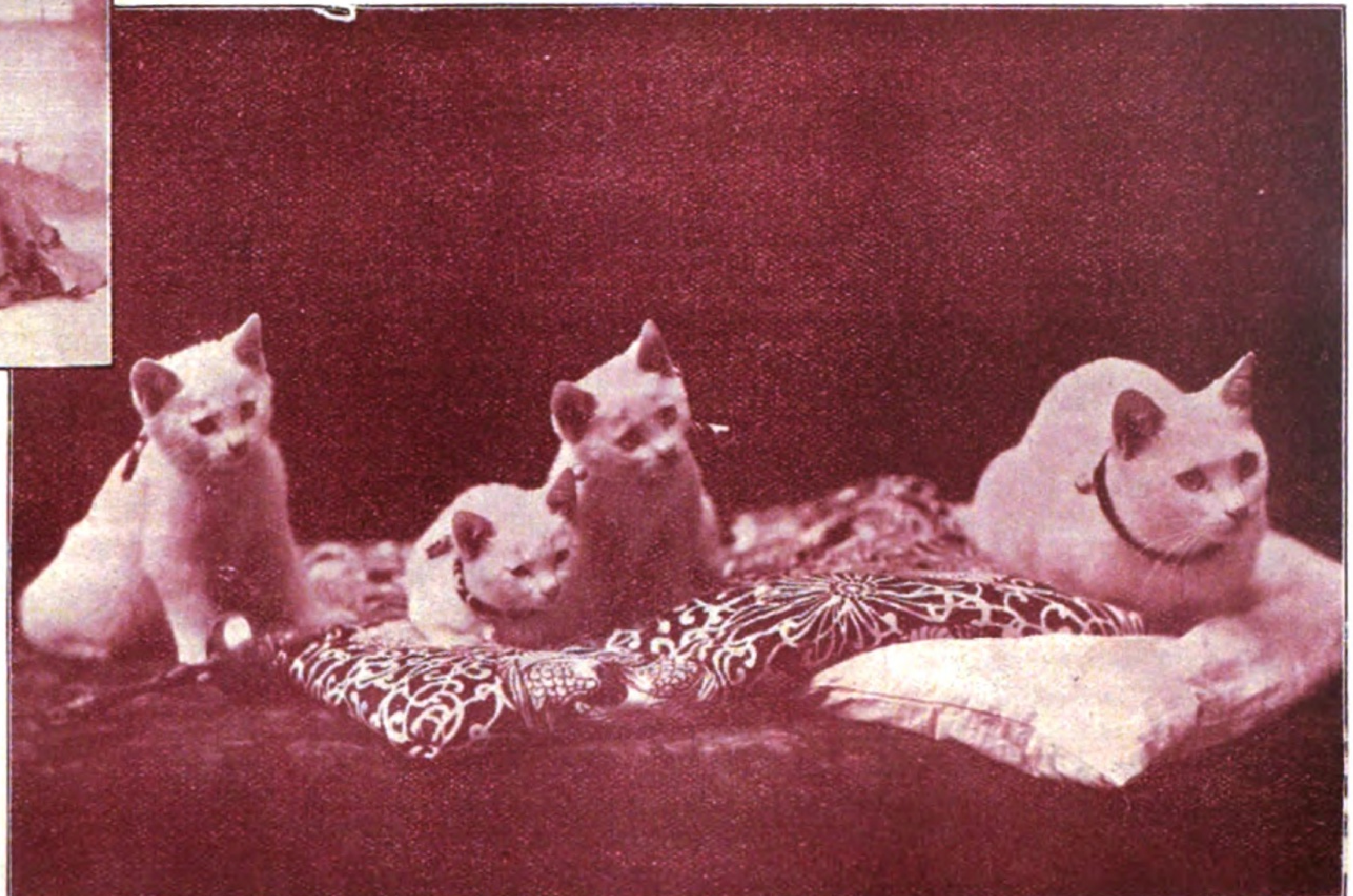


（獨逸聯邦の一王國ババリヤの宮殿）

田中子爵夫人遺愛の猫



故子爵夫人伊與子



（坪谷水哉氏撮影）

軍國の家庭 (阿部泰藏氏一家の并に宿泊軍人)



(記者参照)

陣歿戰士



奉天の戰死者尾寺大尉の一家（夫人は桂總理大臣の令孃）

（記事參照）

龍溪 矢野文雄君序　春汀 鳥谷部銑太郎君著

時代人物月旦

◎口繪名家肖像寫眞拾枚挿入

全一册

洋裝總クロース
三六判五百七十餘頁
正價金七拾錢
郵稅拾錢

四月中旬發行

春汀の人物評は世に定評あり、敢て贅言するを要せず而も近時日露戰爭と共に外人の我國に注目するもの漸く增加するや春汀の人物評亦外人に最も愛讀せられ屢々外國雜誌に譯載せらる英字新聞横濱デーリー、メール此頃太陽の人物月旦を評して曰く『外人は日本文を讀む每に大抵苦痛を覺へざるものなしと雖も獨り太陽の人物月旦は外人の讀者に趣味と智識とを與ふること頗る多し春汀は近代日本の政治界及び其の重もなる役者の意見主義に熟通し且つ健全なる歐洲の新思想に富めり日本の記者は其の知れる所の半ばをも語らざるが如き感ありて吾人の好奇心を滿足せしむるもの少なきに拘らず春汀は善く其の論せむとする問題の各方面を發揮し其の解剖せむとする人物を公平周到に評論せり』云々と亦以て春汀の人物評の價値如何を知るに足るべし本書は最近二個年間の内外人物評を網羅したれば之れを讀むものは併せて世界の形勢をも領解することを掌を視るが如くなるべし是れ又本書の特色なり

鳥谷部春汀君著
● 明治人物小觀
全一册　正價參拾八錢　郵稅八錢

鳥谷部春汀君著
● 明治人物評論
全一册　正價貳拾五錢　郵稅六錢

鳥谷部春汀君著
● 續明治人物評論
全一册　正價參拾錢　郵稅六錢

（乙の二）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の二）

工學士 江浪常吉君著

工業叢書

蒸滊機關

（製本既成）

全壹册
洋裝中判美本
正價八拾錢
郵稅八錢

第一章 總論
第二章 定義及單位
第三章 瓦斯熱力學
第四章 蒸滊の性質
第五章 滑弁
第六章 示壓器及示壓圖表
第七章 滊筒內蒸滊の性質

第八章 複式機關
第九章 冷滊機
第十章 整速機
第十一章 曲柄の回轉力
第十二章 節動輪
第十三章 滊筒 滊筒內餧筒 塡料筐 喞子其他

人文の發展は巧みに機械力を應用するにあり而して蒸滊機關の發明は機械力の發現をして愈顯著ならしむ、今や我邦の工業頗る繁雜を極め、蒸滊機關の効力益々大を加ふるに拘はらず之に關する著書絶無なるは工業界の欠陷と謂はざる可らず、本書は蒸滊及蒸滊機關の學理應用を簡明に論述し初學者をして蒸滊機關の大体に通曉せしめ應用實現の智識を得せしめんとす。

工學士 根岸政一君著 ● 工業叢書 **瓦斯及石油機關** 全一册 正價五拾五錢 郵稅六錢

工學士 增田知藏君著 ● 工業叢書 **舶用機關學** 全一册 正價六拾錢 郵稅八錢

工學士 糸山孝吉君著 ● 工業叢書 **機關車** 全一册 正價六拾錢 郵稅八錢

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

水哉 坪谷善四郎君著

四月中旬出版發賣



下卷（西部）

目次

近畿　中國　四國　都市銅版廿二面寫眞版八十餘面

九州　琉球及臺灣　全國西半部最密着色地圖大判

曩に本書の上卷を以て、日本の東半部なる東海、東山――、北陸、北海、の四道を案内し今や其下卷成らんとす、收むる所は近畿、中國、四國、九州、琉球、臺灣に及び、皆著者が親しく各地を歷巡して、視察する所に據る。大都名邑勝地舊蹟、神社佛閣、温泉、浴場等の案内は言ふも更なり、海山の形勝、水陸の交通、產業の情況、風俗の美惡、料理店、舟車の費額、土產物の調進に至るまで盡く之を詳記し、傍ら歷史を說き、古今の詩歌を挿み、加之著者特得の各地風景寫眞數百圖と各都市の銅版密刻圖二十餘種を添へ、別に一枚折日本西半部着色詳密圖を附す凡そ地方に旅行する者は必ず一本を缺くべからざるは勿論、一室内に在て之を讀むも、座がらにして名所を知り山光水色自然の美景を賞するを得べきなり

▲中判洋布金文字入上製約六百頁正價壹圓郵稅拾錢▼

▲上卷　洋布上製 中判美本 銅版地圖 廿二頁 風景寫眞

日本漫遊案內

◎正價壹圓郵稅拾錢◎

八十二個 全國東半部地圖彩色刷大判掛け添附　▲東部

（その三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

文學博士姉崎正治君　文學士齋藤信策君共輯

界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し、三世の預言者としてその短き一代を終れり、その時々の論議、不朽の述作、收めて此全集五冊の中にあり、日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士はこの中に一條の大天火を見ん……

本編收むる所の其主なるものは故著者が高等學校時代より大學を經て晩年に至るまでの文藝に關する論文にして

巣林子評論と**運命**悲劇

歷史的精神、觀念と道念、天才論、戲曲中の幽靈、

桐一葉と**牧の方**

支那文學の價値、青年文學會漫評、文人の厭世觀、武島羽衣の「小夜砧」を評す、演劇界の風潮と劇評家の責任

社會小說論

「われから」と「わかれみち」、明治の小說、非國民的小說を難ず、「ワルトホイトマン論」カーライルの

英雄論

史劇論、詩的の兩面と其利弊、我邦人の紀行文、國民歌、與土井晚翠、

理想的人物の表現

煩瑣學風と文學者、文明批評家としての文學者

姉崎嘲風に與ふる書、作文論、現代文章私見其他

樗牛全集第二卷　文藝及史傳　下編

裝幀前卷同樣金緣金模樣附　頗美本　約五百頁

前卷には重もに著者の評論を載せ本卷には主として史傳を揭げたり

▲**釋迦**……

▲**平相國**

●平家雜感……

●淸盛骨相考……

▲**菅公傳**

●菅公年表……

●菅公談の後に書す……

●菅公論に就て……

▲**史傳雜纂**

●南歐美術論……

●ナポレヲン三世……

●古事記神代卷の神話及歷史……

●シヤンヌダルク……

●ハイ子が事……

●東北物語……

●世界の四聖……

●冠鐺日記……

●豪傑の半面……

●予の好める人物……

●三十一種……

▲**文藝評論補遺**

全部五卷

第壹卷 三版出來

第貳卷 新刊賣切再版出來

第參卷 四月下旬新刊發賣

(乙の五)

(乙の六)

農藝物理 氣象學

全壹冊洋裝大判
脊皮金字入美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

農學博士 稻垣乙丙先生著

氣象學は實に人生に緊要なるの一科學にして何種の業務に從ふも之れが大要を學ばざるべからず就中農業は其家畜作物の生產上に於て甚しく天然の支配を受くるものにして即ち太陽の光熱空氣の成分、降水、風等の氣象元素の單獨若くば綜合より及ぼすの制裁を受けて、極めて有力なる効果を致せり古來農業の要素としては土地と勞力と資本との三者に待てり、然るに吾土地の要素中には土壤の外之に伴へる一切の天然を包括するものにして其天地の主なるものは土壤よりも寧ろ光熱空氣水濕等にありとす、故に天然氣象の影響は至大至强にして其關係する所は此點より觀ても甚だ重要なりといふべきなり稻垣博士斯學を研究し此天地を利用して農業生產に遺算なからしめん爲め本書を著述せらる蓋し農藝氣象學の著書としては空前の要册なり、農業に從事するもの須らく此重要の科學を學習せざるべからず。

農學士 佐々木祐太郎君著 ●氣候及土壤論(第七版)
洋裝大判 三百五十頁
上製五拾五錢 郵稅拾錢
並製四拾錢 郵稅八錢

理學士 岡田武松君著 ●近世氣象學(第三版)
洋裝大判 三百四十頁
上製五拾五錢 郵稅拾錢
並製四拾錢 郵稅八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

岩村成元君編

北京正音支那新字典

清國公使楊樞君題辭

▲附錄、官制、封爵、地名、度量衡、貨幣其他各般の統計表

本書は漢學の正確なる支那音を示し且つ之れが應用の熟語を彙集したるを以て支那語學又は時文を研究する者は勿論一般世人が常に不便を感ずる支那地名人文の原語を尋ねんとする者の必要缺くべからざるものにして卷中收むる所の其主なるもは

(發音表) 四百有餘の發音を英字及假名の兩樣にて顯はしたれば相對照して其正音を探ぐるを得べく且つ有氣音、無氣音、寛音、窄音、捲舌音、舌尖音、開口音、合口音等苟も語學に必要なる發音の區別を一目瞭然たらしむ

(字典) 字數の多きこと一萬有餘に達し之を發音表に基きて四聲順に排列し聯ぬるに適切なる雅俗の熟語を以てし且つ難解の文字及熟語には邦語にて之が註釋をも併記し以て斯學研鑽者の資料に供せり

(畫引表) 從來慣用せる畫引の文式に從て字典中の文字を悉く羅列したれば發音畫引何れに據るも容易に索引することを得べし

(同字異音表) 同時にして發音の異なれるものを發音表の順によりて序列し一々其發音を示したり亦以て斯學の好參考たらむ

而して附錄には最近の調査に成れる度量衡貨幣解說並に日清兩國比較表、清國官制大要、清國官署官名異稱及英譯、皇族表、封爵表、清國官吏階級表、地名發音表、各省及省城、海陸通商地其他重要なる事項を掲げたり是れ所謂錦上花を添へたるものにして支那事情研究の好材料たるは更に贅言を俟たざるなり

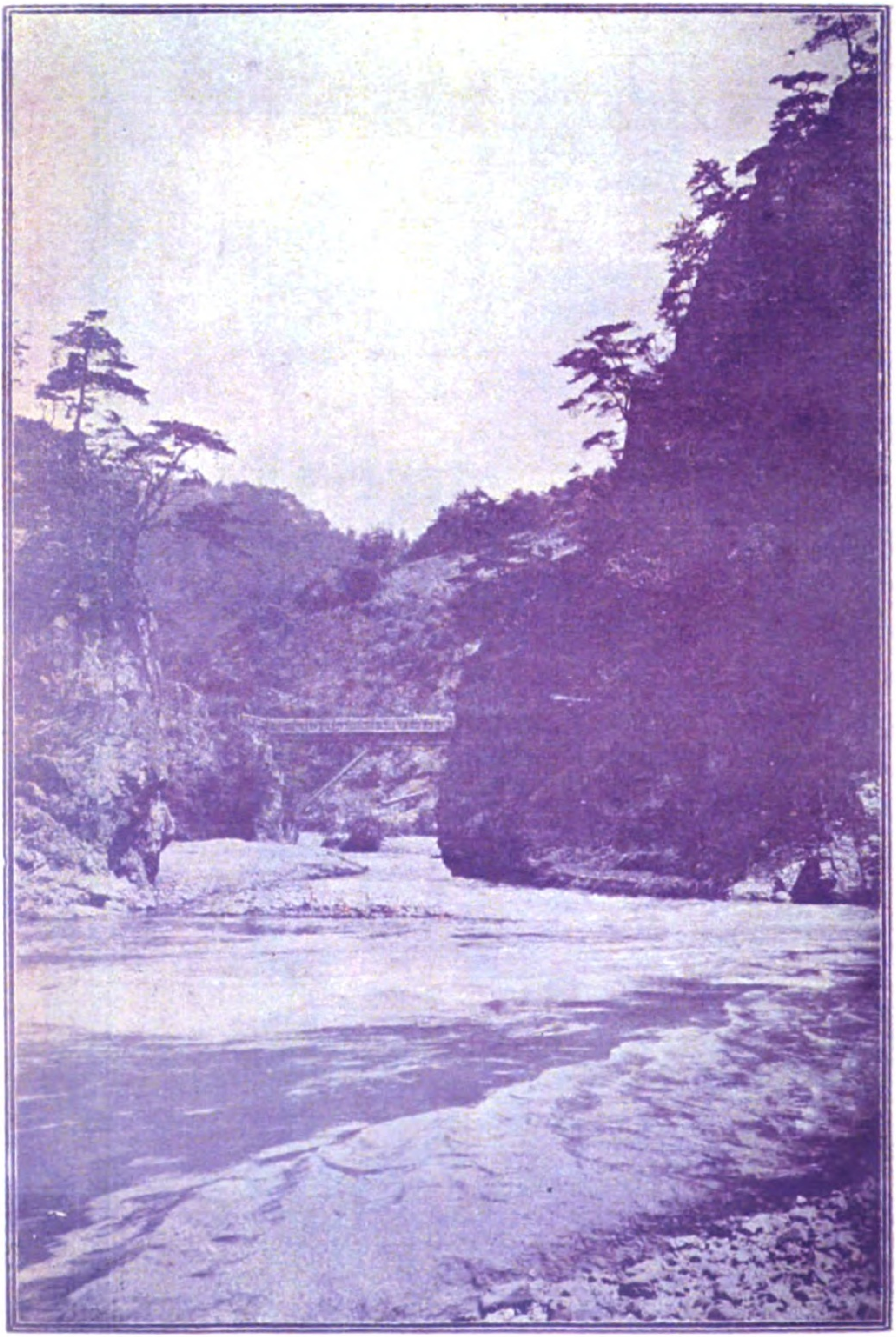
四月下旬出版發行

全壹冊洋裝三六版
袖珍總皮製頗美本
紙數約四百頁

發兌元 東京本町 博文館

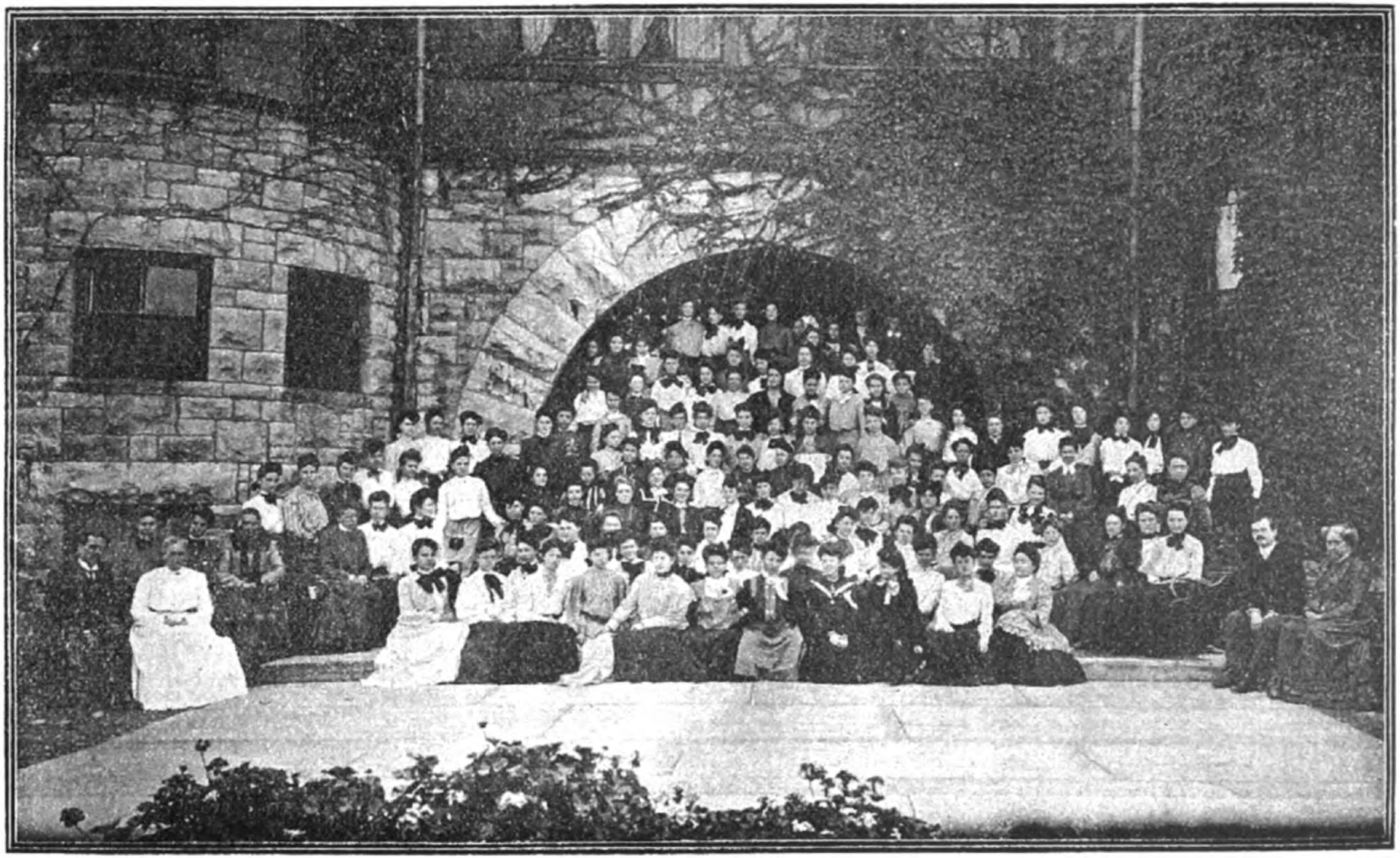
(乙の七)

湍流



京都嵐山の奥四十町保津川の石門

米國の女子大學生



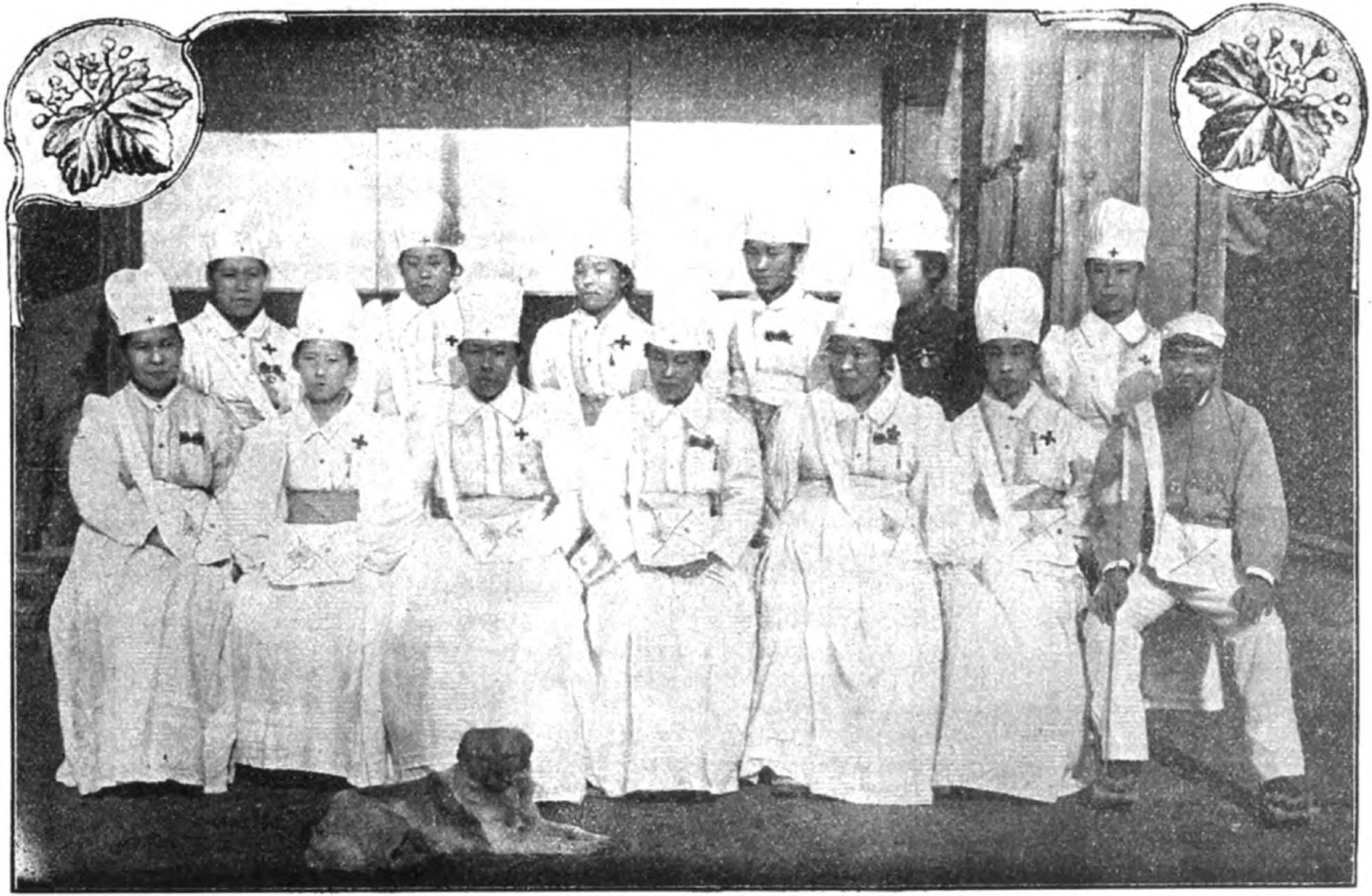
北米ミツソリー大學生徒并に職員

南清の女學生（福洲毓英女塾生徒）

清國福洲の毓英女塾はメソジスト派の女學校にして生徒の服裝は上衣は支那式にし、蝦茶袴を穿ちたるものなり



平壤婦人會篤志看護婦會員





女學世界定期增刊
第五巻第六號
四月十五日發行

閨秀文壇

文學の功德

文學の功德や汎く十方世界の人類を陶冶して之を濟度す、殊に婦人に於て其の功德の大なるを見る。

文學は婦人に智識を與へ、品位を與へ、趣味を與へ、元氣を與ふる良藥なり、又た文學は婦人に限りなき慰藉を與へて鎭痛劑の功あり、そは婦人を苦痛より救ひ、寂寞より救ひ、煩悶より救ひ、ナミダより救へば也。

而も文學より來る光明赫灼の天使（エンゼル）は、熱愛を獻ぐる讀者を率ゐて、高く理想の鄕に遊ばしむ、實に文學を愛する者は幸福なり。

△旅順襲撃

交渉断絶して警報頻りなり、忽ち聞く海天の一角爆聲の上るを、連合艦隊舳艫相啣んで渤海に向ふ、夜海口を襲ふて劈頭奇捷を博す、飛報至つて、都鄙歡聲湧くがごとし。是を日露戰爭の第一紀念日とす。「天山雪後海風寒。横笛偏ニ吹ク行路難シ。磧裏征人三十萬。一時回レ首ヲ月中看ル。」（李益）

△鴨綠會戰

懸軍數百里、人馬韓山を渉る、崎嶇羊腸たり連旬の行程、軍旅の多艱人知るなし、忽ち見る大江の眼前に横はるを、眦を決して遠く虜營を望めば萬幕丘甸に連つて、兵氣蓊勃たり、夜警を聞いて前衛既に敵に近づくを知る。漫々たる大軍翼を張つて大江を渉り、左右挾撃して遂に之を拔く。

△南山激戰

遼南地窄つて峡を爲すの所ろ、一坐の丘陵海に臨んで立ち、四邊の展望千里を極む、古來征人唱へて天險と做す、砲火既に開かれて敵帥策を立つる速かなり、精鋭數萬兵を連ねて之に據る、三月楊柳未だ糸を成さゝるの時、天兵既に來る遼南の一角に、機到つて三軍齊しく進み一擧に此の天險を陷る、天險一たび陷つて、虜膽まづ悸き消ゆ。

△遼陽占領

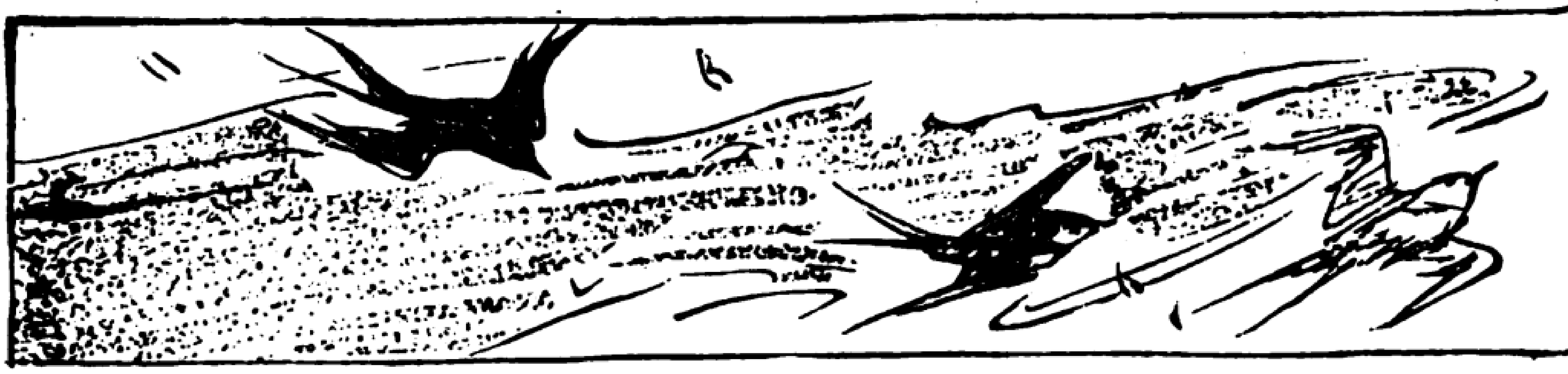
遼東地濶ふして山河の形勝最も雄偉なるの處ろ、糧運千輛、兵勇百萬、兩軍の決戰夙に宇內の目を矚する處ろ、時は秋高九月馬正に肥へたり、遼陽既に過ぎ去つて兵氣尤も盛んなり、三軍乃ち期を合し、營を撤して進攻日を重ぬる旬日、遂に之を拔く、惟惜む空しく長蛇を逸したるを。

△旅順開城

難攻不落、人相傳ふ、死傷幾萬屢々耳を驚かす、問ふを廢めよ旅順の壕深さ幾尋なるを、天兵意氣豪にして千仭の壑一夜に凌夷す。將軍一兒を喪ふて人相吊するの時、開城既に報じ來ッて新春の椒酒佳物に添ふ。『日落轅門鼓角鳴。千群面縛出蕃城。洗兵魚海雲迎陣。秣馬龍堆月照營』(岑參)

△奉天鏖戰

沙河の對陣既に九旬を過ぐ、兩軍滿を持して容易に發せず、忽ち聞く警報の左翼を驚かすを、兵團の惡戰遂に克く勝を制す、黑溝臺邊死屍猥籍、敵師まづ謬る策戰の第一機」、「天兵既に奉天の側背に迫ッて、虜膽まづ悸く、是時鵬翼既に成つて急攻連日遂に全く包圍の形を占む、死傷二十萬、俘五萬、虜軍の主力既に竭きたり。



小説

戰死

楠原しげ子

一

あゝ、兄様、僕の兄様は亡くなつた、士官の兄様は戰で死んだのだ。露助を討ちに行つてやられたのだ。僕の一人の兄様は——

あゝ、死んだのだから、皆、大勝利萬歳で凱旋つて來る時も、僕の兄様一人はもうかへらないのだとお母様が言つた。嫌だ〳〵、兄様は何故討られたのだらう此間來た新聞記者の小父さんは、兄様が亡くなつたのは、天皇陛下の爲だ、日本の爲だ、其代り、僕に早く大きくなつて、兄様の樣に士官になれよツてたが、あゝ、兄様も生きてゐて、二人とも大將になつて、而して露西亞の征伐に行く積だつたに……兄様は先に行つてやられて終つた。あゝ、殘念だ〳〵。僕の病中、兄様は、速く全癒らねば士官にはなれないといふ手紙を寄越したが、僕は今、此通りに全癒つて肥えてきたのに、兄様は居なくなつた。

僕の誕生日に寫つて送つた彼の寫眞には附箋をして滿洲から戻して來た、そしてあの裏に僕が念を入れて濃い墨で『肥えたしげ坊、九才、士官の兄様へ』と書いたのは雨の爲にでも濡れたのか、汚れて〳〵字もよくは分らない樣になつて居る

あゝ、僕の寫眞は態々兄樣の許へ行つたけれど、終に會へないで歸つてきたのだ。從卒からの手紙には、兄樣がやられた次の日、晩方についたので、すぐ、兄樣を葬つてある丘へ持つて詣つて與れた、とあつたのださうだが、兄樣は喜んで與れたらうか、病氣は全然よくなつて肥えた事が分つたゞらうか。寫眞を送れば眞の戰爭を見せてやるツて來たから、すぐ寫つて送つたのだに……あゝ、兄樣が死なゝいでゐてくれたら、軍服の胸の大きい支那の勳章や、奇麗な日本の勳章の下のポケットの中から、露助のうたれるのを見られるのだに……あゝ、兄樣と一緒に澤山の兵をつれて、大勝利萬々歲をやつて居るのだに……あゝ、兄樣は、僕を、一人ぼッちに、しッちまつた！

二

あゝ、兄樣は死んだ、既う歸らないのだ。嫌だなア。せめて僕の大好なあの小姉樣が生きてゐてくれると良いンだけど……そうか、又、彼の優しい僕を一番可愛がつて與れる京都の姉樣がきてくれると、僕は何んなに萬歲かも知れない。あゝ僕の兄樣が死んではあの姉樣はもう來て與れないのだか知ら。僕の家からは兄樣の大きい寫眞を贈る、京都からは彼姉樣のが來る。而して愈來てくれる事になつて、兄樣の都合の良い月日を問合してあつた。夫にいくら待つても返事がないのでお母さんは何したのだらう〱ッて毎日待つて居られたが遲くなつて「案外に遠くへ行く事になつたから見合してくれ、否斷つて與れ」と言つて寄越した限、もう夫で、彼姉樣は何時きてくれるのだか分らなくなつたのだ。僕は早く〱來て貰ひたし、お母さんもさう思ふンだといふので、ではすぐ來て貰へば良いにというても、戰がすまなくては仕方がないと言つた。あゝ、彼時早く來て貰はなかつた者だから、來てはくれられない樣になつて終つたのだ。あゝ、兄樣さへ生きてゐれば彼姉樣も乾

度きてくれるのだがなア。あゝ、くやしい!!兄様は何故やられたのだらう。忘れもしない、一番の電報は兄様がシヤウの報ありといふのだつた。夫に翌日の新聞には負傷とあつて役場の人や學校の先生や大悦で飛んできてくれ、前に見舞にきた人達は皆悦びにきてくれる。お母さんは何卒重傷でなければ良いがと許言つてをられた。僕は其日清水川へ釣に行きたかつたけれどもお母さんが無理にとめるので、翁方の勇一と墓山へ行つて遊んできた。晩方家へ歸ると客間には五六人きて話してゐる。居間ではお母さんと新宅の叔母様とが兄様の寫眞を見ては何處を討たれたのだらうツと案じてをられた。其時、案外に玄關で「電報」といふ聲がした。お母さんと叔母様とは眼を見合され、客間の話聲は止んだ。出てみると役場の人が電報をお父様に渡してゐる、皆其を見つめる、僕は立つてるとお父様が熟と僕を見られる、そしてお母さんも叔母様も呼んで來いと言はれるので一緒にきた、皆、並んで座つた。するとお父様が謂はれるには『もう開いて見る迄もない』とて開けようともせられぬ『だが負傷の様子かも知れない』と叔父様がいはれると先生が、披かれた。先生が披かれると走書した假字。あゝ、あゝ、僕にも分つたよ!!誰一人聲を出してよむ者はない。腕を組んで、皆、うなだれた。お母さんは急にたつて居間の方へ行かれる。叔母さんは僕の手をとつてお母さんの後へ、お父様も叔父様もたたれた。

三

其からといふものは悔の電報や手紙や毎日澤山くるのでお父様は碌々寢られる事もないのでお母さんは、御病後の體に障らねば良いがと心配せられる、叔父様は、もう來る人毎へ應接のため夜も晝も座られた儘、叔母様も毎晩きてはお母さんと談されるけれ共、兄様の事許で、泣かれるのだ。お父様や叔父様は「軍人になる事にした日から既う斯うなる積で居なきやならないのだから……」と謂つて居られた。雖然、僕は、二人、茶室

で話して居られるのをきいた、其時、兄様の聯隊長から來た長い手紙を讀んではなされたのだが、兄様は決死隊になつて少しの部下をつれて敵の陣の奥へ〳〵行つて探つてゐると部下は大抵死んだけど、兄様は脚をうたれた丈で、斥候の任を果して歸つた。そして其次の夜、軍醫の止めるのも聴かないで、今度は本隊の先登で案内しながら進撃せられた。あゝ、其時、兄様等の隊が山の上に出ると、敵は、すぐ大變にうち出して、三番目の大砲の彈丸は、丁度頭の上で破裂して……兄様の頭をつきぬけたのだと。そしてお父様も叔父様も默言つて終つて目をしばたゝかられるのであつた。けれど又、他家の人がくると「イヤ、御國の爲だ、敵は大國だ、日本の男は皆死んでも、何うしても此戰爭にまけてはならない。御國の爲に死ぬる事が出來るのは何より嬉いことだ」と謂はれるのだつた、又ある夜、お母さんを呼んで遲くまで話された事がある。僕は傍で寢てゐたが何でも「……他家にはまだまだ氣の毒な事になるのが多い……十分諦めて、坊を大きくして二人前の仕事をさせ……此兒の前で悲しくしてみせてはよくない」などゝいはれた樣だつた。お母さんは、もう、只、手巾で顔を掩うて――

四

其後ある夜中大變に門を叩く音がする、其が電報！電報！と謂つてゐる。お父様も「又何所か親類にでもか……」と驚かれたが、遺骨が營所へついたから受取に來いといふのだつた。嗚!!! 兄様は愈死んできたのか、出來る事なら片脚なくしても生きてくれば良いに……とお母様はいはれた。

遺骨を迎へには、お父様が御病後であつたから、僕が叔父様につれられて行つたのだ。仲よしの僕がゆけば必然悦ぶとお母さんはいはれた。

案内の兵士について、大きい〳〵、僕の學校なんかとは、また〳〵大きい、立派な建物の間を廻り〳〵して少し高い處の家についた、大きな靴拭で、能く拭うてはいると、其室には、僕の兄様の様な士官が大勢ゐる。何も皆兄様に似てゐる、僕は、僕の兄様も、あんなに謂つても彼の中にゐるのではあるまいかとよく見たけれど駄目だつた。あゝ、去年の春僕が二年級になつた休暇に一人汽車に乘つて遊びに來と兄様が言つてきたので僕は、あの大將の服をきてゆく、士官の兄様の許へだから僕も軍人になつて行くのだッても、お母さんは「坊一人では危ない」といふので何してもやつてくれなかつたが、あゝ、彼折きたものなら、僕は士官の兄様と一緒に此處等を歩くのだつたに、と思へば何だか悲しくなつて泣きたくなつてくる、其時、一人の士官が來るので仰つて見ると『うん、よく似てるッ』僕の頭を抑へる。そして撫でながら『君が滋夫君だネ、僕は君の兄様と一番仲よしだつたが、兄様は死んだねえ……併し天子様の爲だ名譽の戰死だよ、兄様が彼時よくやつてくれたので勝たれたのだ、兄様の仇は今に僕等が取つてやるよ。今日は今から皆でお祭祀をして、其から又、談さうねえ』と言ふのが矢張兄様の口振なのだ、あゝ、僕は何ういふのか知らと其士官の顔を見てゐると『あ、眼がよく似て……』と聲が變になつて外へ向いて終つたと思ふ時、後の戶が披いて、赤帽に白ヅボンで、大きい勳章を只一つ輝してきた、色の黑い恐しい面をした髯の將校だ、お父様のやうに白い髯が交つてゐた。士官が皆敬禮するので僕は、此が此營の大將だナと思つてみてゐると、叔父様と暫く談してゐたが、椅子に腰をかけて煙草に火をつけながら『成程、似てる。坊ちやん、此所へおいで。此小父さんと話さう』優しい聲でいふので、僕は、一寸も恐しくはなくなつて側へ立つた。すると笑顔で『君は大きくなつて何になるンだえ』僕の手を取つていうた。『僕は、海軍大將になつて露西亞征伐に行くのだ』『何して陸軍にならないノ、兄様も陸軍ぢやないか』『あ、兄様が陸軍だから、僕、海軍になつて、ふたり、挾擊をする約束をして居るのだ』『おう、其樣だつたか』

と髯將校の小父さんは言つただけ、もう、何もいはないで……

五

今度は僕等が入つて來た向の戸が開いた、澤山の黒い洋服をきたをば樣がきたのだ、士官や髯の小父さんに挨拶しては隣の室へ行つた。僕は婦人が何を爲に來たのであらうかと思つてみてゐると、一人、何でも、知つてゐる樣な、をば樣が、嫣然とやつてきて、僕の名を呼ぶのだ、何して知つてゐるのかと、話すのをきけば、あ、さうだ、兄樣の聯隊長のをば樣だ。兄樣からよく此のをば樣の事を謂うてき、寫眞も貰つてお母さんへ送つてきたのだ。兄樣の尺八とよく琴を合奏すあのをば樣なのだ、僕は『をば樣の寫眞は僕の家にもある』といふと、『あア、いつまでも覺えて居て下さいねえ……滋ちやんの事は始終お兄樣からきいてゐましたのよ。さア、彼室へ行きましよう。他のをば樣が澤山いらッしやいますから。あの、岡部さん、良う御座んしよう』と髯の將校にいつて、僕の手をひくのだ。髯の小父さんは首肯いた。僕はをば樣に連られて入口にゆくと、丁寧にお辭儀をした、多勢のをば樣が、皆、立つて赤の十の記のある妙な帽子被た頭を下げてくれた、僕は聯隊長のをば樣と並んだ椅子に掛けさして貰つた。すると、知らないをば樣が『お嫌ではありますまい』ッてお菓子を取つて呉れるので、『學校の先生が、お菓子を食つてはいかないと言ふた』といふと、皆、『オヤまアー』と顔を見合したのだ。新宅の叔母樣に似たのが『では之を見ましようねえ』といつて寫眞帖を持つてきてみせてくれる、『やア、これは天皇陛下だ』一番始めにあるのをみてかういつた『何して分つたノ』『僕の家にもあるから』『さう、よく覺えて居らつしやるのねえ』と言つたよ、次々にみてゆくと、髯の小父さんが之には澤山勳章をさげてゐる、兄樣と仲よしの士官もゐる。其次には、僕の兄樣のがあつた。兄樣は嬉し相に、笑ひかけてゐる。





愈々戰爭に行く前に寫つて家へも送つてきた分だ。みてゐると兄樣の強い聲が聞える樣だ。「あゝ、そば樣、兄樣はこゝをうたれたンだねえ」と額を抑へると、只「あア」と謂つた儘で他のそば樣もみな下を向いてしまつた。案外に喇叭の音がして、兵隊が澤山列んで門をはいつてくる。番兵が捧げ銃をすると前の士官も敬禮する。全隊の步調がよく揃つて、勇しいなアと窓によつてみてゐると、そば樣達もきた。士官が號令をかける、皆、とまつてむきかはる、士官が何か言つてる。それが、僕の兄樣全然なので、僕は、不覺『あ、あれが兄樣だ』と良いに……」といふた、僕の頸に抱きついたそば樣があつた。

六

兄樣のおまつりは、多勢の士官や兵や、町の人や、其から、學校の生徒が大變きて、したのだ。翌くる日、兄樣の大きい肖像の下に在つた、あの、小い柩を、僕が持つてかへる事になつた。澤山の人が見送つて呉れて、生徒や兵や兩側に揃列んで、僕の人力車が前を通ると、最敬禮！といふ號令をかけて皆かゞむ、兵は捧げ銃をし、喇叭手は長い〳〵のを吹いた。あゝ、僕は今、兄樣とお母さんの許へ歸るのだ。兄樣は死んだので一人は行けないから僕と一緒に行くのだ。あゝ、兄樣は何所へ行つたつても居ないのだ、あゝ、そうだと思ふと、今迄は、勇しい〳〵者だと許思つてた兵隊の喇叭も、何だか寂しい樣で、つらい樣でたまらなかつたが。あゝ、まだ其より悲しかつたのは、兄樣の葬式の時だ、短い髮が少しと、小い爪が二ツ三ツとを棺に入れたのだ、それが僕のあの大きい強い兄樣、士官の兄樣といふ事なのだ。皆、佛間に集ると澤山の住持が、赤や、青や、色色異つた衣をきて珠數をもみながら御經を唱へる、お燈明がトボ〳〵して位牌の前の、兄樣の寫眞や、今度送つてきた金鵄勳章や他なのがピカ〳〵する、蓮乘院の和尚が、何か口の中で唱へて、たく香がズーッと昇ッて

末は散つて家中匂ふ。やがて和尚が靜かに〳〵念佛を始めると多勢の和尚も、お父樣も、お母さんも、そち樣やら、そば樣やら、もう、皆唱へ出した、あゝ、此時だ、けさ半分以上も散つたらしいお庭の紅梅の下で樂隊がまことに靜に〳〵吹き出した。あの聲は、思出しても、悲しい樣だ、何だか腹をえぐる樣だつたが、あゝ、あれから僕は樂隊をきくのが嫌になつたのだ。何故か嫌になつてしまつたのだ。僕の學校の運動會の時に來る樂隊も每歲嬉しくて大悅びだつたに今年は、何してかつらい事許思出されて一寸も面白くも、勇ましくもなかつた。此間も虛無僧が來たので、お父樣は『之は本ものだ』ツてよび入れられた、年寄の大きい男で、茶を汲んだり話をしたりして、兄樣の位牌へお燈明をし、そして、吹かせられた、虛無僧は上つて座つて、荷物の中から袋入の赤い樣になつたのを出して吹き出した、お母さんは佛壇の前に座つてきいて居られるので僕も傍に座つた。兄樣は此の笛の音をきいてゐるだらうか、尺八が大變好だつたのだが喜んで居るだらうかと見れば、兄樣の寫眞は矢張生きてる樣だ、其に僕は何だか心細くて自然に淚が出て來る。お母さまは瞬もしないでみてをられのだが、笛が案外に低くなつて消え相になつた折、急に前に伏して終はれた、僕は驚いて、お母さんを呼ぶと『お父樣にさういつて、もう、笛をやめて貰つてくれ、きく氣にはなれない』といはれるので、書齋に行つてみると、お父樣は机に倚られたまゝ、俯向いて居られた。尺八は又靜かに高くなつてゐた。あゝ、つらかつたよ。

七

あゝ、彼折から餘程たつて僕の家は一層淋しくなつたのだ。お母さんだつても、もう、琴は一度も彈かれないのだ。兄樣がゐる時はよく合奏したり、きかしたりせられたんだけど。此頃はさういふ事は一寸もなくて何

かすれば兄樣の事許話すのだ、今日も新聞がきてから話が出た。はや長く續いて兄樣の事が詳しく出るのだが今日は、小さい折から今迄の寫眞が澤山出た、其側には、兄樣の大きいのと並んで僕のもあの寫眞が出た。そして、僕の『士官の兄樣へ』といふのも僕の字の通りにうつし出した。其から、兄樣が冠てゐた帽の圖もあつて、其には、星章の傍に指が入る程焦げた樣な孔が開いて後には銅貨位の太さで、內側は血の爲に固まつてゐる事まで書いてある。あゝ、又、悚然とするよ。兄樣の荷物が戰地から歸つてきた時なんざア眞實に情なかつた。每年夏休暇に歸つても、荷物は先に送つて兄樣自身はいつも、納涼舍へ行つてお月樣のお咄なんかしてゐる時、案外に歸つてくるのが癖だつたが、今度はもう、荷物はきても兄樣が後から笑つて歸り、荷物の中からお土產を出してくれる樣なとはないのだなア、と思へばつらくてたまらんかつたよ。そうして軍刀は僕の家の祖父樣や其祖父樣や代々お庄屋の役についてからでなくては佩用なかつたといふ大切なので作つたので僕がまだ學校へ行かないで小姉樣が京都の學校から始めて歸つた夏だつた、支那で戰があつて兄樣は英吉利や露助と共に攻めた折、ちやん〳〵を斬つてやつたら頸が前へ落ちても骸許は走つたなんて謂つたが、今度は憎い憎い露助の生首を斬る間もなく、兄樣がやられたので『此刀も殘念だらう』とお母さんがいはれる、叔父樣はぬいて持つてゐたが少し錆びてゐるのが目についた『兄樣がやられた時には此刀をぬいてゐたに違ないが若し此錆は其折についた血の爲ではなからうか』といはれた。お父樣はぬいた儘此刀を受取つて何か考へては太息をせられたが、お母さんが解いてをられた外套から、何か音がして足下に落ちた物がある。あゝ、其れが……

八

其が此帽子だつたのだ、兄樣がやられる時迄きてゐた軍帽なのだ。叔母樣も其折きて、何ういはれたか、兄

樣がも少し小かつたら彈丸は當るのぢやなかつたらうツて――

あゝ、戰地からは面白い勇しい手紙をよく寄越した兄樣は死んだのだから、もう歸らないのか、此帽は歸つてきても。軍刀は歸つても。元氣な新聞記者の小父さんも此事をきいて眼を拭つてゐたが、けふは此樣子を詳しくかいてゐるとか、そして行李の中に尺八があつた事から兄樣の手紙の中に『戰爭がすんで月が照つてる山の上で吹いて大變面白かつた』とあつたのを其まゝの字で新聞にかいてある、あゝ兄樣は尺八が上手だつたけれど、もう駄目だ、お母さんは、けふの新聞のお終には僕が早く大將になつて露助をうちにゆく事までかいてあるよといはれた、あゝ、僕は兄樣と二人して攻める約束だつたのに………

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

うん、さうだ、兄樣は死んでも、屹度、僕が大將になつて露助征伐にゆく折には、加勢して與れる、去年の夏だつても、墓山で戰爭をしてゐると、兄樣もやつてきて、色々謀略を敎へて與れたんだもの。僕が攻めに行く時にも必然、僕に加勢してくれる。さうだ日本を護る神樣になつてゐるのだから豪らい、兄樣は豪いのだ、僕を護つてくれたら僕は何でも大勝利萬々歲だ。だからお父樣に願つて彼の刀を以て、兄樣を居なくした露助を討ちにゆく。斬つて斬つて斬り殺してやる、其首は、いつか見た芝居の樣に、お墓の前へ供えるのだ。すると、叔父樣は、あの金鵄勳章をくれるよ。さうだ、さうだ、僕は兄樣と二人前の大將になるのだ、兄樣も喜ぶよ、褒めてくれるよ。

僕はもう、何も考へる事はないのだ、其より今から、墓山へ遊びに行かう、お母さんも行つたつけなア、僕が行くと兄樣も淋しくないツて、けふ勇一はお母さんの用達に行つて翁家にはゐないのだから僕一人で行かう。裏のお庭に咲いてるあの花を供へてやらう、あの紫の花は兄樣がうゑたのだ。そして今夜、お母さんは京都の

姉樣へ手紙を出すと謂つてたから、僕は姉樣へも紫の花をやらう。彼姉樣は、小姉樣のお墓參りにきたときもあれをたてゝやり、自分も好だからッて持つて歸つた程だもの。

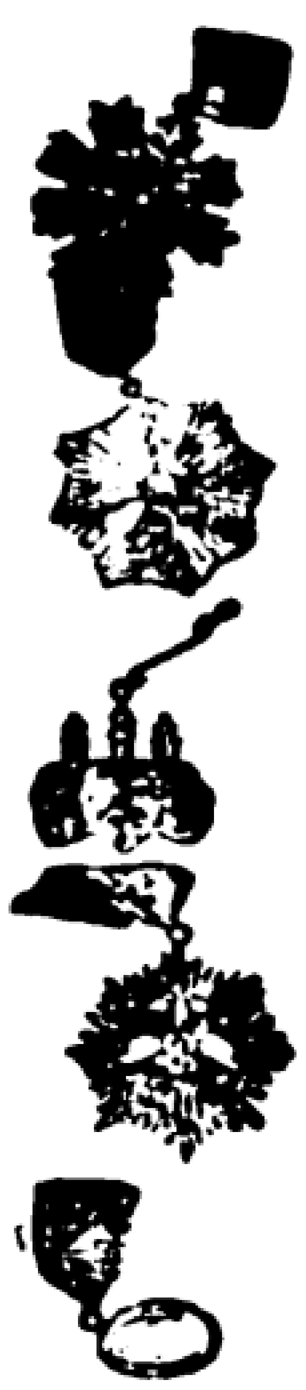
僕は、もう、考へないのだよ。今から兄樣のお墓へ行つてやらう――　兄樣がくれたあの大きいサイフは何所にしまつてあるか知ら――

評　軍人の兄を持てる弟が、其兄の戰死せる一家の哀れを叙べたるものなり。十歲未滿の少童の口より這般の悲しき光景を描き來つて歷々躍如として見るがごとし文中一の悲字を用ひずして悲愁哀婉の情、腸をゑぐるがごとし、誠に入神の文といふべし。今日空前の大役に當つて這般悲哀の情を同うせる家庭世に幾萬といふを知らざるべし。（某）

第一等　賞金參拾圓

岡山縣淺口郡西浦村石山西本內

楠　原　し　げ　子



ひとのこゝろ

白梅女史

一　たゞ兄妹で

「兄様、それでは妾どうしても、どうしても、お亡くなりなすつた増美様に濟まないやうな氣がしてよ。」

霄に星なき春の深更。

椽に端居近く、簷端越、晝見れば手入の能く行届いてる庭の木立の、鬱蒼と茂りあつてる其中に、一際淡然と白らんで見える櫻の影を、悠然として眺めてゐた兄の横顔を見詰めて、

「ですから兄様、どうか照子様をお貰ひなさることは……お止しなすつて頂戴よ。」

振向いて、一寸片頬に微笑んで兄の孝一は、

「はゝは、浦ちやんは大層僕の意見に反對論を唱へるんだね、僕が照子様と結婚する、とすると……何如いふ譯で増美様に濟まないんだ？。」

「その理由……ですの？。」

「然あ。」と輕く點首く。

「その理由……　妾申上げない方が却つて……なせつて妾、其件申上げると兄様は又いろ〳〵の事お考へになりますから……。」

「どんな？。」

「どんなつて妾、兄様！　猶且申上げるのは止しませうよ、申上げると又兄様のお氣質ぢや、屹度神經をお起しなさると惡いから……。」

「浦ちやん、お前の云ふことは些とも解らんぢやないか、増美様と僕と、別段奈何いふ關係があつたと云ふ譯ぢやなし、僕が照子様を、よしんば貰つたところで幽冥界で増美様に恨まれる筈もないぢやないか、それに……。」

と云ひかけて、兄の孝一は。。朝日を一本摘んで火を點けやうとすると、煙草盆の火が消えてゐた。

「オヤ、火が消えて了つて……？。」

覗きこんで、取りに起たうとするのを、

『婆やをお呼び、……婆や！　婆や！。』と二聲呼ぶ。

『最う先刻寢ちまひましてよ。最う深更なんですもの。』

煙草盆を持つて起立ッて、障子をスイと開けると、室内の空氣は温乎として面を打つて溢れ出た。代りに庭面の冷淸なのが水のやうに流込んで、薄暗く心を細めて置いた机の上の洋燈が、小さな炎を微かにゆら〳〵と。

やがて妹は、火鉢の火を移して、煙草盆を兄の傍に叮嚀に置く。

二　光榮にのみ

『浦ちやん、僕の先刻から云つてる事も無理は無いだろ、考へて御覽よ。』

縱へ昔は奈何だつたつて、現今ぢや斯麽に零落れちまつて、親讓りの財產といふのも此の邸宅ばかりだし、だから、僕はどうしても玆で一番ウンと奮發らなくつては、從來の親類や知人や、社會に對しても面目無いぢやないか。

ところでだね、今の世の中は御覽、黃金の光と權門の力と、此の二つの勢力に依らなくつちや奈何する事も出來ん。

だから僕のやうな、黃金の光も輝いてゐなければ、權門の家にも緣引のないものは、迚も一生うだつのあがりつこは無い理ぢやないか。云ひかへて見りや、這の僕の身體と、僕の大事な妹の浦ちやんの身體と、此の二つの將來の幸不幸は皆んな僕一人の今後の處世法奈何に依るんだ。その僕がね、悲しい事には黃金もなければ、權門との關係もなく、一生貧乏學士で埋れて了つては、……僕は殘念で殘念で、到底死んでも目を眠る事は出來んのだよ。

浦ちやんだつて御覽、もう花の盛りの芳紀なのに、僕が斯樣な有樣で愚圖々々してゐた日にや、何時まで待つてゐたッて、良緣が迎ひに飛んで來る事もなし、……僕は一番これが心配になつて堪らんのだよ。

で、僕は先日、情なかつた事があつた。

恰度、先週の土曜日、大藏省の秋山が轉任する其の送別會の席で、村越の奴失敬な事を云ひやがつた！尤も大變に醉つぱらつて居たから僕も彼れの失言を赦してやつたやうなもの丶、……浦ちやん、お前の事を！。』

自分の名を呼ばれて、妹は思はず詰となると、兄は鳥渡唇を嚙んで、

『斯うなんだ。草野君！聞けば君の御令妹は大いに美人ださうだが、秋山君に嫁つちやア奈何だね、秋山君も確か一度君の御令妹を音樂會か何かで垣間見たことがあるさうだが、非常に褒めてゐたから、決して異存のある氣遣ひはない。僕が媒介をする。僕が大いに月下氷人になるから、是非とも秋山君に遣りたまへつて、僕の鼻先に坐り込んで膝を叩いて、僕の手首まで握つて。

那麼ことは奈何でも好いやうなもの丶、其次の言葉が僕の癇癪に障るぢやないか、村越奴！秋山君なら君よりは上役だし、失敬ながら君のお家から考へて見ても決して良縁で無いとは云はれんだらう……ツて、村越の奴め失敬な！　餘り我を馬鹿にしきつてるぢやないか。

秋山に嫁つては奈何だな位なら未だしもの事！彼の秋山の大酒家を指して、良縁だとか、秋山君は上役だとか、餘り指圖がましい云方なんで、僕は癪に障つて癪に障つて、

其晩は寢ても眠られなかつたのさ。』

と稍々激してゐた調子を少しやはらめて、

『浦ちやん、僕はねえ、自分が立身しないと最愛な妹まで輕蔑されて、其の神聖を害されるやうな氣持がして堪らないよ。でねえ、僕は惟ふのに、何卒して僕と最愛の浦ちやんと、この二人の威嚴を毀損されないやうな地位に早く達したいと思ふの。其かはり其城に達するまではあらゆる凡の苦痛を忍ばんければならん。況んや他人の批評、手段の善惡、そんな區々たる事は一々氣にかけては居られない。光榮ある地に立てから悠々振向いて御覽、過去の缺點も却つて逸話となつて

自分達の歴史の裝飾になるやうな世の中だからね。結局は、人は豪くならなくつては辛いことばかりの世の中だもの！。」

と孝一は歎息しながら、

「だから僕が照子さんと結婚しやうと云ふのも畢竟黄金に近く政略の爲めで、僕の立場になつて考へて御覧、亦た故なしとせずぢやないか。」

三　その戀人は

語を止めて、孝一は官製煙草を又一本。赤い螢のやうな光は、薄色の夢のやうな景色の中に彷徨うてゐる、今、夜の幕は彌が上に重なりあつて、輕い柔かな春の空氣もしつとりと重く澱んだ中を、一團の煙草の煙はしづ心なく、ゆたり〱と立昇る。兄のぴたりとチックで分けた黒漆の髪は宛ら煙の中に仄かに浦島の翁のやう。

毎夜樅の葉越に輝めいてる隣家の柳生邸内の瓦斯燈も、今夜は何時の間にか消えて了つて、見渡すかぎりの物象は、皆な是れ春の香に醉つて眠つてゐる。お庭の枝垂松も、若楓も、將た梅も桃も連翹も、それから苔の一杯生へてゐる捨石も、好い心持ちさうに眠つてゐる。その中で、姉妹の話を聞いてゐるのは、一重の色の淡い、哀れげな、少さな山櫻ばかり。兄の談話に熟と俯向いて聽いてゐた浦子は、稍々少時して、

「妾……最う兄樣のそのお意志は整然と存じて居りますけれど……。」

と鳥渡語間を置いて、

「照子樣だけは……情願お止し遊ばして！しませんとお亡くなりなすつたますみ樣に、妾が、妾が、どうしても濟みませんのよ。」

深く右手を懷中に入れて、詰とばかり振仰ぐ。

「奈何云ふ譯で？。」と喫差の朝日をグイと灰の中に揷込むと、

「それがね、眞箇にお可哀相なの、增美樣はお亡くなりなさるまで甚麼に兄樣の事を思つて居らつしやつたか……。

それは些とも兄樣は御存知が御座いますまいし、妾も斯樣な事申上げては却つてお惡いから申上げませんでしたけれど……。』

と何やら又躊躇する。

『あゝ其れで……??。』

と孝一は澁面作つて怪訝な顏。

云はう歟云ふまい歟稍々暫時。黯淡たる庭面を眺めて、浦子は漸く思ひ定めたやうに、

『今でも妾、斯うやつて熟とお庭の景色眺てゐますと、增美樣の俤が歷然と見えますの。恰度左樣よ四月の十六日!=兄樣が福島に出張なすつてお留守の時=雨が霏々降つてた晩よ、增美樣のお亡くなりなすつたのは……嗚呼お可哀相に、兄樣は些とも御存知はないけれど。

兄樣!!!。』と語氣を强めて、『眞箇に兄樣が熱情を捧げてゐらつしやつた方は、增美樣一人と妾思ひますの!!。』

『ふむ!。』と腕拱いて孝一は俯向く。

『增美樣の臨終の際、妾甚麼に悲しう御座んしたでせう!　恰度呼吸をお引取りなすつたのが曉方の三時半でしたから、妾が最後のお言葉を交したのは恰度今時分……十二時過よ。妾の手をお握りなすつて仰有るのに、浦子樣、もうお死別ねえ、貴女とは眞箇に姉妹のやうに仲好くお交際して來て、妾は甚麼に幸福でしたろ、妾は兄弟と云ふものも無く沙漠を渡るやうな淋しい淋しい境界を暮して來たのが貴女のお蔭で世の中を樂しく渡る事が出來ましたのよ。其のお禮は、死ぬ前に今幾重にも〳〵申上げて置きますよ、……つてね兄樣!增美樣は妾の手をお握りなさつた儘熟々お泣きなすつて!

妾も泣きましてよ。

恰度夜更でしてね、病院ですから倘更森閑として淋しいのを、壁も天井も眞白な大きな病室に、眞白な被蒲團をおかけなすつて、增美樣は白フランネルのお寢間着でお休つてゐらしつてね、髮の毛がはら〳〵と括枕の上に亂れかゝるもんですから顏の色は倘更蒼白く

其れに淡い死斯の光が映つてゝ、其淋しさつたら、妾は嗚呼是れが普段お壯健だつた時の増美樣か不知と思ふと、もう心細くつて〳〵、自然に涙が溢れてきましたのよ。

それで増美樣は「あゝ！。」と苦しさうな溜息をお吐きなすつて斯う仰有つたの。

浦子樣妾ね、最う貴女とお死別れしなくつちやならないんですから、貴女情願妾の云ふ事を聞いて頂戴ねつて瘦細つた指で妾の指を弄りながら、浦子樣、妾の申上ける事、決してお怒りなすつちや可厭ですよ。妾……妾……貴女に此事ばかりはどうしても申上げて置かなくつちや死なれ無いのよ。妾眞箇に！貴女に斯樣な事申上げるのはお耻しい次第なんですけども、どうせ最う亡い生命なのですから、最う思ひきつて申上げるのよ。どうぞ！ですからお惡くお取りなさらないで頂戴！あゝ妾……妾……の此の病氣の原因は妾の心柄から……その悲しい情ない心の起つた原因は猶且 妾の此の病氣よ。ですから妾の此病氣は妾の生命ばかりでなく妾の戀……戀までも（その時頰と顏をお赤らめなすつて）戀までも奪ひ取るのですもの!! 噫！妾眞箇に不幸だわ!!つて潸然とお泣きなさいましたのよ。兄樣！増美樣の戀人つて誰樣ですか御存知？あ、其りや兄樣なのよ！」

「ふむ!!!」

愕くと、拱いてゐた双腕が解けて、膝に辷りおちた、庭には颯々と夜風が通ふ。あはれ朧ろの落花！

四　人のなさけの

「看護婦つて者は比較的に呑氣なものねえ、用事があつたら起して下さいつて、何處かに寢に行つて仕舞つたのよ。後は二人つきり、増美樣は徐かに胸の間に手をお入れなさると、スルリ落ちたのは兄樣のお寫眞なの。

蒼白い顏を眞赤になすつて、斯う仰有つたの。眞箇に、浦子樣こんな無躾な仕方に、貴女お怒りなさらないで頂戴よ。未だ何時までも生命があるんなら、妾の

秘密は決してお知らせ申し度くは無いんですけれど、最う妾は貴女にお死別仕なくつちやならないんですから、耻も外聞もお打明け申しますの、本統は妾、萬望して貴女の眞成の姉樣に成りたかつたのよ。……つて跡は止度なく涙に搔暮れて、其の間隙々々に苦しさうな咳をなすつちや、かつと眞赤な血をお咯きなさるんですもの、妾奈何して好いやら……。背中を撫つたり寛げた胸を搔合せて差上げると、增美樣は宛も苦しさうな幽かなお聲で、斯樣な人の厭がる病氣が妾に無ければ、切めて妾の衷情を貴女から申上げて戴きたかつたのですけども、其れも出來ずに妾は死んで了ひますのよ。情願妾が死んだ後で、浦子樣お願ひですからお兄樣の此お寫眞は妾と一緒に……つて又潸然とお泣きなすつた時の其のお顏、今も妾眼の前にちらついて居りますの。

嗚呼眞成にお可哀相だつてよ……。」

「あゝ然うだつたかい、僕は些とも知らなかつた‼」

孝一も異樣の感に打たれて太息を吐いた。

「暫時すると、妾何だか疲勞れたやうですから少し睡眠みますからつて、眞の僅少の間靜としつ居らしつたの、すると其中何だか御樣子が變なんで妾は恟惶てゝ看護婦を呼ぶやら、增美樣のお家に使者を飛ばせるやら立騷いでた中に遂々！曉方の三時頃……‼

本當に、ですから增美樣は死ぬまで甚麼に兄樣をお慕ひ遊ばして被在たか。妾左樣思ふのよ、如彼なお溫順しい方の事ですから、嘸ぞ甚麼にお辛かつたらうと妾本統にお氣の毒でお氣の毒で堪りませんの。

それを兄樣は！功名心にばかりお熱心りなすつて、愛情の無い結婚を照子樣と然さらうなんて、妾奈何してもお死くなりなすつた增美樣に濟まないやうな氣がいたしましてよ。兄樣！」

孝一は答へなく、又腕を拱いて振仰いだ。闇の夜櫻誰人やらが引く裳裾の香さや〳〵と、魂魄のやうな微風に揺ぐと、浦子は凜乎として、

「兄樣、妾左樣思ひますの。增美樣のやうな方が兄樣の奥樣だつたら、嘸ぞ家庭が平和に治まつて行くでせ

うと。雖然噫最うお亡くなりなすつて了つて、本統にまアお可哀相にねえ！妾何だか未だ彼の方は現世に奈何してもお在でなさるやうに思はれますのよ。其れこそ乾度！増美様のお身體は死んでも、魂魄が何時でも兄様のお身體の周圍を護つてゐらつしやるに違ひないのですわ。

兄様が、此節大層御壯健にお成りなすつたのも、乾度彼の方が陰身に添てゐらつしやるからに違ひないわ！ですもの、縱へ照子様のお家が何位お金持だつて、御當人が如彼な跳揚りの當世向の女學生なんですものほんの唯だ兄様の御風采にばかしお騒ぎなさるんで、決して増美様のやうな、心の底から濃な情愛があるんぢや奈何しても無いのと、妾奈何しても左様思ひますのよ。

其れに兄様は妾の事まで御心配して下さいますけれど、妾は一生西洋畫で以て立つ積りなのですから、それさへ修業させて頂ければ、別に何にも希望も無いので御座いますの。情願妾の事は御心配下さらずに、兄様こそもつと御緩然とお探しなすつて、増美様の再生つたやうな方をお娶ひなさるやうに――決して彼んな照子様のやうな虚榮心ばかり強い可厭な方をお娶ひなさる事は情願お罷め遊ばして……妾、お願ひなんで御座いますのよ。』更がふけて、頭腦が過敏になつた故か情に激するまゝ妹の浦子は、平素の無言にも似ず日頃思つてゐた事を皆な云つて了つた。

初めて驚く、噫自分のやうな者を如此慕ツて呉れた女があつたのか。苦しみ！、それは死に垂んとするまで己れの懷しんでゐる男に、己れの戀の片言なりとも云ひあらはす事を爲なかつた嗚呼その苦しみは、何程であつたらうか。女ながら、弱き女ながら！嗚呼その弱き女ながら、最も婦人の生命とする戀愛の發表すら爲ずに徐かに瞑目したので、恥しい！六尺の體軀を抱いた自分が、片々たる虚榮の潮流に將さに推流されんとした其の腑甲斐なさ！生きた己れこそなか〳〵に亡き増美様に對して耻しいきはみだ!!

長いあひだ漠々たる功名の原野に疲れきつてゐた法

學士草野孝一は自らなる歎息「嗚呼！」を洩らした。此の長歎息を洩らした其刹那こそ、彼れが偉大なる眞の愛情、眞の平和の光明を認めた瞬間ではあるまいか。曉近くや、しつとりと袖に重たき露の雫、孝一は亡き女の俤を招いて、人の情の限りなく淸けさに泣いたのである。

五　復活の曙光！

一夜を眠ずに語り明して、あまりに腦神經を疲らかせ果てた彼れは、朝嵐に面を洗ひ淸新の氣を吸はんと曉告ぐる鷄の聲と共に、そゞろに獨り策を曳いて彷徨ひ出た。

一帶の小徑不動坂に盡きて、見渡せば眼界豁然としてひらけ、道灌山の森、田端の里は宛ら薄き繪絹のやう。

露は草葉に、蝴蝶は菜の花に、互ひに深き縁を叩ぎながら眠つてゐる。孝一は頭痛する頭を押へて杖打振り〳〵歩みゆくに、朝霞小川の如く、横さまに流れ流れの底より忽乎として雲雀一羽、朝の歌を奏しながら舞ひあがる。

と思ふと、空の色次第に榮えて、ほの〳〵見ゆる旭日の光。杉の木立の頂きは、金色の炎に輝く。

耳を欹つれば、告天子の他何の聲なく、最も靜けき自然の園生に、今ぞ崇高なる日の御子の出御し給ふ。

「復活の曙光！」「復活の曙光！」

孝一は頭を擡げて、杖打振ッて叫ぶと、傍の菜の花から同じ色の蝴蝶がひらりと飛びたつた。

昨日まで、否な今曉まで、黃金の光は希望の光と一致してゐると確かに信じてゐた彼れは、愛の靈光に融化されて、自然美の崇高なるに轉た恍惚として、新生活に移る瞬時の間は、自ら醉へる心地であつた。

六　人工美もて

我家に歸るや、

「浦ちゃん、お前が今年の秋展覧會に出す好い畫題を今朝僕は發見して來た！」

とあわたゞしく、床の中で、これも重い頭を抱へてゐた浦子は、枕を立てゝ起きあがッて、
『兄様何なの？』可愛い眼で後半は笑つた。
『復活の曙光と云ふ題さ。朝霞が棚曳いてゝ、野や森や、畑や百姓家が薄淡然と見える。其處に旭日の光が淡紅色に雲間から映るんだ、斯樣な佳い景色こそ畫題に取らなくつちや他にありやしない。』
『ほゝほ、其景御覽なさりに、戸外へいらしつたんですの？いやです事ねえ。』
『これが不可で、他に好い畫題があるものか。』
『兄樣、それよりか伺う少時お眠みあそばせよ。今日は貴郎、照子樣と御一緒に小金井に被行るお約束なんぢや御座いませんか。』
『然あ左樣だつたなア！』
孝一はハッと思ひ出して苦しさうに叫んだ。我れながら餘り淺猿しい財婚の豫備！今更恥入つて穴へでも這入りたうなるのに。
　茲時數時を經れば、彼女の玉の腕は自分を拉して、花の白雲鎖す中へと奪ひ去ることか、我れは靜かに決心を固めねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

　ふりはへて海老茶の裳裾長く、高慢の御面に厚化粧濃艶と。苜蓿葉の襟止、橄欖樹色のリボン、よろづ時流に遅れで菫花の香は庇髪に高く、細金線の素透眼鏡越に、誇揚の眼尻憎たげな照子は、今日を晴れと盛裝ッて草野家へ訪れた。
　あはれ彼女は、外面の人工美もて、男子の心意を奪ひ得るものと信じてゐたのであらう?!

評　文は妙齢の筆として元より稚氣を免かれずと雖も、一篇の結構よく社會、人事の巨細に通曉して人情の機微を寫出したる處敬服に堪へず。

第二等　賞金貳拾圓

横濱市戸部町三丁目百十九番地　松居もと子

美術家

一

深山撫子

忽ち眼前に現はれ來る戰塲の光景。一隊を指揮して、奮然、壘內に躍り込まむと、勢こんで、進むとすれど、手足動ず、こは如何にせし、無念なりと、力任せに、もがけども、焦れども、思に任せず、今は是迄と、部下に向て、大喝一聲「突込めッ」と叫びし、我と我聲に、驚いて、覺むれば、こは如何に、敵壘は、あらず、部下はあらず、只これ野戰病院の、一室であつた。

露山少尉は、夢さめて、淋しそうに、四邊を、見廻した。枕元に、有た看護手は、ツト立て來て「少尉殿、御目覺めになりましたか、只今、朝食を差上ます」「ウム、何時だね」「ハイ、丁度九時半です。」答へながら看護手は、暖き、ミルクを容れたる、コツプを持て歩みより、靜に管持ちそへて、此重傷者に、朝の食事を、進めるのである、コツプのミルク、未だ半ならず、少尉は、早くも管を放して『もう好からう』看護手は、痛ましげにチラと、少尉の顏に、目を走らせたが、其儘愼んで、器を收め、今度は、驗溫器を、とつて再び病床の傍に歩みよつた時、ドアが音なく開かれて、そつと半身を、現はした白布を被つた一看護人そつと、患者の方を見やつたが、少尉の目ざめて居る樣子に、足音盜む樣に、這入つて來た。一葉の、名刺を捧げて ベツトに近き「少尉殿、只今此方が御見舞に見えました」「誰れだね」「八中隊の小泉大尉殿であります」「ウム、こちらへ お通し申

せ「イエ最うお歸になりました」少尉は少し氣色を損じて「どうしてお通し申さなかつたか、仕方がないな、よし。」

看護手は、チラと其目を見合せた、露山少尉は、重傷の故を以て、面會は、軍醫が一切、許さないのである

少尉は知や、知らずや、再び云はず、其儘目を閉ぢた。

看護人は、名刺をおいて立ち去る。殘れるも、體溫を計り了つて、日誌に書つけ、にじつて有た毛布を、一寸直して、足音靜に出去た跡、室内は、又元の、靜さに戻て、明方から、頓に出た、風の、窓外に、獨り、荒る計りである、日光はきら／＼と、窓にさす。

稍あつて、少尉は再び目覺めた、イヤ目覺めたのではない、少尉は苦しき其胸中の煩悶に堪えかねて、寂寞たる其瞑目を敢えて續け得ないのであつた。眼を開くと同時に「あゝ殘念だッ」と只一言、ホッと息して、沈と天井を見つめたが、其面には云ふべからざる、苦悶の色が、あり／＼と見られた。昨日の夕、二龍山大突擊の時、即ち此重傷を被ぶつた時、擔架に其身を横へて、自ら致命の傷と悟た時から、深く／＼其頭に、宿た精神上の大苦悶、少尉は之を逃むとして、昨夜來、又更に、別途の煩悶を續けつゝあるのである。身體の苦痛、こは今の少尉にには物の數でもない。

あゝ國家の爲に、戰塲に出で、傷を受けて野戰病院の厚き看護に其身を托せる人の、其大負傷も物の數ならぬ、苦痛とはそも、如何なる惱みであらう。

二

露山少尉、名は六郎、一年志願兵出身の豫備少尉で、後備第○旅團の編成さるゝや、選ばれて之に入り、攻

國軍の、〇〇〇隊として、慘烈なる幾多の戰を經て、しかも身に一彈を受けざりし武運芽出度き人であつたが昨日二龍山砲壘、奪取の時、遂に、此重傷を被むつたのである。

少尉は、靑ざめた面、光りのない眼差に、沈と天井を仰ぎつゝ「あゝ殘念だ、殘念だなあ。己れは此年で、こんなに早く世を去るとは夢にも思はん。思もかけん事であつた。あゝ殘念だなあ。

忘れもしない、今年の一月二日の夜、伯父の宅へ年始に行て、立派な座敷で年酒を始めながら、いろ〳〵伯父と話したが、其時伯父は、お前洋行したくはないかと聞いた、あゝ彼の時、自分は思はず盃を落したつけ。

己れは實に、膝の進むを、覺えなかつたのである。あゝ、繪畫研究の爲に、佛國留學、これまで夢では幾度かみた。然し、今度は夢ならず、金力ある伯父の口から、確に聞く、其言葉、盃も落さう、膝を進めて德利も倒さう。

又夢ではないか、否々、正しく現實、現實だ、こゝは伯父の座敷ではないかと。あゝ、僕は天にも登る心地がしたのであつた。

其時伯父は云た。お前の阿母さんには、昔、己れは非常に迷惑と心配をさせた、己の、今日あるのも、其一半は妹の、お前の阿母さんのお影なんだ。だから己れは、其恩返しに、お前を立派なものに爲なければすまん學資はいくらでも出す、阿母さんも引受けた。一番外國に行て充分、勉強して、名を擧げて、一度零落した露山家に、昔の花を咲して與れと、夫れから昔の話をいろ〳〵僕に、して聞かせて、遂には氣丈の伯父が涙を泛すのである、僕も其時つく〴〵と、おぼろげの記憶に殘る盛であつた我家の昔を思ひ出して、そゞろ涙のさしぐまるゝのであつた。

三

我は、加賀の國、大聖寺に、名高き富豪、露山家の嫡子と生れたのであつた。世が世ならば、荒き風にも當らぬ、我は、大事のふところ子、浮世の、苦勞も知らで過せる身であつたが、幸なくして、端なく家の零落に逢ひ、同時に、父を失つた。

我は其時八歳の春を向へた計り、母はまた、廿五の若さで有つたのだ。

大聖寺は町だと威張つても、戸數は僅に千にも滿たない土地の、殊には知名の家柄であつた丈け、猶、面伏で、一寸用たしに、出るにも夜を選ぶと云ふ始末、母は堪えかねて僕を連れて遂に他國に移住したのである、其先は何處、即ち攝津高槻在だ。玆は我乳母の古里であるのだ。あゝ我母は僕を育つる爲に、實に云に云はれぬ艱難辛苦をせられたのである。

母は口癖の樣に云つた「六さん何でも成長くなつたら、立派な者になつて、大手を振てお父樣のお墓參りが出來る樣になつて下さいよ。お前には家を起すと云ふ重い責任が有る。よその兒とは違ふのだから、身體を大事にして、身を入れて、勉强しておくれ」と、嚙で含める樣に常に云ひ聞せた。あゝ大手をふつて、お父樣の墓參り、これが阿母さんの、生涯の望みだつたのだ。あゝ。

肩のあたりに、つぎの當た、すれた、身に合ひ兼ねる小倉服寒げに、辨當箱提げて、ボテ靴に霜柱ふみつゝ學校へと出て行く僕の後姿を眺めて、是れが、一時は、長者議員の一人にも數へられた、露山家の、一人息子の通學姿かと、母は見送りながら、いつも、泣いたさうである。

あゝ、我生涯、思へば蹉跌も多かつた。廿年後の今日、漸く我家と、云ふものに、住み得るまで、幾度、住

む土地を替へたであらう。幾人の世話に、なつたであらう。氣兼もした、苦勞もした。冷たい人情も味はつた現金な世の人心も知つて居る。

小學校は、やつと了つたが、中學へはとても入學する事は出來ないので。母は涙を濺して殘念がつたが。同じくは、文字に近よりたさに、大阪に出て新聞社の給仕になつた。あれが、丁度、十五の歳。幸にして、或る記者に見出されて、附近の私塾へ夜學にやつて貰つたが、丁度三年目に恩人の記者は、洋行せられる事になつたから、僕は添書を貰つて、信田、信田、即ち今の我師、信田畫伯を便つて出京したのである。これが取りも直さず僕が終生を托さうとする、繪畫の其筆をとる、そも〳〵の糸口で有つたのだ。

四

信田畫伯は洋畫の大家であつた。

僕は幼少から、優れた者になりたい、成つて見せ樣とは、思ひ忘るゝ、暇も無かつたが、其如何なる方面、如何なる職業を選ばんかは、未だ心に定まつた物もなく、云はゞ盲目滅法に、勉强したもので有つたが。朱に交はれば赤くなる、見樣見眞似で、先生の厚意で、英語學校へ通學させて貰つて居る僕の机の上から、いつとなく敎室筆記がすべり落ちて、畫用紙や、モデルの花などが乘り、着物には、インキではない、繪の具の、しみを附ける樣になつた。

然しながら眞面目に、自分がこれに、一生を托さう、此職に、我畢生の心力を注がうと決心したのは、さうだ廿一歳の秋、師の許しを受けて出品した畫が、多少世の視線を引き、遂に貴顯の御手許に、御買上と云ふ名譽ある仰せを被ぶつた時である。

我師は我に、將來深く望みをかくると云はれた。天才？　と人は云ふ。我は果して當について、所謂天才なる者であらうか。

才に頼む者は、又才に折る、抜は只、切瑳琢磨、うます、屈せす、務むる者、始めて達するを得べしとは、我師の、不斷、口にせらるゝ所であつた。切瑳琢磨うます、屈せず。我は飽まで、此言の許に勵んだ。僕が當を公にする度、天才を口にする新聞評家があつたが、僕は見る度、何を糞ッ、天才なんぞ當てにするものかと一人でもつて力んで居た。

我師、信田齋伯は、僕を又なきものに愛して呉れられたのである。

廿五歳で家をもち、母を國から迎へたが、家には未だ我母を、送迎すべき、下婢もなければ、其出入を助くる車もないのである、自用車處か僕は母を馬車にも乘せたい。否、乘せなければ、をかぬのである。自分はどうでも好い、母丈けは昔の露山家の御隱居樣にしなければ止まぬ決心で有た、務めた、一生懸命に研究した、母の爲に、又美術の爲に、然しながら、悲しい事には、一文の財産も持たぬ身の、生活に追はれて、可惜、研究の手を其方へ、取られる事も隨分多いのであつた。あゝ、昔の露山家で有つたらと、しみ〴〵思つた事もないでは無かつた。

五

父を失つてよりこの方、あらゆる不運と云ふものと、苦しき戰を重ねた、僕と母、露山家に、春はゆう〳〵廻つて來た。それは伯父が西伯利亞から莫大の財産を持つて歸朝した事である。

伯父が志を立てゝ故國を去つたのは、殆ど廿年の昔であつた。共に歳をとつて、東都で逢つた、あゝ、彼

の時、母はどんなにか、喜んだであらう。伯父も、どんなにか其深く〳〵過去の、苦惱を、えりつけた、しはむだ顔に、笑を湛えたであらう。

伯父の出發したのは、僕の七歳の時、自分は面影も確とは覺えぬ程であつたが、伯父は實に立派な人物で有つた。

金の外には、尊い物を知らぬ、今の世の、所謂、實業家と伯父は聊か其選を異にしたのである。

伯父は子供を持たなかつた。只一人の甥である自分を子よりも愛し、僕の事を信田先生から聞いて、大變に喜んで、露山家は、代々金の番人ばかりだつたのだから、お前は一番風變りに、美術家と、洒落れたのだね。好からう〳〵、お前の腕は望が有るとの事だ。充分勉强して、立派なものになれと、頻に、勵まして與れたが、遂に、伯父は、僕に洋行せよと進めたのである。僕は飛び立つ思ひで家に歸つたが、時、恰も日露の危機、切迫し、談判は正に破裂せむずる折からで有つたので豫備少尉の籍に有る、自分は、暫く差しひかへた、果して、外交は斷絕。二月八日、壯快なる第一擊は、まづ彼に向つて加へられたのである。

未だ幾日ならず、自分は筆を捨てゝ劍をとる身となり、敵地をふんで幾閲月、玆に自分の最後に逢ふ事となつた。

あゝ留學。身不肖ながら我れ露山春城、幸にして猶、春秋に富む。美術國としての、我日本を、やがては、世界の檜舞臺に、雄飛させむずと、曉の窓に、ひとり密に微笑むだ事も有つたが。

あゝ、我命は玆に盡くるので有る。あゝ、あゝ。

露山少尉は轉々、其身を悶えたが、精神の激動につれ、血は繃帶をもれ、混々として、流れて、ペットを染めた。トタン、ドアが開いて、軍醫の回診。

醫官は、一禮して病床に、近づき、子細に、診たが、覺えず、其色を替えたのである。

少尉の、容體、頓に重を加へたのであつた。醫官は診察を了り、一先づ去つたが、看護人の一名は、室の一隅に居殘つて、靜に椅子により、少尉の病狀を看視した。

こし方を忍び、行末をたどり、將、又、今を思へる露山少尉は、痛恨、只潮の如く、胸に滿ちて、負傷も惱みも、醫官の診察も、はた、又、重れる己が容體も、耳に入らぬにもあらず、感せぬにしもあらずして、しかも其心は未だ、此憂を憂とする餘地は無いのであつた。

六

あゝ殘念だ、殘念だなあ。己れは茲で、どうでも死なゝければならんのか。二十八年を最後として敢えなくも世を去るのかなあ。命ならずして非業の死。國難に殉じて。あゝ、己は國家の爲に筆とつて、我美術界に、聊か盡すところあらんと。

國家の爲に、世界的美術の發展を期圖し。あゝ何もかも、皆夢となつた。あゝ殘念。

あゝ殘念だが――

あゝ然し。然し。果して、殘念だらうか。果して、殘念、殘念と云ふべきで、あらうか。否、々、否。

發矢、少尉は頭惱に燦然たる閃きを覺えたのである。

少尉は低き叫びを發して、起き上らむとしたが傷の痛みに、アツと許り、又倒れた。看護人は、思ひもよらぬ、患者の荒い動作に忙てゝ立ち、「少尉殿、御重傷であります、決して、決して、御動きになつても、不可ないのでありますぞ」「ヨシ、ヨシ、分つとる、もう爲ない。」看護人に扶けられて、再び、仰臥した少尉は、面に



笑を浮べた。然り。少尉は、微笑むだのである。露山少尉は、次第に重體に陷つた。燈火のつく頃より、醫官一名、看護人二名は、ベットの傍を放れず、刻々に進み行く、病勢に、あらん限りの、手を盡したが、悲しい哉。其功なく、今は人力もて、如何ともせん樣は無かつた。

　ドアが開いた。名刺を持つて這入つてくる。醫官は夫れを受取て、『露山少尉、面會人がありますよ、仁廣種臣、新聞記者ですね。』『仁廣、通して下さい。』『ハイ、早く、お通し申せ、』醫官は、許すからと、目で知らせる、心得て去つた。

　即ち、少尉に對し、其病勢增進の恐れある、面會を、禁止するの必要を、今は最早、認めぬのである。

仁廣は入り來つた。彼は、今朝から二度、面會謝絕を食つた、三度目に、不思議にも、許されたので、さては、と其病勢の增進を、氣附いたのであつたが、僅の間に、面影もなく、變り果てた、友が姿を見るより、急に胸迫まつて、思はず淚組む、同時に少尉も、光り無き目に淚を含むで、此友を見上げたのである。

默々の中に、潛々として、下る、あゝ男子の淚。

　醫官は面を背けた。

『仁廣さん、露山少尉殿は、殘念ながら不可ませんです、御遺言があれば、お聞きなすつておいて下さい。』醫官は、小聲にさゝやく、仁廣は言葉が出なかつた。

　かくて醫官は、看護人を連れて、一先づ此室を去つた。仁廣はベットに近く椅子をよせ、つく〲と、少尉の面を見る、少尉は、なつかしげに、仁廣の面を見上げて。『よく來て吳れたね、僕は見ず知らずの、人達の中で、死なゝければならないのかと思つとつたよ。』少尉はハラ〱と淚を溢した、が氣を取り直して、『サア仁廣君、遺言をするからね、書き止めて、どうか國へ、屆けて吳れ玉へ。』仁廣は泣かじと唇を嚙んで、だまつて手

帳を取り出した。

少尉は靜に遺言をのべ出づるのであつた。

「阿母さん。伯父さん。六郎は、我志、僅に端緒についたのみで、國家の爲に、一命を捧げる事となりました、阿母さんには、是迄、實に永々の御苦勞をかけましたが、不甲斐ない私、今迄は、何事も、思ふに任せませんで、何かと御不自由をおさせ申ました。然し行末は必ず、お樂をさせる積りで居りましたが、此通りの運命で、是非も有りません。どうか、お許し下さい。親一人、子一人の私が、阿母さんの、死水も取らず。遠い遠い異國の空で、敢えなく死んで仕舞ふのは、如何にも情ない。實際、餘り殘酷な、運命と、一度は存じましたが。阿母さん、國家のお爲です。どうかお諦め下さい。

伯父さんにもいろ〳〵と、お世話になりました。そして、貴君の、其厚いお志をも、お受け申し、御恩になる積りで居りましたが。遂に夫れも協はない樣になりました。聊か、殘念の樣にもあります。否、一度は、確に、殘念と存じました。

命の二つ有ても足りない程な、大きな望を持つて居りました、自分には、實に殘念とも感ぜられましたが。伯父さん、私は考へました。元來自分がこうして務めるのは徒らに、身の譽れを得むとてではなく、つまり國家の爲に、我名を擧げて、大言の樣ですが、美術國としての、我日本をば、聊か、世界の美術界に紹介せむとする微衷に外ならないので有ります。然しながら、我不才。或は志をなさぬかも知れません。よしや、多少目的は達せられたにせよ、たとへて見れば大海の一粟。ね、ひとり浮で水上に出やうとも、又沈まうとも、大局の上より見て、遂に幾何の益する處がありましやう。

思へば今茲で、命ならずして、死するのも。今後何十年か生きて、少しは志を遂げて、そして定命で世を

終るのも、遂に五十歩、百歩では有りますまいか、私は、天命を知ります。伯父さん、此六郎の使命は、美術の上に、あらずして、劍の上にあつたのでした。六郎は、今や命を果して、再び、空に、歸するのであります。いづれに盡すも、陛下の御爲、國家の爲、伯父さん六郎の死をお悲み下さいますな。世にも人にも知られず、空しく死ぬる人も多い世の中に、かばかり名譽ある死場所を得た私は、天に向て、謝さなければ、ならんので有ます。然し母は女の事、殊に天にも地にも、只一人の私です。如何ばかりお歎きなさる事かと、其を思へば不覺ながら、私は實に、腸を絕るゝ樣に存じますが。伯父さん、母の事は貴君に、確とお頼み申ますよ。自分は必ず、聞て下さる事と確信致します。

今は、不肖此六郎、世に思ひ殘す事なくして、笑つて名譽の、犧牲者となります。ですか我血族のたれひとり、我臨終の床に見る事を得ないのを、無理な話ながら、聊か、遺憾と云へば遺憾なので有ります。

永々御恩になりました信田先生へも、宜しく有仰て下さい。夫れでは、阿母さん、伯父さん。六郎はこれで永のお別れを致しますです。寒暑に氣をつけて、隨分共に長命をして下さい。臨終の際にそれ計り、祈つて居りますよ、左樣なら、おさらばです。

少尉は正しく仰臥して徐に別を告げ了つた。

『君、これ丈けだ。どうか屆けてくれ玉へ。夫から此遺言書は、信田先生へもお目に掛ける樣、書きそへて、於いてくれ玉へ、賴んだよ。』

聞ける仁廣が、鉛筆持つ手は、自ら震ふのである、彼は泣かじと唇を嚙むだ。

少尉は手もて、頰に傳ふ淚を拭ひ、靜に目を其友が上に注いで。『仁廣君、君にも永らく世話になつたが、許してくれ玉へ、僕は茲で死ぬるのだ、何一つ、世に仕殘さず。今日を限りに、果てるのだ。仁廣君、賴みだからね、僕が死で仕舞ふ迄、そこに居つてくれ玉へ、ね。』仁廣は只頷くのみ。

『あゝ君、君には厄介の、掛けつ放しだな。許してくれ玉へよ。』

いたくも、弱りし事よ。其聲、其面差し、見るに、聞くに情なく、堪えず、仁廣は、汪然として泣いた。

漸く涙を拂つて只一言『露山。殘念だらう。僕は察しるぞ。』
少尉は眼を上げた。其目には美しき光を放てり。
『仁廣。一旦緩急あれば義勇公に奉じ、ぢやないか。天壤無窮の皇運を、扶翼し奉る、己は名譽ある大日本國民だ。一時は馬鹿に迷つたよ。お互に小學校の生徒に笑はれちやならない。』少尉は凛然たり。犯すべからざる其威容。

雪白の病衣着されたる露山少尉。我年來の友ながら。彼、發しては萬朶の櫻とや。仁廣は、餘香紛々たる、此風前の花に對して、そゞろ膝を正したのであつた。

風は、蕭颯として窓を訪ひ、やがて散りなば花、いづくと求むるが如く軒をすぐ。何ならむ、夜風に猛る野獸の叫び、陰々として、一聲悲しく少尉が枕に響いた。

八

露山少尉は、其夜遂に沒した。

仁廣は、彼手書を、涙ながらに發送したのである。親友が、厚意になれる、其遺言書は、日ならず東都なる彼が、故家の一室に、開れて、其母と、其伯父と、其師とが、幾滴の、血涙を誘ふであらう。少尉が靈も共に泣けるか、否々、我露山少尉が神靈は、再び偉功をくりかへして北進した、其所屬隊の畏き軍旗の許に。不幾に羽をのす荒鷲の、つばさを折つて、玉の宮居に龍顏殊に麗はしき日の一日も早く來らむ事を、只祈りつゝあるのである。

評　一篇の構想、唯軍人の死に過ぎず、文は拙劣なり材は平凡にして他の奇なし、而かも有為の青年が前途多望の身を擲らして空しく黄土の客となる、其哀愁の綿々たる人をして惻々たらしむ。況んや其境の寥落なるに於てをや。

第三等賞　金拾圓

大阪市北區北森町二九家次方　渡邊たみ子

うきくさ

羽場としゑ

上

西には龍ヶ嶽、藤原の遠山が烟霞の間から見え隠れ、東の方には遙かに伊勢の内海が鏡面の如に望まれて。春は花に美しく夏は月に納涼に、秋は虫聲に七草に、而して冬は雪の眺望に適き、百合が岡と呼ぶ廣野の中央を、釜河といふ清麗な小河が流れて居る。その細流が鴨澤の郷に進らうとする邊に、薄桃色のペンキ塗の洋式建築が二棟、草ぶかき山里に一種の異彩を放つて居る。それは我が故郷の小學校で。僕が此校に入學して後、種々さま／＼の問題に出會た中に、最も僕の胸を動かしたのは、同級の女生の鈴さんのことであつた。

午前の授業が終んで、皆が運動場へ出ると、男生は男生で綱引やら縄とびやら、想ひ／＼の暴つぽい遊戯に餘念なく、女生の方では葡萄棚の下に一群、花園の邊に幾團と、愉快げに遊んで居るのに、鈴さんばかりは平常ひとりで群を離れて淋しさうに櫻の樹に倚れて、他の女生等の遊ぶのを眺めて、美い友染の袖が飜いたり護謨の鞠が跳むのを、さも／＼羨しさうに視めて居る。やがて再授業の時が來ると、皆が元氣よく笑ひさゞめいて敎場へ入る後から、鈴さんは獨悄然として入て來る。鞠が無いからと言つては遊戯の仲間外にしられ、口惡い男生から、動もすると親無し乞食と罵られる毎に、鈴さんは悲しさうに泣きながら宅へ歸つて去くこともある。

衣服は汚いけれども如彼に温良しい優く出來る鈴さんを、何故皆は苦めるのだらうと僕は毎日〳〵不審議でたまらなかつた。

日曜日の朝、僕が母様に伴れられて隣村へ行つた時に、途上で鈴さんに出會た。澤山に草を盛れた竹籠を重さうに背負て居て、僕と母様とに丁寧に敬禮をして、やがて姿は森の陰に見えなくなつた。その時僕は母様に『鈴さんは何故皆に苦められるのでしよう。』と質ねたら、鈴さんが產れると間もなく母親は亡くなり、現今の繼母を迎へると二年ほど經て父親も死でしまつて、其後は僅少の過失にまで繼母からがみ〳〵責はれて、朝夕身體に生傷の絶間が無いほどで、誠に可憐な女であるといふことを御話しになつた。僕は朦朧ながらも自身の幸福を感ふにつけて、不幸な鈴さんを鬼の如な繼母の傍に留かないで、僕の宅へ伴れて來て僕と母様とで慰めてやりたいと想つた。

明日は天長節といふ日の課業の終る時であつた。校長先生は僕等に向つて『天長節の拜賀式が終で後學校を出かけて桑名へ遠足を爲ようと願ふ生徒は手を擧げなさい』と仰ると、皆が大變に喜んで、いそ〳〵と手を擧げたが、ひとり鈴さんだけは手を擧げない、而して顏を赤くして下向て居る。僕はその光景を視て何だか悲しくなつて來たから、一度擧げた手を再すぐに下げてしまつた。すると同窓が僕と鈴さんとを見くらべてウワーと一齊に聲を發げた。先生が『喧しい!。』と御制しなさるのも聽かないで。

翌日親交の龜(犬の名)を伴れて百合が岡へ遊歩に行つたら、螢河の汀で鈴さんが一生懸命に草を刈て居たが僕を見ると忽に『薫さん何故一緒に行らつしやいませんでしたの』と言つた。僕は何とも言へぬ心地がして、急に顏を赤めたが『桑名なんか行きたくないから。』と答つて、漸く濁らした。鈴さんもまた顏を赤くしたが、尾を掉る龜の頭を優しく撫でゝ『奇麗な犬ですねえ。』と言つた。

僕はすたこらと我家へ走歸つて來て鎌を探して再鈴さんの居る所へ行つて、草を刈るのを手助つてやつた。而して今朝ほど母樣から戴いた御菓子と、古くなつた護謨の鞠とを鈴さんに贈た。何とも言へない如な顏をして、涙を流して喜んだその光景を見て、僕は譬へがたなく嬉しがつた。やがて藤原ヶ嶽の裏に沈まうとする夕陽が、紅や黃色の光線で美く百合が岡を彩つて居る頃に、冷たい秋の夕風につれて木の葉の散り來る辻堂の前で、僕と鈴さんとは右と左に別れて、おのが家路へ歸つた。

明くる日僕が學校へ登つて、運動場へ出ると、鈴さんが僕の傍へ走つて來て、幾度も〳〵昨日の御禮を述つた。するとまた衆が例のウワーと叫んだから、鈴さんは血の滴る如に顏を赤めて遠方へ離れたが、其後學校では決して言葉を交さなかつたけれども、他人の居ない所で不期行き會ふと、互に無言で微笑するのが常例であつた。

次回の日曜日の午前に、二階の一室に母樣が裁縫をして居つしやる傍で、僕が復習をして居ると、母樣が窓外の方を御覽になつて『彼の女は鈴に似て居る。』と仰つたから、僕もその方を眺ると、二丁ばかり隔て居る田圃の畔路を此方へ辿んで來る一人の女の子がある。近くなるほど正しく鈴さんであつたから、僕は玄關まで出迎へて、今まで復習をして居た二階の室へ案内した。その折鈴さんは奇麗な菊の花や、枝のまゝの柿などを澤山に吳れた。而して御茶や菓子を鈴さんにすゝめて、繪の書を見せたりアツコルヂヨンを奏て聽かせたりして居る程に、正午が來たから共同の膳で御飯を食べて、それから二人で母樣に種々の面白い御噺を聽かして戴いた。『貧乏でも心性が正直で精く勉强をして親に孝行でさへあれば少も他に耻づることは無い。』と仰つたから僕は『菊さんや小夜さんは十三歲にも成つて居るくせに甘へたり、白粉で虛飾したり、其上に學校のチョークを盜むのだもの、僕は如彼奴大きらいだ。』と言つたら『他人のことを惡評ものぢやありません。』と言つて、母樣

に叱られた。

その晩から僕は非常に頭痛がして、恰度一週間ほど學校を欠席したが。鈴さんは毎日〳〵僕を訪ねて呉れて枕頭に坐つて學校での出來事や種々の御噺をして僕を慰めて、二十分も經つと大變急いで歸つてしまふ。『遲くなると繼母に怒られるから。』と言つて、幾度も辭退つたけれども、鈴さんは毎日〳〵見舞つて呉れた。



間もなくその年は暮れて明くれば明治二十九年の正月となつた。たしか冬期休業も明日限りといふ日であつたと憶ふ。朝はやく鈴さんが僕を訪ねて來て、この間から來宿つて居た義叔父とやらに伴れられて、明日の朝東京へ出發ことになつたから、御訣別に來たと言つて、その青白い頰に涙が流れて居た姿は、終生僕の忘れることが出來ない慘景で、翌朝村はづれの橋の上で、泣きながら義叔父に從て行く鈴さんの後影を見送つた時は、如何程力んでも涙が出て堪らなかつた。

僕は何故鈴さんが東京へ行つたか、その理由を知らないけれども、父樣や母樣は平素その物語の出る度に、

『可憐なことを爲た。』と仰つた。
その後僕は二階から、いつも鈴さんが辿つて來た畔路の方を眺めたり、學校の運動場で鈴さんの倚りかゝつて居た櫻の樹の邊を歩むたびに、何だかその影が見える如に感えて、後は何とも言へない寂しい厭な現想に胸を亂された。

中

嬉しいにも悲しいにも、少年時代は淡泊なもので、歳月の經つ間には淋しいと感ふのも左ほどではなくなり悲しいのも何時しか薄らいで。其後鈴さんの消息は少しも聞かず、また僕も種々の希望や空想にのみ氣を奪られて七八年の光陰は殆夢の如に過して、二十歳と成つた夏の試驗に、首尾よく京都の高等學校を卒業して、その秋東京へ上つて番町の阪谷大佐の家に寓して、此家から本郷の大學へ通學ふことゝなつた。大佐は僕の父が竹馬の親友で、令孃の靜子さんといふのは僕の許嫁であることを知て居たから、僕は道中種々に想像して、大佐は如何に豪傑らしい人で、また靜子さんといふのは、如何に温良しい親切な娘だらうと想つて、片時も速く會ふ期を待つたが、會つて見ると大佐は果して想像通りの人物で、頗活潑大量の氣質であつたが、令孃の方は僕の想像とは餘程違つて居た。

容貌は先づ美人の方で、十六歳の春、御茶の水の高等女學校を卒業して後、十九歳の今日も倘某博士に就て獨佛の文學を、また某西班牙の音樂者に就てピヤノやマンドリンをも學んで居て、阪谷靜子といへば才貌兼備の名媛として既に世間に聞ゑて居るとやらで、娘盛りの房々とした黒髮を、油氣無しの束髮にして黄金縁の眼鏡透しに人を視る容子が如何にも學者めいて居て、擧動が何となく嚴格であつた。笑つたのは殆見たことも

無ほどで。

僕が東京に上つて大佐の邸に着た夜に、家内の衆は皆新來の僕を取圍んで四方八隅の評話をして居たが、やがて靜子さんは『少々調べものがありますから、失敬を。』と言つて、自身の居室に退いたまゝ、その夜は再び此團欒へ出て來なかつた。

翌朝僕は大佐御夫婦に挨拶をして、それから靜子さんの居室へ行て見ると、しきりにユーゴーのラ、ミゼラブルを讀んで居た。『御勉强ですか。』と僕が聲をかけると、氣の無さそうな顔をして一寸顧向いて、『御早うございます。』と言つたばかりで、また忽にその視線を机上のミゼラブルに注けてしまつた。僕は勉强の妨害をしたのを詫びて、自身の居室と定められた離座敷へ歸つて、熟々想つた、學問に凝り固まつて居る婦人は皆々あれほど冷々として嚴格なものだらうかと。

某日、僕が學校から歸つて、今日のレクチュアを淸書して居ると、めづらしくも靜子さんが入つて來て、別に談話をするでもなく、例の黄金線の眼鏡ごしに、机の邊や書棚の上に列んで居る僕の書籍どもを意味ありげに見て居たが、やがて鼻の頭でフヽンと冷笑つて『貴郎は御醫者様に御成りなさるのでしたねい。』と疾より知て居ながら、空とぼけたことを聞くから、僕が沈黙て居ると、『失禮ですが貴郎の御目的は餘り感心いたしません、私は、政法の學科を攻めて行く〳〵は帝國の宰相と成つて、五千萬の國民を代表するほどの勢でなければ……御醫者様なんか、男子らしくも無い……。』と言つた。何だ！婦女のくせに生意氣なと憤つたけれども、これが行末自分の配偶と成るべき人で、また殊に婦女ぐらいを對手に議論をするでも無いと想ひ顧して、唯黙笑つて居た。すると靜子さんは『左なくばです。』と言つて少時考へて、『千古に渉るの大著述でもして、芳名を萬世に垂すくらゐでなければ……。』など〻、實に氣焔萬丈であつた。尙僕が何ごとをも言はずに笑つて居ると

『それでは美い御服を着て、奇麗な俥に乘つて、穢い病人の手を握り歩くのが、貴郎の御希望なのですねい……。』と言つて再び冷笑した。それから火鉢の灰に何か書て居たが、やがて僕の室を出て去つた。その跡で、僕は東京へ來てから今日までの、靜子さんの僕に對する擧動を追想して、實に不愉快を感じた。が、またその間には心奧から僕を愛して吳れる樣にもなるだらうと、物たらぬ心を自慰めたけれども、まだ胸が錯亂して堪らないから、友人の貸して吳れた小說を、何心なく書棚から引出して讀みはじめた。それは初戀と題する飜譯物で、段々と讀で行く程に、餘りその事情が酷く似て居たから、僕は突と鈴さんのことを想ひ出して、小供心に如彼時二人が愛し合たのも或は初戀といふものであつたかと、しばしは鴨澤の小學時代の僕に回つて、行方も知らぬとりとめの無い想像に耽つた。

例のボートレースが催された日の夕景に、墨田から歸つて來て、大佐御夫婦と僕と靜子さんと四人で晩餐を食べて居た時であつた、大佐が今日の勝敗を御問ねになつたから、僕は撰手競漕に第一着の勝利を占めて、チャンピオンフラグを法科から取復したことを申上げると、大佐は大喜悅で『それは御芽出たいことだ、學校の方は非常の好評だし、競技ではいつも連戰連勝で實に君は兩刀づかひぢや。』と言つて御賞讚下すつた。夫人もまた『ほんとに末が樂しみでございます。』と言つて心奧から嬉しい御容子が顏に現はれて居た。靜子さんはフンと鼻で冷笑つて、小供じみた噺をして居ると言はぬばかりの顏をして、身邊に在つた新聞紙を採りあげて『露佛同盟の眞相。』と題する論說を小聲で讀みはじめた。僕は大佐に讚めて戴くよりも、靜子さんの喜ぶ容子を見るのを樂んで居たのに、氣の無い冷淡な容子を見て、私かに落膽した。

僕はその夜臥房へ入てから、また／＼靜子さんが僕に對する日頃の擧動を回想はじめた。平素僕と對坐の際と言たら、非常にすまして居て、偶僕が散步にでも行かぬかと誘へば、碌々返詞もせず。行末の所夫と定つて

居る僕に、あの冷淡さは何といふ性質だらうと返す〲も失望した。

下

ある日、僕は勉强を終つて、餘り無聊に耐ゑないから番町の家を出かけて、上京以來初めての飛鳥山へ散步に行た。而してと、、ある掛茶屋へ腰を下すと『いらつしやいまし』と言つて茶を酌んで來た娘子の横顔を何心なく覗た時、某點にか見覺ゑがある面影だと想うて少時考へて居ると、その娘子も僕の顔を眺めて、さも驚いた樣な容子で、何ごとをか言はうとしては躊躇つて居たが、やがて顔を赤くして僕の傍へ寄つて、『御忘れ下さいましたか鈴でございます』と言つたが、



その音聲は震へて居た。僕はその優しい〱聲を聽いたり可憐な眩しさうな眼睛や無邪氣な愛らしい口邊を見た時に、忽七八年前の過去に回つて、運動場の櫻の樹に淋しさうに倚りかゝつて居た鈴さんの姿や、笹河の岸邊に停立て夕陽の天を眺めて居るサブライムな面影が、あり〱と眼の前に浮現んで來た。それから僕は久し

ぶりに邂逅つた妹にでもたづねる樣に、今日までの浮沈を問ふた。鈴さんは眼に暗涙をうかめて、東京へ來てから三四年の間は厭な三味線や俗舞を習はせられて、十七歳の春、いよ〳〵新橋の某藝者屋へ賣られると言ふことを義叔父夫婦の密話で私に察つて、今さら東京へ來たことを悔んだけれども、故鄕の鴨澤には鬼の如な、義叔父と同心の繼母が居るばかりで、廣い世界に身の置きどころも無くなつて、いろ〳〵と想ひ迷ふた果は、死で恩知らずの申譯を爲ようと、一夜近邊まで用達にと淺草奧山の義叔父の家を出て、花川戶の河岸から身を投げようとするところを、不思議の緣にて救けられたのは、現今鈴さんが仕んで居る隣地に、邸宅を搆へて居られた有福な前田といふ老人で、その後前田家に下婢として仕へて居たが、老人の歿後は僅少の貯蓄を資本に此所に茶店を出して、漸くその日を送つて居るといふことゝ、鈴さんが出て間もなく義叔父は强盜をして監獄の裡で死んだことを長々と物語つた。而して力の無い嘆息をして『如何して斯んなに不幸ですかねい』と言つて色の褪めた襦袢の袖で涙を拭ふた。想へば僕は今まで順境にばかり立て居て、おなじ此世に生れて來た人の子——しかも純白雪の如な鈴さんが、斯んな貧苦な日暮しをして居るとは夢にも想はなかつたので、今鈴さんの哀話を聽て、何といふ因果な運命だらうと感ふと、知らず〳〵熱い涙が僕の頰にも流れた。此後は必らず捨てて置かぬから心配をするなと言つて、僕が慰めると鈴さんは涙の下から『有難うございます』と喜んで、『貴郎の御修業中は如何にしてゞも生命をつないで居ますから、御卒業の後は情願下婢に御使ひ下さい……』と言つて少時流涕に咽んで居たが、また言葉を續けて『その期を樂しみにして居ます』と言つて、涙に曇る眼に、餘念なき喜びの微笑を浮めた。僕の心はかきむしられる如で。やがて夕暮に近くなつたから、いざ歸らうとすると鈴さんは王子の停車場へ下る坂の上まで僕を送つて來て、別れる時に、『鴨澤に居た昔時が戀しうございます』と低聲で言つてホヽと笑つた。その力なき悲しさうな笑ひが、僕の胸奥を亂す種子となつた。

番町の家へ歸つて、僕の居室の障子を開けると、庭石に腰をかけて、何か讀んで居た靜子さんは、五月蠅さうに眉を顰めて此方を向たが、忽に自身の書齋へ行つてしまつた。おなじ婦人でありながら斯うも性質が違ふものだらうかと僕はつく〴〵感じた。如彼石の如な冷たい、學問を鼻にかける靜子さんよりは、教育が無くとも眼には熱い涙が滿ちて居て。全身に燃ゆるような血が流れて居る温良しい優しい鈴さんの方が、僕のためには如何に賴母しいかも知れやしない。僕が生咬りの理窟を女子の口から聽かうとは願はぬ。變性男子と偕老を約することは斷じて出來ない。僕が永遠を契るべき半身は、鈴さんの外には決して無い、此後如何なる困難と戰つても憐れな鈴さんを闇黑な憂世から救ひ出して、僕は僕だけの樂しい家庭を造らうと決心した。

今まで僕は靜子さんの一顰一笑を氣に懸けて、及ぶ限り靜子さんの意を迎へるように願つて居たが。想へば實に愚の極、意氣地なしの骨頂であつた。義理の地盤に築かれた薄弱な愛のために、朝夕心を惱まして居た僕は、こゝに醇なる愛の礎に建てられた誠眞の戀を得て、毅然として『我れ』を見出した。それとゝもに例の冷淡な靜子さんの擧動に就ては、全く無感覺となつた。斯うなると僕の態度もまた一變せざるを得ないので、その後僕は成るべく靜子さんに遠ざかるようにして居た。すると邪推の故か、靜子さんの僕に對する容子が、何となく違つて來た如に想れる。今までは僕を避けるようにして居た靜子さんが、おり〳〵羅何語の質問を爲に來たり、演奏會などへ同行をすゝめたり、また僕の花瓶に、絕ゑず草花を揷して呉れたりするので、僕は内心秘かに薄氣味わるく、如何なる動機に觸れて斯くも靜子さんの態度が變つて來たかを想ひ迷ふとゝもに、願くは冷々石のごとき過去の靜子さんに回つて呉れるようにと祈つた。而して其度ごとに僕は遠からぬ未來に於て、或は演せらるべき一場の悲劇の主人公に、僕が成るのではあるまいかと戰慄する。

評　文章スラリとして姿の直ぐなるは竹の林を見る如し、又雪白の地上に鴉の點々を見るがごとし沈鬱の姿もなく纏綿の態もなく、餘韻もなければ、含蓄もなし、されど意の向ふ處ろ筆又隨ひ、縱横自在、暢達にして而かも鮮明なる幼童に讀み聞すもよく其の首く處ろとならん。

秀逸一等賞　圖書切符（金五圓劵）

伊勢國員辨郡丹生川村　羽場としゑ

菓子賣

上

初花女史

たとひ手にひく筋は一兵卒の數ならずとも、一身惜しからず國に捧げし、天晴日本軍人の妻とは名のみ淺間しの妾が心。よしや、此菓子箱賣りつくして、底を叩くとも、高の知れたるはした金、是もて何うして母子二人が口に糊する事の出來得らるべきぞは唯表面の裏の秘事を現在の我子にまで浮きたる事は恥かしく恐ろしく心とがめせられてくゝる戸口も劍の山、門守る、犬に迄心置かるゝ泥棒にも劣りたる身の上、つらや。君の爲國の爲にと、夫は萬里遠征の客、殘りし妻は、僞りの行商に、重ぬる罪の末恐ろしく、生れてよりつけし事なき、白粉の厚化粧を我子に見られて紅い顏して、ぞつとする程耻かしい、世に淺間しの母、不貞の妻。それのみならず、二人が中なる愛子に、明暮吹矢の路店出さする、未だいわけなき七ツの糓の、アノ愛らしい下げ髮に、欲しきリボンも與へ兼ぬる、貧しくつらき母が心を、くめば可愛や幼心に、夫が出征以來、俄に大人しうなりまさりて、たゞ一度こねし事なく、日暮るればいそ〳〵と、自分の仕事と出て行く後姿、見すぼらしきは此母の罪。

いつも夜更の辻淋しく、カンテラの火影心細う、母が歸るを待ち飽きての居眠は、慣れぬ群集に氣をもまれて、小き心に疲れ果てゝか。妾が歸りしに驚きて、母樣々々と、なつかしがるいぢらしさ。今晩は是程利得りしと、拾錢に足らぬ自慢の金を、オ、出かした、と褒むるは眞の心から。たとひ一錢利得ずとて、人の寐た

る後まで、あの年弱が、店番だけでも、よくも辛抱してくれる事よ。是に比ぶれば、何といふ不甲斐なき者ぞ夫を助けて家を興せし、賢婦烈女の珍らしからぬ世の中に、さりとは腐り果てたる妾が心。とは言へ强き身體ならば、たとひ水仕女の憂も厭ふ事かは。資本無ければ商賣も成し難く、吹矢の元さへ、ともすれば切れんとする難儀な中に、兼て肺結核といふ恐ろしき病に、命の血潮絞られ始めて已に二年、哀の身弱き命は、夫が出征を待つまじと覺悟せしに、却々に日にまして快きは、畢竟留守する心の弓の張りつめし故か、さては世に哀なる者の、助にもれぬ、神の冥助か、佛の利益か。

二十五の女盛、取立なば美人の列は離れまじき、撫肩の細作、夜目には凄き迄美しき麗質に、さりとては洗ひしやらけの袷はへなく、見るから情無き菓子賣姿、菓子箱大風呂敷に抱き提げたる、出征の夫が見なば如何に。歩むともなく、小路より小路に、暗きより暗きに、可成人の雜沓をさけて、軍隊宿舍の行商は、慣れぬ業とて人目耻かしく、況して兵士の前に出る事おや、身は薄氷の上行く思ひに、入らんとする戸口にまづ、宿の主人に斷られて、野良犬と叩き出さるれば、行方に迷ひて、空しき幾夜重ね〱、今もむくつげ男に、行商人入るべからずの、門の掲示、お前には讀めぬか、と恐しう叱り飛ばされて、宛ら盜にでも入りたる思、穴あらば隱れたく、耻かしく情なさに、そゞろ相生橋の欄干に身をよせて、流るゝ水を見つむる程、思は次第に波より波を生じて、何頼母しき事もなく、心細き身には、寧ろお千代が居ずば、此儘一思にと、恐ろしき心にもなるなれ。

さはれ、寒さ身をきる滿洲の陣營に、夫の苦みは如何計ならんを、是に比れば、いかなる憂目も物の數ならぬを、荷車挽きて、お千代に後押させて、身體の續かん限、命の絶えなん迄、働きに働きても、此淺間敷業は思ひ絶えざるべからず。よしや僅寸の箱張に、三度の食は一度となるとも、此穢れたる身濯がざるべからず。と

は言へ、明日の煙の立つ瀬なきに、情なや今宵一ツの菓子も賣れず。一人の客も得とらぬ。おゝそれよ、若しや神樣の默示にてこそ。と我にもあらず、菓子箱橋上に抛ちて、默然たる折しもあれ、突然後より肩を叩く者のあるに驚きて、振返れば、初めてにはあらぬ顔の、さては洋服も劍も、今宵は取り放ちての和服姿、「相變らず何か……」と見さげる樣な聲付。ブンと酒嗅きは、何處より歸りがけの浮々しさ。「愉快さうでございますね」と、媚るやう、「愉快に遊ばなくてたまるものか、何うせ命を的にきまつてらア」。「ホヽ」夜はいつしか更けて、往來絶えたる橋の上に、春まだ寒き風の、ぞッと身に染むを覺えて、我にもあらずつき從ひて、橋の袂を下り曲れば、街燈の光消えんとして、小路の奥暗く、二人の姿は闇に消えて、何處ぞ擊柝斷續の聲。

下

　廻れば慈仙寺の門前、此處には電燈の光も淡き勸工場の角、戸板一枚に、掛けたる赤毛布も、所々破目見ゆる、形計りの吹矢の露店、夜店冷かすそれ客を、千人に一人待つ身の辛や。着古しの二双縞、袷は名のみ、肩狹く洗ひしやらけて、カンテラの油煙いぶせく、眠たき眼を腫らしたる、何處の裏長屋よりか、夜毎々々、さりとては未だ七ツにしては幼顔の、是にも親はあるべきを、繼親のせはしなう、せち辛き憂世の風に、早くも吹き立てさするものか。と慈仙寺參詣の、餘所の婆さんに、年を問はれて念佛を聞かされて、よく〳〵不運な家に、とお勤の吹矢殊更に當てさせじ、と情の涙こぼしかくる者のありて、露店の見すぼらしきには似ず、夜毎四五人の客あるぞ、一ツは風采には似合ぬ、顔立の愛らしき故なる。

　赤本、小間物、玩具店、白いもの鏝塗の看板娘、電燈の光に一入美しう、麗々しく飾りたてたる、夜店は言ふもさらなり、吹矢、玉突、機人形、達磨轉、蓄音器、文字の曲書に筆を賣る者、實地試驗に齒磨粉を賣る

者、是は歯の痛を治する藥、切傷の血を即座に留める、膏藥は此方で御座い、饂飩蕎麥、善哉、蒸饅頭、イヨー京山一座の浮連節、入らつしやいの聲々かしましく、春の陽氣にうなり立てゝ、咽喉から血の出さうな聲。短夜は更け易く、さしもに騒ぎし群集は、二人去り五人去り、寄席から吐き出る若者數百、難波戰功記の團右衞門は、強い者だと力瘤入れ乍ら、一時にどつと散りての後は、いつしかひつそと靜まり歸りて、夜店の前は俄の廣庭、續いて戸を荒く下す音、店臺、悉く疊み終れば、街燈の光物淒して影を力なく地上に投げぬ。少女が吹矢※



※はいかに、カンテラの火影漸く闇く、未だ店を疊まんともせで、うづくまりたる儘、野天の轉寢いかなる夢をや見る。今は起きたる家とて一軒もなく、いつしかどんよりと曇りたる空には、降るとはなしに。折柄何を怪しみてか、小路の奥に犬の聲淋しく、少女が小さき夢は破れぬ。怪やしく目を四方にくばりて、恐怖げなる顔も可愛ゆく、遠き夜廻りの擊柝は、今や三更の夜氣を破りて、可憐の胸には、如何に堪え難くぞ響きし。向の二階に鳴りし時計は、十二、打ち盡したる後は、森閑として寂寞の天地に、又物音一つ聞えざりけり。「なぜ遲い

のだらう、なぜお母さんは今夜は遲いのか知らん、何せだらう。」と獨語、繰返し乍ら、カンテラの油盡きて、心細く消えんとするを、じつと見つめて、急に襟かき合せつ、立ち上りて、いつも母の歸り來れる、小路の奥に、屹と目をくばりて、我知らずほろ〳〵と涙をこぼせば、何處のあたりぞ、遠き善哉の聲。中國一の大都會縱横一里に軒を並べし數萬の家屋、廣島繁盛の中心たる中島も、夜半の空は、猿叫ぶ深山、鶉鳴く山里も啻ならぬ、寂々寞々、晝の花に疲れし眠は、夜半の春雨寢心地よく、高き軒の外にもるゝ軒下に、小く身をよせたる少女、疊む露店に半身は濡れて、只管母を、待つ身はいかに辛かるべき。さるにても心强き母は、此可憐なる少女を、いつまで此處に捨て置きて、人食ふ鬼の面恐ろしく、何處に何事をか、短夜は更け易じ。世に哀なる乞食の子とて、夜更けて一人、人の軒下に佇む者のあるべしともおぼえず。畢竟母上と、二人の淋しい貧しい暮なればこそ、父上おはさば、かゝる淋しさは見ざるものを、最う戰爭は止みさうなもの、お出での時、彈丸一ツで命は無きもの、無事で歸ると思ふなとの仰せ、まこと其れ程恐しきものなら、彈丸の中らぬ内、一日も早くお歸りなさる樣、萬一も其内運惡く、彈丸が中つたなら何とせん。其儘死んでおしまひなさらば、二度とお顏は見られないものか。母上は、それがお國の爲だと仰せらる。それにしても、母上の歸の遲い事よ、何か變な事でも起つたのであるまいか、乾度それに違ひはあるまじ、さもなくば、こんなに夜更けて、菓子を買ふ者もあるまじきに、と小さき胸に溜りかねて、やるせなう自團駄ふめば、雨か涙か、颯と吹く風は、横さまに少女が頭よりおそひぬ。

* * * * * * * * * * * *

「是か、これが貴樣の娘といふのか、早く用事を言はないか。」と聲風荒々しき佩劍の響、嚙みつく樣な怒鳴聲、今更の如く膽つぶれて、「ハイアノ……最う可いので御座います、」と慄く口に袖かみしめて、俯けば「何だ何を

言ッちょるだ、用事があると言つたぢやないか、一目逢はしてくれと言つたぢやないか、太い奴行けッ、」と畜生の縄に追はるゝ聲、恐ろしく舌の根震ひて、我にもあらず泣き出せば、「何を愚図々々しちよるだッ」と立ちはだかり、角燈に煌めく警眼に、屹と睨みつけて、荒々しう引つ立てんとすれば、踏み止まりて、どこ迄も動くまじ、と女の念力「何だ此あま奴、行かないかッ」と帯に手を掛けられて、引かるゝ足許よろ〳〵と二三間、「エイ行けッ「ハイ……まゐります、お千代々々、お母さんは今夜きり暫く歸らぬ程に、淋しくとも、一人で大人しく待つてゐる事ですよ、すぐ……すぐに、歸つて來ますから、」とおろ〳〵と泣聲闇に聞えて、無情の怒聲は宛ら地獄の羅刹にも似て哀なる姿が、追はれて暗く消えんとする後より、先程から、何事の起りしならんと、身を震して幼心に、物をも得いはず、泣きもせで、母と警官とを交々見つめたりしお千代は、此時に至り、ワッと泣き出し、「お母樣々々、お廻樣の處へ行つては厭よ、お母樣々々、」と可憐の兩手をさし延ばして、後から追ふて行かんとする、空はまだ晴れぬ雨の、しよぼ〳〵と宛ら秋の村雨淋く、哀れ角燈の光はだん〳〵に小くなりて●

評　細評するに堪へず、只悲痛の一節を以つてすれば足れり、意識の薄き女性の鑑しておのが教訓とせば幸甚

秀逸二等賞　圖書切符　（金貳圓券）

廣島市西寺町品龍寺内　小田つる子

不遇の緣

大芝信子

一

羽前の中央に蟠れる、月山の大山脈の西方、日本三急流の一なる、最上川を挾んで、別世界がある、莊内とて酒井左衛門尉が舊領地と聞く、其西の海濱に湯の濱と云ふ温泉がある、切傷、婦人血の道、其他諸病に効能あるとて、浴客常に絶へず、後は一體の小山續き、前は茫々たる日本海を控へ、右手は北滿の端、左手は越路の空、遙か向ふは露領滿洲を、水天髣髴の間に眺むべう思はれぬ、首を廻らせば鳥海の山は千古の雪を戴きて、雲表に聳え、崇嚴さながら人生に教訓を垂れて居る樣に見ゆる、其浴舍の前二階の眺望いとも雅なる所に、無雜作な束髮に結ふた品のよい婦人が見ゆる、質素なる飾らざる中にも、目鼻立の麗はしさは、さも青春の名殘りを止めて居るらしい、其心配氣な成る丈け人目を避くる樣子より見れば、浮世を厭ふて居るのであらう、何が故に此佳人は、今此境遇にあるかは、神より外に識る人ぞなき、時々獨り後手の山中に籠るのである、水は潺緩と流れ、木々は天々と前へ出た仙境に、幽玄なる讃美歌の折々聞こゆ、

世のたのしみ、うせゆき、人のなさけ、きえはて、身をおくさと、なきこの世の、なぐさめこそ、エスきみ、

と頌ひては又鹿の溪水を慕ひ喘ぐかの樣、魂の救ひを求むる切なさ、そゝぐ涙は紅に凝らん斗り、春風に谷間を出てた鶯が獨り此佳人の身を鳴くのである、

春の彌生と云ひながら、春風寒き山里の空、輕き草鞋に身を乘せて歩む姿のしほらしさ、森の彼方の千代の松、風に浮かれて歌ふ音や。岩間に落つる雪解の雫、絶えず音づる床しさは、彼岸に咲けるめでたき法の華。妙なる樂器を奏づるに似たり。滴たる雫も積り積れば川となりて浮世の中を流れ行く。流れて後は白浪立ち騷ぐ大海原。彼の女も又流るゝ儘に行つたなら、廣い世界に出でられて、ホームの春の夕暮に、花の色香をめづるものを。あはれや不遇の戀に泣き、死の陸の谷を歩む心細さは如何斗り。佳人は振返へり、振り返へり、山に別れを惜しみつゝ。

靜なる隱れ家よ、此世に汝が無かつたならば、魂は飢ゑて渇いて死ぬのであらう。何時迄も汝と居たい、斯う思ふては居るけれど、不意に追手が襲ひ來て、亦もあの厭な牢屋の中に行かればなるまいか、アヽ、モウ、其を思ふと、身の毛がよだつ樣だ。何故私があの樣な寃罪を蒙つたのであらう、ありと、あらゆる、虐待に遇ふて、座敷牢に押し込められても未だ足らずに、鐵窓に泣繫がれて、中年が間の囚え、ようも此骨々が摧けぬは不思議、アヽあの時の樣が目に浮んで來る。私は座敷牢に居つた時、愛妾のお鶴が呼びに來て、臨終の姑御が私に一目逢ひ度いと仰しやるとの事、私は駈付いて御介抱の上、母上に水を上げた時、母上は私の手を取つて何とも云はれず、はら〳〵と涙をお流がしになつたは御最後。其れから間もなくお醫者樣の御診察にて、之は病死でない、變死であるとの事、嚴しい御詮義の上、加害者は本妻のお鶴であると異口同

音に申立られ。私は夢の中にさまよふ心地、身に覺の無き。事實のあらん限りを申立ても。迚も遁れられぬ罪にかけられて。獄屋に沈入れらると云ふ。餘りと云へば情けない、私は人を殺す樣な恐しい心は持ちませぬ、別けて母上は姝となり日向となつて。私を庇つて下さつた、既に妾のお胸が入り込む時の一通りならぬ御不同意も。多勢に無勢で遂々母上が無念の涙に泣き泣き入りをなされたが元因で。御病氣にお罹り遊ばしたのであつた、其程、私を愛して下さつたのに。恩に報ゆるに恨みを持つ樣な私ではありませぬ、敵をも愛せと信じて居るのに。此樣な寃罪を被ると云ふは神樣の試みであらうか、ドウ考へても分からない、お役人樣も妾が心を御斟量下さつて。保釋を許して下さつたのであらう。今は保釋の身であつて、尋常の身體ではないが。何時迄も此明るき世に居たい、……ドウしても此身は遁れられまいか、又もあの暗い、淋しい獄屋の中で、幾年も月日を送るのであらうか、それよりも寧そ死んで仕舞た方が増しかしら、……否〳〵左うでない、此身は神樣に依て支配され。運命に任かして居るのだもの。假りにも自由にはならない身體よしや、死刑の宣告を受けて。斷頭臺の露と消へ樣が、何處の島に追ひ放され樣が。爲さぬ事は爲さぬ、罪の有無も分らずに死ぬなどゝは。求めて罪を被る樣なもの。アヽ現世の裁判も恐しいが。未來の審判は尙更恐しい……此場合になつても忘れられぬは彼の人の上、此身の事情を識るのも彼人より外にない。風の便りに聞きまするに身を軍籍に置き玉ひしとの事。定めし今頃は胡沙吹く滿洲の野邊で。身命を賭し花々しく戰役に從事して居られよう。私の此樣な目に會ふのも、知り玉はぬであらう。アヽ雲の絕へ間もあるものを。何故私には絕へ間がなからう。死んでも絕へぬは此胸の秘密である、



思へば十年の昔。私が十八の春。ドウしても樂井へ嫁がればならぬと極まつた時に。母に連れられて此濱の濱に來てあつた、眞さんが私の跡を追ひかけて來られたのが。丁度今時分櫻の花の咲きかけた頃、あの山で泣き別れをしてあつた、あの時眞さんは私の手を緊と握つて「靜さん儘にならぬは浮世の習ひとは能く云つたものだネー。之も皆僕の不德よ。其れは分かり切つて居る事だが。其分かり切つた事を制する事の出來

ない。何故此樣な馬鹿だらう。卿さん此愛がチー破れて仕舞ば沙漠の中の迷見も同然。是迄の秋庭眞平ではない。ドンナ君に離るかしらん、其譽り功名の戰場に立て。あつぱれの勇者となつて見よう、其穢帷たる職務をば。愛する貴女と以つて。生涯無妻主義であると云ふ事を。せめても の僕が心やりと思ふて下さい、可愛相な男だと。貴女に一滴の淚があらば。僕は。モウ、其れで滿足です」と舞つた聲は出なくなつて。熱い淚をほろりと落された時の樣子は。今でも、あの山の中に籠つて居る樣だ、やがて山を出でゝ不意にヒウーと云ふ音に驚かされて。二人共に首を上ぐれば。小さい滊船は烟を吐き立てゝ行くのである。眞さんはつくぐ〳〵と滊船を眺めて「アゝあの滊船に乘つて北海の孤島であらうが。シベリヤの氷野であらうが、携へて行つたならドゥだらう」と淋しい笑ひを洩されたが。憤然身を起して歸りましよう。歸りましよう、貴女もチー僕の事は、モウ、死んだものと諦めて。此上は篠井君の片腕となつて。助勢するゝが貴女の本分です。假りにも僕の事など思ふては成りませんよ、之は友誼上忠告するのです」と至らぬ限なき歎訓に私は泣くより外に言葉はなかつた、眞さんは、不意に烏海山を打眺め「アゝ偉なる蝦夷後の富士、アゝ美なる蝦島海の山、汝と別るゝは名殘り惜しと雖ども。汝と共に名を揚げん」と振り返へり、ふり返へり、つゝ。美音を放つて。春風春雨已開花。春雨春風復散花。昨日知音今日仇、人間萬事恰如花。と。吟じられたのは。丁度此岩のほとりであつた、春風は此松の樹にピーと吹いた時。一層悲しかつた、アゝ此松は幾多の星霜を經るも、よも變らずに貞操の操はしさよ、我身一つの行末は浮世と共にドゥなるであらう………、あの蒼天には鳥が舞ふて居る、この深淵の其底には魚が躍つて居る

行くとも無しに旅館の前を通り過ぎた、

「アイヤ〳〵　奧樣歸らしたかい」と聲かけたのは此家の下女のお隨である、

二

お隨は十八の娘盛り。飾られど天の成せる麗質は深山隱れの櫻花と云はうか、漆の樣な黑髮を彌り手の島田に結ふて。手織木綿の縞入に。尻切りの袖無し中綿は。會更稚氣に見ゆる。其れに性質も溫順、殊の外此佳人が愛して居るのである。

奧樣よ。今日あの山に行かした後でノー、部屋を片附けてやるべいと思つて、押入れを見たら。明放しの行李の隅に。紫縮緬の帛紗に包まつてあるものががんした、己あ、錢か紙入と思つたんだ。飛んだ奧樣だ。お金なんか、無くなつたらドゥさしやるんだと、獨り語つて。仕舞ふとした拍子。ツル〳〵と帛紗から離つたんだ。何んだと思つたら寫眞でがんした、己あ寫眞と云ふと。お飯の一度や二度食はれくも見たいものでノー、奧樣に聞きも。しませれいで、無斷て見たから、堪忍して吳さしやいよと。

双の手をついて詫ぶる心根の可憐さ、そしてお隨は目を丸くして、

奧樣、己あ膽あ消へた事ががんすゾー。奧樣も見さしたべい、此家の裏二階に御座る凜しい軍人様ノー、右の腕が肩の處からポッキリ取れて居さしやるのよ、あの人が机の上に立てかけてあらさる、立派な寫眞ががんすノー、其寫眞はノー、先刻奧樣の帛紗の中にあるのとすか違ゐがが

んせん、丸で瓜を二ツに分けた様で己あセツメイ魂消げたヂヤ、

佳人は不意に打たれて何とも答へ様がない、お睦は尚も熱心に話して居る、あの軍人様が一寸見ると恐い様だがノー。語つて見ると極く普い人でがんすヅー、己あ亭主も第二師團の兵隊で戰さに行つて居ると語つたら。喜んで戰さの話しを丁寧に語つて呉さしやる、己あ難有涙がこぼるゝ様だチヤ、

且那はん、お胸が痛くがんしまと聞いて見ると。「サツパリ痛くない、だが何時迄もとタチヤリして居られないから、此の湯に入つてチヤツチヤと癒すのだ」と平氣で云はまる、そして立派な且那はんで。戯談一ツ云はした事がありませれい。己あ御飯のお給仕に行つて「且那はん、淋しくあらまらう」と云ふと「サツパリ淋しくない此様な友達と一緒に居るのだもの」と机の上の寫眞を眺めて。ニツコリ笑ふて御座るヅー、ほんに親い人と云ふと別なものでがんすノー、佳人は眤とお睦の顔を見詰めて、

「多分其お寫眞は中のよいお友達でゝもいらしやらうよ」

「奥様お友達どころでありまうばし、奥様のよ、吊紗のと同じでがんすてば」

タリヤお前さん。他人の空似と云ふものよ。吊紗の寫眞は私の兄さんだよ。天にも地にも無い唯一人の兄さんだよ、と云ひ紛らしたが。耐へ兼れてや。ほろりと落した一ト雫に。千萬無量の感があるらしい。お睦は健氣にも慰めんとして、

「奥様ゑ。其お兄はんが戰さに行つて御座るかノー」

ツー、兄も夾から外國へ行き。私も諸所流浪した故。永年の音信不通。互の行衛は不明であつたが。去年の春。開戰後行つたと云ふ事を。風の便りに聞く許りで。私はひたすらに兄の武運を祈つて。凱旋の日を待つて居るんだよ。お睦は口にこそ云はれ温き同情が溢れて居る。涙を湛めし途端、鳥は楽し相に水面に遊んで居る。お睦は得意の調子で。

　　遠くはなれて、互にしんぼ、
　　鳴じやなけれど、みづになる、

其時佳人は稍愁眉を開いて。ほゝゑみの笑靨を浮かべ。

「ほんに甘い事ヂー。お前さんの歌ふのを聞くと魂は天の外に飛ぶ様だよ。お前さんが居なかつたら、私は氣が滅して死んで仕舞たかもしれぬ」

お睦は佳人のほゝ笑みした、さも嬉し相に。

「奥様よ。其歌の様に互に辛抱して居つたら。お天道様も己あ達を助けて呉さしやるべいノー、別るゝ時に亭主が。お前立派に勤めて呉れろ。露助を打殺して澤山お土産を持つて來ると云つたけヅー。世の中と云ふものは廣い様でも狹いもんでがんすまいか。奥様と己あで斯うして居る様に。お兄はんと己あの亭主も戰さ場で知り合つて居るかも知れませれいヅー。矢張己あも戀しがつて居る様に。彼方でも己あを戀しがつて居るだんべい。人情と云ふものは男も女も同じもんでがんすベノー。

夕日まばゆく顔に袖、見る〳〵日は沒して、鳥は塒へと急ぐのである、又も玉を轉がす樣な聲で。

靈井はるかに。飛ぶ鳥見れば、
わしも行きたや、滿洲野の空に。

歌ひつゝ立去るお睦を。離れがたなげに見て居つた。

月やあらぬ、春や昔しの春ならぬ。此身は此處に迷ひ來て、夢なき戀しさと、懐しさとの明け暮れに、絶ゆる思はなきものを。十年の久しき、血の涙を流した一世の別れの場所なる、渦の濱の海に戀しき人の俤をただに尋ねんものと、來し甲斐ありて圖らずも、此音信を得ようとは。是や天の指圖と云はん。

三

めづらしや。今宵は松の琴聞こゆ。遠ち近ちの水音もおもしろしと、机にもたれて餘念なき折り、障子を明けて入り來たりしは、姿勢正しく〳〵眼光鋭き一男士、鼻下にはカイゼルの美髯切れ長く、黒紋付の羽織に、何やらの荷物。右手を懐に入れしかと思へば、左もあらず。是や風雲叱咤遼東の野に、倥勤を止めた名殘りとも見ゆる。

「ナア、突然失敬、僕は陸軍少佐、谷口健之助と申もの、李花の冠、瓜田の履、其れを辨へぬには御座らんけれど、是非お尋ね申度事があつて參つたのです。露骨不遠慮は御容赦下さい」と慇懃に會釋を述べ。

外でもありませんが、貴女の御令兄は軍人で居らるゝと聞きましたが、御尊名は何と仰しやるお方です。同僚と思へば懐しさに堪へんです、不肖僕も國命を奉じて、去年の五月遼東に渡つて、南山の激戰を濟ました後、旅順攻圍軍に加はつて、隨分思ふたより永びきましたが、遂々難將ステッセルが降伏の下に、東洋無比の要塞地、彼の難攻不落と銘打つた旅順口も、見事陷落したる爲め、一ト先づ本國に歸つたのです……時に御令兄は今何處の方面に向はれてお出です。御名前を伺へば、多分分かる筈。

と。單刀直入の問に佳人は答ふる言葉はなくて。一種異樣の色を帶びながら。

「ヘイ、御親切樣にお訪れ下さる兄の身の上で御座りますか、軍人と云へば云ふものゝ、疾の昔し志願兵となつた事がありましたが、其後米國へ渡航致して、不幸にも病氣に罹つて、遂々異郷の空に斃れたので御座ります」と。一層悲哀の色を浮べて居る、實にや櫻花の雨に打たれし其風情、少佐の事の矛盾せしを照合なき相に、

「ナナ。左樣でしたか、其はお氣の毒千萬。嘸御自身も遺憾に思はれたらうが、人生如何とも致方ない、天命と諦めらるゝより外はありますまい。實は此家の下女が僕の友人の寫眞を見て、此方に似た方の妹御さんが居らるゝと云ふた爲め、若し友人の妹御ではないかと、懐かしさの餘りお訪れ申たのです、アゝ縁も、ゆかりもないお方に御無禮を致しましたナア、

互の談話は途切れて、手持ち不沙汰に見ゆる、隣り座敷は杯盤狼藉。三味に合はして藝者が冴へたる聲で「我戀は三國一の富士の雪、どなたがいけんをなされても、いつも日かげで溶けはせぬ」入るともなしに耳に入つたが。

五月蝿と云はん斗りに打消して、壁を見詰めし途端、目に入りし油繪、此女が日頃携へ來たりし秘藏のものと見ゆる、繪は正しく、キリストがゲッセマ子の園に主の祈禱の姿である、其の繪を見て、不意に思ひ出したらしい、此女も又宗教の信者である事を確認して、少佐は嚴格の態度を取り。

今改めて貴女にお訪れ申度い事があるのです、當時有名な政事家で、篠井晃と云ふ男がありますナア。

佳人は胸に五寸釘を打たるゝ思ひである、

「倚、其妻の柳子と云ふ女を御承知ありませんか。」少佐は何心なく問ふも、佳人には熱血も迸らん斗り、何が故に我姓名を問ふのであらう、世を忍ぶ身の子細あつて、細井花子と僞名して居るにも關らず、ありく\と我名を訪ぬるとは、若しや探偵にてもあるまいか、あはれ、荒野にさまよふ小羊、今や狼の餌食とならんとは、さもあらばあれと、佳人は茲に大胆にも、ハイ、存じて居ます、私の幼い時分の友達なのです、



少佐はさも喜ばし氣に、膝を打ち、笑みを洩らして。

アヽ、天命盡きず、愈々識るを得るの緒を得たのは、僕が身に取つて是程嬉しい事はないのです。實に小説的の樣ですナア。一樹の蔭。一河の流れ、袖振り合ひしも他生の縁とて、よもや此莊内三界で傳手を得ようとは夢更思はんでした。僕かトゥかして其女の行衛を尋れたいと。苦心して居るけれど、ドゥしても分からない。世間の話しには、夫篠井晃の虐待に會ひ、途ひに精神も錯亂して、無意識にも姑を殺したと云ふ説もあり。兎角世の評は紛々として當てにならぬが、又一方の説には篠井の愛妾は非常な毒婦で、妻の柳子の落度を狙ふも、妻は貞烈無双、家政上の經營慘憺。加ふるに堅忍、不拔の精神は、迚も蓄妾風情の想像にだも及ばない、ドゥしても究屈でならぬ譯け、百方策略を廻らした結果。右の手段に及んだとの事、果して其れは事實とすれば實に柳子は可愛相です。蓄妾風情の 謀事と云も恐るべきものですナア、アヽ、濱の眞砂は

蓋くるとも世に悪の種は盡きんものですナア……輿論の如何に關らす、彼の篠井が擧動を見玉へ、名譽ある代議士の職を帶び、一方には辯護士として立ちながら、政事上には權謀術數、訴訟上には怪腕を揮を見ても分かる、其如く家庭にも種々の權謀を用ひて、紊亂を來たし、妻女を虐めたに違ひない、現今政事家たるものゝ腐敗は云ふ迄もないが。今更慨嘆に堪へんのです。

と首を振つて、葉卷の灰を、ほと／＼火鉢の縁に落して居る、

佳人は答ふる氣力を失つて、俯向いて居る、其襟元の麗はしさ、今しも匂ひ、こぼれん斗り、少佐は愈々希望の光りを放ちし顏色にて、

貴女は篠井椰子を御承知あつて、加之其のふり分け髮の友で居らるゝと聞いて、初めて僕が暗黑界に望みの光線を認めた心地が致しました、

……僕には一人の友があるのてす。名を秋庭兵平と申ます、刎頸の交りを結んだ友です。

と、云ひかけて、吸ひ殘つた葉卷を火の中に投げ入れし時、煙はポーと立つた、少佐は咽たき顏をして居つた、佳人は無量の感を懐いて居る、幾春秋が其の間、焦れ焦れた、君が行衞をだに知ゝ由なく、身に添ふ幻を形見に、いつかは又と念かけしに、今此沈默の中に正しき音信を得ようとは、夢にも思はなかつたであらう。少佐は稍其煙の消ゆるを待つて、

僕、其秋庭君の身の上ですナア、彼が若い時分、死を賭して迄も愛した女があつたのです、ですが事情の許さん處より、涙を揮つて別れたのです、泣く／＼女は他に嫁しました、其時秋庭君は非常に失望して、山へ迄引込むうとしたが、熟々考へると、一婦人の爲めに生涯墮落の底に沈むものかはと、斷然志を飜して身を軍籍に置いたのです。其處は秋庭の秋庭たる所以です。爾來職務に勵勉に、加ふるに博學多識、陸軍部内に於ては、文武兼備の眞將、東洋のモルトケと迄呼んだのです。だが惜しい哉。秋庭君は旅順の激戰に斃れたのです、名譽の戰死を遂げたのです。敵の彈丸は左の肺部を貫いて背にかゝつたのです。幸ひに息も通ふものから、即座に野戰病院に送られたが、苦悶の中から僕を呼び寄せて、云はるゝのに、「今迄君に明かさなかつたが、實は斯く／＼の次第である。終生無妻主義を取つたのも其れが爲めである。モウ一言君に云ふ事がある。不審極る事は、昨夜の夢に我愛する者が寃衣を被つて、獄屋に繋がれたのを、あり／＼と見た。さめ／＼と泣いて僕に助けを乞ふた。餘りの恐しさにギアと一聲叫んだ。すると側にある、看護婦に氣付かれて、其れなりに醒て仕舞たが。夢は精神の迷ひとは云へ不思議な事もあつたもんだ」と得も云はれぬ淋しい顏をして、わな／＼と震ふ手を差しのべて。枕邊の鞄から一葉の寫眞を取り出して。其れから秋庭君が始終嵌めてあつた、黄金の指環を左りの藥指から拔き取つて「殘念ながら僕は此傷で死んで仕舞かも知れぬ、若し世にあらば、天涯地角ゝ尋れても彼女に此品を渡して呉れ玉へ、彼女は熱心な宗教家である、或は其方面から、手がゝりを得んとも限られぬ」と云ひ終つて。潸然として涙を流がしたが、急に苦しくなつて、其れ切り息は絶へたのです、アゝ渾身を君國の爲めに獻けた英雄も。此様な秘密があつたかと、僕はつく／＼憐れに感じたのです、と、鬼をもひしぐ男士も、亡友の魂に泣いて居るのである、

春雨ははら／＼と窓を打ち。浴濱の波は怒つて、岩を突く物音は一層凄じく聞こゆるのである、少佐はホツと溜め息を洩らして、

戀愛の破裂と云ふ程氣の毒なものはありません、永久に冬の夜を過ごす様なものですナア、僕は本國に歸つて篠井椰子の行衞を尋ぬれば、現

に獄屋に繋がれて居るとの事、今に思ふと秋庭君の臨終の夢と適合して居るのです。アヽ無盲の愛は夢となつて通ふたのでありましよう。是租の精神かと思へば地下の秋庭君も嘸満足に思ふて居らるゝでしよう、…………僕が折入つて貴女にお頼み申まする、篠井柳子が不幸有罪に處せられたなら、憤みを吞んで默するより外はなけれども、萬一、僥倖にも、無罪放免の身となつて出獄したならば、何卒此品を貴女のお手より彼女にお渡し下さるまいか、

と、一葉の寫眞と金の指輪とを佳人に示して、此品は秋庭眞平君の臨終の形見である。此品には英雄の魂が籠つてあると、何卒お傳へ下さい。同時に、此谷口健之助が、お目にかゝる事を得なかつたのは、遺憾千萬ではあるけれど、軍國多事の今日、ドウなるかも知れん身の上、之も宜しくお傳へ下さい、

と、云ひ終つて立ち去らんとせし時、夜は既に三更、滿夫は松明を燈し、轡押しつゝ、松前追分けの節面白く。

やませ風、
別れの風だよ、あきらめしやんせ、
いつまた、逢ふやら逢はぬやら、

評　其文章は駿馬に鞭つて千里の曠野を行くがごとく、奔放浩蕩として　竄足捉すべからざるの槪あり、其結構は變化自在、出沒測るべからずして眞に雄才の面影を存するものあり、されど奈何せん、一篇の小説徒らに文に役され、徒らに構に役されて、眞情の人を動かすものなきを。

ものがたり

八重子

月満てば缺け花咲けば散る、四時の遷り變れるも自からなる盛衰榮枯の現象、その道理知れど恨めしきは妾が身なりけり。皆樣や哀れと思召して涙も給べや。

妾の嬉しと思ひしは、高等小學を終へ高等女學校に入學せし一年なりき。多大の希望を抱きて學びやに入りし一年、實に榮譽の勞をつみて勤めし甲斐の成績優等にて昇級せし月、妾の幸福は最高潮にてありき。あゝその時、古郷より電報は來りぬ、妾は胸轟き足ふるへたりき、誠そは妾には終生忘るべからざる悲しみの紀念なりき。

取るものも取り敢ず急ぎ歸りしも、はや、旣に遲かりき。涙の内に野邊の送りも濟み四十九日も過ぎぬ。まる程に悲しみもやゝうすらぎぬ。ま

れど時々思ひ出の、悲しきに枕を濡し短かしと言ふ夏の夜も、いと堪え難く明し淋たるともありき。やがて秋は來り冬は過ぎ暖き春を迎へぬ。世の人の嬉ぶと共に妾には第二の母君を迎へられぬ。父君は獨り悦に入り給ひて妾を露ほども省み給はざりき。あゝ妾はこの時より悲みの深く胸に彫まれて、いつしかと忘れにし母君の御惠み、事に當りて忘るゝ事能はざりき。かくて又、一年を經し夏の初、第二の母君は妾に奇なる報をもたらしぬ。そは父君の命なりとて「女子は第一禮儀を知らでかなはぬものなれば必ず禮儀を心懸くべく吾家にては、以前より我儘の増長し居れば一二年、他家へ奉公に行くべし」と、妾はあまりの異外に答ふべき返事の如何になさむと躊躇うち一つ打たれぬ、繼母君は烈火の如く怒り給ひて「この子は仕樣のなき我儘なり」と、あゝ妾は遂に行くべく約しぬ。

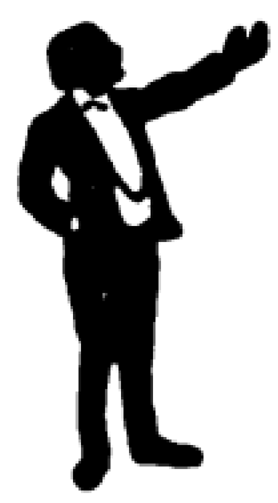
行くべき家は何れなるか、父君の命なりと言ひ給ふも何れは繼母君の勸め給ひし事ならむ。あはれ第二の母君の、など妾につらく當り給ふにや。誠妾にとりては惡鬼のそれよりも怖しければ、何時も心を爽うして命をば待つなりき。あゝわが母君のましまさばかく迄に……………、その夜は泣き明しぬ。

妾は出來うる限り繼母君に仕へ、堪ふ限り命を守り居るに、尙そが上に我儘なりとは、あゝいかにせば繼母君の御意に召し給ふや、わが母君には無理も言ひたりき、「されど」この子は怒つても可愛らし」とわが頰に接吻し給ひしこともありしを朧に覺へ居るなり。あゝ幼きその昔思ひ浮せば只、母君の戀しうなつかしく、など母君は獨り逝き給ひし、何故に妾を伴ひ給はざりき、あゝ思へば母君こそ恨めしうお羨ましくておぼへず淚は頰を傳ひぬ。

あすはこの家を出で行くなり。新しき飛白一枚浴衣一枚に甘んじて——この家を出で行くなり。明日よりは人に使はるゝ身とはなるなり、いかなる宿世のえにしにや、いかにせむ、手馴れぬ業の嗚呼いかにせむ。など思へば思ふ程胸せまりて、ものゝ道理のわきまへられぬこそ口惜けれ。あゝ父君は未だ夢さめ給はぬや、繼母君の末恐しう今は父君をこそ思へ、何時如何なるをなさむも計り難きものぞかし。

あはれ母君のこを見給ひなばいかに嘆き給はむ。あはれ母君願はくばこを知らずしてましませや、父君よとく夢さめ給へ、神樣やわが家を守り給ひてよと、果は神に祈りて默想のひざに、はふり落る淚を拭ひ取る勇氣もなく、いつしかとうなだれし頭の熱くいと堪へ難くして頭をあぐれば、孤燈影淡く四方寂として聲なし。

あゝ妾は如何なる運命の神のみ手に支配さるゝか、あゝ如何なる運命と戰ふべきか。まてもおそろしの妾が前途。



川柳（家庭文藝）

題「雜」

井上劍花坊撰

天

牛込區市ヶ谷舟河原五、岡崎方　下山京子

櫻餅坊はお庭で製造し

評云、京子の句、詩才縱横、しかも優麗高雅にして婦人の特色を失はず、其投吟一々之を證す、五號誌上、人形の課題に應じ「人形屋生きた人形が御客なり」の句を寄す、今亦た此吟あり、可憐の兒女を捉らへて理に遊戯せしむ、豈婦人の特色を失はざる者にあらずや、「櫻餅」と云ひ「坊」といひ、「お庭」といひ、「製造」といふ、一字を苟もせず、物は小にして天地は大なり、而かも俳諧の他山石を假り來り、以て川柳の句品を高からしめ、且つ滑稽趣味を忘却せざるに至りては、吾人の最も多とする所にして、滑稽と云へば必ず狂顛笑謔のみと思惟し、或は狂態猥雜の句を作し、或は非機味沒滑稽の句を作して疑はざるが如きは、吾人の太はだ好まざる所なり、吾人は京子の潜心鍛錬の功を積み、自づから眞滑稽の妙諦に觸り、國秀川柳作家の本領を發揮せんことを望む。

地

青森縣弘前市梅町一番戸　八戸とよ

秦始皇帝名はマツリゴトと眞面目なり

評云、奇想天外より落つ、如かも絶無の事にあらざる也、蓋し始皇本紀に於てにあらずして、十八史略二の卷に於ての事なる可し、「眞面目なり」に大なる働きあり、大なる力あり。

人

神田區塗物町五番地増田幸太郎方　増田富美

どちらへと先づ背の兒に挨拶し

評云、穿ちたり、笑はせたり、寫生句の上乘なる者、頑是なき背の兒に對して寒暖を問ふ、人間豈これより眞實にして、これより滑稽なる者あらんや。

十名吟（有賞）

○ 岩代國郡山町字中町　横田よう子

繪道樂口繪に惚れて本を買ひ

○ 名古屋岩井町五十三　篠田浪子

藥種屋が醫者の病氣を見舞に來

○ 岐阜市忠節町松倉方　野寺登美子

落第で濟んだと親は嬉しがり

○ 小石川戸崎町二十八　淺井琴

きりやうから云ふと妾がなるところ

○ 岩代國郡山町字中町十四　横田くら子

肱かけの下に寫眞をソトかくし

○引越の琴邪魔物で選ばれる　横濱宮崎町三十五　小峰園子

○あらッ雲が赤いからよと袖屛風　堺市中の町西四丁三十八　河合一枝

○廣告紙又號外かと下女思ひ　仙臺市新町三十三　髙橋正代

○しめてやりあとでしよい帶かるくうち　神田錦町三丁目二十一　今井とみ

○輿入で一息(ひといき)つけば離縁沙汰　名古屋東橦木町十九　網野たけ子

秀逸之部

雜巾を縫ふがお針のスペルなり　神田　増田富美
赤さんを貰つて行くとおどかされ　同　同
おぎやあから死ぬまで勝手這廻り　同　同
高帽をソット丁稚がかぶつて見　岩代　横田くら子
おぢいさん帽子を汽車に忘れて來　同　同
顔の血を拭き／＼正行唾を吐き　小石川　淺井翠
手眞似した大きさだん／＼小さく也　弘前　八戸とよ
アレ花が可愛さうねと雨の窓　牛込　下山京子
美しい水落花をつれて逃げ　牛込　下山京子
新婚旅行途中で花嫁がいやになり　岩代　横川よう子
襷にも短かかつたとこぼして居　京都　三宮つゆ子
田舍文士互に天才だと推稱し　岩代　津田かつら
辨當の小イさいだけが女なり　岐阜　野寺登美子
まゝ事の皿に嫁菜は萎れて居　京都　西澤まつ子
居候犬も喰はない蒟蒻を喰い　神田　集田栞
お母さんさうでない先生が斯う云つた　伊勢　武智秀野
テニスの優等者落第の網にかゝる　秋田　浦井松子
蝶々が花盗人のあとをつけ　日本橋　藤田あい子

佳句之部

ねぼけづらへ薄ものの春のお月さま　牛込　下山京子
春の野に詩人牛のやうな風で居り　同　同
花見に行けぬと雨を睨んで居　同　同
巨燵よりも軍ごつこと一決し　岩代　横田よう子
無邪氣な子おまゝよりもパンをたべ　同　同
極の馬鹿うぬが本名忘れてる　同　同
水彩の美人にチョイと髭をつけ　同　同
本好きの丁稚伊勢屋で暇を出し　同　同

品切れで其本が見たくなり　岩代　横田よう子
此世をばのあとは小聲で法性寺　小石川　淺井琴
目につくと道風の故事を云ひたがり　同　同
お先きへと吸物の蓋を隠居とり　同　同
ゆつくりと一夜寐たいと乳を添へ　神田　増田富美
妹を催促されて母こまり　同　同
どうしたらお氣に召すかちやうちん　同　同
飯さへも焚けず良妻のつもりで居　岐阜　野寺登美子
將來の賢母將來を待つて居ず　同　同
女敎師とまで世間では札が落ち　同　同
パン賣の男帽子が歩くやう　岩代　横田くら子
はげあたま帽子のまゝで挨拶し　同　同
取敢えず帽子を旅に代用し　同　同
女學生帽子にチヨイと花を挿し　同　同
小便に起きたついでに月を褒め　神田　今井とみ
樂隠居氣長に庭の艸を抜き　同　同
其當座愚痴のこぼれる母の口　同　同
見合には妙とそばかすかくれて居　名古屋　網野たけ子
密談の相手つんぼで紙にかき　同　同
捕虜にして捕虜と思はぬ捕虜の顔　同　同
捕虜慰問などゝ世間はのどかなり　京都　三宮つゆ子

曲乗りはもうお仕舞と淨助いひ　京都　三宮つゆ子
雅號など名刺に畫いてへボ文士　岩代　津田かつら
如何にも大家の如き雅號つけ　同　同
田舎雜誌田舎文士を月旦し　同　同
田舎文士小學校卒業生　同　同
へボ文士互に雅號呼ばりなり　同　同
死だ子は兎角伶悧なものばかり　伊豫　武智秀野
もう一ぺん子供になりたいぜいりよん　同　同
淨助にされて泣き出だす軍ごと　同　同
母ちやんは馬坊は滿州軍司令官　同　同
もういくつ寐たら兵隊に出られるの　同　同
日軍の勝利を祈ると捕虜御世辭　佐原　夏月竹子
露都でなら開城せぬとステッセル　同　同
退却で位一級進められ　同　同
體格は合格試驗は不合格　秋田　浦井松子
御なさけでやつとびりから三番目　同　同
裏口の下痢にはドクトルも匙を投げ　同　同
さん〳〵に泣かされた芝居はめて居り　伊豫　渡邊梅子
居候葬式だけは御名代　日本橋　石田友子
來た〳〵と手に持つ英書さかさ也　富山　北川よし子
文の末に梅の蕾をやりとりし　牛込　行田はる子

女學世界中學世界の妹なり　三河　藤井辰子
背進の字が幅をやる隱語字典　美濃　山田愛子
お驕りよと天賞がおだてられ　宇都宮　すみれ
アラいやよとあとは目で物を云ひ　茨城　滿佐子
ランプの鍵我は天井に逆立す　越後　島本めぐる
しいられて菊の露ほど娘のみ　大阪　小山ふく子
日本兵退却法を聽き落し　前橋　田部井香久
案じるな捕虜になるぞと手紙なり　函館　三宅嶺子
呼で來た產婆お輕はよい名なり　岡山　有安けん
スツテセル又拾ふのだとへらず口　美作　太田加女乃
シルクハツトきまりわるさうにあるく奴　弘前　八戸とよ
花簪式部の本の中で枯れ　横濱　小峰園子
學理でも易でも日には勝てぬもの　山形　小林いわ
紫の袴老いて黑の袴なり　濱松　柳瀨一枝
發句より欠伸の方が手輕に出　牛込　前田清子
一等に出てたら駄吟多く出來　大阪　磯野燕子
ハイカラは髭の手前で高く買ひ　同　同
ちんぎして見れば氣まづい他の人　越後　竹田きみ子
戰死欄似た姓名にびつくりし　同　鈴木たつ子
撥を投じて看護婦を事とす猫　同　同
面黑き世到る處靑山あり　羽後　武田和歌子

咳一咳それから鬚をひねるなり　羽後　武田和歌子
ホチムーン日記を橫にかき　播磨　吉田某
虎の子をうかと鼠にしてやられ　埼玉　伊東仲子
金綠を鼻にかけたる蓮葉もの　周防　飯田駒子
花見にかこつけて不善を爲す女　下野　新井琴子
市松の母ちやんよくだゝをこね　大阪　末田しげる
下戶だけ花見上戶は酒を飲み　尾張　戶田富美子
長き日を槍さがしてツイ暮らし　岩代　そう子
つき山に登つて花見叱られる　上野　佐藤春江
厄介の上戶は下戶が背負つて來る　函館　村上喬子
奥樣はいつも自慢のごもくずし　福岡　西はく子
國が替れば名醫と捕虜の名がかはり　能登　櫻木壽美
其小說神聖論者そつと買ひ　麴町　豐島豐
露國の新聞號外を出すつらい事　名古屋　森岡ひふみ
露の抗議田螺の腹の底が見え　大阪　須枝しげる
毛虫がといはれて娘袖をふり　沼津　蛭海はま子
ものども續け〳〵と退却し　能登　杉下ふみを
うまい嘘ついて落語家ほめられる　同　同
御婦人の祝捷會はお汁粉や　芝　小島壽鶴子
お花見で見合とはうまい首尾　宮城　阿部いはの
川蒸氣花のある方へ顏を出し　本郷　佐藤ふさ

女郎よりの文燒いて火鉢に抛り込み　　牛込　前川松枝
樽拾ふ小僧蝶々に馬鹿にされ　　靜岡　栗田よし子
ひとり者美人繪葉書でなぶられる　　伊勢　すみ子
淡紅のリボンに來るはすいな蝶　　長門　飯田ふじ
女蝶男蝶菜の花道を二人づれ　　札幌　ゆき子
黒鳩公豆鐵砲に面くらひ　　北海道　工藤露子
傭兵毛布赤い心といふ謎なり　　埼玉　飯塚たい子

撰者吟

里歸りでかい丸髷なぶられる
來た當坐書齋で猫をぢやらして居
婿君に人形抱いて笑はれる
兄さんが貴郎にかはるはづかしさ
漁村の鼻歪らしホネムーンを囃し立て
話してる書齋へ弟が邪魔に來る

春の小川畔

若草もゆる野を縫うて、ちろ〳〵と自然の樂を私語きつゝ流れゆくいさゝ川、水はいと清うすみ渡りて、底の小石も數へ得べく、岸べの柳のながく水面に垂れて、折々春風にわなゝくさまの面白や。

妾は今し花籠片手にその岸べに腰下しぬ。

空はいたく晴れわたりて、天つ女神の織りなせし、薄ぎぬにも似かよひたらん如き、淡き〳〵霞は野となく、山となくたち罩めて、いづこなるらん、雲雀の、美はしき聲にさへづるも、いとのどかなり。

彼方麥田の中の細道辿りゆく、里の少女の一むれは、若菜つみにや、小さき籠携へて、節おもしろき鄙歌の聲も高らかに、張り上げて唄ふさまの愛らしう、その後よりは童の何やらん書物くりひろげつゝ、角いかめしき牛引きゆくも、げに一幅の活畫のやうにて、をかし。

妾は茫然とその影見送り居たりしが、折りから何處より來りけん、一羽の眞白き蝶の、羽翼かろやかに、ひら〳〵と小川越えて足邊近う舞ひ來りしが、蝶は何思ひけん、再び元きし方へと飛び去りぬ、やがてしばしありて黄色の蝶一羽ともなひ來りこのたびは花籠のあたりに解けつもつれつするまよふよと思ひしが、不思議や菜の露はそゞろ己が身をつゝみて、美はし女神まへ忽然とあらはれましぬ、身には羅衫紫袖をまとうて、頸には輝く曲玉掛けたる尊き御姿、これこそまさしく詩の神なるよ。そがまなざしは、夕暮の深き水の靜かなるにも似て、黄金なす髮には、七つの星ぞかゞやきゐたる。

（みゑ子）

落花　70



新體詩

(天) 一縷の望

美濃國武儀郡東武藝村　山　田　愛　子

戰死のうはさとりどりに
　かなしき秋はくれぬれど
生死不明のしらせには
　一縷の望つなぎけり

重き痛手に俘虜とも
　なりしかわがせかくあらば
ちからやつきて俘虜とも
　なりしかわがせかくあらば

かくて俘虜となりし身も
　わが大君はめぐみある
大御心のいとふかき
　なさけにゆるし給ふらむ

されどもされど俘虜の身
　死にしにまさる恥あらむ
重き痛手になやみつゝ
　いかにさむさやしのぐらむ

わが子のせがむ春着にと
　ぬふ針の手もおくれつゝ
となりに聞くや杵の音
　あやしくひゞく心かな

年はや暮れてあらたまの
　春はきにけり旅順口
おちしらせもとりそへて
　めでたき春はきにけらし

されどもあはれわが思ふ
　一縷の望今たえて
旅順の城にわがせこの

なきときくこそかなしやな、

征夫の情歌ひ得てよし、軍國婦人の涙一讀同情に堪へず、（静岡舟人）

（地）菫

花子女史

霞は、空を立ちこめ、
梅匂ひ、若草もゆる、
張詰めし、氷はとく、
鴬は、谿澗を出づ、
いかで、人の思の
など、人の心情のみ
迯に、
手を取り交はし
野のべに、
逍遥ひゐて
二本の、
菫を摘み、
紫は、
君が詩集に！
白きは、
妾が頭に！
其時、幸多かりき。
封の中、菫あり
されど！さど!!
君が文、今日吾手に
色はあせ、香は澌し
封じこめし、情は厚し
接吻す、
胸におしつく、
吾は今、只この思
君は今、如何なる心
今幸あり、此後も！
永久に!!!

あはれ、やさしの情思よ、調亦た面白し。（舟人）

（人）朝日影

滋賀縣犬上郡彦根町箱手町坂口方　重森芳枝

春の浪　ゆたくくと
幾萬里　太平洋。
白き帆の　雲にはせ、
とぶ鳥の　水に入る。
うたはうよ　日の本の、
大觀　まのあたり
みち潮に　あらはれて、
さしのぼる　朝日影

めでたき出來榮なり。大らかなる景色を歌ひ出でゝ、調また之に伴ふ。（舟人）

秀逸

塵外偶吟

信濃　雪子

うしろの山は峰崇く、
前の小川は水清し、
こゝと定めて庵して、
ひとり住む身の安さ哉。
浮き世の風も來られば、
せむろ愁の鬼もなく、

峰より出づる白雲に、
心も身をもまかせつゝ。
紅にほふ花の影、
秋かへして吾まてば、
かすみの帳只中に、
美妙なる鳥の聲すなる。
かゝみとすめる蒼空の、
月に秋詩を嘯けば、
松吹く風もおのづから、
山神が小琴と響くなり。
戀の谷間に身を投けて、
沈む時、
涙の淵に、
いざこゝに、
來れ若人、
果敢なき夢は、
さめはてむ。
黃金の露の香に醉ひて、
煩惱の霧に、
迷ふとき、
來れ利の子、
いざこゝに、
迷の夢は、
さめはてむ。

清洌水の如く、味あり。(舟人)

春の野邊

東京市本郷區須賀町十二　兒玉たき子

其一

のどけき春の朝ぼらけ
我が里近き野邊に出で
すゝろあるきの道すがら
四方の景色を見渡せば
霞もなびき花も咲き
遠近かけて野に山に
行く手に飽かぬ春氣色

其二

のぼる朝日ものどかにて
そよ吹く風も心地よく
堤の柳うちなびき
岡邊の櫻咲き匂ひ
すゝなや菫は黃に靑に
野邊より野邊を綾どりて
春の錦を織り成せり。

其三

彼方此方と來しあとに
雲雀鳴き立ち行くさきに
鶯鳴きて春の野の
道の行く手の樂しさに
心も空に浮かれつゝ
覺えず知らず春の野に
長き日影を暮しけり

其四

日は早西に傾けば

飽かぬ遊もいざやとて
ねぐらに歸る鳥ならで
我が家路にと急ぎ行く
實に面白や春の野は
あすも亦來んあなこひし
花よ小鳥よ春風よ

詞藻絢爛、陽春駘蕩の景を幼く詠み出でたるを愛す

きゞす

名古屋市木挽町六番戸　奥島ひで子

春の日西にかたぶきて
樹蔭小ぐらき山徑を
里に歸るか狩人の
肩にかけたる雉子あり
錦に裝飾る彩の羽の
光澤ある色は亂れねど
胸にかよひし血も冷えて
永眠る姿の安けさよ

裾野につゞく
小松原
おぼろに暮るゝ
春の夜を
草やはらかき
そが床に
雉子つまよぶ
聲もなし
野山の朝日
あたゝかく
あしびの花の
紅は
風もにほへど
たま貢へる
ぎゞすよいつか
かへり來む
戀かたのしき
夢もありし
ふる巣の松の
梢なば
月の光りの
かげにして
魂よめぐるか
宵毎に

うつくしきもの弱かるは
神の恵みを受けしとよ
か弱きものゝ安息は
花環に覆ふのみならず
世に情ある詩の子が
さびしき睫毛うるほひて
涙のま玉かゝるとき
運命のまへに慰安けかれ

綺麗の作なり、

海士の歌

石川縣鳳至郡輪島町字河井　櫻井順子

矢を射る如く翔ける天馬を、
鞭うつ女神西に落ちて、
空に名殘の光り波うち、
眞紅燃えて蹟うづまく。
みよ源家が檣檣そろへて、
壇の浦波おひうつ如く、
奇しき夕雲みる〳〵湧いて、
紀淡海峽敵兵みちぬ。
吹くや嵐の喇叭の音、
煙の空にたかくひゞきて、
女神を逐ふておこる黑雲、
宵の明星はやかげ暗し。
夜のぬば玉の闇を洩れて、
「たかき黑潮恐れはせねど
死れば妻子が飢に泣く」と、
礒をはなるゝ海士の歎聲。
げに物凄き宵にぞありけり。
船やる業になれたる海士の、
歌の聲さへふるひを帶びて、
沖の燈臺ひかりは細し。

あゝ弱くとも星のひかり、かの黒髪を遠くてらし、
砕くる潮の渦にかゞやき、歌聲ふるふ夜にてりわたせ。

詞も調もよく整ひて吟味に値ひす。

春の夕

熊本市西鍛身崎町四〇　羽田方　豊子

あゝみて見たいどうかして、
霞やこむる雨や降る、
春の夕の須磨の浦。

はかなき歌を絃にのせ、
かなたの空をなつかしみ、
暮れゆく庭に立すめば。

身は霞もやに包まれて、
我を忘れし袖のへに、
はらはら散りぬ花櫻。

あらなつかしの我君よ、
共にしあらば歌に詩に
打興じつゝ遊ばまし。

おぼろの月に筆とりて、
この花びらをまきこめて、
須磨なる里に送らばや。

言ふ所やさしく、女らしき作なり。

ふたつの勳章

美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

わが子ひとりは南山に
わが子ひとりは鷄冠山
二人のわが子さきだてゝ
攻むるは旅順不落城

忠　雄りしゝ軍の
厲聲叱咤するところ
堅壘こゝに砕けつゝ
堅壁こゝに破れけり

守るは露將ステッセル
やたけ心のはやれども
傷病兵の數多く
據うる道も絶てけり

二〇三高地は陷りぬ
コンドラテンコは殺されぬ
今はたあはれ開城の
白旗をたつる身となりぬ

嗚呼嗚呼かくて異國の
譽も高き勳章は
二人の胸にかゞやきぬ
いさをことなる光もて

今一息の所あれど詩才仲々に侮り難し。

お袖

岐阜　あちさゐ

切つて放ちし元結に、
にじむ油のあともなく、
島田艶なる襟頸や、
白きをほこるぬき衣紋。

鴇色ぶきの褄さばき、
雪かとばかり香冷く、
素足の鼻緒緋に燃えて、
輕き足どり小町下駄。

ふりの八つ口紅絹うらや、
のぶるましろの柔腕に、
まきし手拭紺絞り、
うせしもやらじ湯のかをり。

夕にぎはふ本町や、
燈にはゆる厚化粧、

道ゆく人は足をとめ、見なれし人もふりかへる、
若き男はあわたゞしげに、出でゝ見ずやの里詭り。
あだな聲音に人迷せて、女の春を盛り唄、
さりとも涙やつゝむらん、その名を問へばお袖とよ。
なびくともなきほゝゑみの、かげこひそめろ秘戀や、
お袖もゝれぬ女子の、其人しらぬ窓の月に、
あらずや臙脂筆かむ怨み、つらさは誰もうつし世に。」

俗曲的なり、併し面白し。

佳調

尼の姉　小石川　島村つや子

口紅さすと朝ゆふに　よりし鏡げの增鏡
香ひこぼれし前髪の　黑きも今はうとしとや
渇仰あつき讀經より　佛因きざす堂の前
菩提弔ふためにとて　髮落とされし姉の君
宿世やちぎりうすかりし　歡喜の夢のさめぬ間に
脊子は旅順の花と散り　十九の春を尼と呼ぶ
手にせる花の散るとのみ　人の運命をさとりては
蝋燭焚きて朝ゆふの　和讚のつとめ安からん
心やすかれ姉の君　淨土のみ座に永劫の
愛の光はきらめきて　聖き法衣の袖をてらさん

なげき　岩代　遠藤雪子

ふかしといへど　そこあらむ
たかしといへど　はてぞある
そのうみよりも　やまよりも
たかくてふかき　みなさけに
むくいまつらむ　かぞいろは
かなしきまでに　おいませり
おもへばくやし　いまにして
われにまことの　なげきあり
いましめおほき　はるのひを
はなふくかぜの　よそにして
たゞあたゝかき　ひかげをば
わがさちとのみ　すぐしつゝ
みなさけふかき　まことをも
をしへおかれし　ことのはも
みないつはりて　きのふまで
あだとなしつる　おろかさよ
いまさらいかに　くゆるとも

かひなきものと　しれどなほ
さとるこよひは　いたづらに
かこつなみだの　はかなくも
みのおこたりを　せむるなり
せめてとしはも　はやくより
かゝるこゝろを　われもたゞ
みおやになげき　みせまじもの

遊春賦

下野　神山ふみ子

花をいだいて野に眠る、少女が夢をさまさゝれ、
せめて酔はせよ若き身は、春や快楽のみじかきに。
みだれ亂るゝ袖の香に、人なづかしき春の夕、
あこがれいづな忘れても、ねたみあおる世の風あらき。
刹那々々にうつり行く、わが世の乘身の運命、
心なければ徒らに、雲ゆき水は流れたり。
過するあしたの辛ければ、かたく鎖めよと願ひたる、
戀をつゝみしつぼみにも、神は咲けよと命じけむ。
思ひ出しげきさすらひに、散りしく花を手にうけて、
行方をとへば佐保姫が、はるの調べもおのゝかむ。
まとろ悟らぬ薄命の、いづれ泣くべき幻か、

酒盃たゝいて歌ふとも、無何有の里に遊び得じ。
くれ逝く春の悲しみに、けづらぬ髪のほつるゝよ、
鏡くだきてしのび音に、うすきえにしをかこつ故。
すてたる笛をとりあげて、息をこむれど曲もなや、
あゝ草ふかき野に一人、袖口かみて泣かむ身か。

母の腕

神田　淺井ふさ子

黑髪ながく背に垂れて、薔薇の紫衣を纏ひたる、
雲の上なるおん母の、情溢るゝ膝の上に、
戯ると見て夢覺めぬ。

運命拙き幼子は、八月病の床に痩せ、
迫る臨終に吐く息も、かほそき乍ら太神の、
御名をば胸にとなふなり。

父はあれどもあらくしや、慕ひつゝ縋る小き手に、
握るゝ袂は冷やけく、めづる心は消えゆきて、
人の涙も涸れにけり。

おはれ血汐を絞られて、袖のひろ間はあられども、
恨みは露も持たざるに、何の憎みぞ衰へを、
辞び給ふ後の母。

親とはつらき習はしか、荒き笞に責められて、
惡しや愁の眉暗く、盡きぬ嘆きに住みわびて、
今こそ出づれ我世をば。

持れと罪を知らぬ子が、辿るや幾日旅の道、

平和の神の御園にて、
永久に睡眠の安からむ。
母の腕に抱かれなば、
世にも敢果なき兄弟が、
輝き胸に温かく、
埋れて過る草の庵、
夢を並べむ三つ枕。（綾）

旅の少女

弟綾苑に和して歌へる

静岡 大高綾子

敢果なき形に憧れて、
君よ菁の花ならば、
旅より旅に慕ひゆく、
徒な咲きそたゞ舞へな。（綾苑）

昨日は東今日は西、
蜜をたづぬる蝶ならば、
花より花に飛びかひて、
いみじき歌も多からむ。（綾子）

露命をつなぐ旅琴の、
色よき君が唇に、
よしや音色は衰するとも、
詠むべき戀の香もあらむ。（苑）

誰がため伸びし黒髪ぞ、
まなざし永劫に若うして、
亂れて額にかゝるとき、
春の花は古りたりな。（綾）

霜夜に結ぶ刈菰の、
君よ小胸に手をあてゝ、
夢も涙に凍るとき、
めぐる戀に笑めよかし。（苑）

霞たなびく春の日は、
ほろ酔若き歎想の、
桃咲く木蔭に佇みて、
清き戀に息へかし。（綾）

月満る伏屋の佗住居、
一夜の宿をまゐらせむ、
褥に露はしげくとも、
君よ今宵は旅籠に伏せ。（苑）

水とならばや

岐阜 望谷滿子

水とならばや我死なば、
心たのしく流れつゝ、
さばしる鮎を釣らむ時、
さゝらぎぬべく長しへに。

水とならばや我死なば、
岩井が下にわき出でゝ、
暑さをこゝに避けむ時、
あつき涙としづくべく。

水とならばや我死なば、
一つおもてにせゝらぎて、
小舟をそこに漕がむとき、
戀しのみ袖ぬらすべく。

水とならばや我死なば、
硯のうみに氷りゐて、
墨を筆にそめむ時、
打ぬるむべく解ぬべく。

春はのどけき花の蔭、
つれなき君の慰みに、
戀しきみかげ寫し見て、

夏はすゞしき若葉山、
つれなき君の齋もらで、
戀しきみ手に掬ばれて、

紅葉あやなる水うみの、
つれなき君の月見むと、
櫂の雫と亂れつゝ、

雪氣の風の寒き夜の、
つれなき君の文机に、
戀しき墨を身に浴びて、

牧場の春

備前　松本茂登子

春雨一たび注ぎては、
牧場に青き草萌えて、
三寸高しつくぐし。
甘き柔き草に飽き、
瞳かはゆき小羊の、
春の日あびて眠るかな。
ひくゝ蝴蝶の舞ひくれば、
雲雀は高く空に鳴き、
梅のほとりに桃のさく。
夕べうす霞こむる時、
み空に輝く明星は、
羊の夢や守るらむ。

磯の夕

[illegible]　美江子女

嶽(たか)きみ神が醫り手を、
あげて刻める磯岩に、
引きては寄する荒波の、
千々にくだけて雪と散り、
しぶきは霧とひろごりつ。」
今し落ちゆく日の神は、
あやふく建てる小社の、
朱塗み堂にくれなゐの、
清き光をなげかけて、
華表(とりゐ)の注連(しめ)に沙風(かぜ)寒し。」
神秘も深き夕霞の、
幕(とばり)はそゝろ磯のべを、
淡くつゝみてさびしらに、
またゝき出でし星一つ、
そは夕神の姿かも。」

夢の花かげ

下野　藤沼ふじ子

花の宮居に佐保姫が、
も裾かへして春の舞
ひらく扇に風たちて、
梅が香こぼる薄暗に。
われ筆とりて野に立てば、
戀をひめけむ小將の、
涅槃(こんつ)もとけて流るゝを、
詩(うた)の小甕(こがめ)にうけ得しと。
おごり小さきわが夢や、
きえて淋しき薄命の、
身な怨すれば此夜半を、
そゞろ繁玉(すだま)の迫りくる。
愛のみむろに醸されし、
色くれなゐの甘酒(うまさけ)を、
唇(くち)に含みて醉ふ幸(さち)を、
神情(つれ)なくもれたむとか。
せめては許せ春の夜の、
朝朝(あした)眠りの覺むるまで、
君が腕(かひな)にすがるまを、
心なぐさにあらむ身の。



端書文

葛天氏選

（天）　この魂性　羽前國西置賜郡下井町　谷山たに子

途に、小石に躓きて倒れたる五六歳の小兒ありき。そが母なる人、走り寄りて扶け起しゝに、啼いて去る樣子もなし、母それと悟りてか、石を蹴る眞似せしに、一と睨みして立ち去れり。この魂性は、抑も誰が養ひしものぞ。

筆力簡勁寥々たる短章と雖も大議論に値す

（地）　小猫　栃木縣下都賀郡國分寺村小金井　大越かく子

花瓶の花に戯れかゝる玉を叱れば、玉は氣色のたゞならぬと見てか、何處にか影を隱しぬ。あはれに覺えて玉よく〳〵と、やさしく呼べば、梁の上に、應へはあれど、いつもの如く、出で來らざりけり。可愛の玉よ。

婉柔輕妙情致あり妾態あり作者の爲レ人を想望すべし

（人）　玉章　名古屋市南鍛冶屋町八十五番地　玉村多歌子

「郵便」そはなつかしの聲なりき、忽ち舞ひ來りぬ、一片の文は、文机の上に。あな華やかなる墨の匂ひよ、目馴れたる美はしの御筆つきは、必ずよ彼の君ならむ。果して〳〵、戀し慕はしの君よりなりけり。開かむか惜し、止みなむかとく見まほし、いざさらば如何はせむ。

眞情流露美的生活を渴望するもの其文辭自ら至る

（秀逸の一）　友への返し　麹町區平川町鍋島邸内　野中すみれ

春子樣！紫の色深き菫の花!! お歌を添へてお送り下され。私どんなに嬉しう御坐いましたろ？ 一はかざしに。一は押花に。殘りは机の上から絶えず清い香を放つて居ます！ 御禮には何を上やうと今其考案中！

御禮の品物よりも幾倍珍重さるゝは此文なるべし

（秀逸の二）鈴の音　下野國下都賀郡中村字下河原田　神山ふみ子

夜もすがら下界の花の香にあこがれ醉ひし里の名殘り惜しげに消え行く曉の空に靜けき氣を破りて櫻の宮のみ鈴はから〳〵と高鳴りぬそもや何處の誰が如何なる願ひにかあらむといぶかしみつゝ木の間をすかして窺へば思ひきやまだ漸々十歳ばかりなる少女のみ社の前に額づき兩手をくみて何事をか一つ心に祈れるらし寄り添ひて仔細をとへばあはれ一人の兄君が遠く滿洲の野に駒を馳かする身の恙なかれとや一點のけがれもなき水晶にも似たる心もてる少女が誠をこめし此願ひいかなる神かしろしめさでやはあるべき。

樸實敦厚にして山林の氣あり頗る人意を強うす

（秀逸の三）白い花　名古屋市木挽町壹丁目六番戸　奥島ひで子

お白粉を掌にうけて、春の水で溶いて居ると、色がだん〳〵淡くなつて、遂に失くなつてしまう、これは不思議だと思つて、又溶いたのが、又消えてしまつたの、その次にもまた。……翌る朝鉢に蒔いておいた菫の花が咲いた、その中に白いのが三つ交つてゐたのよ。お白粉はすみれにとられたのでしやう？

奇想天外より來り神韻縹渺たり

（秀逸の四）わが近狀　下總八日市場停車場構內　保坂せい

包みを机にのせて、袴を脫ぎ、それより小ざるの米を土鍋にうつし、書物片手に、こんろをあふぎつゝあれば、鍋の吹く頃、其日の復習終る、これも理想の家庭を胸に描けばなり。

待つあるの人往々此の如し

（秀逸の五）山家の春　美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

足曳の片山藪に啼く鶯の聲には天地の春もこもるべく賤が家の垣根に咲く梅の花には淸姿幽艶の美も見られ得べし天地の美は春に於て鮮に其淸らかなるは曙なるべく其靜なるは夕暮に在り東の山遠く霞にあくる絶景に對して自然の美に醉ひ落花雪と散る木蔭に佇みてひとり詩想に耽る人間の幸福豈此上やあるべき。

美文の壘を摩せんとす

（秀逸の六）ゆくりもなう文箱の底より今は世に亡き親しき人の遺稿を見出して

名古屋市南鍛冶屋町八十五番地　玉村多歌子

軒端にかをる花橘に、ありし昔をしのぶとかや、そはみやびをが、すさびなるらむ。うすれたれども亡き人の筆の跡、墨のにほひよ、よし橘の芳はなくとも、昔しのぶの我が想ひは、一しほ切なるものあるをや。

多情多恨加ふるに橫溢の才藻を以てす所謂鬼に鐵棒なるものにやあらむ

(秀逸の七)春の一日

伊勢國三重郡楠村字北五味塚　岸田春子

霞より、霞に終る、ひろい野原を横切つて流るゝいささ川の、堤に沿うて、二人の少女が、餘念もなう、笑ひつ話しつ、白い細い手を、さし伸べて、さも樂しげに、菫を摘で居る。その姿が、花にまがひつゝ、やさしい流の水底に、沈むさま、いと興がある。

寫眞石版を見るが如し

(秀逸の八)香　露

能登國輪島町勝田方　池野いさみ子

曙、菫の花野を行けば、何となく、眉に優しうしめり覺ゆるにぞ、指以て撫づれば白露一滴、ア、花の香凝りしにあらずや。妾はソト小草の葉末に置きて、春姫の化粧の料とぞ成しぬ。

春姫必ず笑て宣はん、われ化粧の料に乏しからず、汝が化粧の料とせよと

(秀逸の九)愛弟の凧の感

三河國碧海郡新川町鈴木喜一郎方　鈴木環子

『姉さん！僕かあ彼の大凧に乘つて支那に飛んでいつて而して上からどん〳〵大砲をうちおろして露助を鏖殺にしてやりたい』是は若草燃ゆる春の野遊の愛弟が頭腦に浮んだ凧の感である。

善く童子の感想を寫し得たり

(秀逸の十)かたみの玉章

長野市妻科百一番地　小岩井なみ子

花は大方碎かれて、むなしき梢にそゝぐ蕭々の雨、あたりいとしめやかに、灯火暗う夜は靜か。そと取り出すあゝこの玉章よ、今は返らぬ夢と覺れども、倘そのかみの戀しくて、顔にあてしまゝ忍び泣き。

深情深語讀者をして泣かしむ　(以上有賞)

佳作

小さき社　横濱　寺田光子

松の老木葉茂れり、何をか祭れる小さき社あり、うす暗くして、物すごし。かたへに流るゝ小川には、落椿赤う流れたり。

春の薄暮　函館　三宅嶺子

入相の鐘遠く響きて、菜の花の彼方は霞に包れぬ。牛追ふ童は、驛唄口にして家路にたどりつゝ、手綱は緩く地に垂れたり。堤上の繪師は今筆を執りぬ。而して畫中の人は自ら知らず。されど繪師、彼の妙なる歌の音を如何にせむ。夕月の影は早やほのめきそめぬ。

櫻　美濃　田中久代

高さ一間ばかりある庭の櫻の木を指して「姉ちやんアノ木はあたいとおない年よ、およめいりする時あれを持つて行くわ」まる四歳になる妹の文子は毎日斯ういふては得々として居る。此木は文子が生れたとき妾のお友達から祝つて頂いたので今年初めて蕾をもちました。毎年この葉を摘んで鹽漬として貯へ四月一日文子の誕生日には櫻餅を拵へて祝ひます。アゝ今年この咲く花を見て文子はどんなに喜んで櫻餅を食べるでせう!?

漁村の夕　能登　松下ふみ子

夕陽落ちんとして、西の雲紅ゐに、金色の鹿、銀色の鷺、汀に遊べるが如く、痩せたる漁村の夕べを装ふが如し。沖には白帆三ツ四ツ夕風を孕ませ、砂白く松まばらなる彼岸には、望みを満てる船を迎へてか、一團の男女が双手をあげて待つて居る。あゝ美しき哉、漁村の夕。

雨の嵐山　埼玉　伊東仲子

しめやかに降る雨に、櫻の梢は半ば霞んで、松も處々朧に見えて居る、向ひの小督塚のあたりから、鶯鶯が聲漏らせて、ホーホケツキヨとやると、今し渡月橋の半ば迄來た蛇目傘の婦人が、忽ち歩みを停めて耳をそばだてた。

同職の友に　丹後　原田増子

この職に殉ずる積りと云つておかへんなすつ　たお言葉を味はつて私も今日教授法に骨を折りました、まあ嬉しい嫌だと思つた仕事がどんなにか今日は氣持ちよくすんだでせうこれもあなたの賜物よ、何事も心一つですわね――あなたも御存じの彼の鼻たら　しめ殿の顔が今日は可愛く可愛く見えましたものほんとにありがとうよ清子さん。

將校の愛子　牛込　唐澤はな

目下出征中なる一將校の愛子、父がいたく櫻花を愛すればとて、優しくも、ある日家咲きのいと美しきを買ひ來り、之を床の間に安置せられたる父が寫眞の前に捧げていと得意げなり。されども年老いたる祖母は眉しはめて「太郎や今年ばかりはよしておくれだつたら宜かつたに」

戰地の兄様へ　四谷　山本たづ子

電報ッ! かんだかに呼ばれたのにも、もう胸がとゞろきましたのに。見ればあゝ兄様が――。兄様はあの怖しい戰場で御負傷遊ばしたのではありませんか。泣くなーと御叱りになりますか?でも兄様ゆるして頂戴。嗚呼どうしても泣かずには居られないんですもの。

誰が子　雜ヶ谷　須山規矩子

小雨の曉。今着きし傷兵役送の汽車。何見とめてか車窓に馳せよる若き妻見の頁へる姿しては昨日も一昨日も見たりき。痛ある身を窓によせた

る人の影……あはれそを見とめし刹那の思やいかなりけむ！

門出

熊本　東しき子

「阿母さん屹度々々この宗雄※い戰功なして御目にかけます……。」と凛々しくは云つたが語尾は有繋に怪う顫うて堅く握り合つた親子の手の甲に熱い涙が一雫又一雫……。

夜の暮は全く天地を包み終つて何處やらで鷺鳥がギアーと啼いた。

死

栃木　渡邊瑞陽

妙に匂ひし春の花。峯に彩る秋の楓、孰れか其の根に歸らざるべき。實に夢の世なれや、天意茫々たる此の宇宙に、生を受け、誰れか、死を免るべき。始皇一たび去つて復た歸らず、不老不死の仙境何處にかある。死？死？見よ、墓頭の白露、影淡きにあらずや。

見ぬ兄

羽後　武田わか子

梅の花が咲いた日産聲を上げた梅坊、櫻咲いてから二日目に笑ひ初めた父上はもう笑ふやうになつたかと宣へば母上はこの愛孃のあるところは勇とそつくりだとほろりとしてお仰られた、勇とは私は未だ母上の胎內に居つた時お没死なりになつた兄さん……其見ぬ兄さんの面影が今更に忍ばるゝのである。

庭に立ちて

下野　新井琴子

恍惚と筑波山の上を見るとふはりとした黄雲が一つ竝べ 单を紅く染めて居る。亡き姉君が彼の上に居なさるのではあるまいか。姉君が愛した此櫻ば今爛熳として居るのに！嗚呼思出多き此庭!!

敏ちやん

西の都　白ゆり

姉さんとやさしい〳〵聲して來て下さる敏ちやんも り見る事が出來ぬ星のやうにかゞやく目紅葉のやうな小さい手みんな死の 神にとられてしまつた。

あゝ弟

肥前　紅涙女史

ふと夢からさむると窓うつ霰の音が聞えたあゝ思ひ出すは都に學ぶ弟が上今頃はきつと牛乳かご肩にわらじはき配達に出かけ て居るだろ！あゝさぞ寒いだろーにと思ひつゝつと床を出で窓の下に ひれ伏して神に祈つた。

父君の御墓の前にて

盛岡　山田しげ子

御いたつきときく心も夢病院船をたちしかど長き途と て愚か者今なむ歸り侍る命ある中に一度見て後の事などいひ含めんと 一時千歲の思ひにてまたせ給ひけんを今はこの下に眠られし父君よ願く は今一度御目開かせて。

この親子！

出雲　戸山すみ子

浮世はなれし片山里、夜は靜に更けて微かに餓き猿の叫！一聲！二聲!!!

「伯母さん……」身を切るやうな聲。それが追々にほそると息づかいが愈々わろくなる。

「おゝ花子……」伯母と呼ばれし露子は、今更のやうに溜息つきつゝ「嗚呼こうと知つたならせめて今一足早く來て親子の名のりをするのであつたのに……」あとはたゞ何も得言はで涙と共にうちふしぬ。

戸ぼそより洩れし春の月影。朧に〳〵花子の蒼覺めし顏へ。

兄の戰死を報ずる文

伯耆　錦織幸子

數多の犠牲と共に兄も亦壯烈の戰死を遂げたと今電報が、喨奉天占領の嬉さと骨肉の情の切なさとに交々胸のみ追りて不取敢御報致します。

消息文

天　出征し玉ふ人の姉君に贈る

能登國鳳至郡輪島町字三部　櫻木壽美

きのふはなにがしの城、けふはいづちの壘を拔きしと、旗ふり立て鈴うち鳴らして、賣り歩く新聞號外を見て、あたら髀肉の歎に、堪えやらずおはせし、愛弟信一様には、近々のうちいよ〳〵、御出征遊ばさると、うけたまはり侍る。げに勇ましくもまた芽出度しや。風清く空澄み、今日を盛りの山櫻、それにもまして麗はしき大和心、垣根に匂ふ菫、蒲公英も遙かに君が征途を壽きて、後の思ひ出にせばやとにや。五千萬の同胞も祝ひよろこび、神かけて君が恙なう歸りまさんことを祈るこそいと賴もしう侍れ。

原田の河水、それの千尋もたゞならめや、鐵石心の勇士が、忠と義とに凝りし身を、雪にうたれ月に浴び、君の御爲め、國の爲めと、心一すじに磨き鍛ひ玉ひし甲斐こそありて、こたびの撰に洩れたまはず、雄々しく勇ましく、出でたまふ信一様の御心のほど、推しはかり申すべうも侍らず。健げにも眞先に、八重の潮路を乘り越えて、み國の太刀ふりかざし、雲霞の軍をうち破り玉ふ風姿の、はやあり〳〵と見え申すになん。やがては日の丸のみ旗を、あめつちの殘るくまなく輝やかせ、げに武夫の龜鑑とぞ仰がれて、限りなき名譽を身に擔ひ、凱歌を擧げたまひてぞ、山青く水白き、秀麗なるふるさと、この杉平村に錦を飾りたまはむこと、御兩所様は申すも愚か、姉上の君のおよろこび如何ばかりなるらん、不束なる妾のごときに至るまで、げに芽出度くもま

た頼母敷ふなん侍る。愛弟の御征途、千代こめて祝ひまつらむ、高くそびゆる鵲巣山も、萬歳とこそ祝ふめれ。

言はんと欲する所をよく言ひ得たり、文辭また俗ならず。（靜岡舟人）

地　音づれなき友のもとに

大阪北　女

涙にぬれし袂を停車場にわかちまゐらせしは紅葉色こき秋のころに候ひしをひまゆく駒のあがき早く夢の間に年さへ改まりて花さく春と相成申れところ如何御暮し遊ばされ候やたえて御便りも申上げず御わびの言葉もこれなく候さりながらこれとてもさら／＼御忘れ申上ての事ならねば御ゆるし下され度候當地に御出での時にてすら一日御目にかゝらざれば何となうものたらぬ樣覺え候ひしをかく東西に御離れ申候てよりははかなき夜毎の夢をせめてもたのみさては雁なく夜半山の端に入る月かげ見ては御地のそらはるかに忍びてこの月をいかにながめ給ふらむなど時ならぬ時雨に袖ぬらし居り申候扨時節柄御地は古き都の事故みやびたる御事も候べく名のみきき及び居候北野社内の梅などさぞかしと御うらやましく存候せめて風の便りにも床しき香御贈り下されたく願上候當地にてもかねて御共々散歩がてらに參り候ひし靖國神社の梅は三分通りほころび申候又いつぞや人のあまた集ふところはとてたゞ二人わりごたづさへ參り候かしこの梅も今年はいかにさきぬらんなど思ひいで候折



から妹事しきりに何處にまれゆきたしと申候に同じくはとこの二日の休みを幸ひかしこへ參り候ところ去年に變らぬ色香いとなつかしく見る人もなきに笑み居候其姿のいぢらしくてしばしは何事もうちわすれみとれ候ひしがふと去年の事どもおもひいでられ候に今年は君のゐたまはぬよとにはかにものかなしく存せられしやがてかへらんと致し候へ共あまり見すてがたければ一枝手折りて歸宅致し候一人にてながめ候も心うく候まゝひとひらふたひら封の中にいれて參らせ候よしや一重の色のうすくとも思ふ心は八重ともおぼしくませたまひてよ申上たき事は濱の眞砂の數つきず候へ共あまり長く相成候へばこれにて筆とめ申候あなかしこ

すなほなる出來なり、平淡何の奇もなき内に言ひ知らぬ眞情の流るゝを覺ゆるは、此種消息文の上乘なり。（靜岡舟人）

人都の友に

岡山市森下町九森安竹方　有本君子

櫻の花がひらり〳〵と風にもつれて散つて、仰げば夢のやうに春の夜の月が、何と云ふ好い、美しい夜頃でせう、ねえ文子さん貴孃と一所に植ゑた八重櫻も咲いてゝよ、それから又貴孃と一所に作りました琴の歌ねえ『つゞみに更けしおぼろ夜を、涙か蝶かひらり〳〵』あの懷かしい曲を今夜これから月の光で丸窓の下で貴孃の御座つしやる都の空を仰いで歌はうと思ふんですよ、文子さん貴孃昔戀しかあなくつて、貴孃と共に『朝妻』の舞をまふた時の江戸紫の振袖はちやんと今もありますわ。

あれ又櫻の散つて來てよ、あの時は此室の衣桁には四つの袖がかゝつて居たけれど、今はもう二つねえ。

文子さん、都の空は春も來ましやう、鳥も歌ひましやう、花も咲きましやう、蝶も舞ひませう。

けれどもねえ、ふる里も又美しいですわ、せめて夢になりと、あの女神のやうな蝶に乘つて來て下さいね、貴孃がお出で下さるまでは櫻も散らないで居ますわ、『今日來ずば明日は雪とぞ……』なんて申しませぬ。

貴孃、髮は何に結つて、桃われ、島田、いえねえ花月卷、ほんとうに美しう居らつしやいませうねえ。

文子さん逢ひたいわ、貴嬢もそう思はなくつて、おゝそうでしたつけ先日はお寫眞有難う、東京と云ふ處は好い寫眞屋もありますのねえ、オ、笑つて居らつしやる、お話しして下さい、まあこんなものが出來てよ。

春の夜は都の空ぞなつかしき
つゝみにはゆるおぼろ夜の月

さよならお出紙下さいねえ。

美事の出來、幼き文言を以て優しき友情を叙すと雖も、文に練熟したるものならでは作り能はぬ所。（時間舟人）

しら鳩

神田區錦町三ノ廿四常盤館
淺井ふさ子

さても怪しき運命の糸にあやつらるゝ身の、私は遠からず北の國に行く可く相成候。先達申上置き候如く、雛よりはぐみし此白鳩、むさくゝ心なき人に渡＊



＊さむも口惜しう候へば、み情厚きお前様のおん許に差上候。何卒いつまでもおんいたはり下され度候。

噫、思へばうつし世に、たゞいつまでもくゝ、命ある限りはお前様と睦じう暮さむとこそ願ひしを、望みし楽しみもひと時の夢と覺めて、一家の悲しき運の末は、私をして此地を去るべく餘儀なくなさしめ候。戀くて別れ行かば、また相見むもいつの日か、此程の夜語りが、或ひは今生のおん別となるやも知れず、と思へば流石に胸の迫り候。

さるにても、花散る窓の下にゐて、歌の筆とるいとまに暖きみ手より餌を給ふ、幸多き鳩こそ羨ましう存じ候へ。

四月三日

Kより

久しき前お前さまのおん宅にて、此鳩を見まゐらせし折、愛らしさに我を忘れて眺めしこともはべりしがあはれ、その天使のやうなる姿をわが膝下に見る日が、お前さまよりの別れの文を讀む時とは、神ならぬ身の露思ひ掛けざりしにて候。

勇ましきおん首途の前に忌はしき繰言申上げむは、心なうはべれど、蒲柳のおん身をして、春まだ寒き北海の風に吹かれ給ふかと思へば、胸

も張裂くばかりにて候。何卒おん身を厭はせ給ひて、御健かに功成りて御歸國遊ばすやう、神かけ念じまゐらせ候。
この別れの餘りに悲しうて、ひと日、ふた日は食もすゝまず。おん返し文さへかくはおくれて………。

四　月　六　日　夕　　S　ゟ

大變なこといたし候、わたくしは申譯もなく候。あゝ何とすれば宜しくはべろや、消えも入りたう存じ候。とのみにてはおん分りもあるまじけれど、實は彼の大切なる白鳩をば只今取逃して候。
鳩は眞白の羽に雄々しう風を切つて、いづちへか………あゝ。

四　月　十　一　日　　S　よ　り

御心配は御無用にて候。鳩は私方へ戻り候。庭先に來て、久し振にて古巣を見て、さも懐かしげに羽顫へるを眺めしときは、言ひ知らず優しう覺え候。
あはれ古巣の戀しきは、鳩のみかは。
只今來合せし松やに持たせて差上候。

四　月　十　一　日　　K　よ　り

たび立ち給ふも明日の朝とや、あはれ是非もなく候。
いさましきのぞみ抱きて君行くを思ふになどてかくは悲しき
われ泣けばか、白鳩も愁ふるやうに見え候。かしこ

四　月　十　七　日　夜　　S　ゟ

あはれ優しき取遣なるかな。（勝間舟人）

先生の結婚を祝ひて

長野縣北高來郡諫早　嬉　野　益　子

園の紅梅笑みたゝえ春告ぐる鶯の聲ものどけき今日此頃、嬉しくも目出度御事こそ承り候へ、師の君には惠みの神のみえらびにて名も高きアンセー長老の君のみ許に、とつがせ給ふとか、明日なん神のみ前にてそのみちかひの式あげさゐ給ふよし、何卒赤縄の糸かたくむすばせられ永久につきせぬ愛の泉くませ給へ、願くは共にみ心合せまして、いよ〳〵神のみ榮えあらはされん事を、

御夫の君も定めて師の君の如、世にも才秀で給ふ君とこそ推しまつる、理想的清き平和なるスイトホームつくらせ給ひ、新星の君世に出で給ふも近き日とこそおもほゆれ、あな嬉しき御事よあな目出度き御事よ、就てばそのいとも榮えあるみちかひの式に連るべくこのふつゝかなる姿まで御まれぎの御文給はりかたじけなく存じ參らせ候、實は是非伺ひて親しう御目にかゝりほぎ詞申し上げんと、かれてより樂しみまち居候ひしに、はからずも、さわる事のありて、明日は何分參上いたし兼候まゝ、失禮乍らかくは文もて、遙かなるこの里より、千代に八千代に變りなく榮えまさん事をと、神にねぎつゝみ祝ひ申し參らするにこそ、先は御喜びのみ、　目出度かしこ。

結婚を祝されしに答へて

長門國阿武郡德佐村　案野くま子

あれ、思へば今は五とせの昔とはなりて候ひぬ。忘れも得申さじ、御もと様と、池月の君子様と、わらはと、心あへる三たり、いと仲よう、霞にほへる姫が野に菁菜つみ、六袖あはして唱歌しつゝ、うかるゝ蝶と戯れては打ち興じ、はてはゆく末のことなどかたらひて打ち笑みなど致し候ひける樂しき春もこれあり候ひけるを。

あはれ、無邪氣にかたらひしことの、今はわらはが身の上となりて、よろこびの御ことば賜はる母となりけるとは……思へば思へば、はづかしくも亦夢心地の致され候ひけることかな。



都に御出で遊ばされしより、御めもじ致し候はぬことすでに五とせ、いと御なつかしく思ひこがれし折柄。昔に變らせられぬ厚なる御情の御ことばなたまはり、いと〱ありがたう操りかへしまきかへし拜誦つかまつり申し候。ことに御水莖のやさしう御うるはしき、「幾千代もかはらぬ色や」の御歌、またなう辱けなく拜しあげ參らせ候。

千代かけてことふきませし言の葉を、
おのがみさをのふしにききさまむ。

武骨めきて情をつくし得申さず、殘念の至りに候へども御推もじ希ひ奉り候。御櫻をこきまぜててふあたり、なつかしき君子様とゝもに御勉強あそばされ候御事、さぞ〳〵御愉快のきはみに候はん。都の空戀しくも羨ましくも思ひこがれをり申し候。近き頃の御うつし絵、一葉御めぐみ下され度御願ひ申しあげ候。
先は御禮まで……其内御身御大切に……あなかしこ。

妹を失ひし友の許に

長野縣北來郡　嬉野益子

花は櫻に鳥は古巣にたち歸り、青葉しげれる木の下陰に來鳴く山時鳥の聲さへ、血をはくが如き今日此頃、さらぬだに涙ぐまるゝを、あはれかなしくもいたはしき御事こそ承はり候へ、御愛妹露子の君には、散る花の跡したひ給ひ歸らぬ旅に出でませしとか、さぞ〳〵母君初め御許様方の御嘆きはいかばかりなりけむ、思ひやる身も共に涙に袂ぬらし侍りぬ。

咲きみちし櫻は散るをおしまれど、
　つぼみの花をなどちらしけむ。

あはれ〳〵無情の夜嵐はつぼみの君をうばひ去りしか、さは云へ天には神のおはすものを、

ひとり行く旅と思ふないつくしみ、
　溢るゝ父は君をみちびく。

あゝ天父は彼の君を天つみ國にともなひ給はんを、御許様にもかまえて御嘆きのあまり、御大切の御身をなそこれ給ひそ、先は落つる涙に筆そめて取敢へず御悔みまでかしこ。

戰地の兄に

丹後間野　原田增子

廿日出の御手紙嬉しく、拜見致しました。相變らず、面白い事ばかり。ちよーど。私が讀んでる所へ。母様が入らして、「健からは何と云つて

よこして」と、仰しやるので。大きな聲を、上げて、讀んでますと、往診先から。父上が戻られ、「オツ來たなお見せ」と、取り上げてお仕舞ひなさろ。殆う三人して交はる〳〵引張凧をして讀みました、やつ張そちらは、お寒いそーですね、けども、あれだけ、御氣嫌が、云へるなら、結構ですわ。

お父様も、お母様も、大層お笑ひなすつて。「これでも御用が勤まるのか、何時までも、小供の様な事ばかり云つて」と仰しやつてられました。陣中の御正月承はるだけでも愉快ですのに嘸まあ面白うござんしたろう兄様も、試みに、お餅搗をなさいましたつてね。よくまあ御手にお豆が出來ませんかつたこと。例のお連れの櫻井様がきな取りで兄様の搗き手仕事しい〳〵お話に花が咲き賞が入つて折角のお餅を松の木臭くしてお仕舞ひなすつたと。御氣の毒やならばこちらのが送つて上げたいですよ、ホヽ何處まで人を笑はせるお積りか其の時のお顔と御容子をお描き遊ばした櫻井様のお戯れもう〳〵堪らなくつて私は吹き出して仕舞ひました。



あんまり可笑しいやら御氣の毒やらせめてはと思つて早速どつさり御寫眞の前に積み上げて心をやつたのでした。あらお笑ひなすつちや嫌ですほんとなんですもの。扨て長々の御對陣嘸御退屈でしたでせう御手紙に依ると漸く戰期も熟して整つた様子キツと近い内に目ざましい戰ひが始まるでせう兄様こんどこそ奮て御望み通り十分なお手功を遊ばせ、申すまでも無い事ですがあんまり御無理をなさいますな前の御負傷の後がひよつと破傷でもすると其こそ大變ですものよく御注意なさつて天晴れ花々しく働いて下さいまし。私はもう〳〵胸が躍つてワク〳〵致します。父様も母様も夜となく晝となく兄様の御無事と御手功とを祈つて入らつしやいます。二三日前から通學の暇を一生懸命に編んだ手袋と靴下漸く仕上りましたからお好きな園の露と共に御送り致します小さな袋の中はお父様が御調合の強壮薬別の包は母様がお骨折りの眞綿襦袢共に熱いお心をお汲み遊ばして御身御大切になさいまし。どーぞ又御暇がありましたら御手紙をれー下さいましよ、兄様さよなら、

もの學ぶ友人の許に

美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

一別以來むなき御無沙汰何とも申譯がたくなん。西の京は山水明媚にして名勝舊跡に富むとかや。北嵯峨秋の一日にはおもしろき御歌も多かるべく。東山春長閑なる霞に遊びては天のなせる女性の美も養はるべく。東都は學叢の地。京都は詩的の境。男子は熱鬧繁華の裡に在りて處世の活法を究めむことのよろしけれども。女たる身の世智がらく才ばしらむよりはしとやかにみやびならむこそよけれ。この詩的の境にありてもの學び給ふ御身の三年の後には玉の麗質いよゝあざやかに式部をしのぐ天才のいかに高からむなど。口くせのやうに母ともかたりあひてうらやましき限りになん。嵐山の花に高雄の紅葉に拾ひ集め給ひたる御歌袋やいかに豐からむ。其ひとひらふたひらだに見まほしうなん。學び給ふ學校の御あらましなどきかせ給はゞいかにうれしからん。ひとり山里にひそむわが身の紡織の外にしろなきかなしさはしたしき友どちのおとづれのみこよなき慰にとまたれ侍るになん。去者日々疎と師の君のをしへ給ひしことのはの去るとは遠き別のみにあらず、其學びの道の高く低くひきわかれゆくにもやあらむなど今更思ひあたり侍りぬ。とても同じくは進み得ぬわが身なれども。折々そのかみの罪なき交など思ひいでゝ文通はし給はむことのみいのらるゝになん。雪のなく春とはいひながら比叡山おろしいかにはげしかるらむ。寒多き御身さらに心し給ひてよ。かしこ。

佳作

久しく絶えにし都の友に

越後　新發田　八重咲梅子

如何に、久しう、侍らずや、春子の君。そゞろに、思ひめぐらせば、共に、卒業の榮を、になひて、別れにし、學びの庭を、後に見つ、西へ、東へと、惜しき袂を、別ちしは、あゝ三年の昔にて候ひしよ。しかも、昨日今日の如き、花の頃、花のやうなる、麗はしき、理想に、みたされ、光輝ある、希望に、前途を、照しつゝ、波風荒き、浮世の海に、船出せし、我等同じクラスの友、逆卷く荒波に、ゆらるゝ船の、かぢ、如何にとり給ひし事ぞ。學校の花よ、クエンよと、もてはやされし、月岡の君は、變る瀬に住み習ふ、人の世の悲しさ、今は北海の濱に、さすらひの身と、なりて、つれなき潮に、袖をぬらさぬ日とては、なき、あはれの御身の、上とか、いつも、をどけ給へる、春野の君は、今も變らで、灑

波の花に、この世可笑しう、ながめ、させ給ふとよ、より〳〵は、なにかし、くれがしの、友の上、風の、だよりに、聞き申候。さあれ、ラケット片手に、「スリー」「ツー」を、呼びたりし、テニス塲裡の、無邪氣なる、乙女が、當年の、面影、今や、いづこにか、たづね候ふべき、たゞ、そのかみの、なつかしふ、戀しふ、思ひ出で、らるゝのみ、わけて、親しかりし君、二つなく、むつび合へる君、その君の上、などて、心に、かゝらぬ。ことの、あらざるべき、さるを、今日まで、消息を、絶ちにし故は、筆つくされぬ、長き物語の候を、こもまゝならぬ、浮世の、なすわざと、何もたづねまさで、さかしき御心に、おしはかり、ゆるさせ給へかし、さても、君には、かねての、理想を、現實に、せられて、「スヰートホーム」の、春風の、中に、世の嵐も、よそに、ながめ、させ給ふとかや、そが、上に、永久にと、かしづき、まぜる君は、本郷の、學びや、にても、隠すと、すれど、顯はるゝ、蘭の香の、それの如く、秀才のほまれ、高くおはすと聞く、百里の堺を隔てゝ、草深くこもり居る、うとき耳にも、とく入りにしを、憎らしき君よ、いつまで、知らず顔に、すまし込まるゝことぞ、なか〳〵罪深くならせ給へしもの哉、夕べには、匂ひこぼる花の、下影に、手を、たづさへて、詩を誦み、朝には、金ボタンの制服勇ましく學びや、へと、いそがるゝ後より、角帽さゝげて、送りいでらるゝ、三つ指しとやかなる、新夫人の御姿、日に見ゆるやう、ぜひ〳〵拜見に、出で度きものよ。さても、幸多き君にも、おはしつる哉。さあれ、昔の友を、忘れ給へそ。花ちる朝、月燃る夕べ、手をとり、袖を連れて、理想を語り、文學を談じ、姉よ妹よと、むつび、たりし、昔の友を、忘れまさでか、おゝ君よ。げに、世の中は、泡沫夢幻とや、申すべき、當年のその、理想や、今いづこ、その、希望や、今いづこ、あはれ、理想の花は、つれなき嵐に、散らされ、希望の、星光は、暗雲に、おほはれたる、この煩悶の子を、懊惱の子を、君よ、あはれと、思召してよ、普聊なきアンビッションを、夢みたる、空想兒は、今や、運命の神の、命ずるまゝ、夢か、現か、うつし世の、何も世のさだめと、さとりて、より、悲しみもなく、苦しみもなく、なり申候、大なる悲觀は、大なる樂觀に、一致すると、やらは、かゝるを、こそ、申侍るにや、あらん、かくて、淋しき草堂に、敎への鞭とりて、日々エンゼルそのまゝの、罪なき小兒の笑顔に、慰められつゝ、尊き職を、果すべく越路の里の春まだ淺き、寒風を、一枚のショールに凌ぎつゝ、愛の一字を、先にたてゝ、敎への庭へと、いそぐ、この身を、おぼしやらせ給へ。

今しも、月は、おぼろ、ほゝえみ、初めし、梅花の、薫り、この草のやにも、音づれくるに、かねて、三年の昔、こし方、行末を、語り合へしは、かゝる月の夜、がゝる梅花の下に、など、思ひ出でゝ、なつかしさに、たえぬまゝ、かくは、うちつけに、驚かしまつりぬ。あはれ、君よ錦織りなす花の都の、如何に、たのしく、おはすとも、昔のよしみを、忘れ給はずば、友に別れし夕がらす、獨り音に鳴く、草のいほりにも、折々は　音づれさせ、給へてよ。かしこ。

師の許におくる

備後　くちなし子

月に村雲花に嵐は今更云はずもがな先生世の中はどうしてこうなのでしよう、否私はどうしてかう不幸なのでしよう、先生母は遂に亡くなりました、十日の朝、嗚呼其時の光景、思ひ出すも涙で御坐います、御察し下さいまし私は御存じの通り父には襁褓のうちに別れ、母一人子一人の淋しい境遇で御坐いました、けれど御陰で孤兒の不幸はみず、それは口にこそ出されど、十七年の今日まで父を思はぬ日とてはありません、けれど唯一つの母の愛に慰さめられて居ました、實に私は今まで母によりて生き、母の爲に學びそして如何に悲しい苦しい不平な時でも母に遂ふとすぐ樂しい温い恰も春の日の樣な心になつて居ました、それに母は最早居ません、私は此後誰の爲にか生きましよう、母は私の生命で御坐いますもの、今は早希望も何もない精神的に死した冷やかな死骸となりました、私の前途は光明を失ひました、母は臨終の際に私の手をとり嗚呼死にたくないと申しました、最早手がふるへて書く事が出來ません、先生何卒私の爲に一滴の涙をわけて下さいまし、私の涙は涸れて御坐いません、

今日十六夜の月が淋しい室を隈なく照り渡りました、月は此哀な身に同情をよせてくれるでしようか。

出征せる兄の許に

越後長岡　屋井なか

其後御服務の御樣子は如何におはしましますかいつもさまでの難儀はないとのみの仰せで御座いますけれど何と申しても戰爭のこと且つ戰時の愉快てふ結果のさきにはさぞやいはれぬ事のおはしまさうと存じて居ります當地では御兩親を始め奉り皆々健全で業を營んで居りますから御安心下さいましさて昨日の紀元節には例の如く小宴を張り正面に父上樣と並べて御寫繪に膳部をそなへ各々周りに坐をしめ千代萬代に動きなき御代の壽をのべつゝいて戰爭の談話が始まりました御父上樣の仰せに虎雄の佩ける日本刀は祖父樣のをり世を去せし功により佩刀を許され久しからずして明治の御代となりこたびは彼が手によりて世界の强敵にあたりつゝ韓國鴨綠江より北進して遠く滿洲奉天の地近くゆき一とせならずして二度まで昇級の御沙汰を受けたる功如何にぞや汝等各々努力して兄の名をはづかしむる事なかれいざ武運芽出たかれと杯をさせよとの仰せに一同謹しみて我も我もと忽ちにして御寫繪の前に六つ七つの杯が集りました御父樣これを御覽じて元來呑めぬ虎雄さぞや醉ひしならんとて笑ませられましたげにいくさの場にて劍をくゞりたまを浴び給ふに比しては物の數にも入らざるべければ如何なる勞苦も將うきめもいとはず御兩親樣を始め奉りはらからを滿足いたさせます故何卒遺憾なく御奉公下さいませ伏して御願ひ申し上げます

雪に名たゝる當地も本年は稀有の小雪にて僅か三四尺許りで御座いますが御地の寒氣はさこそと存せられますしかし兄上樣には大元帥陛下の御惠みくまなくて防寒の衣は十分なりと常々仰せられますけれどせめての御たしにもと存じて編みましたシャツヅボン下の類本日郵送いたしましたから御使用下さいまし先づは御伺ひかた〴〵御願ひまでかしこ

俳句

（春季雜題）

翠庵松花選

（天）

灰占に耽る美人や宵の春　仙臺　日吉子

　灰占ならぬ十七字に美人の胸中ありありと讀まる

（地）

もそろかゆき種痘のあとや春の雨　名古屋　ひで子

　平々他奇なきが如くにして高手ならねば能はぬ句なり

（人）

裏畑に葱の古根や忘れ霜　石見　秀子

　素朴枯淡の中に無限の趣味あり

秀逸十句（有賞）

水温む田螺の道の四辻かな　伊豆　彩虹女史

　水田の畔を歩むもの往々此種の光景に恍惚たり

春の日や代參すなる女房衆　京都　まさ子

　沿道の老幼婦女群を成して容姿と服裝を評すべし

朧夜の芝居戻りや高笑ひ　市ヶ谷　冬子

　中にも醉ひたる女の笑ひ聲最も高かるべし

門畑に移し栽ゑけり菊の苗　大阪　ふみ子

　水中の興味

梅咲いて除目に洩れし博士哉　羽後　すえ女

　近來此種の不平博士なきは國家の幸なり

梅白し觀世の皷もるゝ庵　名古屋　すみ子

陽炎や消し炭乾く古むしろ　同　しま女

　前者はオホン家の貴婦人、後者は世話女房

金屏に灯あかるき雛かな　伯耆　花子

　富貴の氣象あり

石地藏衣の破れや春の風　羽前　たに子

　田舍路を歩みては毎々見るところ描得て宛然目に在り

渡し呼ぶ女の聲や朧月　臺灣　きみ子

入選四百五十句

灯ともして桃の影さす雛かな　出雲　しな子

桃の花雛の膳にこぼれけり　同　同

海棠や灯うつる雨の窓　同　同

一籠は妹がすさびの蠶かな　同代　かつら

菊根分して手洗ひ居れば虻の聲　同　同

風にそれて頭の上や虻の聲　岩代　かつら
舟下りて蜆拾ふや川の尻　浪江　たまき
外濠の芹に惡水ながれけり　同　同
春の水池に引き入る筧かな　同　同
青柳の下にやすむや女駕　下谷　初美女
鶯や女あるじは京言葉　同　同
琴の音に垣を覗くや朧月　同　同
靴ぬいで休む堤の菫かな　下野　なみ子
春風に病後の裾を吹かせけり　同　同
日記つくる灯暗き夜や春の雨　同　同
君が代に事なき春や凧　美作　池田芳
化粧水捨つる垣根や海棠花　同　同
春寒き新開港の汽笛哉　同　同
道端の泉に洗ふ根芹哉　同　小金
春寒き辻に易者の行燈哉　同　同
自轉車の稽古日永の廣場哉　同　同
鶯や根岸の里の雨あがり　名古屋　まさを
梅の門平語をかたる琵琶法師　同　同
池一つ圍みて桃の林かな　同　同
兵の夫の留守や畑打　岩代　せつ子
陽炎や蝶ゆら／＼と水の上　同　同

鶯や仙臺様の下屋敷　岩代　せつ子
鶯や御歌所の小柴垣　後志　溪文
海に帆の續く日和や凧　同　同
淡雪の一寸積むや麥二寸　同　同
春風や人に馴れたる裸馬　新宮　千代子
春の水棹なき舟の流れけり　同　同
人馴れぬ小鳥得にけり梅の里　同　同
まゝ事のむしろに落つる椿かな　新宮　都子
かすむ日や島へ渡りの船出づる　同　同
京立ちて奈良に入りけり暮の春　同　同
芹摘で灯す里をかへりけり　伊豫　ふじ子
鶯や晝閑かなる尼が寺　同　同
おぼろ月橋番小家に人の影　同　同
客ありて春の夕べや厨の灯　松阪　せい子
春の夜の小袖かけたる衣桁哉　同　同
色染の糸干す竿や春の風　同　同
憂き我は一人靑きを踏みにけり　能代　綠子
踏青や小川に沿うて次きの村　同　同
踏靑の岡に吹きやる小笛かな　同　同
濱の温泉の赤きフラフや春の風　仙臺　春水女史
船の灯の霞にゆらぐ港かな　同　同

萩の芽に杭打つ庭や春日影　仙臺　春水女史
船唄の遠く消えゆく朧かな　尾張　富美子
大船に小舟に春の港かな　同　同
乗合の船待つ土手の柳かな　同　同
奏樂の遙かに起る花見哉　神田　榮子
下萠の湖畔に柳霞みけり　同　同
船を待つ市川渡し朝霞　同　同
城樓の笛外濠の蛙かな　伊豫　梅子
落花紛々天に微妙の樂の聲　同　同
行春を琴かき鳴らし／＼　同　同
春の夜の歌留多に更けし一間哉　小石川　董子
春雨に獨りは淋し留守の宿　同　同
梅の土堤橋南（みんなみ）に霞みけり　伊豆　梅雨子
木の片（きれ）にかた足かけし蛙かな　同　同
曳上る小舟につきし落花哉　同　同
竹外の古梅の枝やさゝ流　伊豆　草笛女史
梅の寺殉難の士をまつりけり　同　同
菜の花や疱瘡神を送りけり　同　同
春風や笹舟放つ腕飾　伊豆　彩虹女史
牛部屋の壁朱くぬる木の芽哉　同　同
山門を入れば菜花や火事のあと　同　同

身の無事に二日灸をば忘れけり　讃岐　伊代子
靜さや霞の奥の瀧の音　同　同
つき反（そ）れた手鞠を猫のかゝへ跳　同　同
小糠雨御茶所の櫻散りにけり　伊勢　みね子
福原の假の內裡や春寒き　同　同
十反の帆を干す船や磯雲雀　同　同
三韓の貢船來る春の海　羽後　すゑ子
大塔の窟に詣る餘寒哉　同　同
蜜蜂を飼へる孝女や貧にして　同　同
白梅や枕邊寒き銀屛風　石見　秀子
蝶飛ぶや亂れ咲きたる百花園　同　同
朧夜や月は磯邊の松の上　讃岐　白百合
朧夜に花盗人を捕へけり　同　同
鈴鳴るや狹い路次にて猫の戀　同　同
午下り鐘鳴る寺や桃の花　伊豫　濱子
一村の大師詣や桃の花　同　同
家二軒落花の里や春の雨　同　同
乏しげに殘る水菜や春の雪　奈良　くり子
春の川書筆を洗ふ女かな　同　同
雉啼くや御坊の杉に殘る月　同　同
會津領山競ひ燒く日和哉　仙臺　日吉子

浦風に海苔ほす垣根つゝき哉　仙臺　日吉子
春の夕浦島が子の噂かな　同　同
樂果てし窓のほとりや蝶二つ　仙臺　蝶子
月寒し白梅匂ふ硝子窓　臺灣　なをえ
陽炎や夜營に焚きし篝あと　同　同
永き日をぶらり／＼と暮しけり　同　同
古庭や陽炎燃る石燈籠　名古屋　しま女
美くしき團子細工や雛の棚　同　同
なつかしや古りにし加太の守雛　加　同
冷酒も此頃うまし桃の花　名古屋　すみ子
桃を出て菜の花に入る蝶々哉　同　同
山吹や傘さして見る桔槹（はねつるべ）　同　同
紅梅のお寺に琴の温習會（さらへ）哉　名古屋　ひで子
紙雛を居間に飾るや桃一枝　同　同
風琴を持つて出る野や草霞む　同　同
朧夜や内侍納言の歌合せ　伯耆　花子
小太刀佩く京童や雛祭　同　同
畝傍山香具山かけて夕霞　同　同
鶴病んで鳥塒（とや）を出でざる餘寒哉　羽後　すえ女
姫逝いて美しき鞠を遺愛哉　同　同
雛噛む鼠追ひけり春の宵　同　同

蛸壺に酒あたゝむる汐干哉　高輪　きん子
藪原に皷うちけり梅の花　同　同
駒鳥（こま）鳴いて霞にくるゝ社頭哉　伊豆　さゆり
菜の花や燒け殘りたる臼一つ　同　同
菜の花や夕日斜に牛の聲　同　同
正行の戰ごつこや草霞む　伊豆　かづを
河渡る騎兵二百や夕霞　同　同
小魚よる水際の泡や水温む　同　同
ふらこゝや並んで乘れる姉妹　魚津　かなへ
紅梅や女醫師の塀構へ　同　同
夕霞話して歸る神子と禰宜　同　同
山の上の五重の塔や夕霞　遠江　たまき
春風や中洲にかゝる渡舟　同　同
山雀の水かへてやる日永哉　同　同
藤原の子孫なりけり雛祭　名古屋　ゆき女
世にふるく志賀に住いて雛祭　同　同
元祿の雛美くしき古び哉　同　同
花守や箒片手に夕嵐　同　愛子
笠取れば空に虹さし雲雀鳴く　同　同
川越えて他國の空やいかのぼり　奈良　勢以子
斥候の忍ぶ木陰や朧月　同　同

ふらこゝや小鏡落す芝の上　静岡　美奈志子
春風や三寸延びし鹿の角　同　同
ちり／＼と木履の鈴や春の風　同　同
髪結て合せ鏡や梅の陰　下谷　文子
春の雨慰問袋を分ちけり　同　同
鯉すむお寺の梅も咲きにけり　同　同
落椿籔と籔との細き道　静岡　かつ子
宮人の御馬うたする春の野邊　同　同
若草の庭に子兎四つ五つ　函館　美佐子
大象の背に子の遊ぶ日永かな　同　同
朧夜や遠く須磨の灯明石の灯　長崎　とね子
鹽田に小鰮遊ぶや暖き　同　同
山間や青麥まばら家まばら　名古屋　柳城女史
菜の花やぽろ／＼雨に黄昏るゝ　同　同
目障りの懸菜はづしぬ春の風　臺灣　小きん
若草や絹ハンケチが落ちて居る　同　同
今日もまた同じ空へと歸る雁　奈良　菫江
新墓に櫻散るなり春の雨　同　同
永き日を髪結廻る寮舎哉　陸前　たけ女
鶯の摺餌に春の日さし哉　同　同
桃林や夕日うすづく水車小屋　越後　花子

朧夜や戀語り行く花屋敷　越後　花子
江南や柳綠に梅白し　同　同
御祝の今坂餅や桃の花　足尾　鳥玉
焙爐張る宇治の小家や桃の花　同　同
桃さくや茶屋の駄菓子の耳かたし　同　同
花の鐘山紫に暮れにけり　伊賀　玉翠
春雨や煙の白き野の小家　同　同
君と我雛とよばれし昔かな　奈良　くり子
出代りて梅さく里に嫁ぎけり　同　同
鶯や藪にかくるゝ草の庵　備後　たつ子
長閑さや日和山より富士を見る　岩代　世都子
散る花や泣く子をすかす夕まぐれ　石見　登美子
散る花に琴の手とめて坐ろ哉　信濃　たけ子
鶯や押えた儘の琴の糸　岡山　登美子
初午や藪を見越しの赤幟　備中　有安堅
山里や家もまばらに梅まばら　同　同
初虹や日和問はるゝ旅の人　備中　昇子
鳥雲に入るや山又山の雲　同　同
春雨や書齋に籠り日もすがら　長野　龍子
筏さす船頭の笠や春の雨　同　同
春雨や人待ち詫びて針仕事　越後　きよし

一村は女ばかりや蟲打　越後　きよし
髮たちて櫻の寺に籠りけり　同　同
婚禮の二日續くや桃の里　上州　まさ子
閨怨を桃に寄せたる一首哉　同　同
白桃の灼々として朝日哉　同　同
泣く兒をば抱て入りけり雛座敷　姫路　すみゑ
草刈の刈り殘したる薊かな　同　同
白魚の箸にかゝらでくづれけり　同　同
山吹を佛性の姉好みけり　神田　ふさ子
杭を打つ垣根の外や蕗の薹　同　同
猫ねむる椽に目鏡の老婆かな　備前　もと子
將軍の馬上寛かに春の風　同　同
歌主のあと追ふ櫻月夜かな　岐阜　登美子
冷かに花流れ去る朝かな　同　同
蛇の目傘はすや櫻の色あせぬ　愛媛　秀女
春雨や軒端の國旗ぬれにけり　同　同
新來の燕は其夜泊らざる　魚津　かなへ
白梅や餌に馴れたる神の鶴　同　同
小鳥啼く日和となりて梅薫る　臺灣　きみ子
行春の名殘を啼くか軒の鳩　同　同
落ちてある赤きリボンや花筵　岩代　つな子

菜の花の果てに村ある白堊かな　岩代　つな子
菜の花の畑に遊べる雉子かな　越後　同
提灯の行列去つて朧月　同　同
ひら／＼と散るやリボンに花一つ　京橋　一枝
白酒に醉うてはづかし雛祭　同　同
薪能見る人の貌あり／＼と　岩代　桂子
茶を挽いて謡を聴く日永哉　同　同
遲々として沖行く舟や春の月　羽前　梅香女史
花の雨椽に降り込む神の殿　同　同
春風や蜆掘るなる片瀬川　高知　喜世子
藤の花衣桁の端にかけにけり　同　同
八重櫻姉君京へ上りけり　同　同
朧夜や誰が手すさびのバイオリン　市ヶ谷　冬子
嫁入の車つゞくや春の月　同　同
祝捷の提灯ぶらり春の風　同　同
雪洞に影そふ雛の笑顔から　大阪　薫子
春動く芹三寸の田堰より　羽前　たに子
春の海たゞ洋々と明けにけり　羽前　かつえ
雨遊過ぎて櫻にかゝる朧月　常陸　滿佐子
蛤の雫落ちけり猫の鼻　岩代　雪子
花賣の京に出る日や朝霞　京都　とり子

ふらこゝや松に宿かる夜半の月　姫路　ひさ子
初雛を飾るも嬉し桃の花　豐後　花子
三日月を見て戻りけり汐干狩　京都　綾子
摘草や二人語らふ草の上　同　同
若草や籬から出す牛の角　牛込　美江子
吾庵は桃にかくれて了ひけり　同　同
紅梅の湯殿に裸體美人かな　越後　れん子
鷺たつや春の小川のさゝにごり　同　同
紅梅や女主人が風爐手前　小樽　曉子
物思ふ身となりにけり春の暮　同　同
鎌倉に名士老いけり春の暮　神田　いね子
京はづれ桃の小村や鄙びたり　同　同
靑柳の雨の玉散る美しさ　盛岡　露子
迷ひでし聖者の庭に菫かな　同　同
陽炎や窓より捨つる化粧水　廣島　靜子
化粧間の鏡に殘る寒さ哉　同　同
盃のべにの匂ひや桃の花　洲本　蝶子
桃の花鳩啼く宮も霞みけり　同　同
夕ひばり御室の塔を横ぎりぬ　京都　愛子
はる〳〵と花菜畑や春の雲　同　同
春の夜や利根の川船足おそし　岩代　ちか子

石段に花の影あり夕月夜　岩代　ちか子
若殿を迎への馬や櫻狩　周防　みつ女
雪洞をともして雛の品定め　同　同
春雨や今宵も更けて歌がるた　備後　俊子
城跡の昔なつかし花菫　同　同
靑々と草の烟や春の雨　伊賀　靜子
菜の花の別莊を出る日傘哉　美作　池田芳
爐塞や夫は兵に召されけり　同　同
爐塞や托鉢に出る比叡の僧　同　同
大名にこの雛買はれ給ひけり　神田　滿子
裾山に雉子の啼く日や雲ちぎれ　神田　ため子
嚴かな石段のこり花菜哉　伊豆　百合園守
梭の音長閑にくるゝ小村哉　同　同
饂飩屋の柳そのまゝ暖簾哉　同　同
前髪に櫻はら〳〵夕日哉　牛込　はる子
乳母が家を尋ねあてけり桃の花　同　同
櫻戸に忍びの殿や琴の音　三河　辰子
櫻戸に若君まもる御乳の人　同　同
柴草を刈りに上るや春の山　山形　千代子
春の水菫浮べて流れけり　同　同
僧一人庭の掃除や散る櫻　鳥取　貞代

春日和かすかに消えし雲雀哉　伊勢　喜久子
鶯の初音にはらふ琴の塵　筑前　文子
淡く濃く島さま〴〵に霞みけり　同　同
行春やたゝむ小袖に花のひら　備後　明代子
牛は皆牧場に出でゝ春の風　羽後　わか子
春の夜や灯ともし下る屋形船　仙臺　泉女
戸をさして庭にも出でつ春の月　同　同
散る櫻笠に受けつゝ通りけり　平福　秀子
待わびて終に柳を結びけり　同　同
菜の花や渡し越ゆれば南部領　一ノ關　美江子
上覽の打球果てたり朧月　同　同
桃の花かほるもゆかし雛の棚　廣島　壽芽子
彌生野や芝に羽織の袖たゝみ　市ヶ谷　冬子
歸る雁曉かすむ山路哉　大阪　垂柳女史
散る花を少女拾ふや神の庭　上州　とめ子
軍服のかくしに凋む菫かな　埼玉　たか子
裏道に凛と氣高し梅の花　和歌山　峯子
川端の柳のびけり春の風　筑後　錦子
山吹や小雨ながらに朝ぼらけ　武藏　きよ子
櫻狩去年は君と二人にて　大隅　しよう子
朝の人又來て居るや夕櫻　備前　民子

春日和椽にひろげた新聞紙　小樽　仙子
菜の花や兵士を送る旗の數　長崎　孝子
馬子の笛霞の中に暮れにけり　上野　春江女
吹上の砂の中や春の草　大阪　すみれ
雛祭る窓を洩る灯や朧月　大阪　薫子
梅が香や琴師召されし裏小門　同　同
軍樂や八島敷島霞みけり　伊豫　梅子
春雨や窓に腰してバイオリン　同　同
菫野やはかなき戀の二人づれ　大阪　つゆ子
琴の音や朧月夜の梅の宿　同　同
病む鶴の鳥屋の暗さや春の雨　原宿　すゞな
海棠の雨やどさしゝ古つぼね　同　同
裏口の窓に彼岸の入日かな　埼玉　仲子
笹舟の桃咲く岸を流れけり　四日市　たい子
彼處此處なづな花咲く垣根哉　播磨　靜子
靜けさの餘りや三保の夕霞　下野　かず子
蝶一つ吹かれて春の湖の上　京都　みね子
銀燭や襖に雛の後ろ影　本所　望天子
夜櫻の人出盛りや春の雨　京都　あい子
戀猫や闇にころがる鈴の音　安藝　ろく子
洗ひ髮さつと撫で行く春の風　山形　長子

蒲公英や焚き壺したる柴の跡　後志　みどり
目覺むれば鶯啼きて日は高し　攝津　計枝子
おごそかに木の間の千木や初霞　靜岡　美奈志子
深院の小窓床しき柳かな　同　同
澁壺にぽつと落込む椿かな　同　同
お坊主の花折りてゆく夕かな　深川　よしえ
紅梅や茶の湯指南と女文字　同　同
霞から拔出る富士の高根かな　同　同
軍人の首途送るや春の風　甲斐　絶子
菫野や道はかどらぬ女連　同　同
江の岸に桃咲く家や梭の音　陸前　新六
笛の主小川隔てゝ桃の家　同　同
長閑さや空高うして雲雀鳴く　佐原　たけ子
長閑さや釣する舟に人眠る　同　同
朧夜や物の怪恐る櫻御所　大和　まさ子
朧夜の埠頭に立てり漁士の妻　豊後　溪水
船に積む俵を撫づる柳かな　豊前　濟月
菜の花の中から出たり子守唄　大阪　威子
大船のゆるぎ出でたり朧月　岩代　隆子
女神乘りて遊ぶ舟あり春の川　下總　美智子
遊君の姿かすみぬ五條橋　下野　泰子

物思ふ窓に落ちたり玉椿　橫濱　芳子
相傘の燕に顔を見られけり　京橋　かすみ
蝶二つ失戀の吾をなぶりけり　同　同
春風の廣々とした牧場哉　同　同
孤兒の獨り遊ぶや玉椿　名古屋　浪子
春の日や妹髮結ふ南椽　同　同
女同士仲のよき子や桃の花　同　同
風光る浦や長閑に三十里　美濃　美子
物思ひ風に吹かれて奴凧　同　同
鶯姬よ物思ふ我なぐさめよ　同　同
献上の白魚に梅の散りかゝる　尾張　みち子
出征の夫送る袖に落花哉　同　同
紅梅や妻が絹張る五加木垣　同　同
鞦韆やはこせこ落ちし草の上　足尾　照野
鞦韆や高麗人の長煙管　同　同
東風吹や天滿宮の石疊　同　同
盃の流れて來たり春の川　大阪　愛子
小鮎釣昨日も此處で見た人ぞ　同　同
市助の藁打つ音や春の雨　伊賀　かつ子
青柳のけぶる隣に風呂屋哉　同　同
さら〳〵とあとは夜風や春の雨　伊豫　かをる

獅子舞も太鼓の音もかすみけり　京都　まさ子
雲すぎて崖の白藤雫する　青山　かつ子
疲るゝやテニスを退きて日の永き　大阪　ゑん子
駒ひきて野邊ゆく人や影おぼろ　和泉　秀子
渡殿や櫻に思ふこと多き　伊勢　ちゑ子
鶴鳴くや月も朧の岩の下　越後　きみ子
嫁菜摘む乙女が袖を春の風　神田　俊子
月朧ろ詩吟して行く書生哉　神戸　ともへ
琴の爪はづして雛の料理かな　越後　ミトリ
釣り床の稚兒の寢顔や櫻散る　越後　雪子
瓦燒く三戸の家や桃の花　筑後　しか子
美しき花を散らして春の雨　神戸　葉子
北嵯峨へ一筋道の薫かな　桑名　桂子
四疊半に炭の薫りや春の雨　能登　君子
ひな僧の居眠り寒し春の雨　名古屋　ますみ
鶯は啼かず茶店の仲居かな　大阪　垂柳女史
鐘なりて櫻散りたる寺の庭　山城　京子
孫どもと雛をめづるや老の顔　小倉　登美子
春の日や障子にうつる桃の花　阿波　英子
春風や開墾畑の土けぶり　美濃　消枝
比良の雪消えて外山の初櫻　備後　輝子

畑打の小唄うすれて黄昏るゝ　京橋　とよ子
掛茶屋の暖簾に入りぬ蝶一つ　上州　いゑ子
春雨や淋しき窓に君がふみ　肥前　ます子
雛飾り古代めきたる山家かな　下野　はな子
鶯や晝靜かなる奥の院　柏壁　けい子
怨みわび干さぬ袂や春の雨　陸前　みどり
野も山も霞みて聞ゆ麥の笛　播磨　ふさ子
ふらこゝや雲吹きわくる松の風　姫路　六六
二つ葉の三つ葉に霜の別れ哉　越中　いさ子
帯解けば菫こぼるゝ寢床哉　埼玉　さた子
砂さらり泡を殘して春の川　足利　辰子
鉢植の梅の花ちる机かな　山形　てるよ
順禮の足元かろし春の風　讃岐　婦伊子
歌反古の賣り主やせて春逝けり　周防　駒子
陣營に恩賜の酒や春の風　美濃　愛子
御陵の玉垣朽ちて椿かな　肥後　たけ子
人去つて氣高き月の櫻かな　高知　鶴子
すれ違ふ伽羅のかほりや春の月　京都　つゆ子
掛鯛の鹽ふき出すや春の雨　高知　久子
烟たつ十戸の村や梅の花　岩國　きくえ
菜の花の中や長閑に子守唄　同

美文

(天) 松沙日記

八重子

あかつき深く目さめたれば、やり戸自らくりて欄によれば朝霧例よりも深く立ち罩めて、八坂の森の老松が枝にのこれる月、いはんかたなく、かの扇ならでもと撥にてさしまねき給ひけん折も、かくしもありけめといひしらず興催されしかど、語りあはん人もなし。かゝるをりにぞ人のなつかしさも。

村はづれあたりなく鷄のこゑ、靜寂を破りて聞ゆ。淡かりし星の影一つ〳〵見えずなりゆくまゝ、東の山際紅うなりそめ、伏やの軒より白きけぶりたなびきて、夜のとばりは名殘なうひらけぬ。

ひるつかた、書にあきてまどによれば、松並木を棺かきてゆく一むれ。その靜かなるべき野べの送りに、こは何事ぞ。聲高にわめき興じてしたがひゆくさま、そゞろ棺の中に眠れる人の人柄さへしのばれて便なし。心に誠なくて只義理一片の會葬者、むしろなきにしかず。かゝる人は佛につくすにてはなく、世間とかいふむつかしき僞善の集りに對して、機械的に棺の後より從ひ歩くなるべし。末の世の人心つめたし。我死なば、かゝるやからの千萬人におくられ、金襴花やかなる紫衣の僧の、うはの空なる誦經耳ろうずるばかりならんより

只一人心よりたむけし一輪の花に、一滴の白露そゝぎ給はらんこそ、なか〳〵にうれしう、冥路もいとめやすかるべけれ。

袖が崎よりうつしゑにそへたる文

いふはなめげなれど、世にたぐひなくろう〳〵しく在しますが、只わすれがたくて、御あたりの事のみ打偲ばれ申候。清き渚の岩のほとり、立たゝせ給ひて、浪路のはてをはる〳〵とながめ給はん御有様、誰やらが小説の口繪の樣に在しまさんなど獨思ひつゞけ居候。かくばかりしたひ參らする身をあはれませ給ひて、かの御自ら下畵かゝせとの御振袖姿のおうつしきをば、あまり氣まゝなる願ながらさしゆるし給はゞ、いかに〳〵本意に候はん。只今參らするこの姿、今更ならぬ醜さに候。只々御寂しさのしばしを慰め參らせんとの心に外ならず候。かならず人質のうきめを見せ給ふまじく候。またさほどの罪は犯し候はぬぞや。かしこ

右かへし

こゝにても御あたりいかにと、事につけつゝ思ひやられ候折から、ゆくりなくもかゞやくばかりの御姿見奉りしうれしさは、たとへなく候。忘られぬおまなざし、匂やかなる御ぐしさながら、御對面參らする思ひにて、幾度か〳〵とりては眺め、置きてはながめ參らせ候。只々例の片頰の御ゑくぼの在しまさぬが、もの足らぬ思ひに候。衣重げなる御肩のあたり、つばさ無きをあやしみ申候。みるめなき海女がうらふれ姿いかで〳〵都の君にまへらるべき。かつ御所望候ひしは年はつかしけなるよそひ、殊にためらはれ候。されど再びは來ぬ二十一の春姿とて、さゝげまつらん手つきもやさしかれと、猶とて

母君のみじかくせよとのたまへど
たゝんにをしき衣の振袖

いつくともなく都をさまよひ出でし裾野子より

今日の晝食は猿橋にて、夜のは名もゆかしき笛吹川の畔、さし出の磯に自然の美を友に箸とる手快よう致し候。向ひ居し山の上には芙蓉の姿はるかに見え、只なつかしく候。あゝこの山又山とたどりゆく胸の中は君ならで誰かはしらん。こよひはこゝにおぼつかなき夢を結び申べく候。さて又明日はいづく

甲斐路にて

芙蓉の君へ

浮世小路より

窓叩く風のおとに、荒磯浪の夢に入りし爲かとも思ひかへし候へども、夫となく氣にかゝり候ものを、別に御異狀も無きや。いよゝ、糸は結ばるべく候。思ひ出おほき雲の舍を立はなれ、都の片ほとりにかりの宿いたすべく候。僅に膝をいるゝ斗の陋家なるが上に小路の名はにくくしげなる〇〇町と申候へども、我心までも腐敗し候事は無之、且つは「何陋之有」と申事も候。是非とも御閑臥の地しばし立はなれ給へ。聞えあげ度事山の如し

この夕雨風はげしこゆるきの
まづの梢のこゝろもとなき



小路より

松の下いほへ

やさしき妹とのえにしの糸結ばるゝうれしさ、我上にもまして、ゆく末の事とも思ひうかべらる。御かへしには、紅の緒結ひ終へし白き箭につばさ持つ子の二人のれるかたへ

紅の緒かたう結びてし箭は、妖雲の天、混濁の地より、光明の天優婉の地に飛びゆくらんと只うれし

豊浦より

煩累より脱却せられて、彼の巖頭に自然の美を悟り給ひし人の、心にくき振まひこそ美しけれ。されど又世に花やぎ給ふべきほどぞ、何故の御閑居ぞや

かへしは

いはしめ給へ我心、身に綾羅をまとひ、玉樓に住ひ、交際場裡にもてはやさるゝと、軒かたぶきしとて寒からぬほどの衣まとひて、幽邃の地に風月を友の起き臥しと、いづれか眞美の妙味深しと思し給ふか。あなものつゝましかるべき女性の身ながら何事ぞ。見ゆるし給へや、君

刺繍台に向へば「又もや御病にさはり給はん」と乳母の氣つかふが、氣の毒なれは其まゝ仕まはせつ書よむ折から、農家の嫗來り「御つれ〳〵に在しまさんと、かゝる翁ゐで參りぬ。やがて百歳祝ひせんと申候ぞや。昔の話聞き給ふも、御一興に候はん」といと珍らしければ、さま〴〵昔の事とへば、口すぐみて、しつ〳〵と肩うち振りてかたる樣、この雲林院の菩提講まかりける翁は、かうしもありけんとほゝゑまれぬ

夕ばえの富士、さながら金屏にゑがゝれたらん樣なる姿ながめて、庭下駄のまゝたとりゆけは、いつしか地藏尊在しますほとりに出でぬ。こは身代地藏とて、詣づる人おほしとかや。馬琴がしるしゝはれ是か。こゝの橋本郷橋といへるよし、都めきてなつかし。名にしおはゞと思ふも物狂ほし。名もしらぬ、いさゝ小川の岸つた

ひゆけば、櫨紅葉など明う、ところ〳〵にやゝみだれたる尾花のわびしげに、なびき合ひつゝ、うらぶれし葛の葉は黄ばみし葉末を流にひたして、行く水をとゞめかほなるが上にさしいでたる枯枝に烏瓜のいろづきたるか三つ四つ、風になぶられつゝ危ふげにかゝれる様の、水にうつりたる又なくをかし。あやしげなる小屋よりもるゝ水車の音ゆるう、そこの板橋わたりゆく野の戻りの和郎のだみ、やう〳〵に遠ざかりては、又清き水のさゝやきのみ、松の葉ごしの月かげながめつゝ歩むほど、いつか我庵へはたどり來ぬ。月に心うばゝれつゝもわが住む家は忘れぬかをかし。

　こよひは月さやかなる欄に、虫の音をきゝ



つゝ、かへる夜にとふ人もがなと思ふ折から、かゝるもの參りぬといふを見れば、紅葉の枝に結びつけし文、にくきすさびかなと、いひいひときて見るに、古雅なるみちのく紙に、いまめかしき筆つきに

おなじ岩の戸いづるといひけんこよひの月、いかに眺め在しまするか。虫の音しげき淺茅が露にきらめき渡る月影、もろ共にめでばやとの思ひ切に候。今日しも都より甘きもの送りこし候ひつれば、御供には是非茶通箱加へ給へ。久々にて一服戴き度願ひ候。夫れともケレウソート臭き部屋は御いやか

おせはてし色のゆかりこ

松かげの御宿に

さすがに見すて給はざりけるよとうれし。直に筆とりて色こき薄やうにふりはへての御消息、雲間をもれし月の光をも拜し參らせ候。そこにても同じかげをや仰ぎますらん。東おもてのそばしまに、片ひぢもたせての御面影の、わりなくも思ひうかべられ候。思しわづらひ給ふは、歌か詩か。御ひざのあたりの御書は何。山家集か。さりとも又左ざまより讀む書か
山ちかき御わたりもさる事ながら、月の磯べもまた捨かたう候ぞや。かの味よきもの携へ給ひて、此方へぞ渡り給へ。炭さしそへて待ち參らせばや。かねて御好の豆、京よりおくりこし候を、御もろともにと手もつけず居候ものを

白露になやむ芙蓉子

山下いほの君へ

床に活けしりんどうの花結びつけて、かへしやりぬ。何とやらん古ものかたりめきて、をかしともをかし
月夜には相應はぬ電燈の光よと、暗うして、月にかたりし數々は、心の日記にしるしおきければ、こゝにはえかくまじ
一しきり笑ひ興ずるころ聞ゆ。又もやはした女の訛多き言葉を捉へて、笑ふなるべし。世なれぬ田舍人ぞかし、さな笑ひぞ。浪花のあしは伊勢の濱荻、ところ〴〵に變ることの云ひぞと、いひやらまほしけれど、きゝしるべくや

圓熟洗煉の筆、文辭の優婉は王朝の才媛を凌ぐものあり、近頃稀に見る國文體の美文字なり。（舟人）

（地）沈丁花

名古屋市木挽町六番戸　奥島ひで子

われは今幼き妹の墓を訪ふべく來にける。

法泉寺の裏山、春の日きら〱と新芽美しき樹樹の梢を漏るゝ雜木林の小徑を登れば、寺の墓地に出でぬ。苔青く生ひて古き碑、あるは新しく堀り返したる土の小高く盛られて卒塔婆の四五本たてるなど、そこに白く小



さき長方形の石に淨妙童女と刻まれたる前に、われは佇みつ。

妹よ……携へこし沈丁花の一枝を手向けむ。

懐ひ出多きこの花よ！未だ春寒うして庭に來鳴く鶯の音も冴え返る朝より、牀に就きたりし妙子の病氣、日も暖かになりゆかば癒えむと醫師の君の云ひ給ひしを、なか〱に、前裁の沈丁花咲きたる頃は日に〱篤くなりまさる事の心細さよ。われは沈丁花の小枝を折りて、枕頭の藥瓶の口を飾り、其薰りのえならぬを云ひぬ。

乞へるがまゝ哀れに疲せし妙子の手に沈丁花を握らせしかば、靜に通ふ息にあてつ、妹の冷たき唇は微かに

動きて、「げによき薫りよ」と、その蒼白き頰に淋しき笑みを帶びぬ。

これより三日が程、妙子は沈丁花の淨き香に醉ひつゝ、樂めるなりき。

枕邊の行燈灯影やゝに薄れて、短かき春の夜の曉近きなりける頃しも、かの沈丁花を手にしたるまゝ、妙子の幼き靈は逝きぬ、恰も眠るがごとく安らかに。

そも一年の夢とすぎ去りしならずや。

われは立てり、妙子と對ひ合ひつゝ立り、妙子は沈丁花の一枝を持てるなり。

小さき墓石の動くよと見し時、わが頭は恍惚として怪しの影を追ひつゝ鳥の囀りは遠き遠き彼方より波紋のごとく遙かに傳ひ來りて世を隔つるかと感ぜらる。

眞晝の靜かなる日影かぎろひて、身は薄紗に包まれたらんやうに、眼も眩むばかり輝く黃金の千筋の糸の、亂れつもつれつ、走るが如く流るゝが如き中に、妙子は立てる也。

その容姿は西の洋人が鑿の技術に成りし、神の子に彷彿として。

餘りの嬉しさに謂ふべき言の葉も知らざりしわれは、その貌を伺ひ見ぬ、その崇高さ。

妙子の唇は動きつ、かれは何物をか聞きしやう覺ゆ、かれや又何事をか語りし「御なつかしや姉君」たゞこの一言のみ、深くわが腦中に刻まれて殘りし。

妙子は手なる沈丁花をうち振りぬ、淸き香は四邊に散りぬ、妙子の頰は豐かに、若き血は春の潮のごとく沸き返りて、薄紅の色を染めぬ。

わが胸いよ／＼みだれて、物ぐるほしうなれり。

黑き蝴蝶の大なる翼をふりつゝ、薄紗の帳の隙より舞ひ下りしよと思へば、妙子の姿は幻のごとく消えつ

われは夢より覺めし心地して、蝶の行方を恨みぬ。黒き蝶は妙子を奪ひしなり。
花やかなる春日は暖かに照り、鳥は木々の枝を飛び渡りて、かしましく囀れり。
わが手向けし沈丁花の高き薫りは、小さき妹の墓をめぐりて漂ひつゝ……。

美文にして情切なり、結末殊に餘韻あり、文才ある人の筆といふべし。（舟人）

（人）梅花日記

松江市内中原　岸崎以志子

一月十七日　朝日まばゆき籬のほとり、梅の花三ッ四ッほころび初めつ。野梅ながら香り高う、げに心嬉しき朝なりける。常ならば二月ならでは咲かぬをと今更ながら今年の暖かさのおもはれつ。



十八日　いとゝしう花の數ましたり。霜を凌ぎて凛たるけはひ、げにをかしがたう。花の下道さまよはんにあまりに風の寒かりし。

廿日　なつかしき雪子の君へと文認めつ。梅のさゝ枝よく咲きたるを卷き込めて參らせぬ。君がおん手に披かれん迄、願はくば香り消えざれ。

二十三日　月よし。十七夜あたりならん。窓押せば老木の梢にかゝりて隈なき光の流るゝが如、薫り來る梅が香身にしみて、風いとゞさむし。

廿九日　六ッの花宮に舞ひて咲きも揃はぬ梅の梢は頓に花の盛りと化したり。寒ければ出でゝも見ず。

卅一日　明日の料にと梅の花剪る。解け初し淡雪、うなじにかゝれども梅の雫と思へば冷たからず。何となうかほりある心地して。

二月一日　梅もちて御花の師許行く、師の君慈しみ給へる鶯、かたへに在りて聲朗らかに鳴く、梅の蕾をいと好みて、挿し殘りたる小枝投げ與へしを啄ばむさま云ひ知れぬ趣覺えつ。

梅園の花白きも紅きも盛なり。早きも遲きも共に咲きしと師の君のたまふ。

二日　雪子の君より音づれあり。梅の花香り失せざりしとぞ。故郷の梅が香なつかしうかぎぬとていとよろこび給ふ。紅梅の花三ッ四ッ封じこめられつ。遠きあなたのこの花よ、消えやらぬ香の嬉しともなつかしう。

十一日　隣家より紅梅貰ふ。直に床に挿しぬ。白梅「殘雪」蕾いよゝふくよかになりぬ。

十三日　紅梅の花一つ綻ぶ。

十五日　松子の君よりの御玉章、名に高き「銀世界」の梅一輪、倫理の答案に滔々と公徳を論じたる我今此花ひよといひこさせ給ふ。花の都にめでらるべきを、かゝる田舍のかひなき我手に葬られぬる。げに幸薄かりし此花よ。

十六日　殘雪さきぬ。さながら薫れる雪かとあやまたれつ。垣根の梅色あせて、散る方の花のあはれわびし

廿二日　床の紅梅見苦しければ取すてつ蕾なるは一つ〳〵むしりとりて筆洗に浮べをきぬ。

廿三日　東風寒し。梅の梢に紙鳶かゝりて花の蕾夥多落ちたり、一花も惜しと拾ひとりて昨日の筆洗の内にうかべつ。

廿五日　梅の花一枝手折りて、やみませる君を見舞ふ。今年は見る事叶はじと思ひしをといたくも喜びたま

ふ。白くやせたるおん手に香をかぎて、淋しくもえみ給ひし。花ある内に快うなりて一度は來ませといひて別る。

三月二日　松子の君木下川の梅園に行きしとて河畔の寫生を繪はがきにして給はる。筆洗の花半ひらきて紅白打交れるさま美しう。口にて吹けば流れ漂ひていと愛らし。小さき池にあまた浮べて其たゞ中に坐して見たしなどおもひつ。

六日　朝とく紅梅のほとりに行きて見る。梢の雪消えたれば打拂ふ迄もなし。消え殘れる白雪の上に點々紅き花びら四ッ五ッ。白梅またちりそめぬ。君の御いたづきまだ癒えぬを――心淋しき朝なりける。

雅文體日記文の上乘、何となく垢拔したるは床し。

秀逸

有賞

この花

小石川區關口水道町四十一番地關コト方　島村嘉子

一

不運なる星の下に生れ出でし賤の身の、それを運命と安んじはせで、おぞや女のなまじひに藝術の華の香に醉ひ、ひたすら理想の影にあこがるゝ心より、故郷出でゝ一人旅、せち辛き浮世の浪にもまれては、坐ろに過ぎ來し方の忍ばれて、雁鳴きわたる暮春の夕、吐鵑血に叫ぶ首夏の曉、虫聲かすかなる晩秋の夜、さては散る花、みだるゝ雲にも思ひをよせて、あゝいく度か故郷の空を仰ぎけん、げに隙もなき年月の流れ〳〵てこゝに

また春はめぐり來れども、歡樂永しへに逝きてかへらぬ夢と消え、思ふことかなはねばこそ憂き世とや、忍ぶにあまる恨みを呑みて、今も倚山なく水なき都の塵に埋もるゝ身の果敢なしや。

二

語る友なきさすらひのさみしさに、白梅かほる星月夜おばしま近くよりそひて、好める一ふし琴にのせ、やるせなき胸のなやみを解かんとせり。

夕風しづかに涙にぬれし袂を吹いて、あやしく手ふるひ、曲はみだれて、堪へがたき思ひのせまれば、室に入り、短檠に灯ともして平家物語をよみぬ。

興に入りて讀みもて行くに、そこに海棠の花一つはさまれたり。

月日經たれば色は褪せ青葉あはれにしほれて面影はとゞめざれども、倚新らしき思ひ出はこもれるなり。

賊や妹脊の戀はさめやすき菫の紫、春雨に色あせて蝶のさゝやきもあらじ、されどこはまたさめやすき戀にはあらず、天地に一人の友靜子の君が別れの夕、涙そゝぎて賜はりし花片、あつき情を思ふ度に涙は胸にあふれて、春の夜のうたゝねに友が面影夢に見ては、忍ばるゝは別れし夕。

三

思ひぞ出づる、茅渟の浦曲の夜靜かにおだやかにきよらに、松原がくれ仰ぎ見る星の光もうるはしく、草をしきて友と離別の辭をかはし相抱いて泣きたりしはげに海棠にまだ蕾ある頃なりき、堪へがたき離愁の切なる情を胸にみたして、再びめぐり合ふ日の來らんことをよすがとし、友は狭山の池のほとりに――妾はさびしき早稻田の野べに――

あゝうるはしき茅渟の浦曲こそ、永しへに友とわが紀念の地なり、いつかまた再び手をとりて、おだやかな

ることと彼の夜のごとく、しづかなることも彼の夜のごとく、共に草をしき、共に松原により、共に潮の香をかぎ、共に星のきらめきを仰ぎて語ることを得べきか

四

吁友靜子の君、昨日今日の起きふし如何に過ごさせ玉ふらんか、今春深くなりて風あたゝかに野も山もみな新たなる色相もて飾られぬ、あゝこの時、友一人逍遙ふか、白波よするかの渚、春風きよきかの松原に。

海棠咲く頃とならば散る頃とならば、この莖を嚙んで離愁の情をやらん。

いつしか夜は更けて目白の鐘の音哀れにひくゝひゞく、あゝ友に別れ來し旅の子の胸にうかびし春の夜の思ひげに涙のみ多くして。



文、流麗、筆力雄勁なり「この莖を嚙んで離愁の情をやらん」といふあたり、餘韻人を刺す、

あはれ亡き友

東京府下田端　田中千賀子

春といへば、いづれも櫻と思ひ愛でらるゝは、今も昔しも變る事はなけれど、妾は一しは此の花には、思出

多き、忘れもやらじ三年のむかし、初めて都に上りし身の、のどかなる春の日も何かは、たゞ故郷戀しう、父母なつかしく、この花陰に、空とぶ雁のゆくへ忍びし折柄、そもかの君の來給ひつゝ、やさしき御なぐさめごと、今も忘れじ、それよりは、友垣の、いと深う交り參らせて、月にも花にも、ともならでは、嬉しき事悲しきこと、たがひに、つゝみなう語り明しつるも、大方は、花の下、おぼろ夜を、打ちつれだちて歌よみかはせし事も數しれず、學びやのかへるさを、共に春雨に袖ぬれて、しばしの雨宿りも幾度ぞ、うらゝなる日を寫生帳手に、かにかくと、樂しくこのもとに遊び暮し、四ツのたもとは、はなるゝよしもなかりしを、花に嵐のたとへにもれで、ふとある夕べ、風の心地とふせ給ひしがもとゝなり、君はみまかりぬ、あゝやさしき友は、木の葉のごと、散りうせたまひぬ、妾がこゝろはいかばかりぞ、友にとり、妾にとり、かぎりなう嬉しき、この花も今はかへりてうらめしく、あまたゝび、花に、とひては泣き、答へては悲しみ、涙もつきぬるばかしはかなかりしは、つひきのふと思ひしを、關守なき月日は矢の如く夢の間に、二とせ三年は、立歸り春はくれども花は咲けども、いたづらに、過ぎし昔しをしのぶのみ、あゝ幾度花はかへりても戀しき友はとこしへにかへりきまさず、

春くるたびに思ふは亡友。

措辭流暢、盤上に玉を轉ばすの概あり、末段「春はくれども花は咲けども」の警句、全篇を活動せしむ、（舟人）

河畔の想

一

霞湖のほとりにて　雪子

深紅の色鮮かなりし夕づゝの影も、守屋の峯に紫淡くいざよふ雲に舂き初めて、あたりの空一面さつと流す

臙脂の色華やかに、せゝらぎゆかしう流れ行く、上川の水の深碧に映せしも、やがて何處よりともなく次第に迫る黄昏の烟の爲めに、やゝ〳〵にうすれ行きて、今は漸く消え失せぬ。颯として枯れ果てし葦の葉裏を渡る膚寒き風を孕みて、消え殘る眞帆片帆の影二つ三つ、波に搖れて、ゆかしき欸乃の聲、水の面をかすめて通ひつ。かくて夢よりも淡き夜の帷幕はあたりを罩めて、見わたすかぎりくろずみ果てぬ。

うち出でならぬ思になやむ身の胸の憂さはいづちともなく消え失せて、渚にさゝやく小波の妙なる響は、心の小琴の糸にふれてや、樂しき調をかなでつ。さてもなつかしき夕なるよ。



やがて月出でむとするならむ。東の山の端に棚引ける雲は、薔薇色に匂へり。あたりはまたく闇の裡に包まれて、麓の里に燈の影二つ三つ、かすかなる光を放てり。

二

と見る水色なりし蒼空は、やがて紫色と變り、紫色の空またも水色とかはり、やがてまた白き光ある空となりぬ。折しも雲を破りて銀線一條さと閃けば、今まで野山に滿ちたりし淡靄は、やゝ〳〵にうすれ行きて、あたりはまたも眠より醒めたらむ樣なり。金波銀波碎けて寄する川の面撫でゝ、さよ吹き來る風に、衣の袖翻らせつゝ、足にまかせてさまよひぬ。

そよいづこのたがすさびなるらむ、想夫戀のそれならぬ妻琴の響、いと妙に彼方の森陰より洩れ聞えぬ。この月さやけき夜に、凩さへ音なきに空しく過さむもうたてしとの手すさびにや、さてもゆかしき調べかなとそぞろ音する方に歩を移しつ。

三

渚の葦の枯れ葉にそよぐ風の音の、縹渺として遠く消え行きしと思ふ間に、急弦忽ち昂く嘈々として千仭の飛瀑懸崖に碎くるかと怪しまるゝばかりなり。

花の香にあこがれ狂ふ、蝴蝶の舞の如く、森に囀る瑠璃鳥の歌の如く、いと樂しげなりし絃の調べも、やがてやゝに沈み行きて、響もあはれに、つらを離れし孤雁の聲、岩間に咽ぶ水のせゝらぎもものかは。その悲しき調かなづる人の心の裡やいかならむ、今は松風の音も、波の音も全く絶えて天地只寂寞、嫦娥涙に暮れて月の光もうすらがちなり。

我はこの妙なる響耳にして、富も、幸も、戀も、譽も、魔神が射る呪咀の征矢のひと筋に、胸深く貫かれしが如く、いづちともなく消え失せし心地して、呆然として渚に立ちわずらひぬ。

あゝ河畔の琴の音、われはとはに〳〵忘れ得じ、朝な夕な音訪ふ松風は、今その調かなづるやいかに。

四

まどかに美しかりし月は、いよゝ清らかに天心に澄みて、塵の世も今こそはしづかなれ。われは猶も立ち去り得で、そこはかとなく岸の並木を辿り行くなり。やがて行き行きて川に臨める鎮守の杜に至りぬ。

あゝ思ひぞ出づるこその秋の夕、親しかりし友の一人と、草村にすだく虫の聲を耳にしつゝ、千草に結ぶ白露踏みしだきて、そゞろ歩きせし時、共に美しき理想の樂園に赴かば、とやせむ、かくやせまほしなど語らひ

て、蜜の如き未來の思にほゝゑみたりしはこの杜なりしよ、さるを運命の神のつれなき御手は、果敢なくも、わが友の身を拉し去りて、白雲郷の人ならしめぬ。
あはれ玉の樓の人となりし友は、天にましますエホバの神の御手に抱かれて、樂しき香にや醉ひ給ふらむ。

五

夜や更けぬらし河風身にしみて、膚寒きに盡きぬ名殘りをあとにしつゝ、やをら家路に辿りぬ。
月はいつしか雲間にかくろひて、露に濡れたる草村に、かこつ虫の音は世を果敢むが如し。顧れば杜の上の空に、輝きたりし星一つ、光芒うるはしく西の方に流れぬ、あはれ亡き君が魂ならむか。
折しも颯と吹き來る秋風一陣、木の葉二ひら三ひら心ありげにわが袖にふりかゝりつ。

綿密の筆致、景をつくし情をつくせり。

可憐の猿曳（日記の一ふし）

河内國北河内郡川越村　岡市喜志子

一月十日里の子の罵る聲のうちに猿曳來る。
十あまり三つ四つと覺ゆる小娘の面は美しきが、赤き頭巾赤き衣まとへる小さき子猿をおぶへるなり、優しの猿曳よ、よくも亡き妹に面ざしの似たることよと母はのたまふ。
あまりの憐れさに國はいづくといへば長州萩なりと答ふ、父母やいますと問へば父も母も在さずひとり旅なりといふ。

あはれ年端もゆかぬ乙女子の身をもちて遠く故郷を去り見知らぬ他郷にさすらひて便るはたゞ一つの子猿、子猿は小娘を便り小娘は子猿を便りに、その日その日をかせぎゆくいとしき猿曳よと、そゞろかなしう思はれて銀貨一枚とらせぬ。

節おもしろく小娘がうたふ唄につれ、或は舞ひ或は跳る子猿の姿のおもしろさ、信田の杜の舞とかいひて小さき市松人形に乳をあたふる身ぶりの愛らしさ、よくも教へよくもおぼへつるものかな、と思ひぬ。

やがてあつく禮のべ再び子猿を脊にして出でゆきぬ、門にはまたも罵る里の子の聲々。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さても吹きすさぶ今宵の風よ、思ひ出す可憐の猿曳、いぶせき旅籠屋の燈火のもと、いかに淋しく眠るらん、更に憶ふかのあはれの子猿は小娘の傍にそひふしていかなる夢や結ぶらん。

やさしき作なり、小娘と子猿に同情するは、さすがに乙女の筆なり、簡にして情を盡したるを喜ぶ。

さゝぶね

島根松江内中原町　岸崎濤子

汀の櫻ちり初めて緑に萠えし柳の絲の靡くとしもなく、春風ゆるく吹き渡る池のほとり、聲朗らかに唱歌うたひて姉と弟はいと睦じう。

浮草青き池の面に愛らしき笹舟あまた浮べられつ。菫蒲公英山吹蓮花草などの花もてとりどり美しう飾られたり。

水際低う山吹咲き亂れて、芽出し初めたる水草の河骨はちす澤瀉などの卷葉初々しう、そこともなく陽炎

立昇りて春闌の日影いと暖に、芝草青き小橋の下にみをつくしと並びて設けられたる二段ばかりの楷に腰を下して餘念もなう遊べる二人の姿の愛らしさ。

姉なるは十歳ばかりにもや頬豊かに瞳愛らしう、紺飛白の筒袖に紫の帯勇ましげなる弟は六ツばかりにもやなりつらんか。

『ゆーちゃん此はみんな日本の軍艦なのよ。ホラあの一番大きいのが戰鬪艦で少し小さいのが巡洋艦』、『水雷艇は一番小さいのですねえ、澤山あるなあ、これから揃つて露西亞へいくさに行くんだ』二人は手もて水をかきつゝ萬歳を唱へつ『扶桑の空に聳えたる、富士の高嶺の朝日影――』と一齊に唱ひ出す『日本海軍』のうた。



滿艦飾の小旗旛は愛らしき歡呼の聲に送られて勢ひ勇しく港を放れぬ、ゆるく吹き渡る風を受けて小さき手に起る波のまに〳〵おのがじゝあなたへぞ流れ行く、黄金白銀ゆかり紅、裝ほひこらせし笹舟は水面に時ならぬ花を咲かせつ、浮びし緋鯉はいつしか去りてなき交はせし蛙も聲をおさめて岩の上石のはざまなどに打潛して我知らぬ顔なるもをかし。

すみれを載せし小さき舟の最も舟足疾う形すぐれたる戰鬪艦巡洋艦などをあとに既に池の半にも漂ひ出れば、二人は手をうちて水雷艇萬歳を唱へぬ。凜々しきおのこの眉打揚がりおさげに紅きリボン風にひらめきて長き

袂のぬるゝも知らで白よ赤よと打叫びつゝ流れ行く船の行衛を見まもりつ、吹くや春風、双手に起る波いよいよ高う彼方此方に漂よふ舟のはげしき波と戰ひつゝ進み行くさまのあはれにもかひぐしう。

春風一陣、池の面をかすめてあなたへ、汀の櫻雪と亂れて白き花びら水の面白くちり浮びつ。梢見上し姉なる子は亂れ狂ふ樣をそゞかしとや見し心は旣にあなたに飛びて『アレ〳〵御覽よ、オ、奇麗!!お母あさまに糸を戴いて花を拾つて遊びませうや』二人は手を取りて馳せ出しぬ。赤き帶、海軍帽の愛らしき後姿はやがて築山のしげみに隱れてうたふ唱歌の聲高し。

長閑に暮れ初むる日影靜に、波をさまりし池の面に落花音なく、忘られし笹舟はおのも〳〵水草のひま岩のはざまなどに吹き流されつ。香による蝶のすがたやさしく、鳴き交はす蛙の聲一しきり高う——

可憐の趣を目のあたりに彷彿せしむ、才女の筆也。

春の野

兵庫縣城崎町高等小學校内　北村鈴江

夕暮れ近き春の日を、妾はこゝ村はづれの野邊にとたたずめるなりき。

日は今はなやかなる名殘の光を投げつゝ、若草もえ出るあたりは一面、すみれ、たんぽゝ、れんげなど、とりどりなる花に飾られて、あだかも繡箔美はしき衣しきたらんが如く、菜種黄色に麥青く錦とかゞやく野面には、農夫の二人かへるさま見えて、荷へる鍬の光白くまばゆく、さながらきらめく二つの星かとばかり。

牛の聲一つ遠くに響き、あたりは次第に靜まりかへりつ、くねり多き野の小川の、ゆるく一條の白絹を引いてつきせぬ恨を訴ふるが如。

あゝ此野邊。

思ひ起さば去年の今頃なりしにあらずや。軍服いかめしきわが兄君を送りまゐらせしは、涙をふるつてなつかしきわが兄君に別れまゐらせし

は、あゝ思出多き野邊。

「武夫戈を揮て戰にのぞむ、もとより生還を期す可からず」との雄々しき御言の葉を、妾は今とて忘れたるにあられど、そが實となりて永劫に涙の袖を絞らんとは、あゝいかで〳〵思ひ設く可き。春は再び立ち還り花は再び咲きかへるものを。

願へば此處此野邊の別れは、遂に永劫のそれにてありしか。三塊石山星晴き夕、兄君は大夜襲の先登として花々しき御最期、壯烈なる餘香を止めて二十五歳を夢と化し給ひぬ。

あゝ夢々、夢ならばさめよ。

歎くをやめん、慎むをやめん兄君は武士として叉人として、最も光榮ある本分を盡させ給ひたるに非や、歎くは女々し、慎むは其本志に悖るものと、常々の覺悟は堅けれど、今、此處此野邊に立ちては、いかでせき上くる涙を止むることを得べき、ましで雄々しくなづかしき御姿のあり〳〵と、わが前に妾を見やりて立たせ給ふものを。

あゝ慎多き野邊、慎多き春。

ふと我にかへれば、日は既に入りて餘光尚雲をこがしつゝ、夕風しづかにゆかしき花の香をおくる。見上れば丘の彼方に今見盛りなる櫻の一樹すゝ櫻、櫻は兄君の殊に愛でさせ給ひし花なるを、このまゝに見捨てて歸らんも口惜し、されど、手折りて御墓に手向けんもなか〳〵に涙の種。



思出多き野邊に對して慎多き花を怨ず、筆端涙の滴るるを覺ゆ、叙情文の精を得たるもの也。

月の精

（上）

東京市小石川區大塚阪下町十八番地　河井登世子

妾は今、月の清き光を浴びて、豐島が岡のほとりにそめるなり。さても思出多き今宵の月影、おゝそれよ、昊天より降りそゝぎけむ白露の珠

りては結べる玉の鏡か！

妾は何となう、氣高き感に打たれて、身はこれ、天國とやらを彷徨ふがごと。

はつと照りこむ百筋千筋の銀箭、射るが如きに散りし白玉の一顆、神かあらぬか、白無垢の粧したる氣高き乙女の、白き翼もてる鶴に乘れるが……御月樣いくつ、十三七つ、未だ年若い……涼しい聲は松虫の玉をころばすそれのごと、低くやかに唱へつゝ此方に來たるが見えつ。

あゝなつかしの其聲！　その容までがいとよくわが妹に似かよひたる事よ、何處のものにや呼びて聞かんと、聲ふりたつれば、あはれ、何處の會社の汽笛にや、けたゝましく響きぬ、やがてその響の、かすかに消えし頃、わが思は又しても乙女が行きし方に飛びぬ。

（下）

見渡せば彼方に見ゆる鎭守の森、黒く染め出されて、丘の麓を廻れる川白う、夢のごと、ふうわりと虛空に浮び出でたらん樣なる、こゝ何地なるを知らず、妾は小さき白馬に乘りて乙女のあとしたひつゝ、西へ走ること百有餘里、今しも此處なる、さやけき一層に着きぬ、東の窓より照りこむ月影に、そとのぞけば『あ、姉上！　妾は待ちに待ちて侍りき、』たとしへなき嬉しさと、限りなきなつかしさをもて、斯く叫べるは、確かに妹の聲、その言葉の末には、僅しの涙聲さへ交りて。

よわ〳〵しき眼を強ひて見はりて、今し入り來たれる妾を熟視りたるが、え堪えずありけむ、妾が腕によゝとばかり泣き崩れぬ。

こは如何に妹、汝が顏のいとやつれたるは、と、さしも次の語は出でず泣きふしぬ、よゝ如何せしと再び呼びかけし時聞えしは妹の答かあらず、犬の遠吠！　あゝ妹汝は昨歲の今宵永への眠りにつきたりき、一年を經て妾異鄕にこの月を眺む、さやけき影を姉とや見む。

淸淨にして餘情長し。

春日和

筑前　松林歌

友呼びかはす百鳥の聲も、今朝は一しほ勇しく、彼方此方に聞ゆれば、霞の奥からニッコリ顏をお出し成されたお天道樣は、いつもお情深く金殿玉樓の御簷も、九尺二間の棟割長屋も、露隔なく暖かき笑顏を以て、一樣に照していらッしやる。

「春の彌生のあけぼの」にと、未漸く七つか八つ位の孃樣が、可愛らしいお聲にお歌ひ成れば、

「霞か雲か」と、負けぬ氣に張上げ給ふ坊ちやまも、又中々の愛嬌で、實に、人生の春彌生の春、何れをとらぬ麗しさで有る。

「お孃……奥樣……」小さき丸髷を根下りに結つた、四十餘りの女が後から小走りに聲を掛ると、番外大形の丸髷を、ふつくりと離れ相に結つて、際立つ樣な疋田絞りの手柄に、金足まばゆき名も知ぬ寶玉の釵、根元に一本差込んで、はでな紋御召の二枚襲に、厚板の丸帶を、藤紫の眼覺ろ樣な帶上で、お太鼓にキリツト〳〵た十九餘りの若奥樣、十四五の小間使に、桃の花の麗しき枝を持せ、緋の勝た海老茶の深張高く、朝日を受て今角を曲らうとしたが、後より呼掛ろ聲に、不斗振かへつた。

「オヤ婆やなの、悄驚してよホホ……どこいつて。」

「ホホ……やつぱり御孃イヤ奥樣で御座りました。」と、互に花やかなる笑ひをなして、ツト並び立つた小間使は一人ボツチに成つて、不平顔で控てゐる「大層お早く、お花の先生でムりますか、どうも先刻から奥樣の樣だ、とは存じましたが、よもやお歩行とは思もよりませず、色々に考へまして若人違ひではないか、と、ためらつて居ましたがあの、すらりとしたるお格向は、どうも奥樣に違ひないと存じ、お聲を掛ましたが矢張、お孃イヤ奥樣でムりました、ホヽヽ今日は如何してお車にも召しませんで……。」

「オホ……婆や、何も其樣に悄驚する事はないわ、今日は餘りお天氣が眞いので、漫歩歩いて見度と思つてれ、お姑樣も是非、車でと仰有つたんだけれど、時には歩く方がようムりますから、と申てれ、けれど、こんないゝお天氣に、車は何だか惜い樣な氣がしてよ、此の方がいくら氣が晴れて、いゝか知れないわ。」

先程から、奥樣の頭から足の爪先迄、針程も見逃すまい、と、眺め入つて居た婆やは、

「オヤ……左樣で入しやいましたか、然し日頃餘り御歩行に成りませぬに、若お疲が出てはいけませぬ、之からは、やつぱりお車に成されませ、マア奥樣のお髮の能く出來て居ます事、今朝おさばきに成りましたのでムりますか、矢張長田町の滑さんで、たぼの具合なんか本に、何ともいへませぬよ、其お釵の玉は、マア何と申すのでムりましよう、夫に此お召物も、おみ帶も、此度鈴木樣で御新調に、成ましたのでムりますが、之も旦那樣の御氣付きで、マア御若い方に似合ない、感心な方で居有いますれ、マア、御奇麗な御見立のお宜しい事、丸で錦繪に見まするお姫樣の樣で、婆やは先刻から餘りのお美しさに見とれまして、何度石に跌いたか知れませぬよ、オホホ……之が私のお育申した、孃樣かと思ひますれば、此婆やの低い鼻も高く成ました樣で、オホホ……本當でムりますよ、アレ、久振に先生のお門迄なりと、御伴さして下されませ」と、ニコニコ顔で話行く。

向ふから、眞白な辨絹の母衣を掛た奇麗な乳母車に、二つか三つ位の孃樣、ふつくりと林檎の樣なお頬の色の美しさ、お目の邊のクリ〳〵と今にも離れ相な愛嬌をたゞへたお口元抔は、實に、他人でさへ、くひつき度い程である。

「ま可愛らしい孃樣だこと」奥樣は、我を忘れて、うつとりと成されば、

「ほんにま何と申す、お可愛らしさでムりましやうれ、お孃樣も何卒、お早くあんな方をオホホ……。」

「あら、さうではなくつてよ……。」顔を背けてポツト紅をさせば、何處よりともなく櫻の花の一片二片づゝ、そよ吹く風につれて、奥樣の美し

い雲雀高く飛んで來た。

「すヽ、花迄が奥様に……。」節を仰ぎ見れば、遍仁寺垣の上から櫻が長く差出でヽ、此處にも春はと云はぬ斗に、枝もたわヽに咲きほこつて居た。天地のすべてには、たしかに、優美と滿足との色が、表はれて居た。

よく題意を得たり、宛然一幅の畫圖。

師の君の墓

美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

蒲公英、すみれなど咲きいでヽ、春風、おもしろく雲雀さへづる田圃道をたどりて、御冨山の麓、青影清く、ひともとの櫻さきたる處、わが習學びの師なる、石黒先生の御墓にと詣でぬ。三百の子弟が、報恩の心に成りて、こぞの春、たてられし頌德碑は、文字なほあざやかに、鐫る所、皆先生の遺德なり。先生の遺風、山高く、水長へに、今尙三百の子弟を薫化して、一鄕の風紀を維るに似たり。先生鞭を執りて、子弟に敎ゆる、實に二十有五歲。たとへ先生なきの後、學區の異動によりて、其小學校の名は失はれたるも、先生の門下より出でヽ、既に名を成せしもの多く、先生の名は、其子弟の顯達によりて、飾らるヽの時あるべし。今、思ふに、蓋世の英雄として、歷史に不朽の聲を傳へ、或は銅像に千年の面影をしのばしむるあるも、驚天動地の事業、多くは正義ならず。血に飽かぬ野心。美を飾ちざる僞善。僥倖蹄を制して、桂冠を戴く將軍。權勢職を顯りて、葬儀の大なるを競ふ大臣。人は其史傳墓標の壯麗宏大なるを見て、徒らに過去の功勳偉績を說くと雖も、見よ。草莽の裡、蒲額の間、世に埋れたる墓石に殘る功勳の更に大なるものあるにあらずや。天恩枯骨に及ぶ、明治の昭代に至りて、此等の墓石の世に知られたるもの亦多からむ。嗚呼、其墓標の大小は、直ちに以て其功勳の多少を定むるに足らず。先生の墓石小なりと雖も、三百の子弟が、至誠凝りし頌德碑なり。生前名を世に求むるを好まざりし先生の志にかなふは、彼の虛名を謳歌する世の紀念塔よりも、この淚ある文字に成りし頌德碑ならむ。先生の功勳、廣く人の知るなしと雖も、一鄕、三百の子弟、其孫其曾孫に、語り傳へて、先生の德育の及ぶ所、百歲の後に、輝くものあらむ。今、先生の墓前に哭して、十年の昔を思へば、其嚴正溫厚なる風采、尙見るが如く、諄々たる遺誡、更に耳に新なるを覺ゆるなり。腐敗惡德の聲を聞く、現今の敎育界を顧みて、ひとりわが身が、この千載得易からざる先生の薫陶を得たるの幸多きをよろこぶ。嗚呼、先生、呼べど答へず、かへらぬ昔を思ふ淚に、さゝげたる香の煙も消えはつべし、低徊多時、去るに忍びず、折しも聞ゆるは、滿願寺、夕暮を告ぐるの鐘、昔てをるなき時、此鐘によびさまされては、學校の門に急ぎ、先生の敎をうけたる身の、今はこの墓前に在りて、この寂寞の聲を聞く、千萬感慨に堪えず。紛ふばかり散る櫻の花も、わが身無限の恩を知るに似たり。

なほざりにきゝしなしへもいまさらに、とひかへすべききみあらずして。

逸品の文也、今の世斯の如き師少く、又た斯の如き弟子少し。

すみれ

小西雅子

あした、しら露に、かをりつゝ蝴蝶をむかへ、ゆふべ、入日ににほひつゝ雲雀をおくる、あはれわが朝夕の美しからずや。ちりの巷遠くはなれし野べの片すみ、清き小川のほとりなる草葉がくれにわが美しき朝夕はくりかへされつ。あゝのどかなる春の日よ、うら〳〵と霞ににほふ日影はやはらかう野べの若草にかゞやきて、大空にはひばりの歌おもしろう、草花には蝴蝶まひ遊び、なたねさきつゞくかなたの田道には賤の男のふしなかしき唄、こゝには若菜つむ少女子が玉のやうなる聲にうたふ唱歌も聞ゆ。春の風そよ〳〵とわたれば小川の水さゞなみたてゝやさしきしらべかなでつゝゆるうながれゆく。あゝ平和なる春の日よ、塵ふかき都ぢにかゝる平和なる春の日は求め得べきや。

夕日のかげやう〳〵西にしづみゆけばうすう暮れゆくわが野べ、つくしつむ子等も今は皆家にかへりゆきてかなたの岡のあたりをたどりゆく里の子が牧笛の音も聞ゆ。空たかうひねもすをうたひくらしゝ雲雀も床にとかへり行けば、晴れたる大空に、おぼろ月、かげうすうかしこなる梢の枝にかゝりつゝ、をちかたよりは蛙の歌も聞え初めたり。あはれ美しのおぼろ夜や、塵ふかき都路にかばかり美しのおぼろ夜を求め得べきか。

あゝ花はあらむ、月はあらむ、都の春は日もあやならむも、わが野べの如、平和ならじ、清からじ。あはれ草葉がくれのわが身、都の花の色香には及ぶべくもあらざればもろ人にもてはやされむ事、もとより思ひもよらざるなり、さはれ夜半のあらしの無常になき、あしたの雨の心なきをうらむ事なく、朝風に香ひつゝ夕露にかをりつゝ平和なる春を安らけくおくらんとす、あゝ清からずや、あゝ安からずや、あはれわが朝夕、わが生涯。

文もよし題もよし、平和なる田園の趣味をよくも巧みに寫生したるもの哉、あゝ平和、平和は到底田舎のものなりける。

雨の春宵

近江國犬上郡彦根町鐡牛町坂口方　重森芳枝

けふまだきより春雨ふりしきるに終日書齋にたれこめて暮しぬ、長閑なるべき春の日をさても心なの雨うらめしの雨。
今をさかりの梅の花、枝に心を殘しつゝぬかるみにやまみれぬらむ、花あけてやみもせば、いたましや、やさしの鶯の、のこんの香にあくがれ出で花なき梢に迷ふべし、今宵、明日を期しけん遊子の思ひやいかならむ、あゝさるにても心なの雨、さはれ、やがて萌え出でん、わか芽の、このうるほひに、さらにあたらしき力を得て、羽衣かろく蝴蝶まひ、いとゆうもゆる春の野に、しとれとならんには間もあらにな、さば魂あへるかの君と手を取りて、白き淡雲の青空にかようをながめつゝみどりの小野に逍遙して若葉の蔭をたづれゆきわれ草笛を吹き出でゝ艶なる彼の女に舞はしめん、佐保姫のあしとゞめて打興じ給はん迄、はた、彼の女の花笑みを目守りつゝ、面白きこひの物語りにくるゝ日影に歸るもうち忘じて色香なき世の煩を、しばしなりともわすれましを……とかう思ひめぐらせばこの雨のよろこばしやな、あゝこよひ、われと心を同うする有心者ありやなしや。

鶴遊。

月下花を賞す

越中國中新川郡五百石町字松本開谷佐大郎方　しづ子

夜や更けぬらん。いざ寢なまし、と讀みさしたる、源氏湖月抄に栞して燈火かゝげてば、南の圓窓にうつりたる梅の影、一幅の畫繪の如し。戸を開けば、玲瓏たる月は、老木の梅の梢にあり。花やさそへる、月や招ける、兩々今や春色を、語らんとするに似たり。微風梢を渡れば、落花繽紛として、暗香袖にみつ。手なれの琴を奏づれば、潑溂たる緋鯉は、靜かなる池の面に、龍文をなす。花なくば月に清香なかるべく、月なくば花に影なし。あはれ、月や今宵の主か、花やそも。
みやびたりな。

春を偲ぶ

陸奥國八戸十一日町　花子女史

鶯の氷れる涙も、のどかなる春風にとけ初めて、みやびならぬ人の心も憧がれし花の世は、あはれいづらに。
行春の別れを惜むおほかたの心も知らず、今は地に散り布ける花びら一つだになうなりぬ。
さはれ、未だ遠くは行かじよ。
そめる乙女の袂をなぶるそよ風に吹きおされて、金魚遊べる池のちさき岩が根に、寄せてはかへす藤波の花、行春のしがらみは此處、こゝに名殘は止められたり。
ゆかしの乙女よ。汝も春を惜みてならむ。
あす別れを告げばやと、まはらぬ筆を強いてかく運ばせつゝある夜もすがら、破枕に音づるゝ杜鵑一聲、窓を推せば殘んの月、松が枝にかゝりて、淡し。

和歌

水原翠香選

（天）風　熊本市北坪井町八　熊野年子

世人のめにこそみえね時ありて
吹き渡るらむ伊勢の神風

評　多くは春風をよめる中に雅の正式に詠出られたるがうへに時局にさへ適へる最めでたし

（地）閨　岡山市柿屋町二ノ一小西方　植田玄子

明日も又昨日の悔をかさねじと
物思ふ閨の夜たゞ寐られぬ

評　眞心に懺悔爲たる時の心もちは實にさこそ有けれ

（人）落花　長崎市石灰町八十八　上石くに子

靈前にそなへし櫻はら〳〵と
幼き喪主のかたに散るなり

評　哀悼の情みゆるが如し聊少しいかゞしき處あれど今は新派とかいふらむもあれば論ぜず此眞情の深さには誰か涙落ちざらむかゝるなこそ誠の歌とはいはめ

秀逸

（組の順によるのみ前後に甲乙あるにあらず）

落花　越後國栃尾町　内藤幸子

風にちる花の一ひら手にうけて
斯てふりゆく我身をぞ思ふ

同　名古屋市鍛冶屋町八十五番戸　玉村多歌子

去年ともに愛にし君は失にけり
今わが袖にちる花のごと

同　美濃國武儀郡東武藝村谷口　山田久子

朧夜の月の盛にちる花は
蝴てふの夢も知らずやあるらむ

同　石見國邇摩郡都岡村　宮内富子

絶間なく鳴きて木づたふ鶯の
こゑをものせてちる櫻かな

同　京橋區南傳馬町八須貝方　高宮安子

まちし日も咲きてのゝちも散る今も
花には騒ぐ心なりけり

同　名古屋市間町十一番矢納方　永田須加尾

みいくさの門出雄々しく乘る駒の
たて髪白くちる櫻かな

同　對馬國小茂田村　岡市岸子

ちるにをし積るは嬉し春のせに
思ひ亂るゝはなのしら雪

評　歌は平凡なれど朝鮮近き島國にして此みやび心あるがめにつきたれば特別にとれるなり

同　河内國北河内郡川越村　齋藤濟子

亂れちる花よりほかの塵もなし
うき世に遠きみ山べの里

風　麹町一番町十四加藤宗與　神谷よし子

すなとりに出し我父いかならむ
波打狂ひ風あれいでぬ

同　大隅國大島名瀬海岸　市田花子

終夜ひまもる風のさむさにも
御いくさ人を思ひこそやれ

同　京都　渡邊ふさ子

朧夜にそことしもなき花の香を
おくるは風の情なりけり

閨　姫路市滿病院　船江雪子

すき間もる風寒き夜は仇し野に
銃をまくらの夫をしぞ思ふ

同　陸奥國八ノ戸馬場町杉弦方　山本はる子

夢さめてわが夫あらず母あらず
小窓にあはし有明のつき

同　京都葛野郡太秦高等小學校　龜井懿子

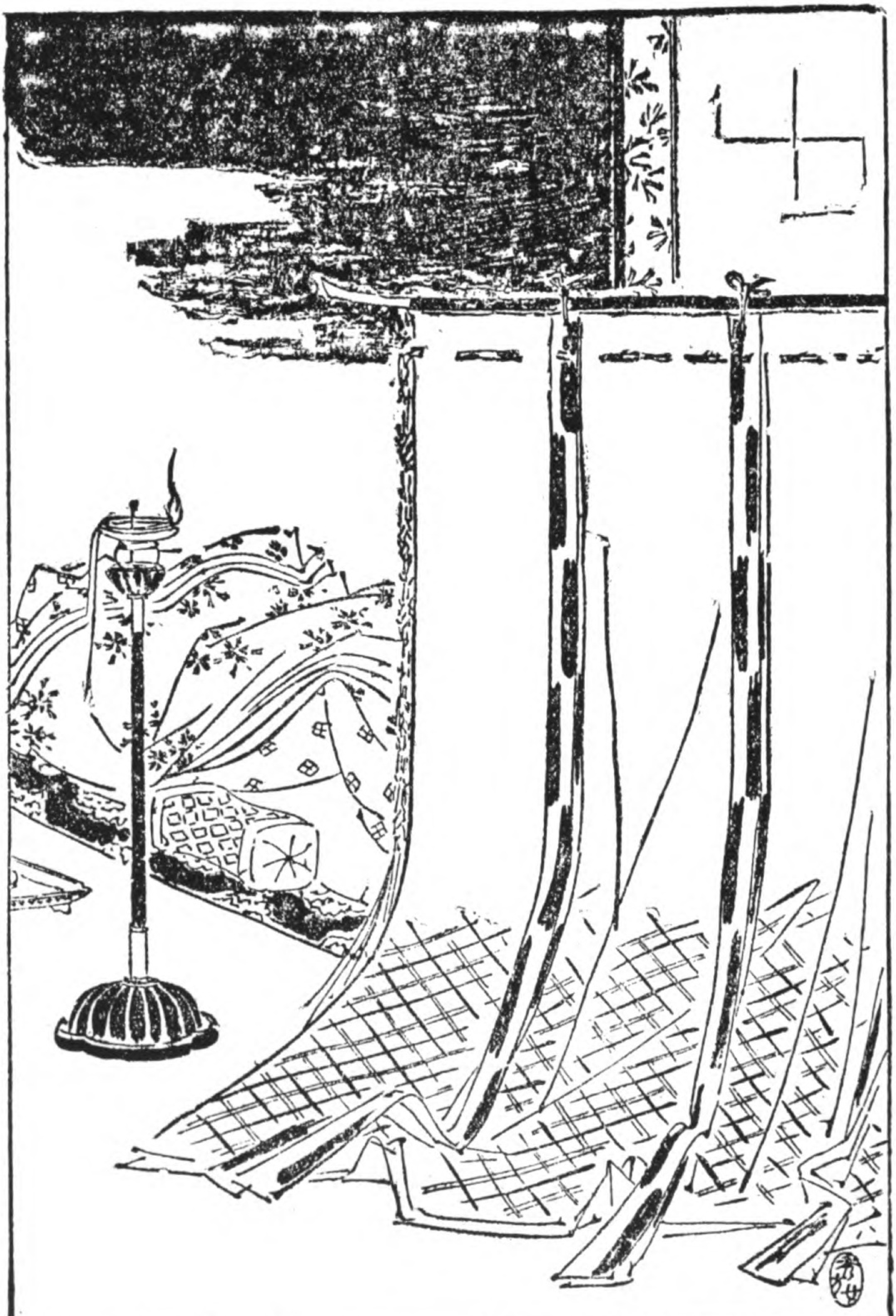
せの君の凱旋きましゝ夢さめて
燈火くらし獨ねのとこ

佳作

●　越後　上野花子

妹が雛と添寢の顔の上に二ひら三ひら花ちらし見ぬ

歌題　閨



長き日を遊び疲れて少女子が舞ふ芝生にちる櫻かな ●島根　園山藤子

春雨に友とさしかはす傘の上に花ちりかゝる山の下道 ●牛込　文子

散らぬ間ははなか雲とかながめしが今日は降つむ雪かとぞ見る ●備後　和田いそ子

春風は野路をわたりてなよびかに少女が袖に花ふゝきいる ●筑後　香山さだ子

明日こそは見ばやと思ふ山櫻よはの嵐に散りにけるかな ●三河　榊原きく子

若菜つむ少女が袖にたれ髮に花の吹雪のふりかゝる哉 ●信州　神津ます子

夕暮の鐘のひゞきにちる花のもとにたゝずむ尼法師あり ●岡山　高矢晴子

夜もすがらつゝとる人やいかならん園のひまもる風もさむきに ●熊本　大久保みよ子

長き日を心短かき春風のさかりの花をふき散らすかな ●函館　村上齋

大井川ちりうく花の筏舟惜む心をのせてゆくらむ ●廣島　黒川冬子

たつれこし心も知らでおそ櫻人しらぬ間に散りはてにけり ●下總　石井芳子

乙女子の池にうかべし笹小ふれゆくも歸るも風にまかして ●愛知　廣中たか

ひとしきり吹く春風にさそはれて花ちる庭のひろしづかなり ●兵庫　柳田淸子

わらはべが遊ぶテニスのボールそれてちらす花びら蝶と舞ひゆく ●能登　張江たつ子

木傳ひてなく音も匂ふ鶯の羽ふきにもちる山櫻かな ●新潟　久我千代

散る花を振りの袂にうけてみつ思ふこと多きをとめ子のとも ●山形　岡田千代子

散りかゝる花のこかげに駒とめて物や思へる若きもの丶ふ ●赤坂　川村米子

あらし吹く窓の内よりながむれば雪にまがへてちる櫻かな ●山口　岸子

駒はせて習志野の原たまふりてかたほかすめて散る櫻かな ●東京　伊藤乙女

いさぎよくちる櫻花あふきみに去年をし思ふ人や多からむ ●麴町　野中すみれ

雪とちる花の下道夕くれてむしのたれきぬ二つ並み行く ●芝　山中千代子

さかりなる花をわかせかみはかへと手折る手もとに散亂れつゝ ●金澤　英子

たえ間なく雪とまかひて散る花に昨日の庭は面かすりして ●下總　久保木浦子

夕月夜霞みてくるゝ楕より袖寒からぬ雪ぞちりける ●筑前　木村こま子

櫻花山路も見えず散りにけり春もいよ〳〵暮れんとすらん ●能登　瀬田みよ子

● もの〻ふが今際の笑みにたくへなむ風にかつ散る山櫻花　福岡　中牟田源子

● おぼろげに匂へる月のかげ更けて輕く散りしく櫻花かな　牛込　深堀つる代

● いさぎよく散るをならひの櫻花とつくに人も今かめづらん　大隅　池江みえ子

● 飛ぶ鳥の羽風もいとふ櫻花つれなくもふくはるの山風　尾張　淺田しづよ

● 二十年は昨日の夢とふる郷に今も花散るふるでらの前　出雲　岩井じん子

● 小窓よりのどけき空をながめゐる少女が髮に花ちりかゝる　陸奥　小林花子

● 月かげに散り行く花のほの見えて笛の音高し嵯峨のわたりに　山形　渡邊たち子

● あたらしき櫻の花はちるとてもよゝにかぐはし靖國の宮　滋賀　遠藤しづ子

● 今もかも友とほめゐし櫻花のちりかゝるだにうつくしきかな　丹波　谷　園子

● 流水の曲かなづれは小簾の外に花吹わたる風の音する　河内　矢寺はぎ子

● 醉人のひさご枕に暖く眠れる顔に花散りかゝる　群馬　田部井いゑ子

● 少女子が編物おきて椽近くちる花片を數へてぞみる　鹿兒島　酒匂しか子

● とぢこめし一間のうちも燈火のうごくをみれば風やあるらむ　名古屋　江崎ゆき子

● 進軍の喇叭の音ともろともに陣營寒く雪おろしふく　東京　倉橋絲子

● やれし窓かたぶく軒の賤がやを家をしらぬ小夜あらし哉　豐前　和田秋子

● たまさかに歸り來ましゝせの君とかたらふ夢のさめしくやしさ　丹後　森田よし子

● 獨寐の淋しきれやにをさな子のゆめにゑみつゝ父をしも呼ぶ　但馬　小西入尾

● 戸衾離れてだにも寒き夜を矛を枕の君やいかなる　越後　坪井わか子

● 父はうたれつまも荒野の露と消えぬ我の病をわれいかにせん　新潟　阿佐野今子

● 夜れむりもやらず閨の裡に露西亞にますらむ背子想ひつゝ　下谷　藤　枝──子

● まさしくもはかなき夢はさめはてゝ枕になげく獨りれのとこ　博多　太田とも

● 戈とりて草しきれの夢にだに今をも知らず眠るますらを　千葉　森田いし子

● かたしきの衣手寒みさ夜深けて雁の音かなし君をおもへば　伯耆　鈴鹿幸子

● 小夜更けて鎖す板戸のすきもりて閨の障子もしめる雨かな　備後　松田坂子

● 打ち笑みて乳房を探るうなひ子に暫しは國の怨み忘れつ　東京　白木菊子

ありし夜の夢にも似たる春雨や稚兒が寐顔に涙ふりかゝる
● 仙臺　高木いち子

幸なくも手おひになりていたつきの閨のひまにも涙しぐるゝ
● 姫路　毛呂正子

唯獨ゝ淋しき閨に夢さめて想ひみだるゝ夜中の春雨
● 奈良　松石くり子

戰每にわが背いかにと思ひねの枕にほそる閨のともし火
● 仙臺　渡部光子

添寢する乳子の笑顔をみる每に出征にし背子を又思ふかな
● 石見　宮内登美子

衣縫ひて獨り背子待つ閨の戶に更行く雨のおと靜なり
● 越前　三田村さと子

よひ〳〵のゆめに海山辿るなりひとり閨守る武夫のつま
● 上州　佐藤誠子

遠征の兵士うたゝしのばれてねむりもやらぬねやの月かな
● 新潟　内藤行子

里の戶のすき間をもれてさす月のやつれし乳兒の顏てらすなり
● 佐賀　野村千代子

つゝとりて夫はいづこにたゝすらむ閨のいた戶にあられうつ夜を
● 能登　比古田君子

夢覺めて夫をし偲ぶ閨の戶のすき間洩れ來る庭の梅が香
● 河内　矢寺はぎ子

雪の中に埋れたゝがふはらからをおもへばいとゞ閨さむきかな
● 常陸　文子

さらでだに長きこの夜をいとゝしく一人ふしどにいを寐かねつゝ
● 京都　顯明寺忍子

益荒雄の淸きこゝろに似たるかな散るを惜まぬ山ざくら花
● 上野　菊地屯子

春風に氷や解けし浦汐に行く艦とむる日の丸の旗
● 神戶　冬川すい

たちまちにからくれなゐにそむ戰の野山のさまをおもひやる哉
● 下總　伊藤美智子

兵士が野營慘濟夢さめて思案に更かす閨の來ける
● 新潟　渡邊節子

ふく風はそれと見えれどちる花は庭白妙の雪とつもれり
● 大阪　山村末尾

雪とちる花の木かげに駒とめてなにうたふらむ益荒たけ雄は
● 弘前　平山ちい子

ふる里の春を知らする文のうへにちり込みし花をも封じつるかな
● 鹿兒島　まきの女

春風のそらにみだれて飛ぶものは小てふに似たる櫻なりけり
● 和泉　細川義子

いかにせん惜むと知らでほろ〳〵と庭白妙に花のゆきふる
● 栃木　田波なほ子

勇み行く駒の立がみふく風に花ちりかゝるふたつ三つ四つ
● 伊豆　葉村あや子

ちる花を積るがまゝに積ましめむ山路わけゆく小笠の上に
● 大阪　伊勢てる

思ふどち永き日あかすみつる間に櫻は雪とつもりけるかな

● 上州　佐藤誠子

いまぎよく散るはな陰にたゝずみて貢偽の人の友おもふらし
● 大阪　濱田銀

春風は薫りちらして吹きすぎぬ芝生にしろく花をのこして
● 備後　岡本たつ子

行く水のかへる瀬もなき仇波に散りて流るゝ花をしぞおもふ
● 大阪　大道若榮子

ふく風のちからもぬるき春の日をおぼつかなげにちるさくら哉
● 下野　水井とく子

春の夜に歌のまとゐをかへるさのおぼろ月夜に花吹雪する
● 香川　長松千代子

鶯もなれしれぐらをまよふらんよの間にちりし花の木ずゑに
● 三重　楠井よし子

夜あらしをうらむ我こそつたなけれのどけきけふも花はちるをや
● 神戸　小菊

散る花にむつるゝ蝶と舞くるふ花はてふかもてふは花かも
● 名古屋　石黒龍布子

世の人のをしむもしらで櫻花かぜのまに〳〵ちるぞはかなき
● 備中　妹尾逸子

空蝉のうつらふ色をながめふる尼の衣にさくら花散る
● 羽前　梅香女史

山寺の鐘のひゞきに花散りて夕さびしく春暮れんとす
● 尾張　鵜飼てつ

花誘ふひえのねおろし吹きしけば袖に雪散る志賀の山越
● 備中　大野ますす子

おはしまにひとり物あむ袖のうへに夕月あまく櫻ちるなり
● 博多　太田とも

宮人の榮華のゆめのあとゝへば入相のかねに花ぞちりける
● 山口　佐藤清子

月ならで訪ひ來る人もなかりけりさくらかつちる庵の夕ぐれ
● 岐阜　和田美子

敎へ子の手をひきつれて歸るさにリボンにかゝる花の一ひら
● 小石川　杉浦きよ子

春雨のふるとしもなき里川の水にうきゆく花のうたかた
● 下野　小百合女

誘はむとせし人はおともせで花はふゞきとちるかあやなき
● 牛込　瀬藤千代子

櫻ばな夕の風にちりそめてはたへたゆたふ今朝の庭哉
● 新潟　逢坂泉子

千鳥なく磯にめさめて一人寐の閨のともし火影ぞ淋しき
● 三河　鈴木環子

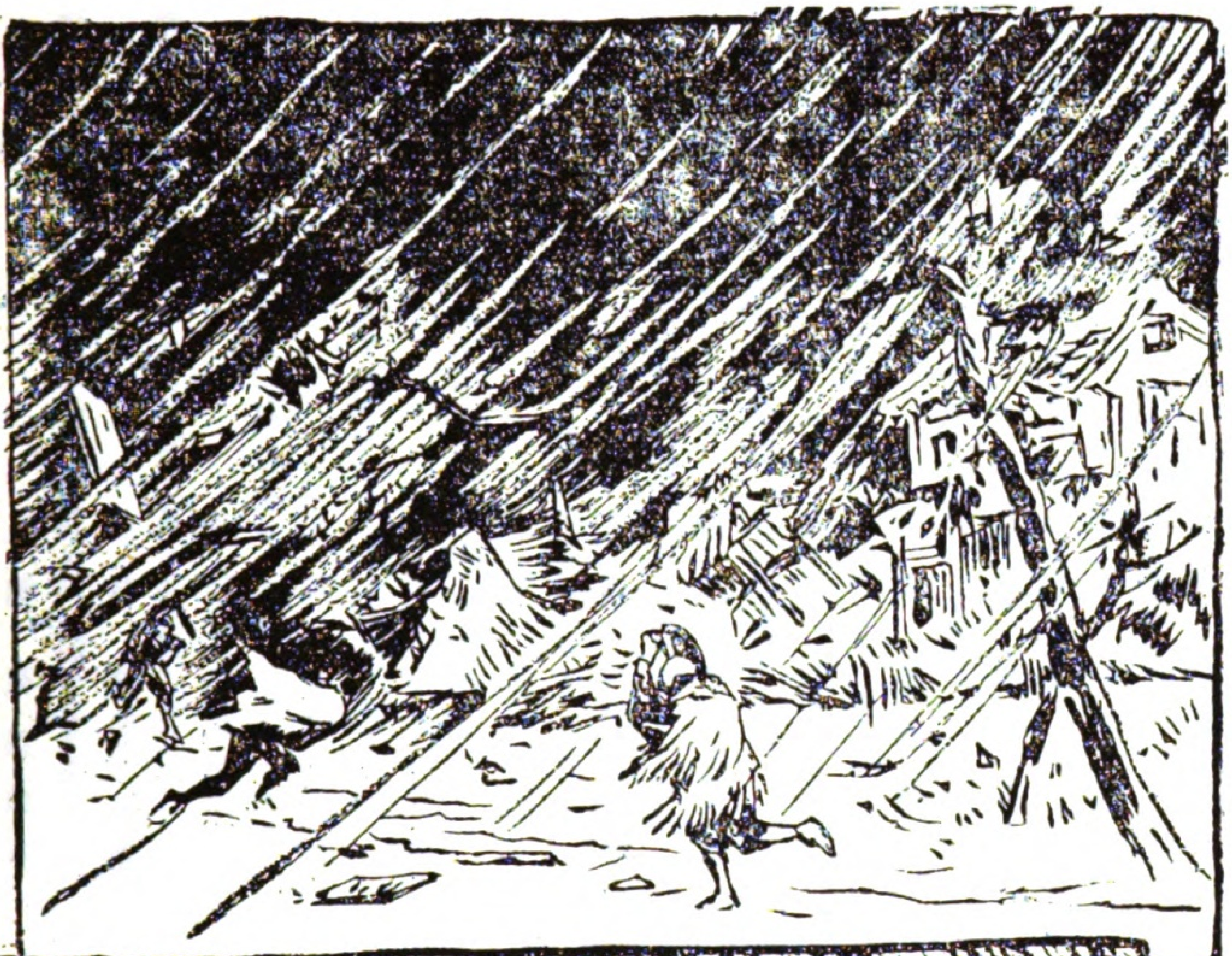
夜を寒み鉢とる人を思ひては夢もむすばぬ閨のうちかな
● 尾道　濱中内文子

閨のうちに衾かされて寒きよをいかにこほらむ支那のあら野は
● 根津　きみ子

嬉しさもはたかなしきも淋しきも世はさま〳〵の閨のうち哉
● 石見　牧岡嘉子

夢に笑む兒の面わと眺めては淋しき閨に物思ふ人
● 赤坂　樋口あか子

一人ぬる春の雨夜のつれ〳〵にかぞへてもみる軒のたまみつ

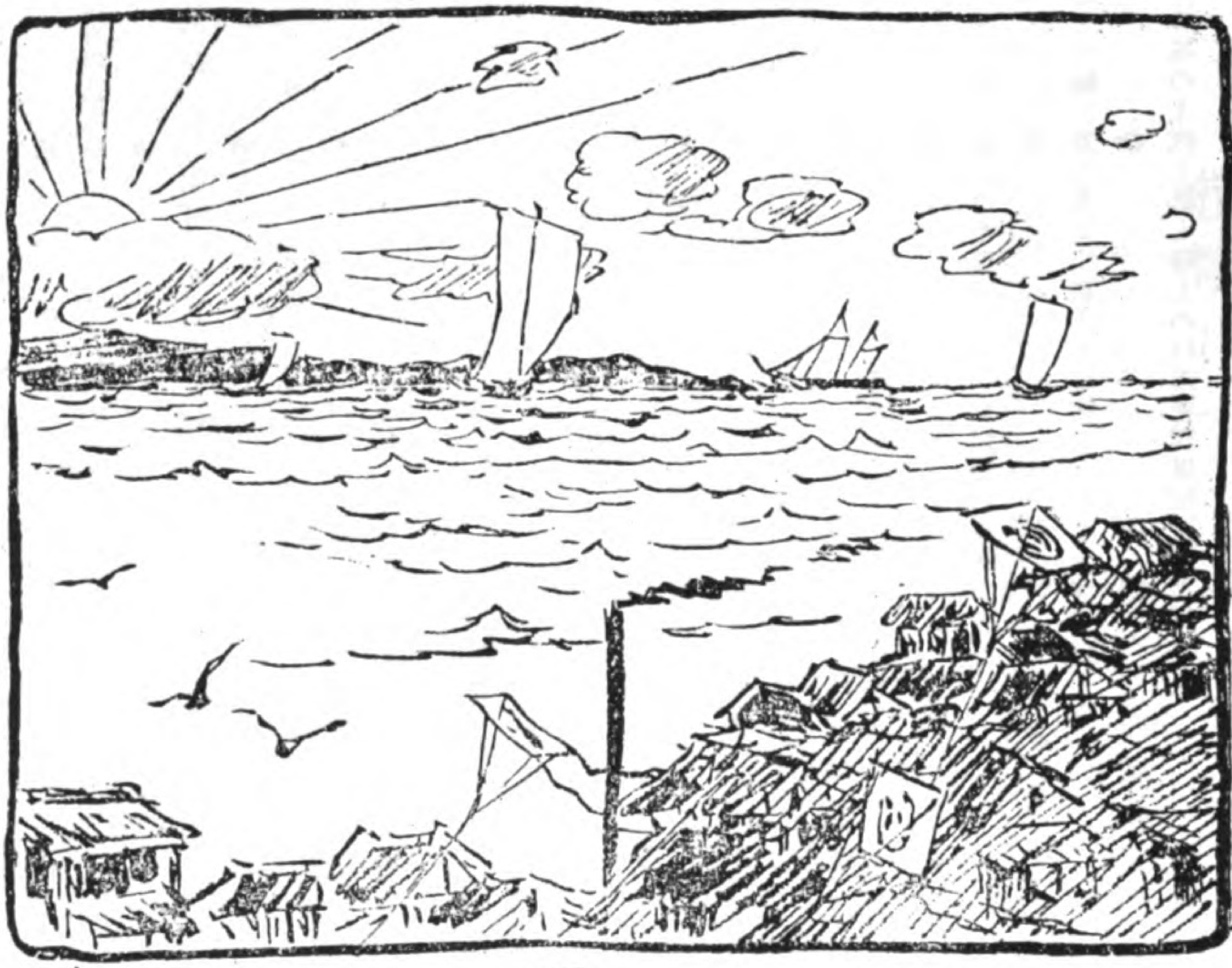


▲暴風——一時間に四五十里を走る風

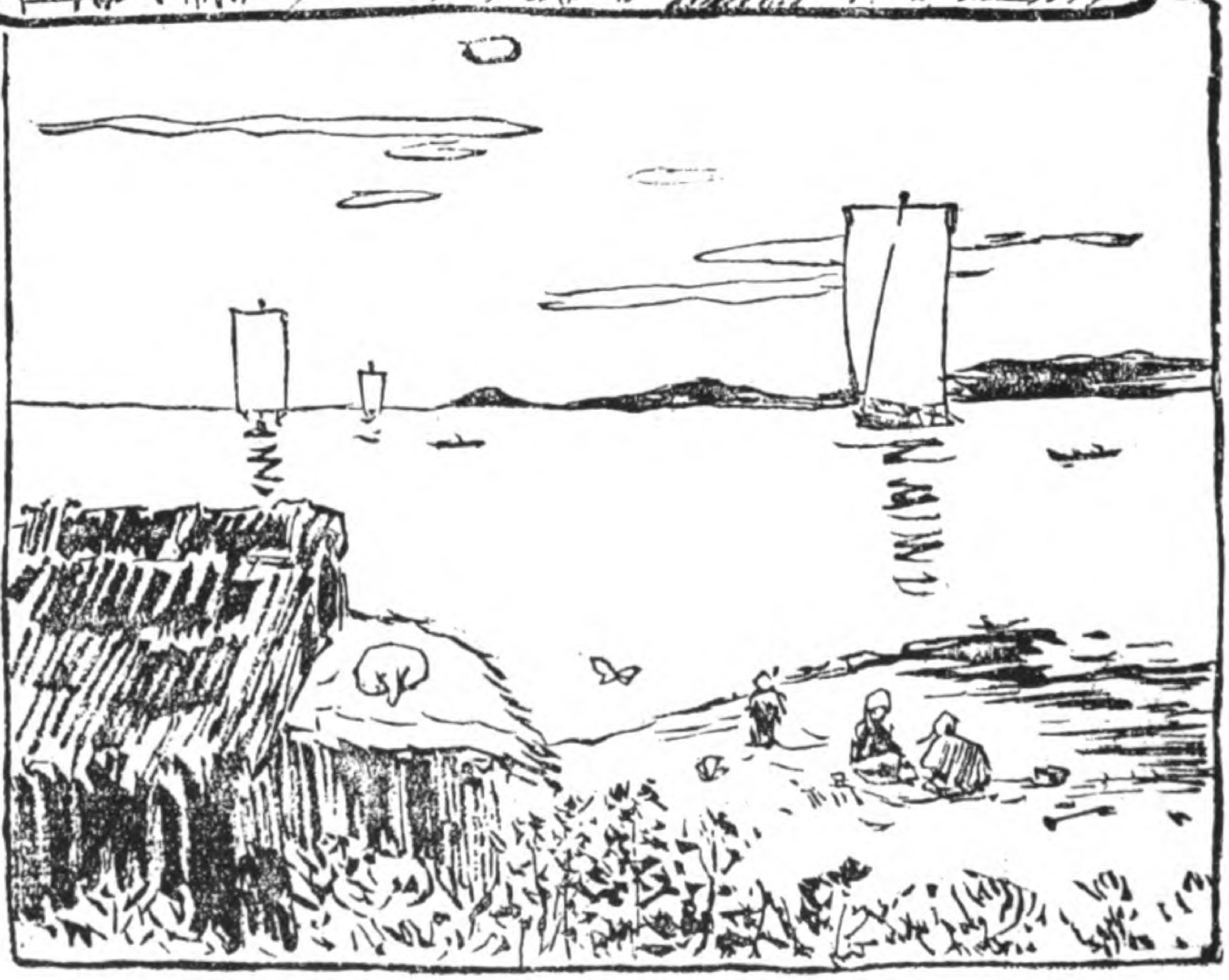


▲烈風——一時間に二三十里を走る風

風の種類



▲強風――一時間に十里内外を走る風



▲軟風――一時間に二三里を行く風

● 宮城　小山田　みどり

號外の鈴にめさめていとゞしく胸打さわぐ國の中かな

● 豐前　山本　房子

衣づれの音も幽かに更けし夜にいよいよかたる袖のうつり香

● 福岡　中村　春香

討死と見し夢さめて今更にさかゆめなれといのる夜半かな

● 福岡　宮島　久子

衣ずれの音も淋しき一人寢の思ひにしづむ長き夜すがら

● 大阪　まつば

ひとりねの閨さびしさの慰めに文のたよりをくりかへしつゝ

● 陸前　村松　くにゑ

刈りふきしかやの葉朽ちて春雨のふるも音せぬ閨ぞ淋しき

● 下總　三田　よしゑ

小枕のせまきに籠る夢だきて片袖さむし病ふせる床

● 新潟　竹田　きみ子

みだれじと誓ひて守る閨のうちを月ぞ夜ごとにきしのぞくなる

● 美城　江尻　滿佐子

流石にも親の前にて打笑めど寫眞手にとり閨にこそ泣け

● 紀伊　近藤　うきぐさ

風寒し閨の衾は冴え果てぬせこが露營の夢夜からめ

● 神戸　水越　よし

霞二つ輪に舞ふ見えて朝ぼらけ旅こゝちよき春の野の風

● 山城　古川　かつ子

桑の花の上吹く風も時しあれば荒鷲巢組む巨木倒さん

● 佐賀　藤松　りか

にほひ來る花の香にこそ知られけり吹くともわかぬ春の山かせ

● 伊勢　佐々木　らく

あだ波はうちしづまりて浦々のおばたくに風のどかなり

● 神戸　鴨田　嘉子

霞ゝすむ胡地の荒野におく露を吹き靡けたるいせの神風

● 在姫路　きよ子

みどりめの針もつてさへこほりけり閨の燈火ほそくゆれつゝ

● 上總　藤田　誠子

長江の南岸千里草萌えて水村山郭春の風ふく

● 山形　竹内　かれ子

美しきすみれつみ居る少女子が袂ゆるがし春風のふく

● 下野　新井　琴子

春と云ふ名のみ立ちつゝあだなれや霜げ催す滿洲の風

● 岡山　三村　喜代子

山こしの霞の里に一夜ねて風にきこゆる追分の節

● 群馬　美佐保　はな子

すは敵のよせくとみつる夢さめて夜あらしくるふ鴨綠の川

● 臺灣　安田　政子

世の中もそらふく風のまゝならばこゝろにかゝるうき雲もなし

● 横濱　平野　民子

醜草をふきなびかせて日の御旗御威稜の風にひるがへるなり

● 仙臺　村田　蝶子

雁連れて背戸の畑に群れ遊ぶ雛の和毛に風吹わたる

● 周防　きりのや

吹くとしもなけれど風はふきわらしいかのぼりなる音ぞきこゆる

撰歌について

水原末瑳子

今回閨秀文壇にて募集せし歌凡千三百首許り、多くの中に優れてめだちたる物もあれど、こは手だれの人の變名にて出されしには非じ歟と、疑はるゝは其手跡といひ、口調といひ、多年めなれ耳なれたる心持すれば也、此雜誌の募集は元より諸孃達の奬勵の爲なるを、さる老錬家の交りては所謂鷄群中の一鶴、彼ひたち山と弟子力士の如く、何人かゝりても及ばず、初心者の立場を奪ふは大人氣なし、大關は大關どちの本場處にてこそ雌雄を爭ひ賜ふべけれと思へば、態と採らず、此よき歌を見落してか、彼さしもなきを撰ぶ眼盲たりとな嘲り賜ひぞ、又歌は眞心を言に出てうたふが本意なれば、詞工みに面白くいひ廻したる造言よりも其口調は及ばずとも、眞情より出で、血あり涙ある什を天地人とし、次には句調よく風情をかしきを秀逸として抜出たる也、さばれ事匆卒にものしたれば、自然見落したる事やあらむ、具眼の大先生達見出賜はゞ必よ笑はで告賜へかし、悦びて從ひ侍りてむ。

扨倩惟に此歌ども、東京のは尠くて千中九百九十迄は地方より出たり、就中僻境ならむと思はるゝ地にて風流にも歌に心を寄らるゝ殊勝さよと感ずる有、勿論地方にも昔より有名の大先生あまたあり、京都の赤松祐以、尾州の林陸夫、越後の原宏平、陸奥の長利仲聽、四國の潮見琢磨、九洲の船曳鐵門等、其他にも頗の歌仙ありて各々門人を取立らるゝなれば、地方とて學び難しとにはあらねど、或は道の遠きや何やと不便がちにて、都會の如く至る處に何の師にても在るに非ねど、志は有ながら學び得ぬ人も多しと見えて出詠者中誤りなきは甚すくなく、其趣向は奇抜なるもあれど、修學の足らざる爲にいひおほされず、其意は然なめりと察せらるゝもてにをは語格の違へる爲に、反對の意になれるもあり、題を取違へ添物にとられなど、枚擧に遑あらず、中には克學つゝ必上達せらるべしと、末頼もしき口吻の人も尠からず、僅に一

二字の事にて、よき歌になるべきをと口惜く、歯痒きなど最もをしむべき事にぞある、それらの人の爲に少しく歌の歴史を申さむ。抑歌といふ物神代の昔より皇國手ぶりとして、誰も讀て知れる古今の序にも、花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば、生としいけるもの何れか歌をよまざりけるとありて、心に思ふ事をみる物きく物につけていひ出せるが即歌となるなれば今の如くむつかしくてはとてもみる物聞物につけて容易に歌にいはるゝ物ならんや、太古には其世の詞を其儘只みそ一もじに續くる迄にて、何の造作もなかりし也、然ればこそ山かつ賤の女迄も皆歌よみける事日本紀古事記及び萬葉にも多くみえたり、世の移り替るにつれて詞も次第々々に押移りぬ、されど中昔迄は日常の詞も甚しく野卑ならず、猶其まゝ歌にもよまれて女同士かきかはす文も其時代詞の儘（今是を消息文といふ）源氏物語は今の戀愛小説に等しく、女童も皆師の講釋をきかずしてよく解すればこそ愛讀したるなれ、歌も今の如くむつかしからで誰にてもよみたる事物語中に女の童下婢などの歌あるにても知られたり夫より鎌倉時代迄は猶日常の詞も押移るとはいへ、語格おのづから正しかりしを、足利氏に至りて世は戰國となり、諸國みだれに亂れて文筆に心をよする者は僧侶の外に非ずなり、幼より老に至る迄唯戰爭をのみ業とし、世上一般に無學文盲の輩のみ至る所に多く、田舍武士都に跋扈し、言葉も次第に轉訛すれども、之を正す人なければ、いひたきまゝの方言片言流行し、語格の正敷詞は唯歌文にのみ僅に殘留したれば、終に歌文の詞を雅言と稱し、日常の言語を俗言といふに至りぬ、斯分れたる後にしては歌文共に師に附て學ばざればよまれず、中昔の物語も解し難き物と成果たり其後織田豐臣を經て、徳川氏に至り、始て天下泰平と成しかば茲に文學も再興の機運に向ひ東滿契冲眞淵本居等の大家、輩出して大に古學をとなへしより、歌文共に隆盛になりしかども俗言の方は猶誰も矯正せんとする者なくて轉訛するに任せたれば、彌々益々恣に移り行て停止する處を知らぬ光景也、今日にても北陸又は

九州地方には却て古言の存する有、是僻遠の地は交通不便なるが故に、詞の轉訛も尠き也東京の如きは大都會なるだけ殊に言語の轉々甚しく女兒などの詞は實に猥りとも何とも譯の解らぬ淺間しき言多し、方今澤山にある學校にてちと言葉づかひを矯正する教師はなき事かと常々思ひ居りし矢先に、思ひきや人も有べきに文部省より此頃あられなきかなづかひてにをはの改正とか號へて出たるを、日本新聞に日毎足曳の山鳥の尾のしだり尾の如長々しく揭載するをみれば、折角四大人等の盡力にて正しくなりし皇國固有の文典を四離滅茶になさむと爲とは、世間有名の博士達口を揃へて其不可を論せらるれば我等風情の喋々するには及ばねど新奇に走る若人らの迷信する者なきにも非ざるべし戰時多忙の時局をも顧みず無益ならばまだしも有害の事をいひ出て幾多の兒童を誤らむとする罪空恐ろしからずや、此雜誌愛讀の諸嬢よ決してつり込まれたまふな。

歌は題意を克わきまへて讀むべき事

戀慕の歌の中傍題の物多し單に傍題とのみいひて解し難き人の爲にいはむ傍題とは要用の事が脇に成て添物あしらひが主と成、歌の規則に背くをいふ也、例せば落花といへば即ち櫻花のちる事なるを花とあれば何でもよしと思ふらむ、梅の花ちると桃の花ちるなどよめるは皆落第也、梅桃にても花に相違なきに何故なるかと案外に思ふ人もあらむなれど、日本は櫻を以花の第一とし櫻花國といふ名さへ有る程なれば、單に花とのみ云ふ時は、櫻に限る也、他の花は梅の花、藤の花と樣々各々其名を附ていふ例也、故に題にも櫻ならば落花とかき其他の花は桃の花のちるを藤の花のちりたるをみてなど詞書とする也、歌にも其名をいはず只花とよめば櫻の事になる外は何の花と名を付けていふと心得て違ふとなし、譬ば戀といへば親子兄弟朋友間にても逢たしと思ふ即戀に相違なけれども此情男女間に殊に甚敷が故に單に戀といへば男女相想ふ事となれるに等し惣て何にても其重きが其物の名となれるは此他にも例多し、祭とのみ云ふは加茂の葵祭の事(禁中の御

（坂なるが故也）山とのみいへば叡山の事（是れ又朝廷の祈願所なる故なり）なるが如し、此他猶あるべし又風、閨は共に雜題にて季節のなき物なれば雜によむべき也、然るを風は春風をよみたる多し當季はゆるすとの說も無に非ねど、折角歌のよきにと惜さに一首を撰みたり、此他にも春風の題ならばよき歌あれど雜題には採がたきをいかにせん、閨も亦有明の月や吹あるゝ風などの添物が重くなりて、閨中より外へ出たる如きは傍題となれる物也かやうの事どもいひ續くれば猶多かれど、今は只此度の題につきたる事を申のみ、上件にいへる如く雅言俗言の分れたる今日に在ては歌文は學ばずしては得べからず、師友に乏しき地方にて斯道に志深き君たちよ吾老婆心を以告參らすも、學ばむとならば詠艸を寄送たまへ、懇切にをしへ申さむ音樂や香茶花の如きは其師家へ通學爲に非ざれば學び難けれど、歌文は千里の外よりも文通にて學ばるゝ物也、但し簡便の規則あれば返劵を封入して下名の所へ照會あらば即送り參らすべし、（東京市麹町區上六番町廿六番地水原翠香）

雫のあと

陸奥八戸町番町　江渡秋子

△夏のすゑつかた、獨杖を日ざかりの野に曳く、いばら多き小徑、晝顔ひとつ美はしく咲けり。

伴侶なくてひとり咲かむの運命かも
野徑にあはれ晝顔の花

△夏のたそがれ、波しづかなるうらわをさまよふ、あるじなき小舟、沖の彼方に浮べり。

帆も舵もなみのまに〳〵たゞよひて
行方定めぬ舟をしぞ思ふ

△小雨そぼふる秋の夕、みちすがらさゝやかなるいほりを過ぐ、今盛りなる黄菊白菊いたう亂れたり。

秋風に花壇のあるじいたづきて
菊の亂れに秋の雨ふる

△秋のあした、庭の白菊露にたわみて、いとにほやかなり、手折らむとすれば、白玉はら〳〵とこぼれぬ。

手折らじなちぎる運命のうすくとも
露こそ花の命ならまし

△白百合のひともと、美はしく野に咲けり、心なき男の子、あらあらしうも折りて去りぬ。

野にさきて香こそ笑こそ高かりき
今はた問はじ姿よそほひ

謎々

「裸體畫」とかけて

剣花坊選

天

越後國三島郡日吉村　坪井わか

日本の軍略家」と解く
心は「こだま(兒玉)が名高い

評、撰者は常に日本の謎が、恰かも國文國歌のソレのやうに、言語の上で働かしたのが多く、意味の上で働かしたのが少ないのを不満足に思つて居る者であるから、此謎の如きはあまり嬉しがる方では無いけれど、どうも意で働かしたのに秀逸が少なければ仕方が無い、則ち天位に推したのである。此解答の意も働いて居る點は時局を當て込みながら素も苦しんだ痕跡なきと、展覧會の評判繪を材料にして、新しいところを見せたとの二ツの點にある（木精は一昨年展覧會へ出でし評判の裸體畫なり撰者蛇足）

地

芝西應寺町六十　白木菊子

眞夜の花婿君の御顔」と解く
心は「きまり惡るさうにぬすみ見る

評、羞恥の態、宛然處女の情、とてもいふ可きところ、多く評は致さぬ。

人

信濃國北佐久郡志賀村　神津とみ子

貧乏人から來るお嫁」と解く
心は「まるはだか

評、簡單で、輕妙で、滑稽で、天眞で、しかも意解である、殊にお嫁の二字、女性を離れぬ處妙である、

秀逸之部（有賞）

▲

正直者」と解く
心は「包みかくしの無い所が美點

備前國赤磐郡豊田村　高矢高子

▲

戀」と解く
心は「神聖なのもあれば非神聖なのもある

大阪市北區網笠町　まち子

▲

下手な圖案」と解く
心は「意匠(衣裳)が無い

大阪府三島郡茨木町　岡市安江

▲

決死隊」と解く
心は「歸らん(壊亂)が多い

日本橋龜島町一ノ三八　古谷はま子

▲新婚の夫の顔」と解く
心は「見るもはづかしい　博多　太田とも

好解

▲戰時の新聞記事」と解く
心は「取締が嚴重である　越後中蒲原郡沼垂上二ノ町　野崎キヨシ

▲晴天の富士山」と解く
心は「雪の肌をあらはす　出雲國簸川郡川跡村　松本濟子

▲旅順攻圍軍の負傷者
心は「腰より上の者が多い　越後國中頸城郡菅原村　田村のぶ

▲激戰現場の寫生畫」と解く
心は「見る人畫家の苦心を知らず　下野國眞岡町　月笑女

▲慈善家」と解く
心は「常に善心(全身)をあらはす　宇都宮　すみれ

▲正直者」と解く
心は「包みかくさず　米澤新町一之町　淺間民子

▲美人の泥醉」と解く
心は「美點より醜點が目に早くはいる　筑前若松山手通二　木村駒子

▲螺旋狀の甕」と解く
心は「曲線美　岩代郡山町字五町　横田くら子

▲海中の濃霧」と解く
心は「汽船(貴賤)が見えぬ　熊本縣伊倉町　關かね

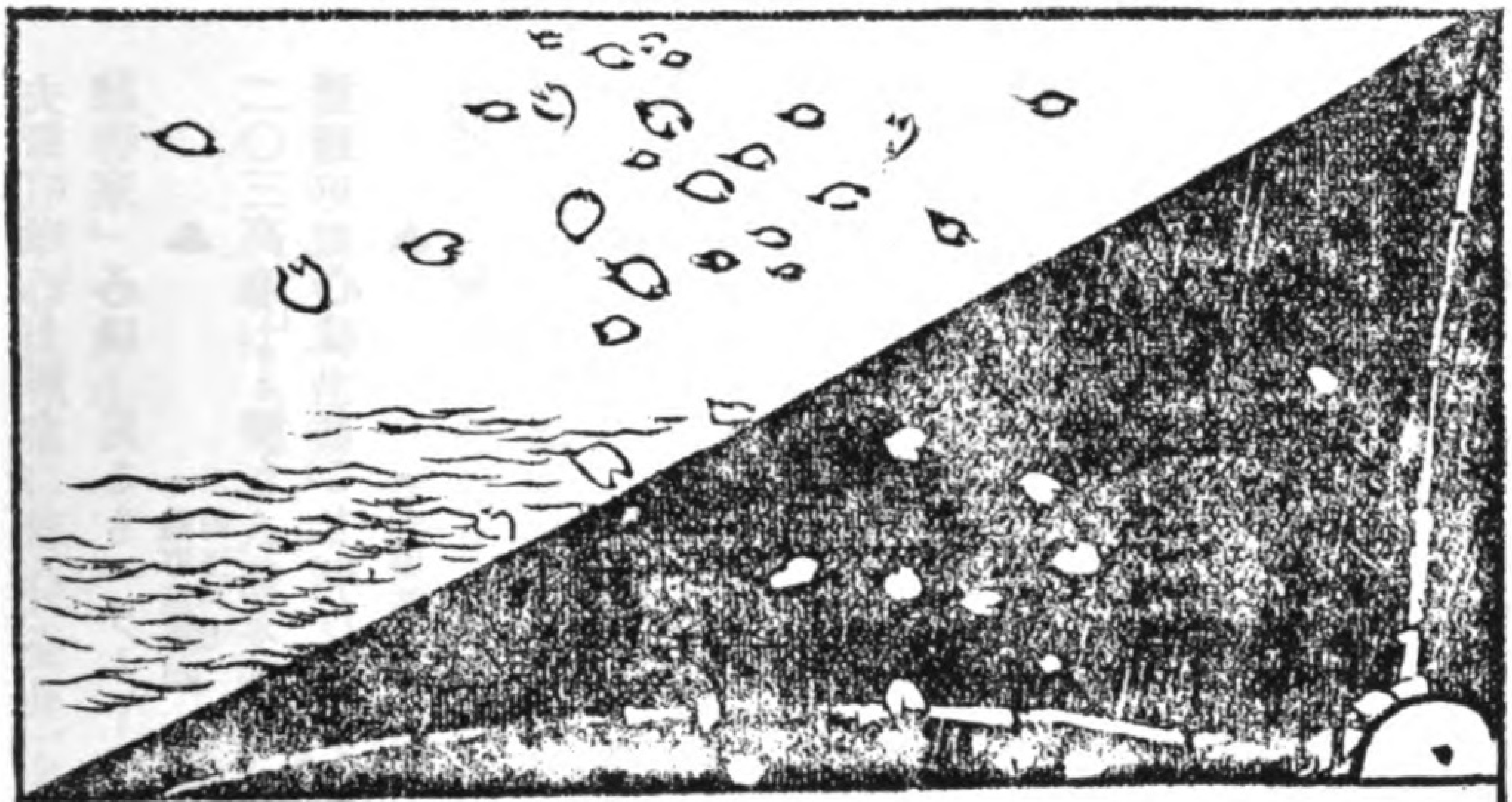
▲明治七八年頃の新聞記者」と解く
心は「思ふ樣には書かれない　函館區東川町二八二　濱岡キン

▲結婚の見合ひ」と解く
心は「見ないふりして見る　山形縣東田川郡八栄里村　皆川かつえ

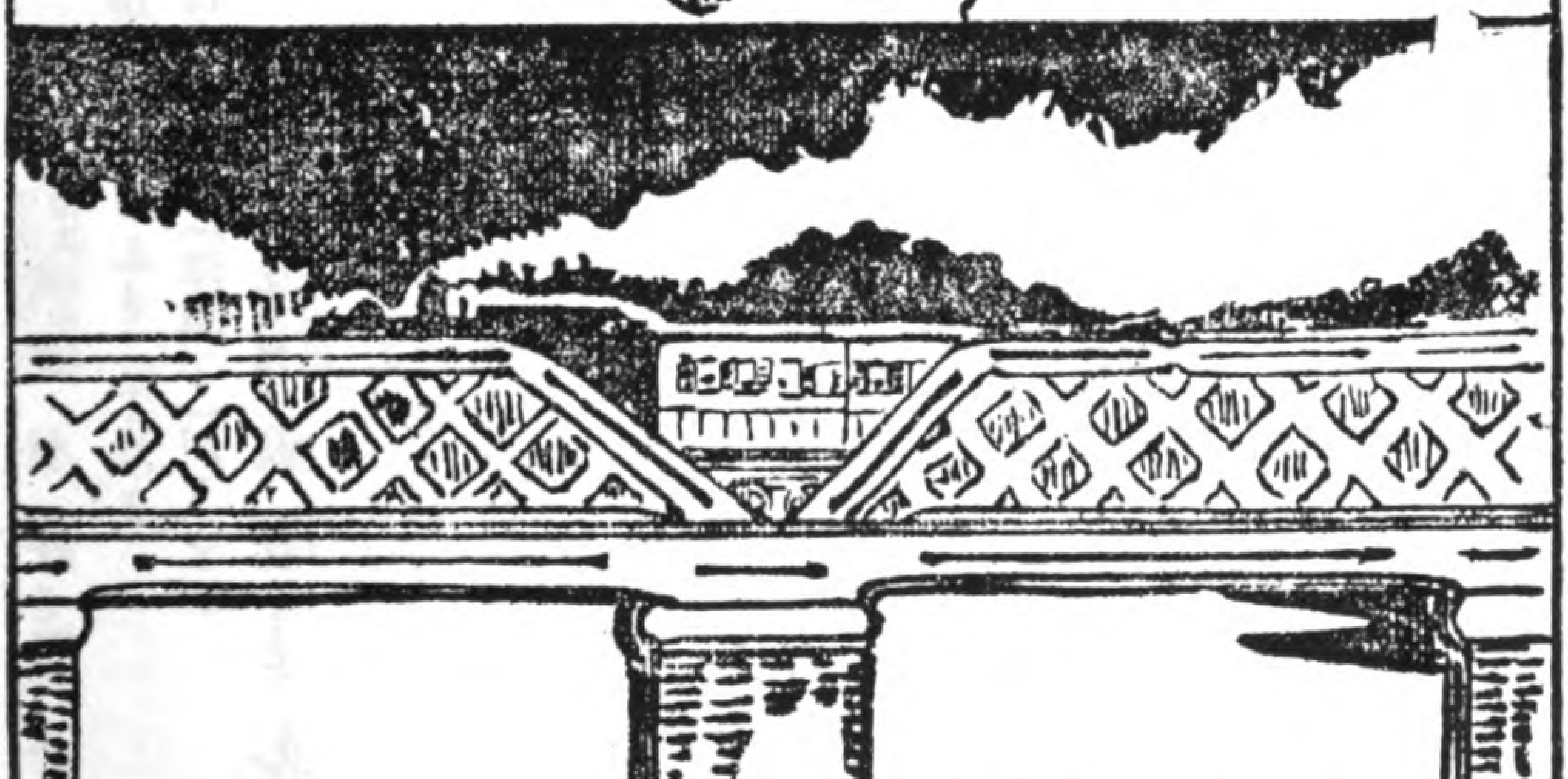
▲　新潟縣中蒲原郡金津村　竹田きみ子

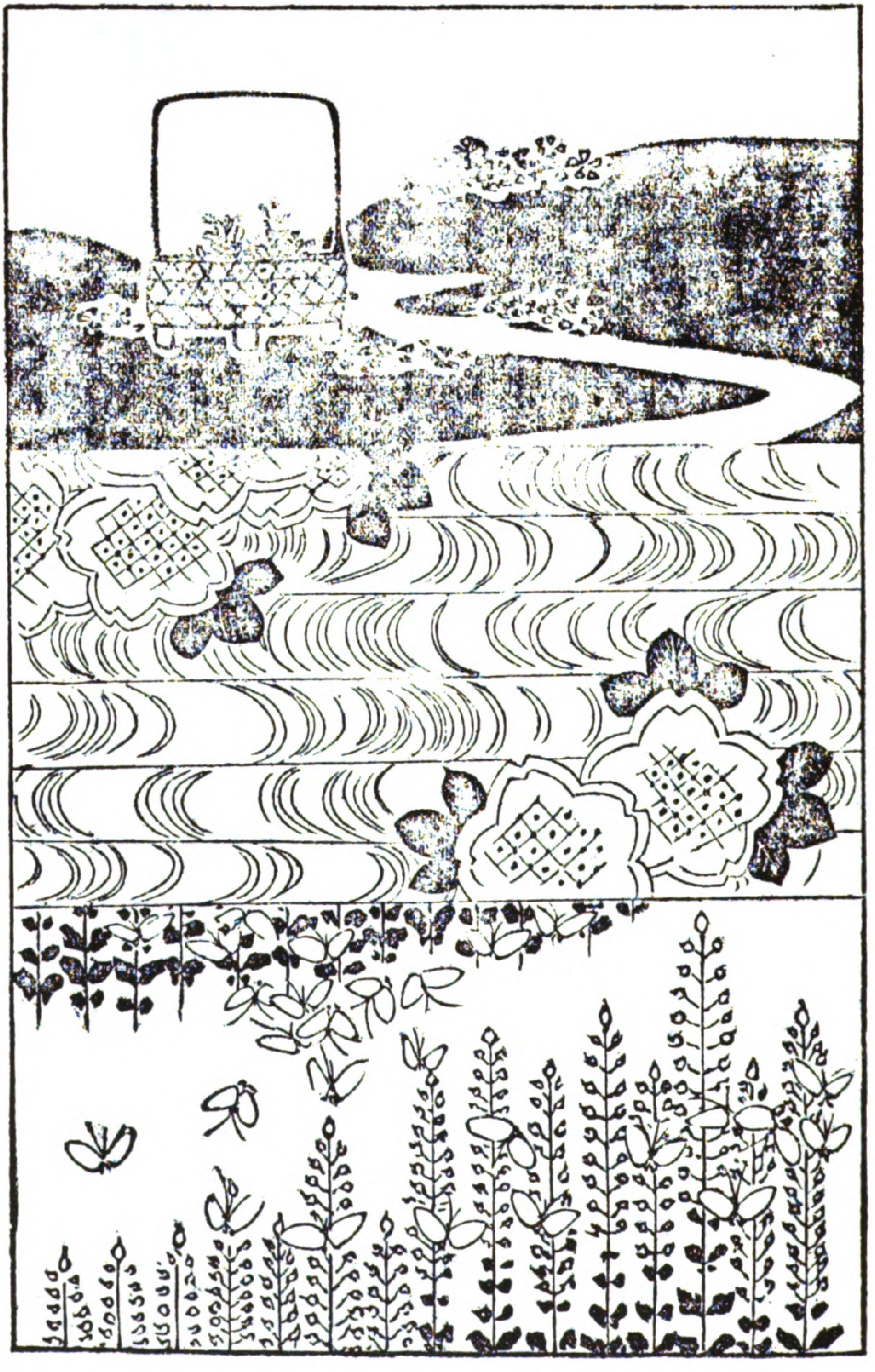
夫婦喧嘩」と解く
心は「見るもハラ〱する
▲　麹町區飯田町五ノ七　安田康子
二〇三高地」と解く
心は「どこもかしこもまるで見える
▲　石川縣輪島町　櫻井順子
山賊」と解く
心は「まるはだかにする
▲　美濃國安八郡大藪町　田中久氏
貧乏人」と解く
心は「福(服)がない
▲　福岡縣鯰田炭坑　檜村里
前者と同解、同心、
▲　出雲國安來町　得能富久子
怖いもの」と解く
心は「見たがる
▲　麹町四丁目　野田みつ子
拂下運動」と解く
心は「とかく收賄(醜猥)が多い
▲　福井　山田まつえ
病人の看護」と解く
心は「男のも有るが女に限る

▲　横濱　小峰園子
風月堂」と解く
心は「洋畫師(洋菓子)がうまい
▲　上州　高森とし
交際塲裡」と解く
心は「美人が持てる(美人がモデル)
▲　島根　岡野きく子
強い日光」と解く
心は「まともにながく見て居られぬ
▲　山路松代
水氣の切れぬ天ぷらの種」と解く
心は「ころもに包まれぬ
▲　小石川　中村フサ
露國の大敗」と解く
心は「隱さんにも隱されず
▲　福岡　手島とみ子
朝起旅行」と解く
心は「中々卑猥でない(日は出でない)
▲　牛込　福島柳子
舞踏會」と解く
心は「美人がもてる(モデル)









出征せる兄の許へ

和歌山市金龍寺町　石井浪子

奉天での大激戰……今日の御手紙でほつと呼吸を吐きました。先月の末奉天占領の號外の出た時に、私の心は如何でしたろー。

我軍大勝利と大活字、其時はこのよなく、嬉しく勇ましく感じましたけれど、次々讀んでいつて、一番お終に行くと、「我軍死傷數千〇〇聯隊最も苦戰〇〇隊此占領の一番槍」と書いてあるでは御座いませんか。妾は今迄、兄樣等の隊が、別に重だつた功名をしたと云ふ事が、新聞にも載ていない樣ですから、不圖したら、今度は、奮發したのじやなくつてと、くよ〳〵して、母上と二人でいろん!!な妄想に耽つて居たのよ。

其夜には、其れは妙な〳〵夢ばかり見て、起きて見ますと、寢衣がびつしより。

其れから、顏を洗うのも可笑な氣がして、其れに父上が、御役所から退きなすつて、歸て來ての御話に、〇〇隊とやらは、兄樣等の隊らしいと、云ふので倚更心配しましたの。

而して、兄樣は常から膽が太くありますから、眞先に進んで、今時分は墓の下で眠つて居ると、父上が笑つて仰しやるけれど、もしやと思ふて、其れに、母上は電報が、今に來やしないかつて、びく〳〵して居らしやるので、妾も氣が氣でなかつたのですわ。丁度今迄、佳坊が遊りとふいて居つた喇叭の音が、はた、と止ると、妾と母上がお茶を入れて居る、茶の間の障子を、いきなり開けて、電報つて、包んだ紙を、ほり込んで、走つていつちまうの。心配の折でしたから、いきなり其れを取ろーとしたならば、其包が開けて、其れは先刻來た號外でしたの、あまり

可笑しので大笑ひ。其から五六日と云ふものは、いつも寢覺めがよくはありませなんだ。

今朝は少し氣分もせい〳〵するので、鏡臺の前で化粧していますと、松が(今度來た下女)「嬢樣兄樣からの御手紙が奥樣の處に」と云ふので、早速、母上の居室へ飛んで行たの、(行く内でも色々思つたの)して「兄樣は」と問ひましたなら、莞爾として居らしやるので、やつと妾は安心しましたの、すると又兄樣は大功名をしたのじやなくつてと思つて、見ると一刻も猶豫がならず、母上の膝から引き取つて、見てみますと、あゝ嬉しかつたこと。まあ嬉しいつて、あんなに嬉しかつたとは、生れてから初めてよ。あまり嬉し過ぎたので、少し躊躇してよ。

御察し申します。兄樣殘念でしたろ、殊に兄樣の隊が大功績を成すつたと、聞きましたならば嘸……私でさへも、兄樣が功名の仕損ひをした樣に思ふの、父上は狐に魅された、よーやと云ひなさるが、母上は、もー安全で、御國の爲に盡して、歸るればよいて、

妾も色々な事を計畫なさるのも、戰爭なさるのも、御國に盡す忠義は、同じ事と思ふの、妾は兄樣が達者で、御國の爲に盡さるゝのを、願つて居ますのです。

內地は大分暖くて、彼岸櫻は追々咲きかけて居ますが、滿洲はまだ〳〵寒い事と思ひます、兄樣隨分凌ぎにくう御座いましよ。

妾は先日、母上と一所に、氏神さまへ御參詣をしたの。其時は中々の參詣人でした、すると兄樣達を思ふのは妾等ばかりではないと見へます

母樣は今迄死なぬ位の人は、此からは武運が、身體に付き纏て居るから、もう大丈夫で、申しますの。妾も、あなたが乾度勇武者となつて、勳章をつつて威張て御歸りだろー、と信じて今から、其折がしのばれて、おゝうれしい事。佳坊も達者で、いつも兄樣に負けないで、軍刀を振りまはして、遊んで居ますの、兩親はいつも健です、其他親類等も皆變つた事は御座いませんまあ〳〵兄樣は御自愛なすつて。　さよなら



女子と文學

勝間舟人

私は「女子と文學」といふ題で、聊か女子の爲に氣焔を吐いて見ようと思ふので御在ます。女の方には女の言葉で言ふた方が御解りが宜いと思ひます故、態と女子の口吻に眞似て申上ます、其の御積で、

文學は素と男子ばかりで出來たものではありませぬ矢張女の手鹽に懸られもしたので今日の樣に大きくも立派にも成つたものだと思ひます、別ても日本の文學は女に依て幕が開けられたと云ても宜いのです、御覽なさい彼の王朝時代を、幾多の才女方が輩出に成て、優美の筆を御揮ひ遊し、才華燦爛、百花研を競ふと云ふ有樣で、日本の文學史上に花やかな序幕を見せて居るでは御在ませぬか、其以後いろ〱變遷もありましたが、明治に成ては女子教育の進歩と共に王朝の盛時を再び現して、才はじけた君達が澤山出來、和歌を御讀みなさる、新體詩を御作りなさる、小說に筆を御染めなさる、中には四角張つた論文を草する方もあり、其が何れも見事な出來榮で、男子方にもをさ〱讓らぬ程でありますから、文學に於る婦人の技能の馬鹿には出來ぬ事を世間でも認めて與るやうに成りました、西洋では尙更の事、米のミス、コレリーの如き、英のブローニング女史の如き先輩の後を繼いで輩出する女詩人の彩筆は、有髯詩人をも凌がん狀態ですから、女流作家の文運や隆々として冲天の勢ありとでも申しませうか。

で、是等女作家の餘薰馥郁たる筆の跡を拜見するに付け、又た先輩に斯る天才あるを思ふに付け、私共女子の才能も磨かば偉大の光を放つものであるといふ事が自覺らるゝので御在ます。

讀者としての女子

先づ讀む方の側から申上ませうか、女子の讀書法は男子とは全で行方が違つて居ます、文學書にしろ科學書にしろ、男の書生には兎角上の空で讀み流し、彼や此やと讀み散らす風が御在ますけれど、女の學生の讀方は極めて熱心で、眞率で、側目もふらず始から終まで細かに見通すといふ風で所謂眼光紙背に徹すると云ふ忠實な讀方は却て女子の方にある樣に思はれます。

女子の書物に對する態度は、

第一に興味を以て讀む、即ち小說でも讀み出して興味を覺ゆると、其の興味は更に後段の興味に結び付いて、其から其と面白さに輝く眼を曝して腹一杯飽き足らはでは本を措かぬといふ風であります、而して到る所に蠱惑され、慰められ、其の結果は尻が重くなり、呼ばれても返事をせぬ樣なことに成ります。

第二には注意を以て讀む。女子は注意が綿密ですから些細の事も見逃しません、從てアラを搜し出すも女子に限ります、又た記憶がよう御在ますから、一度讀んだ事は何時までも能く覺えて居ります。

第三には同情を以て讀む。小說を讀む時の如きは殊にさうで、作中の人物に同情して了つて渾身の血を涌き返し、夢中に成つて了ふので御在ます、

是といふも畢竟女子の性情が感情に富んで居て、天性文學を好むやうに出來てゐるからであります、女といふものは箸が倒れて可笑がり、芝居を見ても手巾を搾り、道傍の乞食を見ても可哀相に成て來て財布の底を叩いても與りたくなり、ほんに淚もろいので御在ます、けれど斯うした優しい麗しい情があればこそ、荒くれた男の心も慰められ、人の世話も出來るといふもの、是れやがて文學に多大の興味を感ずる所以で御在ます。

例へば新聞小説を讀むにしろ、妾等は明日が待遠で待遠で、此の先は何う變るだらう、此の主人公の成行はどうなるだらうなど、人知れぬ苦勢をして全然作者の掌中に飜弄されて了ふので御在ます馬鹿氣て居ると言へば馬鹿氣てもゐませうけれど、此位の熱心が有つてこそ初めて文學の趣味を解する事が出來るので御在ます。

而して又た女子は斯ういふ態度を以て文學書類に接しますから、心理上に受くる影響の大層なは申すまでもありません、其故惡感化を慮つて娘達に小説類は危險であるとて折角好きな讀書に制限を付ける方が世間には多いので御在ます。



私は勿論此の小説不可讀の意見に賛成するものではありません、寧ろ義理人情を解し世の事理に通ずる唯一の方便として、小説の熟讀を奬勵したい方なのですが、如何せん、中には随分人生の暗黒面を描いた嫌らしいものがあり、神聖なる家庭には迚も入れられぬ物が少くはありませんから、常識の固らぬうら若い女子供に向つて

は何方かといへば見せぬ方が安全で御在ます、併し近來は家庭小說と銘を打つて光明の方面を描き、家庭の道德を鼓吹する樣なものが顯はれるやうになり、世間の好尚も亦た其の方に向くやうに成りましたのは、誠に結搆な事だと存じます、何卒斯う云ふ風の作を澤山供給して戴きたいものです。

其柄讀者へ御注意にまで申上ますが、讀むに從つて文學の趣味を知る事が深くなり、文章の善惡も分るやうになると、是非共自分で書いて見たくなる、而して二三の作が友人にも賞揚られ、雜誌に投書して幸に掲載の榮を得る樣な事にでもなると、讀者の位地を脫して一躍文壇に乘出し、紫女の流を酌まうなどといふ大それた謀叛心を起す方も少くはありませんが、其は考へ物、私はマア――御待ちなさいと申上たく思ふのです、米國閨秀作家の泰斗ストウ夫人も、

文學殊に小說の樣なものを婦人が作らうとするのは容易の業ではない、私は文事の素養ある婦人に勸告致します、貴女方は御自身小說家に成らうと思ふよりも、寧ろ忠實な讀者と成て、文學によつて慰藉を受けた方が宜い、其方が遙に優つてをります。

と、斯う申して居るので御在ます、如何にも御尤の仰言で、私は今の女學生方に向つて夫人の言の如く成らんことを願ふのであります、生意氣に文壇に出娑婆つて下手な駄文を見せびらかすよりも、一層退いて忠實なる讀者を以て任じ、靜かに他人のものした作物を味ひ、而して文筆を弄る暇を以て小遣帳でも付てゐた方が遙かに利益だと思ひます、詩を作るよりは田を作れとはホンに善い敎訓で御在ます。

扨て少しく文學を愛讀する事から受くる影響を申しますと、直接間接に大層な利益が御在ます、即ち文學を讀み咀嚼すと、之に依て品位を養ふ事が出來る、情操を研く事が出來る、趣味を高める事が出來る、而して天の成せる麗質を一層美しくする事が出來ます、其故婦人の容貌を化粧するものは臙脂であるが、婦人の精神を化粧するものは文學であるといふ事が申されま

す。

一、文學は女子に智識を與へる。御承知の通り女子は男子と異つて狹い境遇に生活しなければならぬのが並ての狀態ですから、從つて女子の社會的智識は男子よりも狹くつて劣つて居ります、其故之を補ふには文學によるより外はありません、文學は實に世上にありとあらゆる智識を讀者に供給するものですから、常に之と親めば種々の事柄を知る事が出來て、何程自己を益すか知れません。



一、文學は婦人に慰藉を與へる。婦人は陰氣性で、神經質で、ともすれば鬱ぎ勝ちになり、雨降る夕べ虫唱く夜半、世の無常を感じては身も世もあられぬ寂寞を覺え、憂きにつけ、辛きにつけ身をはかなみ、徒らに涙を催すが癖ですから斯る時は努めて心を慰めるやうにしなければなりませんが、其には文學のたしなみが必要であります、淋しい晩よし其處が孤燈の下であらうとも、靜かに讀書を試みたなら、何時か文學の活氣に觸れて、沈んだ心も自づと引立てられ、周圍も何となく賑やかに感じて來るものです、例へば書中に

天然の美を見ては身自ら其境にあるの思ひをなし、人情の妙に打たれては吾其人と語る想をなし、又た偉大の教訓に逢ふては大聖人の說敎を目のあたり聞くの想をなし、尙ほ又た御空に星を仰ぐが如き高き理想に醉ふことも出來て、氣も心も爽快とするので御在ます、斯樣に文學は人の心を慰藉する力を持ておりますから婦人に取つては無二の伴侶だと思ひます。

文學を愛する者は幸福なる哉、戀に泣けるお方よ、薄命に泣けるお人よ、文學に來つて其の甘き露をお吸ひなさい、而して文學の洗禮によつて煩悶や懊惱から甦りなさいまし、人はパンのみで生くる者ではありません、靈性の糧を文學に求めて其處に慰藉を得るのは婦人の高尙なるたしなみだと思ひます。

作家としての女子

私は前章に於て作家たるよりも忠實なる讀者たれと申上ました、諸姉はソンナラ女子は到底讀者を以て甘んずべきものであるか、作家としては成功出來ぬものであるかと御訊ねなさるで御在ませう、私は之に答へて申します、素より文學を好んで愛讀する位の女子ですもの、好こそ物の上手なれで、作家として成功されぬ道理は御在ませんと、紫式部にしろ、一葉女史にしろ、假令稀世の天才であつたにしても、彼程の名を成した位ですもの、作家としての修業を十分に積んだならば其の域に達せられぬことはありますまい。

今の文壇を見渡す所、男子の方が占領して居つて、女子の影は乍殘念殆ど見られぬと言つて宜いのです、一時は一葉女史を初め、若松賤子さんや、三宅花圃さんや、薄氷、稻舟なんといはるゝ方々が踵を接して顯はれ、才媛濟々、稍々王朝の盛時を眼前にする樣な觀が御在ましたけれど、其もホンの僅かの間で、一葉落ち若松枯れては、再び華麗の彩筆を揮ふものなく、さしも文壇に花を咲かした當年の女文字も漸く跡を斷つて、非常に寂寞なものに成て了つて居るんですから、此時此折、女流作家の出現は妾達の首を延べて待設くる所、男子方も亦た大旱に雲霓を見るの思で双手を

擧げて屹度歡迎なさるに違ありません、斯ういふ場合ですから女でも志さへあれば、案外容易に成功出來るかも知れませんよ、あはれ今の女學生中に我こそ一つ文壇の女將軍たらんと志す方はなきや、藝術界の花と歌はれて見ようと思ふ方は御在ませんか。天才は望んで得べきものでなく待つて來るものでなく、其の來るや百年に一人のみと申しますなれど、其の一人に成らうと吾から奮ひ立つも面白いでは御在ませんか、よしや第一流の境には至れずとも、當時は新聞にしろ雜誌にしろ婦人の寄書家が欠乏して居る位ですから、文學を修業するといふことは女子に取つて何の道得策であらうと思ひます。



斯う云ふ譯故女子は確かに文學者として成功する事が出來ます、けれど女子と男子とは體格の異る如く天賦の性情も違つて居ります故、文學上の立場も自然異はなければなりません、前にも申した通り、女子の性情は感じ易く泣き易く、同情に富んで、其の容貌の優しい如く思想も優しいので

すから、詩人となるには恰好の天性を有つて居るのです、併しながら豪宕とか壯大とかいふ點になると、到底有髯詩人の敵ではありませんから、婦人は何處までも自己の天分を守つて、男子とは別の方面に立つやうに爲なければなりません、即ち情的の方面を本領として、自己と密接の關係ある家庭の方面といふものか、敎育の方面とか、慈善の方面とか、又は宗敎上の安心ともなるべき光明の方面とかに筆を染めて、社會の革新風俗の矯正に向ひ婦人相應に援助を與へたなら、一管の筆の力にも能く百萬の讀者を動かして、國家を益することは莫大なもので御在ます。

扨て婦人の文章を取つて男子の文章に比較して見ますに、其の思想の異る如くに矢張文章も異つて居ります、男子の文章は雄勁で、壯大で、嚴肅であります、天馬空を行き、又は壯烈鬼神を泣かしむるといふのは男子獨得の筆力で御在ます、然るに女子の文章は優雅である、艶麗である、纖細である、花咲き匂ふ樂園を來らしむるやうな書方は女子の特長であります、斯ういふ優美の書き方は男子には迚も眞似られない藝であります、又た女子の筆致は流暢で平易で、觀察が緻密で、些細の事をも見のがさず、よく讀者を其の境に彷徨せしむる樣な一種の魔力を持てをりますが、是は一般の女性詩人に通じてある特色であります。

けれども上手は別として、下手な女の書いた物は欠點が多くて見られたものではありません、女の文章の弊は兎角纖弱巧緻に流れて、冗漫になり、無氣力になり、不得要領に終つて所謂シメクヽリの無いものに成つて了ひます、併し女子のばかり惡くは言へません、堂々たる男子の書かれたものでも隨分感心の出來ないものがあります、男子の文は壯大である代りには惡くすると疏放空大に流れて、駄法螺を並べて太平樂を吐いて、獨り善しとする樣な管らぬものが出來ます、其故比較べて見れば欠點は何方にも有つて、孰れ優り劣りは無いので御在ます。

でも流石に上手といはるゝ際になると、男子にしろ女子にしろ各々自家の文躰を創造して其の特長を發揮

してをりますから、後代までも文名が傳はる位で何時見ても見飽きがしないのです、殊に女の文は――
――私が女で女最負の所爲でも御座ませうか、男子のにも勝つて一層好い香がする樣に思はれます。

扨是よりは二三の實例に就て御話致しませう、先づ紫式部の源氏物語から花散里の一節を抄出して御覽に入れませう。



花散里の心細げにおぼして、常に聞え給ふも道理にて、彼の人も今一度見ずば、つらしとや思はむと思せば、その夜はまた出で給ふものから、いと物うくて、いたう更かしておはしたれば、女御斯くかずまへ給ひて、立ちよらせ給へる事と、喜び聞え給ふさま書きつゞけむもうるさし。

いといみじう心細き御有樣、たゞこの御かげに隱れて過ぐい給へる年月、いとゞ荒れまさらん程、おぼしやられて、殿の内いとかすかなり、月おぼろにさし出でゝ、池ひろく山小深きわたり、心細げに見ゆるにも、住みはなれたらむ、岩ほの中おぼしやらる、西面にはかうしも渡り給はずやと、打屈しておぼしけるに、憚れ添へたる月影の、なまめかしうしめやかなるに、打ふるまひ給へるにほひ、似るものなくていとしのびやかに入り給へば、少しゐざり出でゝ、やがて月を見ておはす。

また茲に御物語の程に明がた近うなりにけり、「短夜の程や、かばかりの對面も、又はえしもやと思ふこそ、事なしに過しつる年頃もくやしう來し方行く先のためしになりぬべき身にて、何となく心のとまる世なくこそありけれ。」と過にしかたの事ども宣給ひて、雞もしばしば鳴けば夜につゝみていそぎ出で給ふ、例の月の入はつる程よそへられてあはれ也、女君の濃き御衣にうつりて、げに濡るゝがほなれば

月陰の宿れる袖はせばくとも
　留めても見ばや厭かぬ光を。

いみじと覺えたるが、心苦しければ、かつは慰め聞え給ふ、

行きめぐり終に澄むべき月陰の
　暫し曇らむ空なとがめそ。

「おもへば惡しや、たゞ知らぬ涙のみこそ心をくもらすものなれ」など宣給ひて、あけぐれの程に出で給ひぬ。

何と優雅な文字ではありませんか、趣味ある筆ではありませんか荒れたる宿の二美人を現し、月を點出し杜鵑を點出して何となく幽寂可憐の趣を彷彿せしめる所、流石王朝時代に第一流の名を恣にした式部の筆であります、尤も斯う云ふ優美の書き方は式部に限つた譯ではありません、王朝時代の閨秀作家は總て優美の風を備へぬはなく、彼の和泉式部にしろ赤染衛門にしろ、多少面目は異つても、何れも雅びの筆を持つてゐる事は一致して居ます、故に當時の文學は絢爛花のやうで百世に輝いて居ります、次に淸少納言の枕草紙から一例を引きませう。

例ならず、おほせ事などもなくて、日頃になれば、こゝろほそくてうちながむる程に、をさめ文をもてきたり。おまへより、左京の君して、しのびてたまはせたりつるといひて、こゝにてさへ、引しのぶもあまりなり、人づての仰事にてあらぬなめりと、むれつぶれてありたれば、かみにはものもかゝせたまはず、山吹の花びらを、ただ一つ包ませたまへり、それに、いはで思ふぞと、かゝせたまへるを見るも、いみじう、日頃のたえま、思ひなかれつる心も慰みて、うれしきに、まづ知るさまを、をさめもうちまもりて、御まへにはいかに、物の折毎におぼし出で、聞えさせたまふものなるをとて、たれも、あやしき御長居とのみこそ侍れ、などかまゐらせたまはぬなどいひて、こゝなる所にあからさまにまかりてまゐらんといひていぬる後に、御かへり事かきて、まゐらんとするに、此の歌のもとさらに忘れたり、いとあやし。おなじふることといひながら、しらぬ人やはある、こゝもとに覺えながら、いひ出でられぬは、いかにぞや。などいふをきゝて、ちひさきわらはの、まへに居たるが、下ゆく水の、とこそ申せと、いひたる、などて、かく忘れつるならんこれに、をしへらるゝもをかし。

淸少納言の文章は男勝りで雄健であるといふのが古來の定說でありますが、此の文を見ると有繫に女らしく、矢張り當時の時代思潮たる優雅を何處までも現して、而も筆力の自在なる、細な事を巧に言ひ廻す手際は、感心なもの、納言の文は文中に何共いへない好い

味が籠つてをる樣に思はれます、當代一流の文星と仰がるゝのも決して偶然ではないので御在ます。

降つて明治時代を見ると、王朝時代にもまけず多くの女流作家が顯れたが女性は矢張何處までも女性で、女の手に成つたものは何となく靭軟で御在ます、明治の閨秀文學の代表として、樋口一葉女史の傑作「われから」の一節を紹介致しませう。



今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路いそがはしく、お出入の町人お歳暮持參するものお勝手に賑々しく、急ぎいたる家には餅つきの音さへ聞ゆるに、此の邸にては煤取の催の塵座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下に散り亂れ、お雜巾かけまはる者、お疊たゝく者、家内の調度荷ひ廻るもあれば、お振舞の酒に醉ふて、これが荷物に成るもあり、御機嫌うけたまはるお出入の人々お手傳ひとて五月蠅きを半ば斷りて集まりし人だけに瓶のぞきの手拭、それと切つて分け給へば、一同手に手に打冠る姉さま被茄子、頰かぶり、吉原かぶりをするもあり、旦那樣朝よりお留守にて、お指圖し給ふ奥樣の風を見れば、小褄かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の麻裏を召して、あれよこれよと仰せらる、一しきり終りての午后、お茶菓子山と擔ぎ込めば大皿の饅頭まき分捕次第と沙汰あつて、奥樣は暫時の程二階の小間に氣づかれを休め給ふ、血の道の強き人なれば胸くるしさ堪へがたうて、枕に小搔卷假初にふし給ひしを、小間使の米より外、絕えて知るものあらざりき。

これは年末煤取の混雜の狀を描き出したものです

が、よくも斯う上品に面白く書けたものです、女史の筆もまた遒勁だといふ定評を下されて居りますけれど、觀察が細かで、痒い所に手の屆く樣に筆が廻るのは此の文を見ても解ります、而して女史の文章は上品でしとやかで、御殿女中の世間話でも聞いてる樣な感が致します、要するに女史の文は紅葉さんの樣に軟くもならず、露伴さんの樣に硬くも成らず、よく兩者の間を調和したもので、巧みに明治の時代精神を活躍せしめる才筆は確に稀世の天才であります、女史は今より十年前、廿五歳の春齡を以て若死なさいましたが、誠に惜しい方を亡したものです、さればかの高山博士も、

吾人は思ふて玆に到る每に未曾て故一葉女史が流星の如くにして來り、流星の如くにして逝けるを悲まずんばあらざる也、嗚呼女史や其の來る何ぞ遲かりし、其の去るや何ぞ速かなりし。

と仰有つて滿腔の同情を表されたので御在ます、併し女史は死すとも、女史の遺著三十餘篇は、源氏物語や枕の草紙と一つ書架に飾られて、彼を王朝文學の花と崇めば、此は明治文學の花と尊ばれて、萬世に生きるのですから、文學者には成りたいものです。

閨秀作家

王朝の才媛作家には前述の紫式部、淸少納言を筆頭に、榮花物語の著者として知られた赤染衞門、和泉式部日記をかいた和泉式部、古の奈良の都の一首を讀んで當時の歌壇に才名を走せた伊勢大輔、狹衣物語をものした大貳三位、大江山の歌を口吟んで、擧朝の人を驚かした小式部内侍等があります、此等の才媛方は日本文學の素地を造られた人達で、今日の文華を咲かしたも畢竟此の方々が根を培はれた恩賚であらうと思ひます。

又た明治の閨秀作家では、一葉女史の外に小公子の譯者として英文家として嘖々の文名を荷はれた若松賤子女史の如き、十七歳にして始めて小說を作つたと傳へらるゝ梶田薄氷の如き、一時美妙居士と並んで才名

を喧傳せられた稲舟女史の如き（此の四人は皆な不幸短命、今は故人と成て了ひました、）其他能文家として又た能筆家として盛名ある三宅花圃女史の如き、新派和歌の一體を創めたる與謝野晶子夫人の如き、近頃「かたゝがへ」の一篇をものして評判の善い鈴木秋子さんの如き、何れも有名な方々で、明治文壇の花形役者と言ても宜いのです。

眼を轉じて西洋を見ると、米のストウ夫人、ジャンクソン女史、佛蘭西のスチール夫人、英のブローニング女史、エリオット女史、インジエロー女史等の如きは何れも第一流の作家で、文學史上に特筆されて居る人達であります、中に就き最も著名なる者三氏の小傳を左に御紹介致しませう。



（一）ハリエット、ビーチャー、ストー夫人は西暦千八百十一年六月十四日、米國コンネチカットといふ所に生れ、幼少より賢く非凡の才氣を有つてお在でした、七歳の時には既に讃美歌や聖書を諳記したと申す位です、後一二の學校に學び、その後教師の職に從事されましたが、二十五歳の時、神學教授のカルビン、

イー、ストウといふ人の所に嫁がれました、當時は奴隷解放の聲が沸騰して騷々しい時代でしたのが、夫人が黒人に同情を表するの心はやがて「アンクル、トムス、ケビン」と云ふ小說と成つて、正義を鼓吹したのであります、所が此の小說は非常の好評を以て迎へられ、發行後十日も經たぬ内に、忽ち一萬部を賣盡すといふ盛況でした、其の後も多くの小說を公にし、賞讃の聲の内に世を送つて、遂に千八百九十年七月、八十五歲の高齡を以て永眠されました。

（二）エリサベス、バレツト、ブローニング女史は西暦千八百六年英國のタルハムといふ地に產聲を揚げました、女史は生來虛弱でもあつたし、夫を撰ぶに就ては大きな理想を持つて居ましたので、久しく獨身でをり三十七歲に成つて初めてロバート、ブローニングと結婚されました、夫も矢張詩人でありましたが、妻のブローニングの方が遙かに名聲が高かつた樣です、女史は敬虔の念に篤いから、その作中には宗敎の高遠なる理想をほのめかして、無限の慰安を與へるといふ筆法であります、結婚後三年經て兩人の間に子供が產れて間も無く、カサ、キッチー、ウキンドウスといふ傑作を公にしました、是は伊太利の自由の爲めに爭ふといふ筋でありますが、其卷の中に女史自身の『愛の生涯』を書いた節があります、之を見ると女史が如何に夫に愛を献げてゐたかゞよく分ります、結婚後十五年の樂しい春秋を送り迎へたが、遂に病を得て千八百六十年の六月廿九日といふに、夫の腕に擁かれながら、靜かに永眠されたので御在ます。

（三）ジョージ、エリヲツト女史は實名をマリヤン、エバンスと言ひます、女史は千八百十九年十一月英國のワーウキツク、シャイアと申す所で生れ幼少の時分から讀書が好で、文筆が得意でしたから、後一二の雜誌に關係してその文名は漸く世間に知らるゝやうに成りました、三十二歲の時、ジョージ、ヘリクー、リウキスといふ人と結婚し、其の後夫の勸告により、小說に筆を執る事と成り、遂に『シーンス、オブ、クレリカル、ライフ』といふのを書いたのです、よつて夫リウ

キス氏は此小説にジョージ、エリヲットと署名して、直ちに「ブラック、ウット」雜誌社に送つた所、作者の本名が秘せられてゐるのと、趣向の面白いのとで、忽ち空前の大評判を博し、五百弗の報酬を得ました、そこで又た第二の小説「アダムビート」に筆を染めました、其の後も續いて新作を著はして、英國第一流の女子作家と尊ばれる樣になりました、千八百七十八年夫に先立たれたので、爾來二年寡婦を立てゝゐましたが、遂に米國人ジョン、ワルター、クロッスなるものに再嫁して慈善の行ひも多かつたのです、然るに其年の十二月假初の風邪が原因で返らぬ旅に赴かれました、倫敦ハイゲート墓地にある女史の墳墓には、今も文人や詩客の參詣があつて常に香華が絶えぬといふ事であります。

轉地療養に居る友へ

周防　中村春子

御懐しさのあまり、花を見すてゝ歸る雁がねに拙き水莖の跡ことづてゝ、一筆示し上まゐらせ候。げに御許さまと袂をわかち候ひしは、いまなほ目の前なる心地せられ候ふに、いつしか夢のやう過ぎ去りて、はや三月あまりに相成申し候。その後の御病状、いかゞ渡らせ候や。追々春めき候まゝ、さぞかし御快方のことゝ悦び居り申候。

野山の春色やゝ色榮えて、今日この頃は、菫花野につれだつもの三々これあり、誠に田舍の春景色、えもいはれぬ風趣にとみ申候。御地もさすがに屈指の名どころ、たとへ菫、たんぽゝ咲きほころ野の趣はこれなくとも、未だ明けやらぬ磯邊のほど、眞砂かきわけての朝逍遥、あるは月清き夕、お得意のみ歌詠しながら、松の木の間のさすらひに、いたくみ心の伸ぶる心地せられ候はむ。優なる御許樣のみ心の琴にひゞきしその想を、お暇の折々お便り下さらば、いかに嬉しきことならむ。そのほど、幾重にもねんじ上まゐらせ候。

筆の序、すこしくお留守宅の有樣ものしまゐらせ候。御兩親樣は、いとすこやかにておはし候。美ちやんは、今春御許さまの御在宅なきまゝ、何となうお寂しき御様子、しかし、いつも甲斐々々しく學校へ御通ひこれあり候。武ちやんは、いつもながら快活に、昨日も終日、村の童等と戰ごつこに、他事これなく候ひし。御最愛の狗猫とも、御留守宅中の一興ものにて、またよく忠實につかへ居り申し候。

右樣の次第に御座候まゝ、お留守宅の事には些の御懸念なく、一心御保養相なるべく、妾は、御許樣ゝすこやかに御歸宅、ともぐに學の園に通はむことの、一日もはやかれかしと待入まゐらせ候。先は右お見舞まで、あなかしこ

櫻花譜

愛華女史

天が下花は多けど日の本に咲ける櫻の美事なるに勝るもの外にはあらざるべし、この花や誠に大和民族理想の精華、植物美の粹を極めて百花の長と推さる、支那にては牡丹を花の王と稱し、西洋にては薔薇を國の華と云ふめれど、我等日本人の眼には何う見ても櫻が花の王なり、美の極なり、見よ、煕々たる春日の下に爛熳咲き出でて、雲か霞か將た雪にも紛ふ此の花の景色の如何に美しからずや、其の容色の優美なる、其の姿態の崇高なる、扨は其の散際の潔さ、我が國人の氣象にも似て、めでたしともめでたし、斯るめでたき花なれば古來此の花を嘆美する聲幾干といふ事を知らず、紀貫之は櫻花を愛るの餘り



旗さくら

さくらよりまさる花なき花なれば
よその草木のものならなくに

と詠じ、在原の業平朝臣もまた

世の中にたへて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

と述懐し、又た本居宣長は之を我が國民の精神に比して、

敷島の大和心を人間はゞ
旭日に匂ふ山櫻花

と詠せられたり、或は高適の對照としては、花は櫻木人は武士といひ、又武士道の表章としては、凝つては百錬の鐵と成り、發しては萬朶の花となりといひて、歌に詩にその美を頌し、その德を歌ひたる事は實に盛なるものなり。

故に文學上より此の花を研究するは趣味最も深し、

なほ美術上よりするも、園藝上よりするも、植物學上よりするも、その材料は何れも豐富にして興味極めて多かり。

先づ櫻の種類を文學上より分てば、夥しき數にて、―理學博士伊藤篤太郎氏の調査によれば三百六十餘品ありと云ふ―是等を一々品評せんは面白き事なれど、餘りに煩しければ今は大方に持囃さるゝ物丈を擧ぐべし。



普賢ざくら

○桐ケ谷、一名車返シ、又た八重一重とも云ふ、此の花櫻の中の櫻ともいふべく容色最も秀でたり、一枝の中に八重と一重の雜り咲を點綴して頗る見事なり、尤も八重の花は多く一重の花は少なき由、こは元と鎌倉の桐ケ谷より出でたるが故に此の名あり、又の名を車返しと云ふ譯は嘗て後醍醐天皇住吉神社に行幸あらせ玉ひし折、此の花の餘りに奇觀なるより再び車を返へさせ玉ひて飽かず見そなはせ玉ひし故事によれりと言ひ傳へ、又た一說によれば、昔し二人の男あり、物に詣でての歸るさ此の花の下を過りて、一人は八重なりと言ひ、一人は否な一重なりと主張し、互に言ひ爭ひて議論容易に決せざるより、二人は遂に踵を返して再び花の下に近寄り見たるに、一枝に八重と一重とが雜咲きてあるを見出でたり、是にていづれ勝負なく兩人共申分立ちしと、それより八重一重とは名付けたりとか。

○泰山府君、花の色純白にして葉は綠色なり、昔し櫻町中納言といへるが、此の花の散ること早きを惜しみて泰山府君の祭をなせるが故、斯く呼びならはせるとか、又た萬葉集にも此の花の盛り七日は過ぎじと云ふ歌見えたり。

○鹽竈櫻　こは花も葉も紅を帶びて、頗る艶麗なり、されば花のみならず葉まで（濱で）見るといふ心にて

鹽竈と名付たりと云ふ、面白き名よ、名付親は誰ぞ聞かまほし。

○伊勢櫻　淡紅を帶びたる八重咲なり、攝津の國伊勢寺より此の花の種出でたりと言傳ふ、されど、一說によれば、此の花櫻のヲハリに近き頃、咲くが故に此名を得たるなりと、其の心は伊勢は尾張に近ければなりと、さりとは餘りに謎めきたりな。

○姥櫻　開花期最も早く、葉無くして花咲くが故に老ひたる女の齒なしとの意にて斯くは命名したるなりとか、盛は過ぎたれど姥櫻殘んの色の捨て難きなど〻小說家の筆に上せらる〻は此の花なり。

○旗櫻　花の色白くして淡紅を帶びたる八重咲の中輪なり、花の中より二段の紅き花瓣突出せり、その狀恰も帆を掛けたる如くなれば、又た帆掛櫻の名あり、旗櫻と云ふ由來は、むかし八幡太郎義家奥州を平げて凱旋の途次、常州久慈郡端龍村に暫く兵を休めし時、一株の櫻の木蔭に旗竿を樹て、その儘殘し置きたるを、後の人紀念として其の樹をハタザクラと呼ぶに至れりと、


山ざくら

○熊谷櫻　八重咲の小輪にして花瓣の先端尖れり、蕾の時は其の先端少しく紅味を含むと雖、滿開後は漸く白色を呈す、この花は他の櫻に魁けて逸早く綻び、彼岸櫻よりも早く咲き出づるが故、源平一谷の戰ひに熊谷直實が平山武者所と魁を爭ひたる古事により斯くは勇しき名を負ふに至りたるなりと、

○駒止櫻　又た下馬櫻とも云ふ、駿河國富士郡狩宿に在る櫻樹なり、こ〻は建久の昔、右幕下賴朝が富士の裾野の卷狩に本營を敷きし跡にて門前下馬札の傍に一株の櫻樹を植えたりしが、此の木今なほ存して、獨り當時の威勢を語れり、花は枝垂咲にして、無數の枝脚蜘手の如く四

方に差出でたれば、滿開の時は宛ら天幕を張りたるが如く、而も根の周圍は二十餘間に蔓延し、壯觀此上もなし。



伊勢ざくら

○題詩櫻　美作國行在所の舊跡に在る櫻なり、昔、兒島高德が詩を題したる木なりとて、有名なり、花は人の遺薫を語り人は花の餘芳を賞して、千古に不朽なるべし。

○南殿櫻　又た左近櫻と云ふ、紫宸殿の南庭にありて、其の位置御階より、巽の方に當るが故世に之を左近櫻といふ、當初は梅なりしを、桓武天皇遷都の時櫻に植替へられしと傳へらる。

○楊貴妃　八重咲の中輪なり、花瓣は紅にて先端白し昔時、興福寺の僧玄宗と云ふ人の愛したる花なるからに此の名ありと、其は楊貴妃を愛する者は唐の玄宗なれば、花を人に見立てゝ、斯くは命じたるなりと、抑は此の僧花散りて後の恨もまた一入なりしなるべし。



昭君ざくら

○昭君櫻　一重咲の大輪なり、花瓣は廣くして厚く、花梗又た長し楊貴妃よりも色濃くして艶なれば、匈奴に歸きし王昭君の國色にたとへて、斯くは名付けられたるなりと、

○八重櫻　一名奈良櫻、こは所謂奈良の都の八重櫻なり、花は淡紅色の小輪にして、甚だやさしく、花梗は

細くして長く、二本の雌蕊ありて一の花に二個の果實を結ぶ、淸輔の袋草紙に『上東門院の中宮と申せし御時、伊勢大輔はじめてまゐる、或人の八重櫻を奉りければ、伊勢の前にさしつかはし玉ひ檀紙硯を前に置き、同じくさしつかはし玉ふ時に人々目を附ていかゞ申すと見あへるに、とばかりあつて硯ひきよせて、墨をとり、靜におしすり歌をかきて之を進む御堂殿とりて御覽ずるに、淸げにかきたり


薄墨ざくら

いにしへの奈良の都の八重櫻
けふ九重に匂ひぬるかな

殿を始め各々當意即妙なること萬人感嘆し、宮中鼓動す』とあり、之より此の花一層有名となれり。

○九重櫻　花の形桐ケ谷に似て。花瓣多ければ、九重の名あり。

○雲珠櫻　京都鞍馬山に在り。權中納言安賴卿もこの花を見て、


楊貴妃

これやこの音にきゝつるうすざくら
鞍馬の山に咲けるなるべし

と讀まれたり、雲珠とは唐鞍を懸るとき馬の鞍の後に付ける飾にして、此の花の形恰も其に似たれば、や

がて花の名となりたるなりと。

○普賢像　千瓣咲にして色は白く花輪は大なり、二本の雌蕊が宛ら象の鼻の如く長く突き出でたるを以て、而も鼻と花とは國音相通ずる所から、菩薩の乘る白象の鼻に譬へて此の名あり。

○秋色櫻　上野公園淸水堂の傍に在るもの是なり、俳女秋色、ある年の花の頃、その木蔭にて

　井戸端のさくらあぶなし酒の醉

と云へる秀句をものして以來、秋色の名を櫻に付けて今に名高し。

○淺黄櫻　又の名を鬱金櫻と云ふ、花の色は黄褐又は黄綠にて、一重の物も千瓣の物もあり、之が綠の葉に雜りて咲き出でたるは仲々に奇觀なり、赤阪の氷川神社にウコン櫻と呼びて此の種類のものあり。

○薄墨櫻　花は單瓣にして細く小く、色あくまでも白し、而も莖と葉とは共に紺青にして薄墨の如し、

○二度櫻　二段咲の花にて、一度開花の后其の中心より再び蕾を出て花咲くなり、隨つて開花の日數も長し。

○遲櫻　桐ヶ谷の八重咲にて花形稍々小さく、又た紅色を帶びたり、他の櫻に遲れて吹くが故に、古歌にも「靑葉がくれの遲櫻」と讀まれたり。

○不斷櫻　單瓣白色の花なり、四時花咲きて斷ゆることなければ此の名あり。

○墨染櫻　藤原基臣みまかりし後、深草の山に葬りたるに、上野岑雄といへる人悲みてよめる歌

　深草の野邊のさくらし心あらば
　　今年ばかりは墨染に咲け

これより深草にある櫻を墨染と呼ぶに至れりとなん、

○香櫻　花は千瓣にして紅色を帶び、香氣最も高し、

以上は文學上より分類したるものなるが、此の他にもなほ夥しき種類あり、されど眼を轉じて植物學より分類すれば、左の十三種に過ぎず、

(一)姬櫻、(二)高砂櫻、(四)庭梅、(四)ゆすら梅(五)糸櫻、(六)彼岸櫻、(七)み山櫻、(八)豆櫻、(九)山櫻、(十)吉野櫻、(十一)寒櫻、(十二)目白櫻、(十三)しろ櫻

花の美を知るは獨り文學のみかは、科學的に分析して造化のなせる植物美を研究する亦面白かるべし。今や都は柳櫻をこき交ぜて春の錦を織りなせば、櫻の研究を試むるには最も好時期也。

閨秀小說一覽評

擔當記者

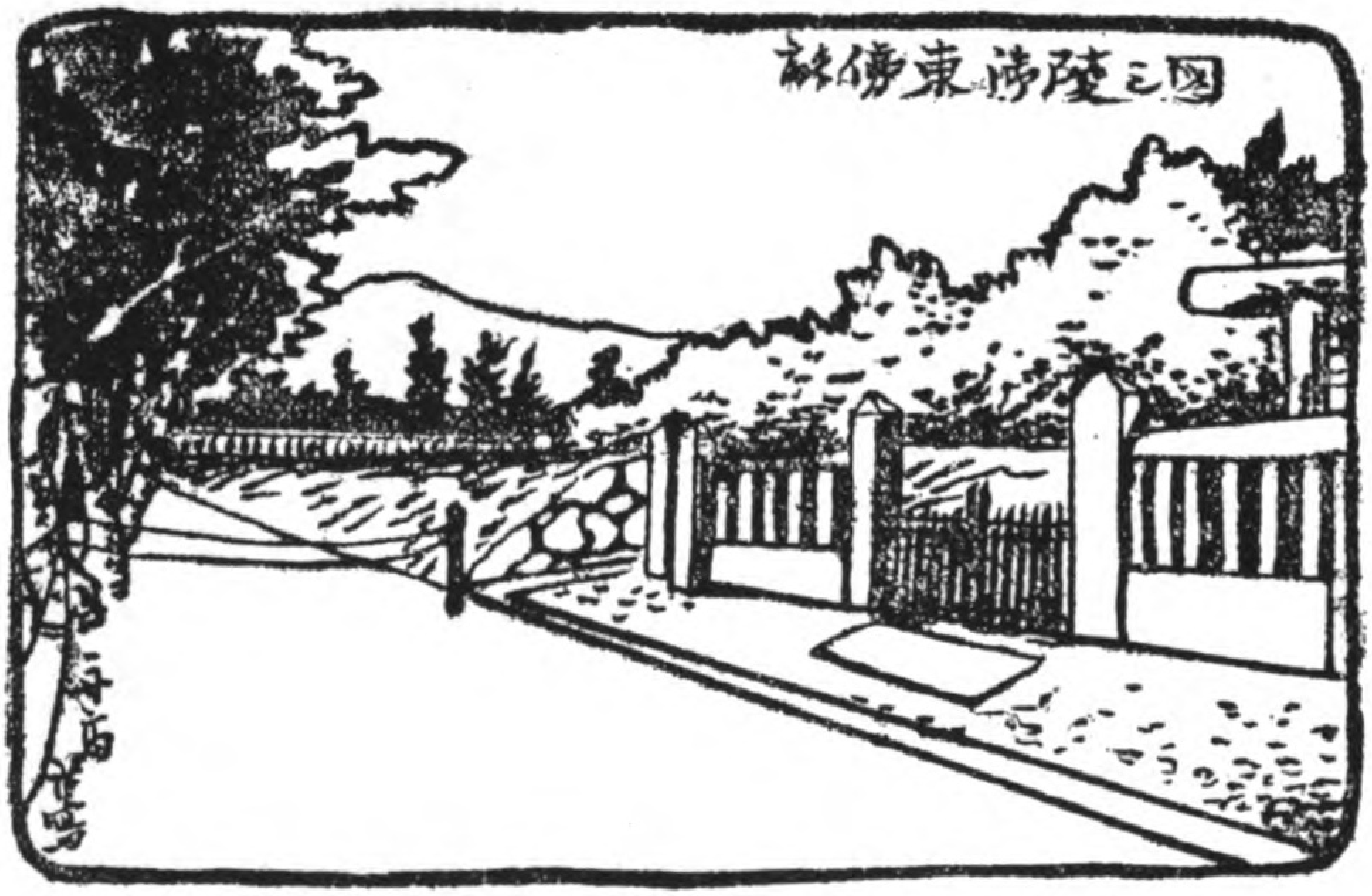
數千の犧牲を供して旅順を開城せしめ、數十萬の大軍を役して敵の主力を奉天に殲滅せしめたる此の戰勝國人の抱負の如何ばかり大なるかは今俄かに知るべからずと雖も、今回女學世界が戰勝の紀念として募りたる閨秀の文章に就て見るに、其の多くは從來曾て見ざりし雄大渾厚の氣の含まれたるに徵して自から其の然る所以の偶然ならざりしを知る。中に就て應募小說二百餘種あり、評者は約一ヶ月間の日子を以て反覆丁寧に之を熟讀せり、始めはその文章を玩味し、次で其の結構を見、而して前後の關係、着眼、着想の用意のある處を討究して巧拙を見、以て徐ろに之れが評語を加へたり、評語或は當らざるものあらんと雖も、評者は斷じておのれの好む處に偏せず、おのれの欲する處に淫せず、虛心平氣、唯自から信ずるまゝを記して正直に發表せしのみ、是れ諸孃の手に成る金玉を、猥りに筐底に埋藏するものにあらざるの實を示さんのみ。

△白菊　　楠井松子

秀子と名づくる一佳人あり、當世風の才子にして而かも前途有望なる學士園田武夫を人知れず戀ひ居たりぬ。秀子の父は武夫を女婿として相應はしくは思ひしかど、母なる人既に財產に心を屬して森雪雄なる一紳士に秀子を許婚しぬ。秀子は人事の不如意をかこちつつ千秋の怨を抱きて雪雄に嫁ぎぬ。武夫之を聞いて又密かに遺憾の情ありしも今は如何ともすべからざりしなり、一年春色駘蕩、人花に醉ふの日、端なく兩夫婦は櫻が岡の公園に相會す。秀子、武夫と相顧みて一語なし、無言の裡に無量の感慨生ず。この際若し基督をして言はしむれば、彼等は其の心の裡に相姦しつゝあるなり、然り誠に相姦しつゝあるなり、斯る境遇にある人の妻は元より不幸なれど、斯る妻を持てる夫こそ眞に不幸の極ならずや。

△當れ丸　　島田ます子

鴨緑江畔陣營寂たる夜、歩哨の任にある豫備少尉花木梅雄は今しも遠く千里の故郷の事を追懐しつゝあるなり、三年以前の事、戀に悩みし事彷彿として眼前に顯はれ感慨頻りなりき。翌くれば五月某日、九連城の激戰戰酣にして梅雄は遂に彈丸の見舞ふ處ろとなりて重傷を負ひぬ、只見る野戰病院第三號室、寢臺に横はりて呻吟せる梅雄の枕頭一個の佳人ぞある、嗚呼これ我が悩みの主たる戀人綾子が看護婦となりて傷者を勞はるものならんとは、綾子は梅雄に謝罪せり、是れ即ち此小説の筋なり、されど梅雄が懊悩の素因明かならず、又綾子が謝罪の意も



大和名勝（一）

十分ならざるは遺憾なり。

△花の顔　雪洋女史

岡崎中將の養女操子がその許婚たる虎尾少尉が出征中遼陽にて戰死したる悲みをうつしたるものなり、月に叢雲花に嵐の浮世のさまざま世にありふれたる物語ぞかし作者秋田の人。

△節分　室屋美子

維新前まで去る大身で仲間若黨に送り迎へされし家の子が節分の夜に辻占を買るといふ話、明治十年頃の小説の材料としたらば立派なものであッたらう。傳へ聞く會津戰爭の時白虎隊に加はりし一人明治の世に活き殘りて今は郵便の配達をなせるとかや。

△旅枕　古矢さだ子

貧苦の裡に永々と病める良人を介抱して回復せしめたる芳江といへる貞女、その良人が徴集されて戰地に赴き居る事を書きたるものなり、萬里長征人未だ還らずの情掬すべし。

△春　風　　花子女史

唯ふは〳〵としたもので、筋も結構も、想も何もない散漫な書き方です、要するに筆者は幼稚な御方でせう陸奥の人。

△傾く月影　　高田義子

人間の智慧盛りといふ五十男、而かも二十歳を過ぎし二人の子ある立派な親爺が年若き娼妓を引き入れて妾となし其の正妻を追ひ出せしかば正妻は他家へ嫁らんとして其子に別を惜しむといふ筋なり。土臺人を馬鹿にした話にあらずや、四十過ぎたる家の主婦が何の理由もなしにをめ〳〵離縁されるも馬鹿な話であるがその又離縁された女が二人の子供を捨て他家へ再緣するといふも聞へぬ話。

一體こんな愚にもつかぬ材料を取ッて小説に書き立てるといふのは大いなる心得違ひ、チト御工風あッて然るべしだ併しこう申すのも眞實の老婆心だ決して惡るく取ッて下さるなよ、作者は京都の人。

△姫百合　　池田きん子

お芳といふ妙齢、三千圓の仕度金で進まぬ方へ嫁入るといふ世の不如意をかこちたる哀れな物語なり、これも誰故不心得なる父親が借財より起りし事、實の母さへ世にあらば斯る憂目に遭はざりしを義理ある母の中なればと喞つ乙女のいぢらしさ、さても世の中に兩親揃はぬほど子の爲めに不幸なる事あらじと思はしむる筆ゆきや〻小説の體をなせり、作者は大阪の人。

△血染の片見　　尾崎小浪

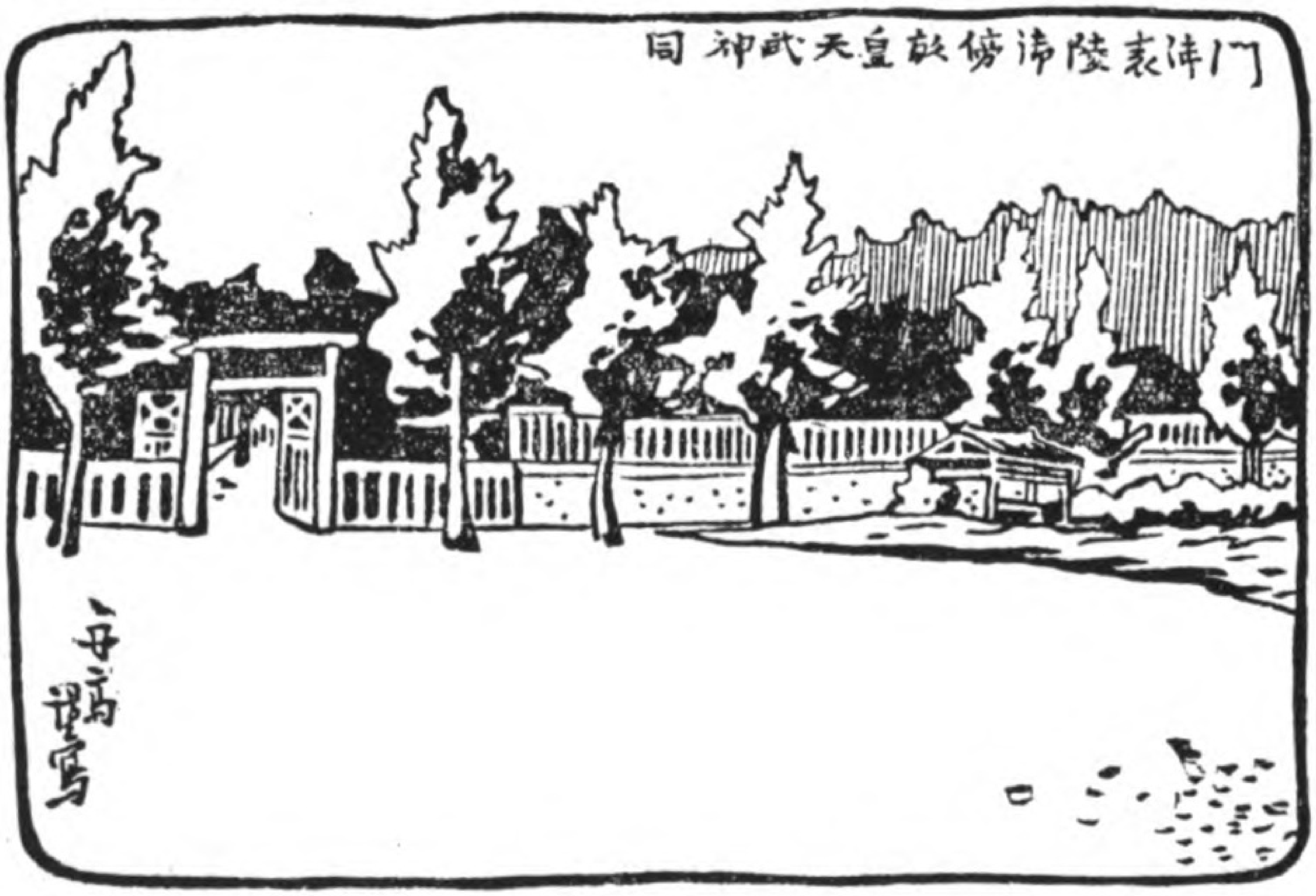
大變に御骨を折ッて御書きなすつた樣ですが、これはどうも文に成ッて居りません、お氣の毒ですがもう少し文章を御習ひなさい、斯く申のは、貴孃が妙齢に似合はぬ詞の數を澤山御存じで、それを使ひこなす技倆も十分備はつて居ると見とめるからです。噫、惜しい事、丁度よい道具を持つた大工が家を建てる事を知

らぬと同じ事です、御勉强なさいまし。

△春の光　伊藤素志子

一少尉あり許婚の女に冷遇せられて憤然として征途に向ふ、彼れは許婚の女を以て我が生命となしたり、而かも今故なくして彼女に辱めらる、何の甲斐ありてか生きん、如かじ唯潔く身を敵彈の的として死し、以て壯烈の名を留むるの優れるにはと、斯くして彼れ一少尉は拔群の働を爲し、功錄せられて芽出度凱旋す、許婚の女、以前に變る待遇を以て彼れを迎ふ、凱旋少尉の意甚だ不審なり、就て其故を問ふ、女曰く是れ征途に臨んで君を憤發せしめんと欲しての策なりしよ、我が父少將の入智慧なりしよと。

大和名勝（二）



△從軍畫家　あき子

水上秋畝といへる畫師、陸軍少將柳生武志の知遇を得て少將の令孃幸子を妻とし、夫婦いとむつまじく暮せしが折から日露の開戰となり、秋畝身は軍籍にあらねども苟くも國民の本分として此際何とか一身を國家に捧げたきものと覺悟し、我が天職を發揮して國恩に報ずるは此時なりと少將に乞うて大本營の從軍畫家となり、鴨綠江より鳳凰城を經、至る處に於て壯烈なる筆を揮ひ遂に斥候に附隨して深く敵の動靜を寫出し、恐れ多くも叡覽の榮を得るに至りしが、端なく敵彈を蒙り名譽の負傷者と

して後送さるゝに至るといふ筋なり。別に取り立てゝ稱するほどの作にはあらねど、義氣壯烈、志ある美術家の抱負を遺憾なく發揮して懦夫をして立たしむるの慨ありといふべし、作者は東京の人。

△聞かぬ氣　平　博子

戰爭以前に露領へ出稼ぎしたる女あり、時局の爲めに居留民一同引上げて遙々と西比利亞の曠野を半年間さまよひ千辛萬苦して漸く歸朝し、やれ嬉しやと我が故郷へ歸り來れば、年老いたる兩親は既に亡せ、力と賴む一人の兄は軍事探偵となりて滿洲へ入りしが、端なく露兵の爲めに捕はれて銃殺され、空しく志士の名を留めたりといふ、時局に因める物語なり、五年といふ長き年月異郷にさすらひ、始めて故郷に入りし時の感情、さては我が家の荒れすさびたる光景など、多少感慨を惹くべき處ろなきにしもあらねど、筆未だ幼稚にして情趣至らず、且つ話の筋唐突にして條理甚だ錯然たり、所謂意は到つて體の備はらざるものなり、恐らくは作者自傳なるべし、上野の人なり。

△柚餅子　池野　みさ子

一少年あり、うらゝかなる春の日、一人旅して只ある田舍の掛茶屋に憩ひぬ、茶屋に妙齡の女あり、粧はねど天然の麗質花も羞かしき容色なり、少年そゞろに眷戀の情を催ほして低徊去り難きおもひを描きたるものなり。小說としては奈何なれど一部詩的の筆、纖細なる寫生の文としては相應に成功したる點なきにあらず、されど全體幼稚にして筆意十分暢びず、且つ少々うるさしと思ふほど同一の句の疊出せるは拙とや言はむ、今少しく洗練の功を積まざるべからず、文中梅を形容したるところ、

一輪の滿月古りし臥龍に云々
玉を綴つた鐵扇の枝に云々

など、どうやら物になりさうな形容にて、幼稚の割合に奇拔なところあるは愛たしといふべし、作者は能登の人なり。

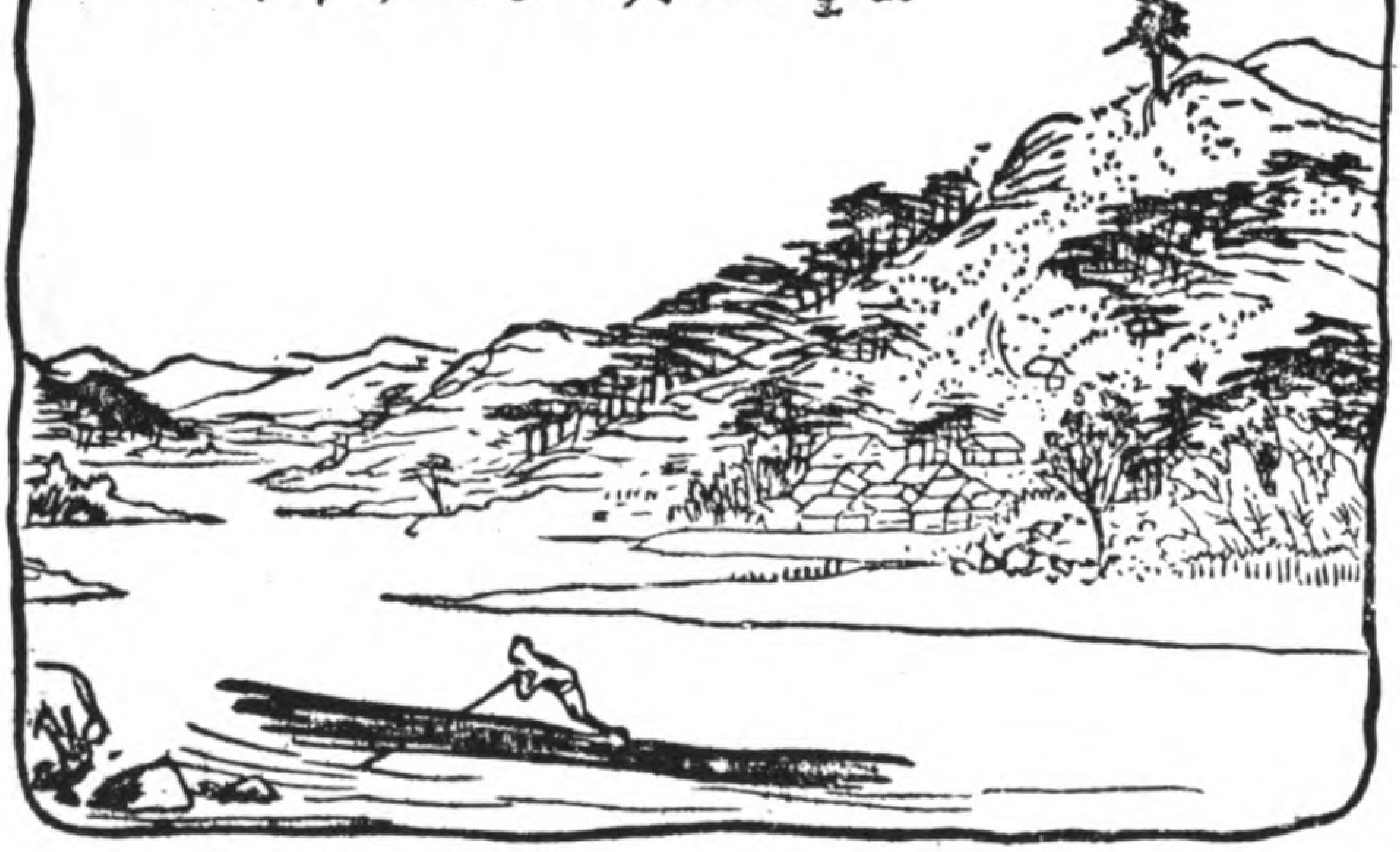
△義理の柵　葉山　しげ子

筋はチト時代的なれど、かい摘んでいへばざつと左の通り。

東京に女義太夫竹本若繁なるものあり、相州逗子附近の古谷某なるものゝ親切にほだされて遂に其の子を宿すまでの交情となれり、古谷某には他に許婚ありて夫婦となる事能はず、依つて生みし子を渡して双方の交情を斷つ（作者曰く飽きも飽かれもせぬ中をと）以て其の間の如何を知るべし、若竹は浮氣稼業のやうなれど流石は女氣の我が子忘れ難く戀しきまゝに門附に姿を變じて我が子の容子を見に行くといふ筋なり。十八世紀頃の日本には隨分尤もらしく思はれし小說なり。

△花のとばり　須藤正子

稚き作なり、まだ乳の香失せ



吉野川ヨリ上流妹夫山ヲ望ム

大和名勝（三）

ぬやうな子の口吻ありて可愛き心地さる、東京の人。

△白百合花　二葉女史

どうも小說といふものはね、糸を手繰るやうに筋ばかり書ても無味乾燥でおもしろくはないが、さればとて叢から蛇が頭を出すやうに、によこり〳〵と話の頭が突き出て、主意がどこにあるか分らぬのにも困ります。さて其筋は鳥居坂の東洋女學校の卒業生中野百合子とその幼な馴染なる高等商業學校の卒業生伊藤徹との間の戀を描いたものですが、書き方が例の叢中の蛇的でちつとも感興を惹かないのは殘念です、作者は東京の人。

△浮世の緣　酒井秀子

花子といへる病める美人の事を

書いたものなり、梗概を述ぶる事能はざるまでに散漫のものなり、其儘恰も堤防決して、水の氾濫せるがごとし。

△苔の花　　みどり女史

肺病を患へる妙齢女子の身の上を書きしものなり、筆ゆきたど〳〵しくして讀むに堪へず、作者は神奈川の人なり。

△漁火　　米川秋香

山陽邊にある漁村の光景を描きしものなり、文稚弱にして功を成さず。

△書畫會　　勝山たけ

その光景は達者に書かれたり、まづ才筆といふべし。文中少女を寫せる中に「年はまだ十二三、櫻の蕾の樣な乙女、粗縞の琉球紬の單衣に牡丹茶の袴を腰高に穿ち、丈長の髪をふつさり結び下げ其の髻の處ろにかけられた桃色のリボンは花に睡れる蝴蝶のやう――」とあるあたり、新米の作者とは受取がたき筆つき也、されど是は小說にあらざるを奈何せん。

△流星光底　　竹田きみ子

鬼少尉と呼ばれたる岡田濟、聯隊長より或る任務を授けられて、敵陣中へ躍り込みしもその目的を達する事能はざりしを悔いて自殺せんとする處を、有馬中隊長に見つけられて思ひ止まるといふ筋なり、客氣に焦る冒險士官の意氣を寫してやゝ其面影を彷彿するに足るべきものあれど、その冒險的任務が敵將ステッセルを生擒するといふの一事既に有り得べからざる事實なるを以て興味索然否徒らに讀者をして啞然たらしむるに終れり、作者は新潟縣の人。

△普門品　　菊谷きみゑ

仙臺の長者議員赤松某に二人の娘あり京子といふは姉なれど妾腹なり、妙子といふは妹なれど正腹なり、春雨しと〳〵と降る花の三月妙子は文學士野村某と結婚の式を擧げて紅燈緑酒の賑ひ今酣なり、姉なる京子懊惱に堪へず深くおのれの一室に閉ぢ籠りて身を嘆むは何ぞ、今夜の盛宴男の中の男として見らるゝ、妹の花婿なるその人は曾ておのれが思ひを焦して夢にも

忘れざりし戀人ならんとは、何だか夢のやうな小說なり。

△墓畔の美人　増野やす子

青山の墓地にさまよへる一佳人あり、此頃戰死せる其の兄の奥都城に詣でゝ、眞情をうち明かす、その述懷を描きしものなり、情切にして感深し、されど小說としては飽かぬ心地する。

△許婚　白菊

田園のかざりなき戀をうつせるものなり、實に綾羅を纏ふも心に傷みあれば野末の小屋の乞食にも劣らん、心だに淸く安らかなれば身は埴生の小舍に住ふとも金殿玉樓にもまさりつべし。作者は陶淵明を理想するの人歟、筆は巧みならずとも又拙

大和名勝（四）



なりといふべからず。

△軍人の妻　山脇幸子

出征の夫より度々無事の報知があつたので、いつも嬉しく思ひ居たりしに、最後の書面讀む間もあらせず、電報一通、戰死を報せしは何たる無情ぞ、そも軍人の妻は始よりその覺悟なかるべからざりしに。

△十六夜

春まだ寒ききさらぎやこゝ長崎の夕ぐれと書き出された一篇、讀んで行けば、あつけない事まあ殆んど小說の體を成し申さず作者はお幾歳ですか。

△春の磯邊　中西狂女

兄は豫備兵として滿洲の野に出征し、留守宅には年老たる父が生

活の助けにとて小舟に乘りて漁を爲しけるその貧しく寂しく暮らせる家の少女が毎日海邊に出て沖の方を眺めつゝ波にあこがれつゝあるといふ丈の事なり、元より詩にも小説にもならぬものなり、作者名古屋の人。

△磯　波　　三谷ため子

伊勢は津で持つその伊勢の津に武夫といへる青年あり、幼な馴染の澄江と未來を約して互に清き理想を描きつゝありしに、澄江の兩親は武夫の家に產なく、身に勢力なきを侮り娘の前途を富家に嫁らすを得策と思ひけるにや、名古屋の金滿家某より千圓の結納を取りて、武夫との仲を裂かんとなしけるを、武夫憤慨して身を捨んと覺悟し、その身の豫備少尉の役にあるを幸ひ、無理に召集を出願して、いさぎよく戰死し、以てその憤悶を晴らすといふ筋なり。文の整はぬ所以にや、筆の到らぬ故にや、讀者の感を惹く事能はざるは遺憾なり、作者は伊勢の人。

△女の操　　佐藤長子

一體小説に限らず初心な人が文を作るには想を練り文を練り、筆の付けどころを愼重にしてかゝるものですのに、あなたは一體まアどういふ御所存でせう、亂雜と言はふか、不熱心と言はふか、遣り放しと言はふか、誠に評者はその意を得るに苦しみます、況んや梗概を書くに於てをやです、どうかもうちつと拙でも構ひませんから鄭寧に書いて頂戴な、成程貴孃に言はせれば狩野古法眼は馬の履で蟹を書いたぢやないかと仰やるかも知れないが、馬の履で蟹を書いてその蟹が活て居る樣に見へるのは古法眼の筆力、不用意な處ろに精神が籠つて居りませう、けれどもこれは千練萬鍛、腕を鍛へた法眼にして始めて成る業、未熟の人の眞似る限りではありません、貴孃の文には所々天才の閃きが見えて居ります。若し苦心經營して忠實に御遣りなされば屹度名人に成れる性質ですよ。

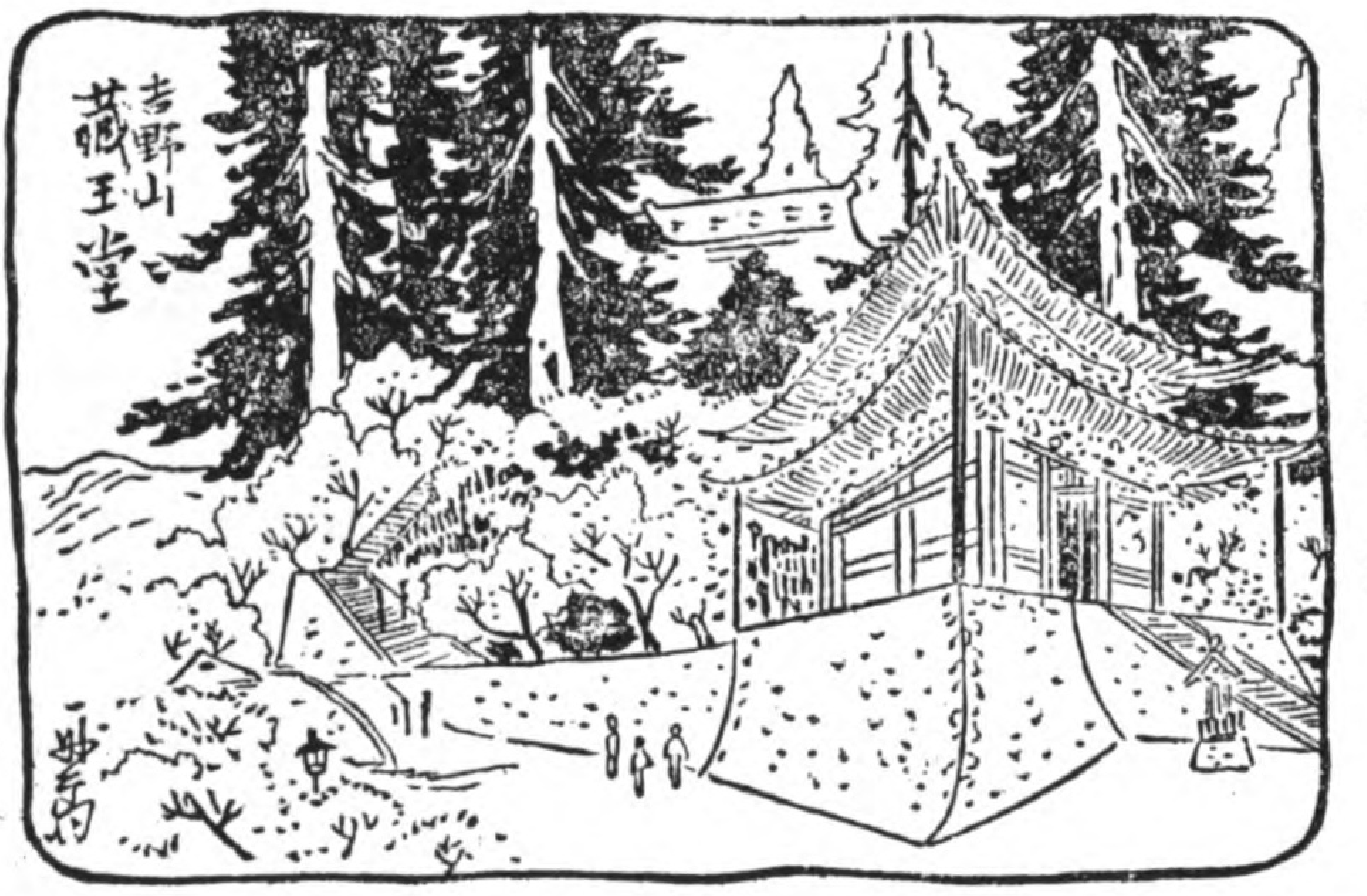
△貸　家　　石川愛溪子

因緣屋敷の事を書いたものなり、鬼庄といへる殘忍酷薄の高利貸が、其の借家の借主を殘酷に取扱ひし爲め、怨靈其家に殘りて後人に祟りを成すといふ筋なり、

二十世紀にはあるまじき小說なり、作者は東京の人。

△新夫婦の墓　梅原賢子

遼陽の戰爭に天晴れ名譽の戰死を遂げたる陸軍大佐高山正の未亡人節子が操を破つて尼となりしを、親類緣者寄り集つて無慈悲にも節子を離緣し、高山家の財產を分配し、節子をして身を置く處なきに至らしめしかば結局節子は身を墓なみ入水して死すといふ筋なり、陸軍大佐の未亡人ともあらうものが、こんな意久地のない事でまあどうしませう、一體人の妻たる者が何の因緣もなく、他人から離緣されるといふ法のあるべき筈はなく、況んや亡夫の遺兒のある身



大和名勝（五）

に於てをや、作者は切りに節子に同情を表して書いて居るけれども、讀者は節子の只勝甲斐なく馬鹿なるに愛想を盡かさんと欲するのみ、況んや亡大佐の叔父なる人が大佐の遺言と稱して千圓の手切金を紙に包んで節子の前に突きつけるが如き無法なる事あるに於てをや、誠に言語道斷世にあるまじき沙汰の限り、軍國の不名譽この上なし、よしやこんな無慈悲な親類があつても公平なる世間がこれを放棄つて置くべきか世にこんな母親を持つた子供位災難な事はありません。噫（作者は東京の人）

△軍事郵便

中學生小松明雄と高等女學校生徒岩井初子とが御定まりの戀に落

ちて學校を放逐されたといふ事を書いたもの、新聞の雜報を少しく氣取つたものに過ぎない、ダガ書き方は拙手な方ではありません、評者は大に敬服して居りますが何分香ばしい材料でもないですからね——。

△御兄樣　柳　子

平和な家庭兄妹の愛を書いたものです、兄は出征軍人の大尉、母は世にいふ賢母、世間より尊敬されて美はしい一家の容態目に見るごとし、されど筆は幼弱なり。

△眞の友　田口紫子

女子大學生徒の取チマリのない、亂暴な、有樣を書いたものである、下宿屋の二階で男女相合して、カルタ取り、小說評、ピヤノの合奏、しだらのない事限りなし、もしほんとうにかうなら大變な事ですが、まさかにこれは小說でせう。

△親友　ほとゝぎす

高山繁といふ法學士と其の妻綾子はまだ新婚匆々である、晩餐の席上で兩人のろけ合て居る處ろへ花園登といふ友人尋ね來て相變らずお睦まじいなと冷かす處ろを書いたものである、何だか讀んで居て齒が浮くやうである。

△ゆく春　くちなし姫

新平民の娘松枝はその村の富豪の若旦那秋山義郎を戀ひぬ、所詮及ばぬ戀と諦めながらも、思ひ切れぬが人の情、義郎は豫備少尉として出征しぬ、遂に名譽の戰死を遂げぬ而して松枝は如何になりしか作者之を語らず、讀んで飽かぬ心地ぞする。

△梅の馨　主人公は藤田隆子

これも又青年男女の戀をうつしたもので、巧みもなければ、熱誠もない、唯だら〳〵と冗長な事を書き流したものといふに過ぎない、評者當惑せざらんと欲するを豈得べけんやです、又感服せんと欲するも豈得べけんやです。

△天職　なみ子

荒木貞雄といふ大學生と高等女學校の優等生なる某花子とは遠い親類である、兩人暑中休暇で國へ歸つて居る間に互に往來して樂しく語らひ、或時は二人して

眺望に富んだ山に登り、或時は清き流れの谷川に誘ひ、或は緑蔭に汗を入れ、などして、現在を夢の如く、將來の希望を語りつゝ密かに未來を約して居つた。然るに卒業の後貞雄は某博士の女婿となッて花子との約を破ッた、花子は失望して慈善事業に終身を委ねる事にしたこれがこの小説の筋である。

△苅萱堂　高橋　花子

これは變哲なものでございます。小説でもなければ詩でもない言はゞ丸なき空鐵砲、只ボン〳〵と音のするばかりです。

△さだめ　土　筆

何だかヒドク貴族的のものです、評者はどうも判斷にこまりました、これは御鬮を引いて見ねばわかりません。



大和名勝（六）

△看護婦　千　鳥

敏夫は花子を戀ひぬ、花子は知夫と約束あり、而して知夫は戰死せり、敏夫も又失望して死せり、こゝに於て花子は赤十字社の看護婦となれり。性格も何にも顯はれぬ乳臭小説なり。

△花ぐもり　柳田のぶ子

片輪の子ほど可愛いものはないと世にいふ譬へ。盲目の妹、其の不自由を思ひ遣ッて姉はいとしくて堪らない、その光景をうつしたものである。文章は極めて自在、意の至る處ろ筆又伴ひ、情の向ふ處ろ文又隨ふといふ甘さは十分である。其やさしき姉娘を形容した

文に

「緑の滴る樣な黒髪を前髪豐かに妃殿下卷に結つて露の名殘のまだ干もやらぬ白薔薇を無雜作に挿した品位の貴さ名は雪枝と云て十八九遠山の霞さながらの眉、秋の水の清けさを聚めた瞳、春猶淺き海棠の蕾のやゝ綻んだ微笑おり〳〵手を引た妹と、さも睦まじげに築山を繞り泉水を迂つて、藤の棚の下を櫻並木の方へと歩を移してゆく。」

その盲なる妹娘の美音を形容した文に

「清い優しい唱歌の聲……。宛から久方の天つみ空の霞の帷帳を洩るゝ天女の御歌の夫れかあらぬか……神々しい聲は此宏き庭内に澄み渡つて陽炎燃ゆる午下りの春。何に驚いてか睡眼見らしきが李の梢より海棠の茂みに枝移りした其途端にハラ〳〵と散る白蕾紅瓣。池の緋鯉の浮きつ沈みつゆるぎ波紋の三つ四つ七つ渚の蘆の芽角ぐむこと寸餘。白李に映りて八重山櫻今を盛りの春の装ひ其下蔭のベンチの上に腰打かけし二人の姉妹はたとふれば夫れ櫻と海棠。」

△流れ星　　廣瀨みゑ子

稚氣いまだ失せず、今二三年の修業を要す。

△檐下の乙女　　遠　子

△空たのみ　　加藤正子

△えにし　　てる子

△涙ちゃん　　あき子

△斷髮　　宮下琴子

以上五篇、匆卒の執筆と見へていまだ體を成さず。

△うづみ火　　永田康子

これは先年懸賞小説で甲賞取りし水橋康子の作と大樣似たる處ろあり、暗合といふも小説には不思議な事而かも其名は同じ康子、不思議な縁もあるものなりとおもひうるはしけれども取らず。

△春のころ　　野の露子

達筆なる書き方なれど、小説として人の感を惹かんとならば今少しく文に工風ありたきものにこそ。

△海の一曲　　吉田仲子

地方富家の娘田鶴子が、有爲の青年野村秀夫が海外へ渡航するを送り、別れに臨んで、平素ひそめる戀情の湧起して感に堪へざりしといふ極めて單調なるものなり。前後の記述繁雜にして甚だ剪裁に意を用ひざりし。

△濱の歌姫　　中川きよ

文章はすら〳〵としてよし、されどいまだ小説の筆にはあらじと思ふ。

△無情　神奈川かすみ

身から出でたる錆といふ事あり、人の運命のはかなきを寫せるものか、唯々其新聞三面記事的なるを奈何せん。

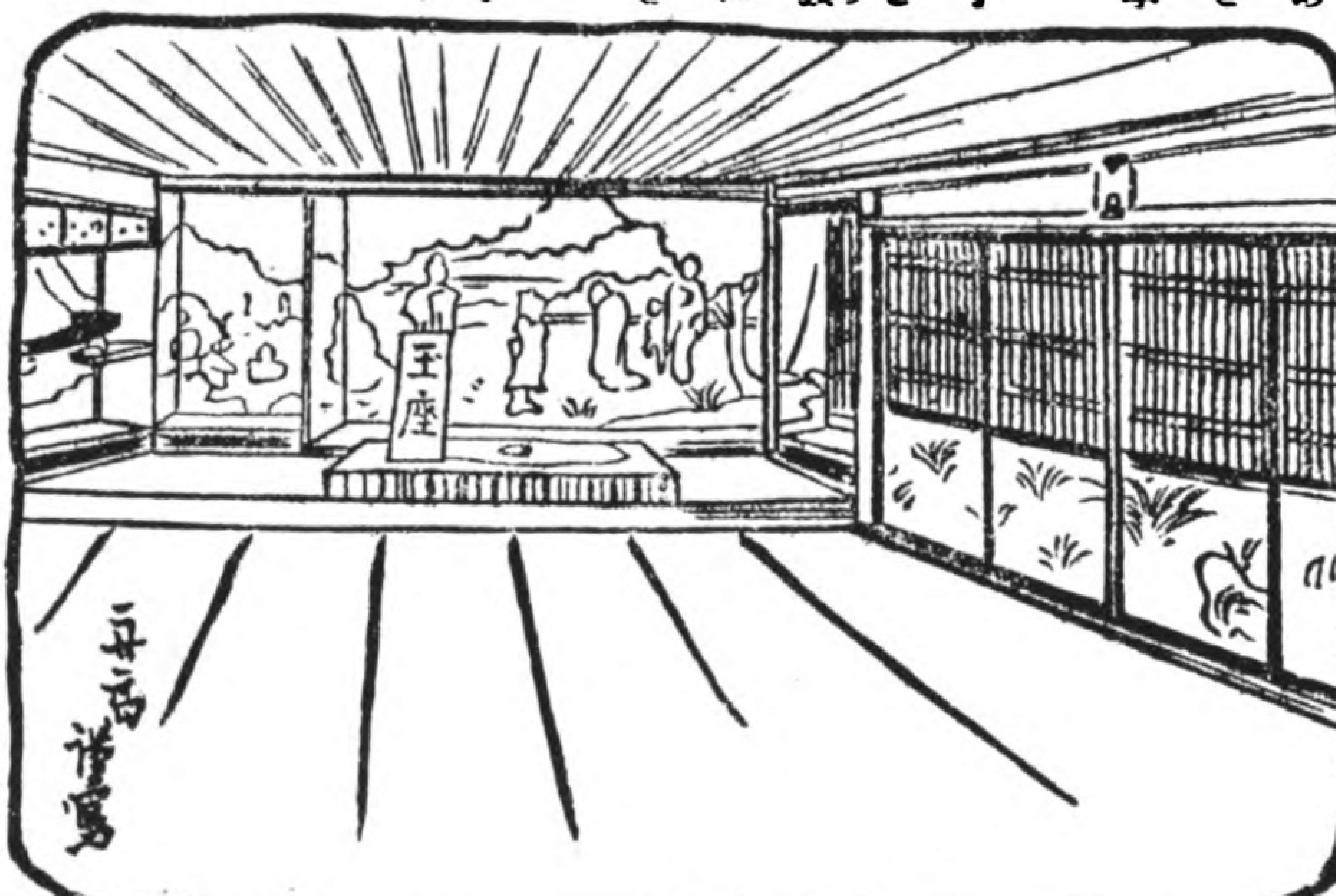
△復讐　靑山せい子

若き士官の妻、良人の出征を慕ひて戰地へ看護婦として出發せり。良人戰死して其身も遂に異境に消へゆけり、壯烈なれど陳腐を免かれず。

△筑紫野　池末　純子

婦人の抱負と希望と、理想と、生活問題を書いたものである。小説ならば人情の變化、世情の冷熱を寫すべきであるのに、一も此の點に書き及ばざりしは遺憾なり。

大和名勝（七）



後醍醐天皇吉野の行在所

△梅の薫　ふみを

これも又出征軍人に關係ある小説未亡人が献身一事業を創立したところの美談である、事は美ならざるにあらざるも今の世にあり得べからざる事柄にして而かも趣向は澤山有觸たるものなれば評者は只陳套の二字を以てこの作を評するの外に辭なきを奈何せん。

△世捨人　宇井かつま

大層奇麗な手蹟でした不斷の身だしなみさぞとおもはるゝ御方なれども、まだ御幼弱な御すさび、今一いき御勉强遊ばせ、乾度うまく御成り遊ばしますよ。

△あづさ弓　桂木　澄江

これはあた緣は異なもの小說

といつたやうなものでせう。洋行がへりのパリ〳〵音樂師桂木澄江孃は高い望もあツたのにとう〳〵同郷の人小和田信次と申す會社の雇ひと結婚した。これも縁因です。澄江さん決して不足におもつてはいけません日本はまだあなたのやうな天才を妻として歡迎するほどに開化?はして居ませんからね。

△初日の出　　　村田蝶子

仙臺にて獨眼龍政宗以來累代砲術の指南役たりし印南義高も時勢の變遷世に用ひらるゝ處ろなくして空しく槽櫪に朽ち居たりしが西南の役に志願して出征し戰功あツて勳章まで賜はりしも其後官を辭して專ら祖先傳來の秘法を巧究し大に其筋に用ひられ今回再び志願して砲兵隊附の士官となり、旅順に於て砲と共に戰功顯はしたりといふ話なり、時にこの老士官の娘八重子なる男勝りが數年前姿を變じて旅順に在り密かに軍事探偵を務め居たりといふ奇遇談は少々受取がたき話也。

△後かげ　　　かげらう女史

優子といへる妙齡の女子あり、その友清子と相携へて菫花吹く春の野に散歩す、兩人は今同じくその學校を卒業して豫ねて相約せる如く東京なる女子大學へ入らんとせるなり。然るに優子の母は繼母にしておのれの意志を强いてまで入學する事能はざるの事情あれば殘念ながら、清子への約を果す事成り難しとの事を打ち明かして同情を求むるといふ處ろ、この篇の主眼にして。すべて清子の自叙体を以て描き出せり。客觀的に描かれたる優子の內氣なる意志の强からざる性質、其の弱々しき風貌、其の艶にして而かも衣に堪へざる纖麗の態度などよく描かれて女性の筆としてはまづ相應はしき作と許すべし、末段の一章、清子が女子大學を卒業して歸りし時、親友なりし優子は既に亡き人となりて、花のおもかげ見るよしもなく、身世の變化轉た凄然の思ひありしといふあたり、情趣、凄婉亦得難き筆といふべし即ち左に

私はけふも亦優さんのお墓へおまゐりしやうと思つて手には優さんのお好きの菫を束にしたのを持つて椿落る山路の草をわけてゆきました暖かい春の日でのどかな小鳥の聲々に交つてどこからか折々鐘

の音も聞えて來ます。向ふの一むら草木の茂つたあたり黒い垣の廻つた處――そこに優さんは安く眠つて居られるゝです、私はうつむき勝にたどつて居ましたが、フト人の氣はひに驚ろいて見ますと優さんのお墓の方から出て樒の木陰を彼方へと行く人の影、品のよい丸髷姿の奥樣風、あの方も優さんのお墓へお参りして居たのかと、思ふと何とく懐かくして、しばし後影を見送つて居ました、白い半ケチを面に當て、始終うつむき勝に居られましたが、フト振り返つて私の方を御覽になつた其のお顔が、どこやら優さんに、私ははつとして眼を見はつた時もう後ろ影は木々のしげみに隠れて――

的是れ優子の實の母ならずして何人、清子今にして知る優子が家の家庭に深き恨みのありし事を。是等の事情すべて側面より筆を着けし事故朧ろ氣なれども情



大和名勝（八）

意は十分に酌み取らるべき作なり、又前段優子が物思ひに沈める樣を描きて。

白い鰈はやゝしばし墓のあたりをめぐつて居ましたがやがて力なげに去りました優さんは其ゆくへを守りながら――

流石は義理ある母に添ふて幼きより苦勞せし人の趣を寫して躍然たり同じく優子の風姿を描きたる條に。

ツト立ちあがつて墓を手にもつたまゝ今しもほんのりと向ふの森の上にあらはれたおぼろ月を仰がれました、裳のお袴を裾長う――この時の優さんのお姿は實に女神のやうに尊く見えました。――

△愛の其花　わかば女史

どうもこの戰勝國の日本、軍國多事の際なる今日に

斯様な小說の出來たのは、怪しからぬ事とは思ひますが、併し不完全なる人間の情といふものは大概こんなものかと思ふとそゞろに悲しくもなりました。話は海軍士官敷島武夫の新未亡人、澄子に就ての事である、澄子は一昨年の暮十七歳にして武夫に嫁して三月ばかり、同棲の夢未だ暖かならざるに武夫は出征して決死隊に加はり遂に名譽の戰死を遂げたのである。澄子に姉あり美代子といふ、美代子に許婚あり、名は聞ぐ、二十四五歳のハイカラ風、這奴不屈千萬にも澄子に戀慕して、口說かんとせしを體よく澄子に刎ね付られたといふ筋に評者は解釋したり。併し筆に同情ある故か相應に讀まれました。

△浮世　稚見ざくら

松島靜子といへる女教師、そが内縁の良人なる松代大尉が出征中戰死せし報を學校の教員室にて聞き愁傷の面を包みて悶へ苦しむ様を描けり。文は幼稚なれど情致凄婉少女の作としては割合に出來たり。

△夜嵐　松林うた子

武麿と呼ぶ華族の若様あり、二十八歳になりていまだ定まれる夫人なし、親戚の誰彼れと取り持つ人もあれど武麿更らに取り合はず、結局獨身生活が氣樂なりとて悠々たり。是れ仔細なくては叶ふまじ仔細は何ぞ、過ぐる年の春一日、いづこにてかこの若君心やさしき一人の乙女に遭ひぬ、この乙女は女學生なり、女子美術學校に勉强中なりときゝて心ひそかに戀ひ慕ひぬ、二人の間は隔つれども遠くて近きは男女の中と清女の戒の通、いつしか互に憎からずおもひ居たりしに、其後ち乙女の父、突然田舎にて身まかりぬ、乙女急をきゝて歸省しぬ、爾後相見ざる數月、男堪へ兼ねて文をつかはす、その返事によれば女はいつしか病の床にありて危篤の趣なり、男驚ろく、扱いかんとも爲し難し、女逝きぬ、臨終の一言、武麿様に只一目御對顏を得たしとの切なる詞あり男無常を觀じて遂に獨身主義となりぬ。

軍國講談

旅順の名物

貞水

人生中の不幸にも種々ありまするが、幼なくして父母に別れ孤兒となりまするくらゐ、憫れむべき者はございますまい、先般旅順の降將ステッセル夫人が、將軍と共に旅順を去り、今や靑泥窪行の汽車に乘移らんとする際、警備として其所にをられたる我軍隊の一將校が、此一行に對して麁略なきやう萬々心を注られました末、何氣なく夫人の引連られたる子供を見て、聊か異樣に感じましたるところから、圖らずも夫人に對つて、校「此お連になッとるは皆貴君のお子ですか。」夫「イヽエ此は妾の子ではございませんが、我子よりも大切に育ッてやらねば成んので、此旅順にて孤兒となりましたる者が參拾六七人ございます、是は皆戰爭のため父を失ない母に別れた者ですから、妾が皆引受て我子と心得て此先養育いたす覺悟でございますが、其中にも此所に連ましたる三人の女の子、此七歲になりまする男の子は、別して大切にしてやらねば成んのでございます。」校「アー然うですか、扨は此大切になさるといふ子供の父母は、何れも戰爭の爲に最期を遂られたのでございますか。」夫「然うでございます。」校「シテ其男のお子の父は何と申される方です。」夫「ハイ」とステッセル夫人が思はず濕む瞼を手巾で拭いながら語られましたは、抑も此男の子の父といへるは、旅順の露軍中に最も驍勇の聞え高く、我土屋師團長をして敵ながらも天晴の勇猛かなと感嘆せしめたる、西部西比利亞第三狙擊隊の大隊長ニコラウキッチウフ其人であります、デ此大隊長が既に旅順に向つて出發をする其一月ほど前、尤も以前から大病でありし妻が、哀しげなる聲を出して夫ニコラに對ッて、妻「モシ妾は此病氣の爲に迚も快なる見込はございません、お醫師は癒るとのお言葉もありますけれど、何うも妾は快なるまい

と思ひます。』ニ『イヤ其樣な弱い氣を出さんで、何うしても快なッてくれんければ可んヂャないか。』妻『イヽエ何うも快ならふといふ考へがございません、就ては妾がない後には此子でございます。』と其時六歲になる男の子を枕邊に招で、妻『是れウヰチャン、妾はモウ病氣のために快ならないから、お前は此母がない後は温順しうして、父樣の言ふことを能諾て、學問をして立派に成身をしておくれよ。』と子供の手を緊かり握ッてホロリと落す一雫、ウ『母樣、然う言んで早く快なッて下さい、温順しう致しますから何うか早く快なッて下さいまし。』此時母は兩眼より迫來る淚を瞼で留め、妻『モウ母は此世の別れであるから、今言たことを能忘れぬやうになさい。』傍らよりニコラが、ニ『ヤ萬一の事があれば、決て此方が傍らを離さず、和女の望通り學問もさせ、立派に成身をさせるから安心をしなさい

妻『ハイ、何うかお傍を離さないやうにお賴申ます。』

ニ『イヤ夫にはモウ和女も覺悟をしてをるやうだから實は話すまいとは思ッたが話して聞せる、先頃から屢々軍人が當屋敷に出這入りをするのは、日本を討といふ我國の計畫であるから、今日にも命令があらば、此方は戰地へ直ちに出發をするのである、がお前は此通り大病であッてみれば、實に戰地へ出發をするのも心殘りである、併し萬一の事あらば、此子を連て戰地に赴く覺悟であるから、片時も傍らは離さん、充分養育をするから安堵しなさい。』妻『其事は仰せなくとも、最早日本と開戰するぐらゐのことは、妾も軍人の妻ですから能承知してをります、何しても此子はお賴申します。』言ふうちに漸次に容子も惡いから醫師を迎へるモウ可んといふ、六歲になる子供は母の傍らに進み、ウ『母さま温順しうしますから生て下さい、温順しうしますから生て下さい。』二聲申した時に冷やかな笑を洩して、ニコラの妻は息を引取ました、ニ『アー憫然なことぢや、今死する身をもつても、我子のことを斯まで案じ煩ふて死にをつたか。』流石强氣の軍人も暫し淚にくれゐたり、斯て翌日耶蘇の式をもッて葬送も濟してしまひました、先懇篤に佛事をも執行なひ、間もな

く命令があッて彌よ旅順に出發をする事になッた、ところが此ニコラが妻に對ッて、片時も傍らを離さんと誓ッたのは無理はない、親戚とてはなし、六歳になる子供を預ける人とてもない、と言て此子を刺殺して戰地に出るといふわけにも往ない、何しろ戰局は如何になるかは知んが、兎もあれ旅順に連行ふといふので爰に出發の用意に及び、我子ウキチヤンを膝近く招で、

ニ『コラ其方は憫然なものぢや、今回小國なれども武備嚴肅なる日本を相手として、我露國が戰を開くに臨んで、母に別れし其方、此西比利亞の長途を父もろとも旅順に向ふのぢや、時しも寒風皮膚を刺がごとく、此父ニコラは兎も角も、ウキチヤン其方には風なども冐せたくない、宜か父もろとも此から戰地に參るのヂヤぞ。』ウ『父樣母樣は連てゐらッしやらないのですか

ニ『コラ何を申してをる、母は一ケ月程前に死したではないか、ア今更のやうに母などの事を申すではない子供といふ者は死したる母を知ながら、未居るが如くに思ッてをるか。』と憫然彌増して鬼のごとき兩眼よりハラ〳〵と落涙を致しました、其内に馬卒は乘馬の支度をして玄關前へ牽出す、ヒラリ打乘るニコラ大隊長從卒はウキチヤンを抱て大隊長の乘たる馬の前鞍へ乘る、ソコデ一旦兵營に至りまして部下を率ゐて汽車に乘込む、大勢の見送人又は有志者が一時に叫ぶ萬歳の聲と共に、汽車は烟りを殘して發車する、數日を經て旅順に到着した、直にニコラ大隊長は極東總督の官邸に參りまして、アレキシーフ總督に到着の屆を致して後ち、ニ『偖總督今回私は一人の幼兒を召連ました。』と爰で亡妻の終焉の期の遺言でもあるし、母を失なひたる子であると思ふと、何となく憫然に心得るから、始終我傍を離さず置たい、何うか此儀はお聞置下さいと願ふ、總督も是を承まはッて、武人の常として斯る悲劇も往々あること、何にせいニコラ大隊長は氣の毒の身の上である、望み通り伜は傍らへ置て宜しいと言わけで、又此子が片時も父の傍らを離れずにゐる、然ば兵を訓練する時にも馬の前鞍に乘てゐる、其内に日本の軍隊は益々盛んに金洲の邊に斥候をかけるとい

ふ事は旅順に相分る、ソコで此南山は旅順の先咽喉と言て宜くらゐ、此南山南關嶺に充分防備をして、日本軍を此處で喰留るといふは素より露軍の計畫であッた然るに南山は明治三十七年五月二十六日、然しも堅固に築いた半永久的の要塞なるに、日本の一師團三師團四師團此が向はれまして、頗ぶる激戰の後遂に露軍は打敗られて多大の死傷を出し、殘れる將校士卒は命から〳〵逍々の體で旅順へ逃て來ました、此時ニコラ大隊長は天地も割るばかりの大聲をあげて、ニ「コレ其方等は日本の兵に破られるとは言甲斐のない奴ヂヤ、腑甲斐ない奴ぢや、殘念なことには此ニコラ、自ら進んで南山の防備を承まはらんと申し出たるに、軍の戰略上より此旅順に殘りをりくれと言れ、是非なく此防備の擔任をいたした、然るを殘念なるかな、我南山にあらば必らず日本軍を破りて、一かな敵を深く引入るやうなことは有まいに、見苦しき爾等の擧動、此旅順の要塞に腰抜武士は一人も入れん、進寄り來らば切捨るぞと腰なる劍を抜手も見せず振冠り、礑たとばかり白眼つけた、ヤ何うも其聲の大きいこと耳を聾するばかり、殊に勇氣と申し大いに怒ッた其權勢に、敗兵將校は震えあがッて旅順の要塞に入ることも能はず、如何なさんといふ折から、此體を見兼てコンドラ少將、馬をあふッて夫に來り、暫しニコラ大隊長の容子を見てをッたが、コ「大隊長」ニ「ア此に少將閣下」「今お怒りは御尤もです、然れど戰爭といふものは、敗軍をしまいと戰てをッても、其時の兵の巧拙で敗軍をすることもある、何も此處に來た將校士卒が惡くッて南山が破れたといふ次第ではない、日本軍の戰術に陷ッて南山が破れたのですから、貴官は腹を立んで、是に來りし者を要塞に入れて、復役に立べき時もあるから、何うか容赦をしてやッて下さい、本官がお謝罪をするから。」ト振返ッて一同に、コ「コラ大隊長にお謝罪せんか」ソコデ重立た將校が恐る〳〵進んで、ヤ「大隊長、何うか敗歸の罪は御仁恕を願ひます、其代り此恥辱は他日必ず雪ぎます、萬一此要塞に日本軍が取詰ましたる時に死を決して防ぎますから、何うか此度の事に御容赦を願

ひます。』ニ『實に言甲斐のない諸君等であッて、発し難ないのだけれど、コンドラ少將閣下のお執成であるから本官が発してやる、以來我手に附て必らず戰功を期なさい。』將『ハイ。』ニ『若卑怯な擧動をされると、其時は容赦なく切捨るから。』將『ハイ』是で漸く敗兵將校を要塞内へ入ましたが、此大隊長の勇氣によッて大いに旅順の士氣を振ふことになッた、然るに八月に至り日本の第拾壹師團、土屋中將の率れました軍隊が劍山砲臺に向はれました、是が非常な激戰だ、數回激戰の後漸うに此砲臺を占領する、然るに敵の逆襲にて又奪れる、復奪返す、遂に露兵が破れて彌よ此砲臺は日本軍に奪れたといふ時に、ニコラ大隊長の許に此が知ると、ニ『言甲斐なき我軍の有様かな、イデ〳〵其儀なら我日本軍を破り、此砲臺を回復す、爾等續けッ。』と馬に跨がり、六歳になる男子を馬の前鞍に乗て、佩劍を抜て眞先に進み、四中隊の中から撰み出したる三百人の精兵を從がへ、驀ぐらに劍山さして進み來たり、ニ『ソレ日本軍を打ち破ぶッて此の砲臺を回復せ、突貫と〳〵。』下知におよんだ、此の



ステツセル將軍

體を見て日本軍は、スワ逆襲ぞと銃口揃へて射撃出しますするを、物ともせずに馬を進める、ピユー〳〵と飛來る銃丸は雨霰のごとく、此の時ニコラ大隊長は、心の内に思へらく、我戰死は素より覺悟の上なれど、頑是なき伜を死なすは憫然の至りと從者を顧みて、ニ『ヤよオステーサン、爾是より旅順に戻り、此ウキチヤンをステッセル將軍に頼め』と言ながら兩手をかけて、前鞍にをるウキチヤンを下す、從卒馳せ寄つて、オ『心得ました、若様の御身は確にお保證申します、御安堵遊ばしませ。』と言ながら抱取る、ウキチヤンは振返つて、ウ『父様何故私をお下しなさる、何卒御一緒に。』

ニ『イヤ其方は危ないから、オステーと共に旅順へ歸つてをれ、追つけ父が宜いお土産を買て戻るから温順う待てをれ。』ウ『イヘ〳〵私が危なければ父様も危ない、死ぬなら御一緒に、何卒お側に。』此一言に鬼の如き大隊長も、思はず涌出んとする涙を瞼で押へ、ニ『ヤア時移ては詮なし、オステー早往け。』叱りつけられて從者は、己の脊に銃丸を受るも、主人の身に負傷させじと、ウキチヤンを抱いたまゝ涙と共に旅順の方へ駈出す、ニコラ大隊長今は心やすしと、部下を勵まし劔を振て眞先に進む、此時敵味方の距離僅と相成ツたれば、日本軍も銃に劍を付け、下り拳に取て近づくところの露兵に突かゝる、此方は素より期するところと、双方銃劍の先を突合ツて、チヤリン〳〵〳〵と火花を散す、後方より打出す銃聲は益々猛しく耳を劈くばかり、鬨の聲は天地に震動して、ガーラ、、、ドーンピユウー、ポカツト來る、實に其現況は雨と言はふか霰と言ふか、激しく飛來る此中を物ともせずに、突立〳〵突まくり、或は組打刺違ひ、忽ちの間に此ニコラ大隊長の一隊が決死の勇戰に、二度まで日本軍に奪はれたる此砲臺を、茲に奪返して露西亞の國旗を高く揭げ、ワアーワツと一同が勝鬨をあげた、此時我土屋師團長、望遠鏡にて遙に此現況を見られ、土『敵ながらも天晴れの勇猛賞すべき奴だ、併し此まゝには捨置んからソレ奪返せ。』此命令に再び日本軍が震天動地の勢ひをもツて、是れに進まれたる時には流石の精兵もゴロ

〱打れる、ニコラ大隊長惡鬼羅刹のごとく、劍を振ツて部下を勵まし、『爾等此ところに屍を曝せ、一歩たりとも退く者は我手にかけん。』と駈廻りて下知したれば、暫時は支へましたが、風を切て飛來ツたる砲彈間近きところにて破裂し、其碎片がニコラ大隊長の、右の耳の下から左の咽喉へ貫いて、アツと馬から落る、續いで部下も大半打死或ひは重傷を負て、三度目にして此砲臺を全く日本軍が占領する事に相成ました、是土屋師團の戰功によりますところから、我四國の名所劔山の名を取て、此山を紀念の爲劔山と命名されました、偖從者オステーサンは、主人の悴をステッセル夫人に能賴んでの後、主人の安否心もとなしと取て返すと、最早砲臺は日本軍の手に占領された後であツた、切ては主人の遺骸なりとも尋ね出して弔はんと、大膽にも只一人此砲臺に忍入んとして、端なく哨兵の爲に發見され、愍じ抵抗しませんければ仁義の日本軍、何とて斯る者の命を絕ませうや、夫をオステーサン、劍を拔て立向ひましたる爲、主人の跡を追て遂に此所に落命した、其行ひは血氣に



ステッセル夫人

逸ッたとは申せ、其志しは賞すべき者であります、先はニコラ大隊長の遺子ウヰチヤンのお話しは斯の如く。

續いて三孤女のお話、是は丁度昨年二月の九日旅順沖の大海戰、我艦隊から發射まする砲彈の一部は、遙かに旅順の市街に達して此處彼處に破裂するので、市内の騷動は鼎の涌がごとく、氣の早い露西亞人は逃げやうとする、支那人に荷物を頼む、其荷物をもッて支那人の姿が見えなくなる、跡を搜して駈廻る、新市街から舊市街まで支那人の腕車を雇ふ、毎も貳拾錢ぐらゐが此騷動で、私拾圓あります、夫でも大切な物は頼んで積込んければ成んといふ現況、其中に子供三人の手を引て馳往く女、是ぞアルチヤンゲリオルスキーといふ露國陸軍歩兵大尉の夫人であります、夫の營所へ來て、夫「貴夫戰爭が始まりました、子供等を連て立退たものでございませうか。」大尉は平然として、大「イヤ騷ぐ事はない、斯不意に日本軍が寄るといへど、當要塞は堅固であるから決て仔細はない、併し日本人は勿々油斷の出來ざるものだ、兼て日頃申し聞てある通り汝は軍人の妻ヂヤて、能子供三人を預ッて屋敷にをるやう、我先祖は露國が中興西比利亞に手を入る時に大いに忠義を盡した、其血統であれば我亦先祖の名を汚さんやうに、今回の戰ひには充分盡す覺悟であるから、子供の事は能汝に頼んだぞ。」夫「夫では貴夫にも御機嫌よう。」爰で妻子に能言聞てアルチヤン大尉はアレキシーフ總督の許へ來て、自分の思ふところを述て時の至るを待ました、其うちに日本の軍隊が滿洲の地へ現はれて來る、ソコデ此旅順の背面に進んで來る日本軍の狀勢を知ため、將校偵察を出すことになつた、其時アルチヤン大尉は自ら進んで、ステッセル將軍に對ッて、單身にて此偵察を遂たいと願ました、將軍も大尉の膽力を能存じてをりますから、是を許して彌よ偵察に出ることになつた、此時妻は三人の子供を連て大尉に會ッテ、夫「貴夫は此から單身偵察をなさるんで。」大「アー今ステッセル將軍ともお別れをした、就ては日本軍隊に近づくのだから、萬一の場合には死は覺悟してをる、汝は女ながら子供等の教育を過まらぬやう、

又成身致したる曉は家名を汚さんやうに頼みます、モウ直に往から、此りや汝等は母の言ことを能守つて、立派に成身するんだぞよ。』子『はい、父さんは此から何方へ往らつしやる。』父は是より陛下の御爲に日本軍隊の狀況を偵察して、軍人の意旨を貫くのであるから、最早汝等に會んかも知んぞ、と口に言ねど以心傳心爾の眼をもつて我子等に示す、何となく別の惜まれて、如何に軍人といへど心は安からず、其まゝにして大尉はズッと要塞を立出る、子供の手を引て夫人は、アルチャン大尉の姿の見えなくなるまで見送つて居ます、是から大尉は危險を冒して其任務を盡し、何の村落には日本の兵が何個中隊進んでをる、何の方面には師團の司令部があつて兵力は何のくらゐ、と其報告の確實なる大いに軍事上に利益を與へもしたので、將軍からも度々賞詞を受ました、然るに日本の軍司令部が椅子山の下まで進んだ頃ほひに、其近傍まで近よつて偵察をした、既に旅順から水師營に至る三十里堡まで來ると、向ふから支那人が兩人連で進て來る、此方は夫を

意にも留ず擦違つて歩を運ぶと、件の支那人は立留つて振返り、支那語で、甲『彼りゃア露西亞の將校に違ひない。』斯う言つたのが耳に入つたから、アルチャン大尉も訝しな支那人だと思つて、此りャ道を變て一旦旅順の方へ引返さふと、彼是小半町ばかり山の根方を早足に廻ると、彼支那人が先に立て日本の將校、半小隊程の兵を率て來て、乙『待てー。』と聲がかゝる、しまつたりとアルチャン大尉、逃れんとして見たが何分にも日本兵に取卷れた此將校は露語が出來ると見え露語をもつて、將『此りャ爾は露軍の將校ならん、單身にて此邊まで何用あつて來たか。』大尉は默止てゐる、將『速かに答あらざるからは師團に引立て訊問をする、サ同道せい。』此時大尉は、大『如何にも我は露國軍隊の大尉である、日本軍が此邊まで進しと聞き、我單身偵察のために參つたのである。』將『ナニ單身偵察、ソレ引捕へよ。』兵『參れッ。』と兵士がバラ〳〵と進んだ、大尉は是までなりと軍刀の鞘を拂ッてサア來いと構へた、將『小癪な事をするな、打々。』といふ命令、忽まち兵は銃を向け

てパチ〳〵ヒユーと打つ、夫を右に轉じ左に避け暫時抵抗する有様は天晴の勇氣、是がために兵も四五名負傷した、此體を見て某將校は大に怒り、イデ乃公がと軍刀引拔き躍り込んで、將『無禮をするなッ。』と振下す一刀、流石の大尉も眞甲から割れて、血烟りもろともドウと倒れる、ソコデ將校は馳寄ッて此大尉の所持品を調て見たが、何れも認めてあるものは暗語だから少しも要領を得ない、是非なく兵を纏めて其次第を隊長に報告する、早くも此事がステッセル將軍に分りました、ソコデ將軍は大尉の妻を呼で、將『偖アルチヤン夫人、大尉は日本軍に近づいて、遂に露國の軍事偵察なることが分ッて敵の爲に最期を遂られた、眞に氣の毒な事です、併し軍人に恥ざる天晴れの覺悟で、實に陛下に對しては忠義である、其最期は我軍隊の模範となるべき事であるから、何か大尉が遺せし物を持參されよ、夫を棺に收めて葬儀を執行なはふから。』夫人は此時は、夫『夫が然までの功なきを、將軍が然やうに思し召れるとは眞に有難い事、夫では夫が常に身に着てをりました衣類を持參りませう。』と運動の時に冠れる帽子や何か揃へて是を持て來る、ソコデ此遺物を人形のごとく造らへ、夫を棺に收めまして立派に砲車に載て葬式をする、是を大尉夫人は喜で、斯まで將軍が夫の爲になし下さるならば、假令女なりとて妾代ッてお國恩に報いんければならぬ、と堅く決心いたしまして、頓て三人の子供に對ひ、夫『偖お前等三人に言て聞せるお前等の爲には父上、私の爲には夫ハルチヤン大尉殿は、偵察を遂やうと思し召て、日本軍の爲に遂に露顯れて御最期をお遂になッた、定めし御無念であらう、夫ゆゑ私は是から將軍に願ッて、夫の志を繼で日本軍の陣地を偵察して、是を將軍に報告するによつて、お前等は將軍の夫人のところへお預するから、能温和しうするんですよ。』子『はい』爰で三人の娘を連て將軍の官邸へ參り、夫人に面會して何か子供等をお預り下さいと頼みました、夫人は眉を顰めて、夫『和女は是から何うなさるお積りですか。』夫『はい妾は是から亡夫の志を繼で、敵情偵察の任を務たいと存じます、貴女

樣が娘共をお世話下さる事を御承知あれば、直に將軍へ願ッて其お許可を蒙りたいと存じます。』夫人『夫は亦雄々しき御心底、併し御單身なれば未しも、三人といふ子供衆もありながら、然やうなお願は迚も將軍に於て許しますまい、其思し立は枉てお止りなされたら宜うございませう。』

夫人『イヤ堅く心に決しました事、何うか御承知を願ひます。』

夫人『然やうなら兎もあれ將軍にお會なされて、許すと申しますれば私も亦お子さん方をお預り致しませう。』夫人『夫では何うか將軍にお目通りを。』是からアルチャン未亡人はステッセル將軍に會て其許可を請ふ、何と說ても一向に諾ないソコデ將軍も是非なく是を許可ました、アルチャン未亡人は小躍りして忽ち男子の服を着け、是から旅順を出て日本軍の陣地を距る五哩のところまで進んで、細かに敵軍の動靜を取調ること二週間、漸うの事に危ふき場合を免れてステッセルの前まで來ました、而して暗號をもつて認めたる偵察の狀況を將軍に見せましたスルと此報告書が大層なものだ、旅順が三十七年十二月の末まで保ちましたのは、全く此偵察の報告が確實であッたからで、然も夫が八月の事で、其時より五ヶ月間保つ程の偵察を遂



委托されたる孤兒

たといふは天晴なことで、併し婦人だけに報告が終ると、心身の疲が一時に發して氣絶をする、醫官を招で手當をする忽まち我に復る、將軍は未亡人の手を取て將「ヤ實に男子も及ばん和女の誠忠、定めし本國皇帝の許に上奏をしたら、陛下も御滿足に思し召れるであらふ、天晴〳〵。」と賞られたくらゐ、ソコデ三人の娘も母が無事で戻りましたるから大層喜びました、随分日本でも奥村助右衛門の妻は、越中末森の城に夫が籠城の際、自ら甲冑に身を固めて夫を助け、部下三百の兵を勵まして前田利家公の援兵を待つ、實に天晴北越女丈夫の名を後世に傳へましたが、敵ながらもアルチヤン夫人の如きは、夫にも劣らぬ女丈夫であります、然るにアルチヤン未亡人は、此偵察だけでは未充分でないと深く心に決しまして、或夜夫となく子供等に言聞け、其寢靜まるを待て又もや男の服を纏ひ、密かに我家を立出で何れへか赴いた、斯とは知ぬ子供等三人夜明て目を覺すと母の姿が見えない、母樣〳〵と泣叫く中に、長女は最早十一歳になりまするゆゑ、妹等兩人を慰め賺して不圖傍らを見ると、枕邊に普通の書面が置てある、子供心にも前夜母が言しことの胸にこたへ、其手紙を懐中に入れ、兩人の妹の手を取て涙ながらにステツセル夫人の許へ來る、夫人は其書面を讀で見ると、夫の志ざしを飽まで繼たい死は素より覺悟の上、就ては娘三人の養育の幾重にもお願申す、成身の後は人れも軍人の妻になしたまはれといふ意味だ、ソコデ是をステツセル將軍に見せる、將軍は其書面を見つめて、將「アルチヤン大尉と言ひ夫人と言ひ、斯も揃ひし夫婦があるか、實に天晴れなる事である、併し何れに參りしや。」と部下の將校に申し付けましてアルチヤン夫人の行方を捜索すると、其翌曉松樹山に日本兵と刺違つて死してをつたる事を發見する、是を直にステツセル將軍に報告をする、屍骸を是へ持てといふ、擔架に載せて運んで來る、ステツセル夫人其他將官將校ズウーツと並んでをる、見れば勇ましき白の男裝軍服にて天晴な最期、實に夫と申し妻と言ひ斯ばかり忠を盡せしのみならず、要塞の防備に取て最大の功を奏

してをるによつて、茲に夫人を旅順總督と同じ資格の葬式をする、夫から直に此事を本國の皇帝へ上奏をする、で陛下よりステッセル將軍へ軍中獨斷の論功行賞を許されまして、茲に將軍よりアルチャン夫婦の遺せし其長女へ對し、セントゲオルギー勳章を手づから授與した、此勳章は我金鵄勳章と同じく武功拔群の者に限り賜るものにて、乃でステッセル夫人は、何うか此長女を始め三人の子は、我傍を離さず立派に成身をさして、兼て其母の遺書にありし通り軍人の妻になるやうにして遣たいと語られたと言は、勿論然もあるべき事でございます。（完、石原明倫速記）

故里の養父へ

東京市小石川區大塚坂下町十八番地　河井登世子

今日しも試驗は終りを告げ候て、肩の重荷を下したる樣の心地せられ、お友達の誰彼打ち連れて、村里の方に散歩して、積る心の塵をはらさんなど誘ひ候を、体よく斷はりて、久々の御無沙汰御詫旁々、都の春の花の色など御傾り申さんと、机に寄りかゝり、墨おし流す折柄、小使が持て參りし父上樣の御手紙とる手遲しと、おし披き候が、あゝこは夢にてはあらざるか、

お兄樣には今度〇〇の會戰に身を國家の爲め犧牲になされしとの事、妾は夢かとばかり、思はれて、暫しは人心地も失せ侍りし、

さはいへ、武士の戰場にて死なむは、こよなき名譽と聞き侍れば、今更の樣女々しく涙など落さば、死出の冥路にありと聞く、三途の川の水嵩など增して、御兄樣の御障ともなり候はんかと、せきくる涙はおし拭ひうち拂ひ侍るも、悲しみはいやが上にも、增さり候あゝ夢にてあれかし、父君樣にて候らはずや去歳國を出で玉ふとて、都へ上り玉ひし時、妾、道しるべして見せ參らせし、上野の櫻は今を盛りと咲き亂れ居り候を、かの花の下にて、「花は櫻に人は武士、兄さん！　この櫻の下の武士なる兄さんと何とたとへましよう」と戲れしその樹は今に尙盛りに侍るを。

父君樣にて候はずや、まことわが筆は亂れ候、亡き父親にも勝りて、何事もわが爲に心を碎かせ玉ひ、ゆかしくなつかしく思ひ參らすわが父上に、などてわが心をうち明さで果つべき、人の心は歌にもよみ琴にも彈きて、悲しさは悲しさ、嬉しさは嬉しさを寫すと申し侍るを、あゝ、いかなる歌、いかなる琴も妾が心を寫し得ず候を、まして水莖の跡、やつなう怪しさに、幾度か認め直し、認め直し候も、かくばかり寫し難き妾が心と思ひとりし。「薄き縁とあきらめて」に讀み及びし時はたえ入るばかり泣き侍りし、思へば薄き縁かな、

願はくば、父君の嫁とわれを許させ玉はゞ、これほどうれしき情はあるまじく候、いつまでも亡き兄上の許嫁とわれをおぼしめさば、これほどうれしき縁はあるまじく候、

若き未亡人

芙蓉

某月――日、陸軍步兵大尉尾寺氏の夫人茂子の君を靑山高樹町の邸に訪ひぬ。夫人は現總理大臣桂伯の令孃なり、尾寺大尉は今回奉天の激戰に於て名譽の戰死を遂げられたる前途有望の靑年士官にして、陸軍部內に於て嘖々の評判ありし人にぞある。

此の日は曇天なりき。淡墨を流したる如き天は濕り氣を帶びて、春の風銳どく、電車の裡、人は猶外套の襟深く埋めて、外氣を厭ふ風情なりき。滿洲軍一方の大將たる黑木將軍の邸前より程遠からぬ處ろに、小かなる一と構への邸あり、これ即ち尾寺氏の留主宅なりき。

よしや位、人臣を極め、顯榮中外に溢るゝばかりなる權門、豪族の家に人となりし身とはいへ、緣ありて一たび嫁けば、女は良人に從ふものなり。良人の運命は即ち我が運命なり、其の父君は鵝冠を戴き駟馬を聯ね、堂々として廟廊の間に周旋するの人なりとも、其娘の嫁しては又其の豪華を夢想だもすべからず。桂伯の令孃たる夫人も、尾寺氏に嫁しては尋常一士官の妻たるべし。昔日の榮華を思ふべからざるや勿論なり、されど世には多年、乳母、日傘に育ちたる人の、やゝもすれば親里にありし時の榮耀を忘れ兼ねて、兎角に我儘、氣隨なるが多しとかや、記者は日頃よりして這般の人には多少必らずこの事あるべきを期しぬ、然るに今回尾寺氏の未亡人を訪ふに當りて我が豫想の全く反せるは聊か意外なりし。夫人は紹介狀も持たざる未知の一記者の訪問に接して些の胸隔する處ろなく、慇懃に迎へられ、その坐敷に請じ玉ひき。

若き士官の未亡人、權家に育ちし人の令孃、結婚後一ヶ年の同棲だも全ふせずして亡くなられし人の妻、是等を思ふにつれて記者が夫人に對する、同情の念、惻怛の情は、油然として起り、面をあげて其人を見るも、氣の毒に思はれたり。悲慘とは斯る時の情ならんか、記者は眞に悲しくおもひぬ。全く今の境遇に在ら

る〻夫人の心を想像して。

只見れば室内には線香の香、充ちわたりぬ。床の間の祭壇を蔽へる白布、裝飾せる寫眞挾に、軍裝せる勇士の面影まざ〳〵と立ちたまへり。

供物の二三品、賑はしかるべき祭壇もいと淋し氣に見へたり。

記者はまづ祭壇に拜して退りぬ。夫人は、取り亂して居て、誠に失禮をと禮を述べたまひぬ。夫人は愁ひの面を記者に見せじとや、雄々しく取り做したまひつ、語らる〻やう。

「軍人の妻は元より覺悟でございます。ですから戰死したからとて今更歎き悲しむなど〻は、思ひ寄らぬ事で、夫は未熟ながらも國の爲め、陛下の爲めに一命を擲つて盡さうと、今般多年の宿志を遂げたのでございますから、嘸かし本望だらうと、皆々喜んで居るのでございます。只殘念であらうと思ひますのは折角參つて戰爭の終局を見ずに仕舞ッたのが心殘りであらうと存じます、これからは目出度く凱旋遊ばす方々を御祝ひ申して、良人の英魂を慰めやうと思うて居ります。

また不束な私もどうか御國の爲め、皆樣の御引立を蒙つて、繃帶巻でも致すつもりで居ります。御覽の通り、今迄は身體の弱い爲め、田舍へ參ッて居まして皆樣のいろ〳〵と御骨折遊ばすのに、空に日を暮して居りましたのが、口惜うございます。

私には三人の子供がございます、十八の年に嫁入りまして茲年で六年になりますが、結婚後良人は方々へ出張致します又私は病身で轉地をしたりして同棲致したのはまる〳〵一年位でございます。子供は皆男子ですから、これから一心に養育して、どうか父の後を繼ぐやうにと、それはかり樂みにして居ります。

私ですか、左樣、これから音樂でも學びまして分相應の務めを致したいと思ひます、ハイ歌は松波先生に御厄介になりましたが、不器用な質ですから一向上達はいたしません、まア不勉强なんでせう。それにとんと學問の素養がございませんから。」

夫人は謙遜して申されたり。その服裝は、地味な矢

がすりに黃八丈の羽織を重ねられ、江戸紫の極めて目立たぬ模樣ある襦袢の襟をつけられたるは、記者の眼にいた〳〵しく思はれたり。夫人は三歲の折、懷かしき母君に永訣たまひし不幸の御身の上なりきお墓の前に楓のやうな手を合せては、幾度かその父君をして斷腸のおもひあらしめたまひしとか、こは夫人を育てまひらせし乳母の語りて今も猶涙の種なりとかや、三歲の折母君に訣れたまひし夫人は今其良人を亡ひたまひて、二十年の昔しの哀れを。こゝに又その遺子の上に見たまはんとは、夫人は實に不幸なる方にぞある、人生に福薄きもの、强ち其日を暮らし兼ぬる貧者に限るものかはとは、世の人の云ふ處ろなれど、夫人の如きは、その貧者にもまして歎き多からん、聞く夫人の母君は三浦子爵の令妹にて賢夫人の聞へ高かりし人なりと、今の桂伯爵夫人はその後參られし方にてこの未亡人を育てまゐらせしは專ら今の伯爵夫人なりしと。

記者が夫人と話しつゝありし時、四歲になりたまへる令息は無邪氣なる顏して、祭壇の方を指したまひ「父樣お茶召上る」とのたまひぬ。こは父君の逝りたまひしを知りたまはず、稚な心に供へまつりじ、お水を見てお茶とおもひ斯くはの給ひしなり。

夫人は我が子のこの稚き樣を見て淋しげに笑みたまひぬ、如何に物哀なる樣なりしよ之を思うて記者は夫人の御心を察しつゝ、さながら胸を抉らるゝおもひをなしぬ。

因にいふ尾寺大尉名は藤三父は長洲萩の藩士にして伊勢大廟の神官を勤めたる國學者なるが、大尉は十三歲の時出京して伯父なる新山陸軍監督長の家に寄寓し、小、中學の課程を歷て陸軍幼年學校に入り、三十年一月を以て士官學校を卒業し、同年某聯隊に入り小隊長より聯隊長の旗手に擧られ、三十三年北淸事變に際して渡淸し各所に轉戰殊功あり勳六等并に金品を賜はり同年淸國皇帝より第三等第二双龍星を賜與されたり。而して今回の戰爭には得利寺、大石橋、遼陽、沙河等に奮鬪し、黑溝臺の戰には中隊長として敵陣に突擊し偉功あり軍團長より感狀を受くるの光榮を得たり。大尉人となりて溫厚にして其風采は整正、平素他の趣好なく、唯新古の戰術書を讀むを唯一の樂みとし、這般該博の知識を有したりといふ。(享年三十一)

くさぐさ

▲東洋婦人會　清韓婦人古來蟄居幽閉の陋習を破り社交場裏に導くことは頗る困難なりしにも關らず、東洋婦人會の設立以來、公使館及び在京の清國婦人は勿論神戸横濱在留の婦人に至るまで翕然として東洋婦人會の主旨を賛成し同會の集會には何時も多數清韓婦人の出席を見るに至れり且戰捷の結果清國女子留學生の益々増加せんとする傾向あればとて、同會にては清國公使、青木子爵、長岡子爵等役員會を開き左の三項を決議したり

一　清韓國婦人と親交を厚くするため、鍋島會長、長岡副會長、青木子爵及其他會員の自邸、清國公使館等に於て毎月一回講話會を開き家族的團欒の裏に相互の親睦を謀ること

二　四月十五日清國公使館に於て講話會を開くこと

三　清國留學女生の保護監督の爲に、公使館各州學生監督等の紹介を以て本國父兄との交詢連絡の道を開き又神戸横濱等にては新來留學生のため船着の便を計り、東京に於ては學校の選擇、寄宿舍、日本語講習等につき各種の指導便宜を與ふること

▲軍國の家庭　實業社會の君子人と言はるゝ阿部泰藏氏は過般三田松阪町なる自宅に五十日間出征軍人を宿泊せしめ座敷二間を打通して歡待されしが、其節紀念の爲めに撮影せしものは即ち本誌卷頭に掲げたる寫眞なり、内將校には小西少尉、大地少尉、須藤少尉、財川特務曹長等あり、阿部氏家族は夫人優子、次女隆子、三女富子　四男章藏四女八重子、五男舜吉の諸氏なり、

▲奥樣の締り方試驗法　去る頃下女の試驗法迚手拭を搾らすれば上は能く搾りし上丁寧に疊んで差出し。中は能く搾りて擴げて持參し、下は搾つた儘に差出し下の下は能くも搾らずに持て來るとの事をきゝしが是も然る苦勞人にして上中下の三階級を共通して何處へも出入しつゝある通人の話說なるが一家の取締役たる奥樣と眞に其名の如く締りのあるや否やを知らむと欲せば先づ其家に就きし時に故意に一寸したる事を出來し雜巾を借るに如くはなし能く絞てのある奥樣の司配下にある家には其雜巾までがチヤンと能く縫さししてあるに反して古手拭や襤褸切れ杯を出す家は取締に緩みのある事必定なり云々而して又曰く方今の家庭に新知識分子即ち學校出の奥樣を有せざるは稀なるが如きも學校出の奥樣の上に更に姑を有する家庭は兎も角も新知識先生のみの家庭に至ては藝娼妓の上りよりも不始末なる向き多きは不思議と云ふべし云々

▲婦人の病氣に就て　濱田婦人科某醫學士の語る處によれば今日此頃の春分より夏期に掛け最も子宮内膜炎の發生し或は再發し易きの時にして此病氣が流行病ならざるにも拘はらず比較的多き現象を認むる所以のものは一は春期に關聯せる生理的原因と一は暖氣となるに從て黴菌の發生し易きによるものにして婦人の最も注意せざるべからざる時期なりと

▲金魚の相場　實縫越きに楼館に水ふきかけ稗蒔にギヤマンの金魚鉢を案排するなどの夏座敷のそれには早けれども追々時候にも向ひたると迚昨今賣出したる金魚は例年の通り二才子なるが本年の金魚は昨年來氣候不順のため成育思はしからざりしと種類は流金、和金、支那金和蘭、丸子、小龍等なるが就中和蘭の飼育者最も少く從て高價なりと今各種金魚の相場を掲ぐれば左の如し

一和金　上物（百匹に付）一圓五十錢より三圓小物（同）一圓より二圓まで並（同）五十錢より一圓まで▲小龍　（百匹に付）五十錢より六十錢迄▲支那金　（同）二圓より五圓まで……丸子（同）一圓より五十圓まで▲和蘭（一匹に付）五圓より五十圓迄内並屑下屑と稱する和金龍金の屑に至りては百匹四十錢より四十錢迄

序ながら鯉の種類と相場を示せば鯉は黑鯉緋鯉斑鯉胡麻鯉變り鯉等にて相場に二才子百匹三十錢より一圓まで又金魚鯉とも三才四才になれば却て二割高なるが通例なりと

▲汐干狩の船相場　追々汐干狩も近寄りたれば船相場は如何にと聞に十人乘内外船頭一人付一日金一圓七十錢より二圓二三十錢位、傳馬船廿人より卅人乘り船頭二人付一日金三圓より四圓四五十錢位、乘合船は一人に付金廿錢より廿五錢位なり本年は貝類の發育宜しきより人出多き事なるべし

▲昨今の菓物　本年始めて淸國芝罘より輸入せる葡萄は横濱商會の手を經て東京の水菓子店にて販賣し始めたるが品質頗る優等にして日本種中の最良品たる甲州種と比して劣らぬ位な

り尙此輸入葡萄の傷物は市中の菓子屋の手に渡り砂糖をあしらひ月の雫と呼びて販賣し居るが其賣行き至極良好なる由一斤の定價六十錢位舶來菓子中無核甜橙は一個四五錢位干葡萄干杏一斤三十五錢位苹果は一個五六錢より十四五錢位なるも就中苹果は舶來品よりも日本產中北海道を初め青森並に川崎在の產品は色彩美麗にして且價値安直なる故舶來品に比して賣行頗る好く其一個の市價二三錢より十二錢位紀州產の無核甜橙は一個三錢より十錢位迄にして甲州產の干葡萄は一斤二十五錢より三十錢位迄同地產の月の雫は一個一錢五厘尙ほ干柿は一函四五十錢位にして甲州產の串柿は一函三四十錢位內地產のシャボンは一個五六錢位なり晚春より夏へかけて最とも歡迎さるゝ果實は夏蜜柑にして內地にては長州萩產のものを最良品とせり一個の賣價三錢位より七八錢位夏蜜柑に劣らぬ果實にて殊に病人向きのものは梨實なるが東京市にては川崎產を貴ぶなれど其の產出せる品種は生食用として頗る良好なれども貯藏に適せざるの缺點ありそれ故貯藏物として中仙道產のものを最良品とし一個五六錢より十錢位なり

▲大統領夫人と日本服裝　北米合衆國大統領ルーズヴエルト夫人は豫てより我國服裝の優美なるを賞賛し現に聖路易大博覽會にては多くの織物を購入したりとの事なるが此程左る方へ現今流行の貴婦人通常服付屬簪、帶留、時計、指環、紙入其他の携帶品二個づゝを注文し來れり深く交際社會に立入らず且つ家庭敎育嚴格なりとの評判ある同夫人にして斯る嗜好の生じたるを見ても如何に米國の我國に同情を表し居るかを知るべし。

▲軍人家族の生業扶助　內務省の訓示によれば地方に於て實際救助の任に當る人々の內には此生業扶助なる方法を以て大仕掛の授產塲的の設備を要するが如く心得依然金錢給與を繼續するを便利とする向きある由なれども內務省が云ふ所の生業扶助は决して斯の如き狹隘なる意味にあらず苟も常人の職業として差支なきものは如何なる種類の事業たるを問はず被救助者自身の體力に適應するものを授くべしとの精神にて若し斯の如くにして尙生活に困難なるものあるに於ては其に始て其不足額を金錢にて給與すべしと云ふにありと。

每月五日發行

定價表

一冊	（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊	（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊	（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊	（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二冊
增刊四回……一、四、七、十月價格同一

郵稅	
一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等			割引　四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引　三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引　二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引　二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅八年四月十五日發行　第五卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千百三十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

華族女學校學監　下田歌子女史著

女子普通禮式

和裝大判　正價卅五錢　郵稅八錢

讀賣新聞評…（前略）此書他の俗書と異なりて最も斯道に智識經驗深き下田歌子刀自が古今東西の宜しきを制し一々挿圖によりて叮嚀に編述したるものなれば其圓滿完備にして斯道の指南車たること言を待たず

大橋乙羽君著（第十九版）

和洋禮式

洋裝大判　正價廿五錢　郵稅六錢

人生交際の道、禮を以て第一とす、本書は世に得易からざる幾多の珍書を參考し、專門師匠の校閱を請ひ、優麗なる圖を加へ、順序のよき區別下に反覆叮嚀に冠婚喪祭の禮法、起居、言語、衣服、應對、宴遊、獻酬の諸式より上下、父子、夫妻、兄弟、親戚、知友等の諸作法まで凡て和洋の禮式一切を記述せり。

中島義式君著（第七版）

新撰　小學女禮式

洋裝大判　正價廿五錢　郵稅六錢

世の開明に連れ時の文化に伴ふて淑女の令風又改善の域に進まざる可からず中島氏本書を著はして婦女家庭の要義たる禮式を新撰し洽ぐ女教の軌範を網羅せり且文章平易流暢にして幼兒も能く讀了せられ挿圖又た本文を補ふて用意精密なれば貴姫令孃は素より家庭上には缺く可らざる禮書なり

博文館編輯局長
坪谷水哉君著

全一冊大判美本
紙數六百餘頁

日本女禮式大全（第十五版）

本書が世の良妻賢母の友として女學生の良師友として、歡迎せられたるは發刊後既に十五版を重ねたるにても知らる可し著者は斯の如き好評を博すると共に益々責任の重を知りて、更に全文を修訂増補したり、其內容は日本固有の女禮の美性と泰西普通の禮式の外に女子の知るべき技藝、作文、作歌、其他一切の事を網羅し記事の豐富と文章の流麗に加ふるに精巧の諸禮式繪畫數十葉を以てし、其製本の美なる世に比類なし、世の良妻、賢母、及令孃を有せらるるの父母方は、必らず一本を備へ給ふの要あり。

▲洋布上製　正價九拾錢　小包料拾五錢

▲蒔繪畫入　正價壹圓廿錢　小包料拾五錢

中島義式君著

新撰　女子作法書

洋裝大判　正價廿五錢　郵稅六錢

從來學校に於て作法の教授を受けし人其修業后に於て禮節を實踐せざるもの多きは夙に識者の慨する所なり、要するに斯る失體は作法を以て單に教場に於ける一種の技藝として修練するのみして平常の動作行步の間に之を活用せざるに基す中島先生茲に見らるゝ所ありて此著あり淑女令孃は是非就て一讀せられたし

濱本義顯君著

婦女教育　明治姫鏡

公爵三條實美君　子爵芳川顯正君題辭

和紙刷大判　正價六拾錢　郵稅八錢

卷の一
文字の教●語の教
作法の教●花の教
文の教●道の教

卷の二
●孝行●貞操●立志
●信義●儉素●和
順●勉強●忍耐●
試驗●敏知●慈善
●教育

卷の三
●小兒養育の大
意●裁縫●編物
●茶湯●活花●
和歌●毛糸

讀賣新聞記者　關如來君著

明治の令孃

洋裝大判　正價卅五錢　郵稅四錢

明治の令孃は、上は貴顯縉紳の令孃より下は貧困苦樂の女學生に至る、才學絕群超凡、德行端嚴貞淑、採て以て明治の令孃の摸範となり規矩となるものは擧げて之を一卷の中に收めたり、以て世人が知らんとする高貴の家庭ゝ如何を推知するを得べく現今令孃の如何なる學校及び家庭教育の下に生長して他日の良妻賢母となるべきを觀察するを得べし。

（奥付の一）

發兌元——女學書

岸上操君著

家政案内

洋裝大判 正價廿五錢 郵稅六錢

國の品格は國民戸々の家政に由り、國民の品格も亦多くは家政に由て養成せらる、故に心ある人は家政を重んじ其整理と榮譽とに注意す。本書は日用百科全書中第一重要の編にして、家政整理、一家團欒の樂、父母子女の心得、婢僕使役の心得等何人と雖心得ざる可らざる箇條を擧げ、丁寧親切に之を說明せり。

醫學士 三島通良君著

母の務

洋布上綴 正價七拾五錢 郵稅拾錢

本書は多年職を文部に奉じ學校衞生に於て且つ又專門小兒科醫として名聲嘖々たる三島博士が個人衞生中最必要にして且國家富強の基たる婦人及び小兒の健康を保護增進せんが爲め泰西の學理を應用し之を本邦の人情風俗に鑑み我邦現時の家庭に適應する衞生法を叙述されたるものにして世の賢母良妻たるの職責を盡さんとするの人は素より一家の經營上何人も缺くべからざるの要册なり

華族女學校學監 下田歌子女史著

泰西所見 家庭教育

和裝大判 正價卅五錢 郵稅六錢

其國異なれば風俗又別なり我國外邦に交際する今日又婦女の彼國婦人と交際するの必要尤も多しそが第一に心得べきは彼國家庭の如何を詳かに知るより急なるはなし本書之を詳記せり

華族女學校學監 下田歌子女史著 全二册大判並製

家政學

家事内政を整理するは婦女生涯の本分にして衣食住の事より始めて金錢の出納公私の交際賓客の應接子女の教養婢僕の雇使に至るまで皆其責務にあらざるはなし近來女子教育の風潮激變の餘一たび蹉跌せし後は途に女子の修學を逡巡する者あるに至れり此書は下田歌子女史が當世に鑑みる處あり其學識東西古今に通貫するの考案に訴へ女子教養に對する綱要を網羅し其志勗めて周密の志行を養成するにありて疎放の習慣を矯正し實際的良母賢妻を得るの捷徑を示さる實に是れ齊家の韜略たり

▲正價一册參拾錢 郵稅一册六錢

華族女學校學監 下田歌子女史著

家事要訣

和裝大判 正價卅五錢 郵稅八錢

本書は衣服の取扱方、裁縫、洗濯、染物等の簡易法及び住居の撰定構造に就ての注意其他室内裝飾淸潔法、及び金錢出納家事經濟の概略を詳述せり

曾我部純一君著

最新 家計簿記

洋裝大判 正價廿五錢 郵稅六錢

第一章 ●帳簿
第二章 ●簿記
第三章 ●勘定科目
第四章 ●誤謬訂正の方法
第五章 ●豫算の編成
第六章 ●決算
第七章 ●帳簿記入の練習
第八章 ●女學生の會計
第九章 ●公債株劵及手形帳簿
第十章 ●預金

村井弦齋君著

下女讀本

洋裝大判 正價拾五錢 郵稅四錢

今や敎育の隆盛なり。然れども未だ一家の經濟と衞生とに大關係ある下女敎育の必要を說くものなし著者本書を著はして下女が執るべき職務の秩序と心得とを說き傍ら之に經濟衞生禮義道德の事を懇切平易に敎へ以て下女の改良より延て家庭の改良に着手せんとす是亦方今社會の急務といふべし。

（後付の二）

華族女學校學監下田歌子女史編

家庭の心得

和裝大判
正價卅五錢
郵稅六錢

本書は下田先生が家庭に於ける少女の心用ひとして其行爲の斯くなれかしと欲する節々を勉めて興味を以て讀了する樣ものされたるものにて日常人々が親しく見もし聞きもする所の美しき模範と惡しき模範とを取つて示されたるものなり。

華族女學校學監下田歌子女史著

母親の心得

和裝大判
正價卅五錢
郵稅八錢

本書は母親の守るべき德義務むべきの責務諸注意より姙娠中の心得育兒法等を說き小兒の發育小兒の取扱及哺乳小兒の衣食住虫齒種痘小兒の疾病負傷遊戲玩具傅婢伽等を親切に述べたり。

華族女學校學監下田歌子女史著

學校の心得

和裝大判
正價卅五錢
郵稅六錢

家庭に於て施すべき教育の手段は嚴格教戒によりて可憐なる幼年兒女が腦を刺激せんよりも寧ろ和樂なる談笑嬉戲の間に於て之を薰陶するの効果あるは何人も認むる所なり其學校に在る間と雖ども亦多少其趣味を含まざるべからず故に少女が心を娯ましめんとして畵本やうの物こそ中々に其素き腦を染むるとよとて其書を著はされたり

中村鉛子女史編

家庭の模範

全一冊洋布上綴
中判 四二四頁

方今社會の上中流に通じて其家政一般を見るに表面錦繍を飾りて裏面に糞土を包める如く破倫破德を行ふて醜然愧ざる人多し爲めに一家は惡魔の棲所となり風波絕ゆる時なく和氣靄然の家庭は全く其痕跡を失ふに至れり是れ一家の小にして實は國家の大に及ばす利害ならずや女學世界記者中村鉛子女史久しく誌上に家庭訪問欄を擔任し數年名家を歷訪して其直話を世に紹介せり今本書に其模範となるべきもの數家を撰摘して一層世に益する所あらしむ權門有力者の家庭學者名士の家庭軍人實業家の家庭等其各家の主人に親接して實踐躬行の直話を寫眞し溫かき香ばしき家庭を作らんとするの眞模範に資するなり諸子一本を備へて美質眞風に涵養せらるべし

▲正價三拾八錢
郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著

婦女家庭訓

和裝大判
正價卅五錢
郵稅八錢

此編には其母たるべき人の注意衛生の點より幼兒が漸々發育して小學に在る程度迄其翫具遊戲の有益なるものを丁寧懇切に擧示したるものなり。

華族女學校學監下田歌子女史著

庭訓お伽噺

和裝大判
正價卅五錢
郵稅六錢

この書は我邦古代のお伽噺より、近代のものに至る、多くの同書類中より撰み出せるなり、總て此類の書中には甚だ面白き趣向のものありて往古の風俗をたづぬる栞とせんにはこの上なきものなれども兒女の教育に適せざるもののあれば著者深く此點に注意し且つ丁寧に注解を加へたれば年少女子の必ず一讀明瞭に解するを得て大に風教に裨益することあるべし。

華族女學校學監下田歌子女史著

お伽噺教草

和裝大判
正價卅五錢
郵稅六錢

この書は、少女が家庭教育に裨益あらんことを希ふ爲めに東西のお伽噺の中、最も智德の涵養に利あるべしと思ふものを摘み、猶其れを取捨增減して綴れるものなり、されば噺しの趣向は極めて嶄新なるもの多し、その文章は尤も平易を旨として記したれば傍ら作文の初學びに最も裨益あるべし書中對話體は主として都の詞づかひを用ひたれば少女が對話の栞ともなるべし。

發兌元――女學書

華族女學校學監下田歌子女史著

女子諸藝要訣

蠶桑裁縫刺繡押繪編物等凡て我邦の女子に缺くべからざる手藝は一々圖解して詳密なる說明を施し之れを讀めば師に就かずして各種の工藝自ら悟了するを得べし

和裝大判
正價卅五錢
郵稅八錢

吉田調子君著

裁縫と編物

女子の尊き天職は母として子女を育成し妻として一家を齊整するを主とす特に家族の衣服類は一として女子の手に繫からざるなく裁縫及び編物は實に女子として尊卑に論無く最も必要の手藝なり本書に於て懇切叮嚀に其順序方法を解明し一讀其術に精通すべからしむ

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

博文館編輯局編纂

衣服と流行

衣服は體を蔽ひ寒を防ぐ實用の外美を添へ氣品を加ふ故に社會の進步に隨て衣服彌よ美に流行益々盛也本書は和洋兩服の製法用法より模様色合を始め古來流行嗜好の變遷及び今時の流行等を詳叙し文の足らざる所は優麗精緻の畫を用ゐ懇切叮嚀に之を說明す紳士貴女等若し本書を身邊裝飾の參考に資せば風采彌よ優美高尙なるべし

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

飯田呉服店裁縫部
小岩井規太郡君
鹽田直三君 合著

實用裁縫全書

本書の主とする處は普通の衣服は固より之に附屬する諸種のものに就て普ねく裁ち方積り方等を網羅し専ら實用に供せしむる爲め前編に於ては裁縫に關する諸般の要件を掲げ後編に於ては裁ち方積り方を圖解し附錄には織物染物の産地を記して參考に供せり讀者よ實用を主とする本書は解說にて六ケ敷き所は密圖を添へて直に了解し得べき様に注意せり請ふ愛讀あらんとを

全一冊和並綴
▲大判二六六頁
正價五拾錢
▲郵稅八錢

刺繡術專門磯村大次郎君著

實用刺繡術

●第一章總則　繡下繪の心得○着座勢○用器○糸の綜合せ方○繡地の張方○糸の結方及び針の使用法○繡方の解說及肉の使用法○繡方の通則及び糸の使用法○仕上げ　●第二章　樹木及花瓣の部　若松○森松○櫻○梅○藤○竹○紅葉○菱米及櫻○花菖蒲○牡丹○蓮○菊○福壽草○桔梗○蒲公英○撫子○蓮花草　●第三章　山水の部　●第四章　禽鳥の部　●第五章　昆虫の部　胡蝶○蜻蛉○蟋蟀　●第六章　紋章の部

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅四錢

山田興松君著

實用造花術指南

天然の工を奪ふの巧を以て、各爛熳の櫻を見、馥郁の梅を詠むる、之を造花の枝に待たざるべからず、珍を愛し奇を悦ぶ今の世は此種の美術の年々に發達して交際塲裡に一段の裝飾資料を増す、本書斯の技を精叙して盡せり篤志の婦女諸君一讀あれ。

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

實用料理法

藤本藤蔭君著

洋裝大判　正價廿五錢　郵稅六錢

金錢の使用にも死活の二法あり同じ肉菜にて鹽梅調理の巧拙によつては味に天地の相違あり故に賢くして節儉なる一家の主婦は最も料理法に注意し廉價にして味ひ善き食物を調ふべし此書は此人々の爲めに日本支那西洋三國に涉り最も簡便にして又最も實用に適する百般の調理法及び献立等を詳記し兼て古今の料理法にも及べり戶々日常必需の書は實に是れなるべし。

西洋料理法

佐々木孝君著

洋裝大判　正價廿五錢　郵稅六錢

方今內外の交際漸く頻繁となり諸般の改良風を爲して起る西洋料理の流行亦以ある也蓋し心身攝養の必要に基くこの西洋料理法は多年斯道に從事せる者の著書にして、世間何人と雖ども、容易に割烹せらるべきやう、簡潔實用的に說明せるものなり、故に大家の令閨或は交際家の令孃抔、力に勞することなくして自から風味美き肉羹を調進するを得、實に無上の好著述なり。

●八百善料理通

八百善主人著

正價卅八錢　郵稅六錢

●漬物早指南

小田原屋主人著

正價拾貳錢　郵稅四錢

料理手引草

華族女學校學監　下田歌子女史著

全一冊　洋裝大判　正價卅五錢　郵稅八錢

夫れ料理と献立とは新たに家を持ちたる婦人は勿論學校にて之を修めたる人と雖も困難を感ずる所なり故に本書には專ら其實踐を裨益すべき事を示して其衞生と經濟との注意を主として年若き主婦が參考の一助とす其內容の大體を擧ぐれば一般料理の心得としては（一）衞生（二）經濟（三）鹽梅（四）外形（五）器具の注意（六）飲料の撰び方（七）食品の撰び方及び献立心得數十項あり最後に本邦料理西洋料理の數百法を載す

衞生食物調理法

阪本隆哉君著

和裝大判　正價卅錢　郵稅六錢

本書は從來の料理法より其衞生に叶ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の食膳に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人體を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗方切り方煮又は炙り方食物の着色中毒物又は飲料水の運び方器具の淸潔小兒の食物など逐一說き示したり家庭衞生として日用料理の師册として各家是非一本を備へらるゝの必要あるを知るべし

病者の食餌

阪本隆哉君著

洋裝三六版　正價廿錢　郵稅四錢

從來諸家の稱せられたる調理割烹の書類は、坊間に數多く見受けたれど、衞生のことに迄說き及ぼされたるはいとも稀なり、抑も食物は人間生活上一日も忽せにすべからざる重要のものなるにも拘らず、一家の主婦達を始めとし女學校の女子達の敎に至るまで、食餌衞生に心を留めざる樣覺ゆるは口惜しき限りなり。かゝる有樣に過ぎ行かんには世に病める人々の數增すべき道理なれば著者の奇しき、いみじき思ぼし立ちにて、隅より隅へ意の屆く限り、考の到らん極み、病める人の用ゆめる食餌の調理に付ぎ其利害と方法とを編述せられたる本書是なり行文の通俗にして明瞭なる。曩に著されたる衞生食物調理法と共に何れの家庭にも必ず一本の備へあらまほしくなん。

●料理早指南

醍醐山人著

正價廿五錢　郵稅六錢

●料理いろは庖丁

風羅山人著

正價拾八錢　郵稅四錢

（後付の五）

發兌元——女學書

岡崎淵冲君著

各傳比較 點茶活法

全四册和上綴 帙入正價貳圓五十錢小包送料貳拾錢

此書は篤を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳傳統の系譜諸流の傳を列記して其異同と理義の在る所を知らしめ一目其是非好惡を撰び易からしむ初學の人は主客の作法を始め手前百變の基棚莊千化の起露地の繩張茶室の構造迄容易に獨習自得せられ師範の人は各傳の異る所作の變亦一の理義ある事を了し敎導の助け講義の參考となる事尠からざるべし

博文館編輯局編纂

茶の湯と生花

洋装大判 正價廿五錢 郵税六錢

茶の湯と生花は日本特有の一技にして、國風の瀟洒、淸麗氣韻、沈正の態を見るに足る、苟くも中以上の士女は皆之を辨へざるを耻とす、玆に斯道の大家に乞ふて、其技の初歩より奥秘に至る迄を最も平易明瞭に逃べ、文の足らざる處は圖繪を以て之を補ふ、本書を讀む人をして又師に就くの煩なからしむ

吐月齋惠一鳥君編纂

挿花盆石 四時の詠

全三册和紙 上綴大判 正價五十錢 郵税六錢

本書は洞月齋か遠州流挿花の道追々亂るゝを慨し之を正さん爲め正花の則式を著さんの志ありしも終に果さゞりしを門人吐月齋師の志を繼ぎて此著あり其技の精妙は載せて書中にあり世の盆石挿花を學ぶの人は是非本書を一讀せさるべからず

江刺家協一先生著

茶の湯大全

全一册洋布上綴 中判五〇八頁

本書は嚴に茶道極傳書を著はし世の好評を博したる有名なる松風庵江刺家空齋宗匠の新論にして凡そ茶道に關する一切の茶器扱方のことを挿圖にて詳細説明し且索引に便ならしむる爲め（イロハ）別に爲したり其他概言せば爐風爐炭手前より薄茶濃茶古風點流臺月點向切隅爐大板長板向板朝晩飯重茶椀盆點晝夜咄朝晩飯後不時跡見獨客等一切の手續并に七事式に至る迄點別等一切の手續及置合のこと挿圖して平易に詳記したるものなり故に斯道初歩諸彦と雖も一讀して平易に獨修することを得べし實に稀有の良書と謂ふべきなり請ふ愛購を玉へ。

▲正價六拾錢 郵税八錢

華族女學校學監 下田歌子女子著

女子遊戲の栞

和装大判 正價卅五錢 郵税八錢

本書は下田先生が專ら女子がものする幾多の遊嬉中其體育に將た敎育に益多くして害なかるべきものを選びそが心身の發達を助成せんが爲め著はされたるものなり又鼇頭には我國太古よりの遊嬉の沿革を記したり

安藤謙吉君著

福引集

洋装小判 正價拾貳錢 郵税貳錢

此書は内外遊戲全書の第十四編として出版したるものにして正月の遊戲には缺くべからざるの福引新材料五百種を題の部解の部に分ち尚福引談として福引方法を評述したるものなり附錄には●歌がるた必勝談●覺え方●並べ方●見かた●取り方●かるた會に就て等あり讀んで斯道の妙手たるを得べし

石橋思案君序文 加野孤雁君編

●新案 福引種本

正價拾八錢 郵税四錢

石橋思案君序加野孤雁君有田鐵笛君共編

●征露紀念 續福引種本

正價拾八錢 郵移四錢

千河岸櫻所君釋

女訓評釋

和裝大判　正價六拾錢　郵稅十錢

●女今川　●女實語敎　●女庭訓
●女訓孝經　●女大學　●女中庸
●女小學　●女孝經　●女誡
●女論語　●內訓　●女範

文學士　大町桂月君著

女學生訓

洋裝小判　正價廿五錢　郵稅四錢

本書は大町桂月君が例の銳利なる筆鋒を以て、當代女學生の失點と注意すべき事と及び有形無形に襲ひ來る誘惑等に就て懇切丁寧に敎訓せられし絕好の金玉文字なり、女子諸君一讀再讀暫くも座右を放すべからず

松原岩五郎君著

女學生の栞

洋裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

此書立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切よく利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中々諷諭諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は毒筆を以て單刀直入婦人の弱點をゑぐる處あり。世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて濺げるかを知りたまふべし。

千河岸櫻所編

日本女子立志編

木版錦繪口繪挿入　全二冊和並綴　大判七三六頁

往時山城伏見の處士中村惕齋「ひめかゞみ」參拾餘卷を著はす、その書述言紀行の二大部に分ち、和漢古來の賢婦烈女が嘉言善行を網羅し最良の婦敎書として其名世に高し本書は「ひめかゞみ」に次で慶元以後より明治の初めに至るまでの賢淑、貞烈、孝烈、忠烈、勇烈、文學、才略の女丈夫二百六十名を列擧して其境遇意氣、品性、動作を敍すること精、文章亦醇にして流暢風敎の資として絕好の良書なり、女子諸君必讀せられよ

▲正價一冊六拾錢　郵稅八錢

華族女學校學監　下田歌子女史著

外國少女鑑

和裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

本編は我國の外、東西洋諸國に聞えたる少女が勝れたる事蹟を尋ね求めて綴りたるものなり、されば內國少女鑑と合はせ讀みたらんには同じいみじき行ひも彼と我と風俗習慣の異なるが爲めに又は古と今と世の遠く相隔たりたるが故に多少其趣のかわれることどもを見て深く考慮する所あらんには其實踐に裨益する所少からざるべし

華族女學校學監　下田歌子女史著

內國少女鑑

和裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

下田歌子女史が家庭敎育に熱心なる又斯文に堪能なること今新に喋々を要せず本書は我日本に於ける古代より近世の少女が傳記に就て大方の少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる挿繪亦精妙なれば家庭の讀物として無上の寶册なるべし

東京女學館講師　西田敬止君著

女子修身鑑

和裝大判　正價拾錢　郵稅貳錢

本書亦女子修身の鑑ともすべき、孝貞、賢淑なる婦女子の操行品性を敍述して、其修養の資に供するもの、著者は東京女學館其他府下高等女學校に敎鞭を執らる敎育者なれば隨て其用意亦尋常の著書に一頭地を拔くものあり就て讀了せられたし

藥學得業士 金澤嚴君編

通俗治療救急法

小判上綴
正價廿五錢
郵稅四錢

本書は衣食住婚姻育兒防疫等の一般衛生法より諸病治療法看護法及藥品調製法急病頓死火傷等の救護法温泉海水浴轉地療養其他常に心得べき百般の衛生醫藥に關する事項を細大洩す所なく詳細に記載し且文章平易にして通俗を旨としたれば何人と雖も常に一本を備ふべきものなり

醫學士 守矢觀國君譯述

生殖器新書

中判上綴
正價九拾錢
郵稅八錢

本書の原著は合衆國に於て非常の喝采を博し、第五百版の多きを累ねたるものなり、而して同國の貴婦人等は此書の爲めに莫大の利益を得たるを喜び、或は謝狀を添へて金牌を贈るものあり、又は金ペン、寫字臺等を贈るものあり、孰れも口を極めて此書の効驗の著明なるを頌讃せざるは無し、推して以て價値の如何を知るべし、世の紳士令夫人、令孃よ、請ふ一本を購ひて幸を受け禍を防がれよ。

醫學博士井上通泰先生監修
中川恭次郎君編
全十二冊洋並綴
大判約千頁

家庭衛生叢書

家庭に衛生上の智識の必要であるといふことは今更いふ迄もないが、此衛生上の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても、之に衛生上の智識を應用したなれば、家庭がどの位幸福になるか殆ど測り知ることが出來ないと思ふ。其他小供を育てるにも、傳染病の流行時にも病人の出來た時にも、婦人の姙娠時にも、凡て吾々の家庭に衛生上の智識の必要であるといふを證據立てる機會は日常甚だ多いのである家庭衛生叢書は各專門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して一般人が衛生上の智識を開發するといふを目的として發行せられたのであつて、讀者は必ず得る所が多いことと思ふ、尚此叢書に講話を承諾せられたる大家は、夫々專門の諸博士三拾餘名である。

第四編迄既成
正價一冊貳拾錢
郵稅一冊[illegible]

西田敬止君著

育兒と衛生

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

能く健全なる小兒を生育し又家族の健康を保つは是れ人間第一の幸福なり著者親切に平易に明了に其次第を詳叙し文字の足らざる處は鮮明優美の畵を以て之を補ひ懇篤至らざる所なし世の文學を解する人々之を讀みて育兒衛生に注意し玉はゞ一家の幸福招かずして至るべし

醫學士 小川劍三郎君著

通俗衛生 眼のはなし

洋裝中判
正價拾八錢
郵稅四錢

眼は主命の所謂眼目にて、官能全躰の主部ともいふべき所、其大切なること喋々を待たざるなり、著者は大學を出でゝ大學病院の助手となり、縣立病院に眼科醫長となり眼科專門を以て開業し、特に其必要を認めて最も卑近に眼の衛生を述へんため、日常の遊戯、耳慣れたる義太夫謡曲の文句等、手當り次第に引用し、勉めて多趣味に説明し、挿圖も所々に加へたれば、讀者は容易解し大なる實益を收むるを得べし。

娘を持てる親、妻を持てる夫、母を持てる子、女と云ふ女は見よ

姉妹を持てる兄弟は繰り返しくて此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを、

文藝倶樂部之愛讀諸君よ、

諸君の知り邊に於て若しも子宮血の道さん前さん後の諸症にて種々の藥を用ひても其効なく困難する人あれば試みに此中將湯を服用せしめよ……百發百中

中將湯の名譽

產科婦人科專門諸大醫の稱讚を得たるのみならず、畏くも上宮様方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽と云ふべし

醫學博士慈惠病院長 高木兼寛先生（東京）

產科婦人科專門醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生（東京）

產科婦人科專門ドクトル 木村順吉先生（東京）

婦人科專門獨逸ドクトル 朝山義六先生（横濱）

產科婦人科ドクトル 佐伯理一郎先生（西京）

大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル 緒方正清先生（大阪）

產科婦人科專門ドクトル 小林山卿先生（大阪）

愛知病院婦科醫學博士ドクトル 柴田耕一先生（名古屋）

ドクトル婦人科專門グラシエト、ハアマシー 大月文先生（福井）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱讚を忝ふしたれども略す

●十年前のちの道三週間に全治す●

子宮病血の道產前產後

の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先迄差込み或は正氣を失ひ●息切れ動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●浮腫●月

經不順

年頃になりて月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事を苦にし氣分惡しく常にふさぎ勝の人殊に子宮出血白血長血帶下にて久しく患らひ身躰衰弱せる病にても全治すること請合なり（論より證據早々試みよ）



中將湯

定價	郵送料
五週間 貳圓	十五錢
三週 壹圓廿五錢	十錢
二週分 八十五錢	六錢
一週分 四十五錢	四錢
三日分 二十錢	二錢
一日分 七錢五厘	二錢

●中將湯は各國藥店にあり無くば本舖へ申込あれ●東京市は配達し●遠國は郵送すべし
本舖へ御注文の御方は病人の容躰詳しく申込あれ●切手代用一割增の事

本舖 東京市日本橋區通四丁目七番地（電話本局千九十七番） 津村順天堂本店

支舖 大阪市堺筋大寶寺町南入（電話東二百七十八番） 津村順天堂支店

女學世界定期增刊 閨秀文壇
（每月一回五日發行）
第五卷第六號
明治三十八年四月十五日發行
（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい) 明治期復刻版㉟
明治38年4月(第5巻第5号、第5巻第6号)

2007年12月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3288-1　C3321